倭国神代記

がばい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
倭国神代記

【Ｎコード】
Ｎ１５７９Ｘ

【作者名】
がばい

【あらすじ】
わのためと　くにをばもゆる　かむごころ
きすぎさりても　しるしつづけよ
もしも、神がわたし達を愛しておらず、わたし達がいきていることを気にも留めておらず、わたし達の世界を遊具のように扱っていたのだとしたらどうしますか？
そんな神に抗う者達の話です

はじまり（前書き）

シリアスな話ですので苦手な方はもうしわけありません。
処女作ですが頑張って書いていきますのでよろしくお願いします。

はじまり

もしも、神がわたし達を愛しておらず、わたし達が生きていることを気にも留めておらず、わたし達の世界を遊具のように扱っていたのだとしたら、どうしますか。まして、神に棄てられた者は、どうしたらよいのでしょう。

きっと、わたし達は路頭に迷い、ただ忘れ去られて行くしかないのでしょう。それはとても悲しいことです。

もしも、わたし達の神が欺瞞に満ち、傲慢そのもので、冷徹な心しか持たれていないのなら、祈りを捧げるに足るお方なのでしょうか。まして、神に大事の者を奪われた者は、どうしたらよいのでしょう。

それでも祈りを捧げ続けて、神の愛にすがりつくしかないのでしょう。それは、とても辛いことです。

獣道すら存在しない、人が踏み込むのを拒否するかのように木々が生い茂る森。その奥深くに少し開けた場所があった。そこには泉があり、天を覆う木々の葉の間から月の光が漏れていた。

泉のほとりにある切り株に、男が一人、腰掛けて詩を詠んでいる。白く染まった髪は老人のようで、色も、つやもなく、筋肉はやせ細り、切れ長の目の中にある黒い瞳は死人を思い起こさせる。その肌は青白く、生を感じさせなかった。ただ、詩を詠む声だけがその男が生きている事を物語っていた。

いと思ふ　いとしの君に　木漏れ日で
　出会ふた事も　いと悲しかな

女「セイガ」

詩を詠んでいた男に近寄る女がいた。ふんわりとした漆黒の髪は、

夜に星空をより美しく見せるためだけに闇が訪れるかのように整った美しさを強調する。その深紅の瞳は、もしも水が赤かったならばこのような色をしているのだろうと連想させるほど透けていた。男は駆け寄ってきた女の方に目を向ける。女はそっと語りかけた。

女「遂にこの日が訪れました。わたし達のすべてが始まったあの日以来ついに・・・」

興奮気味に女はそこまで言ってから、自らのはやる気を抑える。星空に輝く月の光が女を避けて照らしたかのように表情が消える。

女「二人の出会いは、わたし達の時と同じ様に致しましょう。セイガ、またあちらへ戻ってもらいます。ですが、必ずあなたを取り戻します。そして、あの頃のように共に戦い、今度こそ・・・」

辛そうに女は言った。そして、セイガと呼んだ男に手を差し伸べ、近くにいたもう一人の男の元へ誘導する。男はセイガと呼ばれた男と瓜二つだった。しかし、人とは思えないほどに鮮やかな色をしていた。

倭国大乱と呼ばれた戦いがあった。それは、今より十四年前に起きた。奴国、伊都国、対馬国、一支国、末盧国、不彌国、宗主国である邪馬一国の連合国家である邪馬台国。倭国大乱はその全土を巻き込み、国の存在そのものを脅かした戦いとなった。

倭国大乱は伊都国のイブキ親子を首謀者とした乱だったが、ヒミコと呼ばれる巫女の登場によって沈められた。

倭国大乱後に女王へと就任したヒミコは、敗れた伊都国をイブキ一族が引き続き統治するのを認め、幼きイブキ　シンムが継承する事を決めた。それには当初、各国の王達は拒否の姿勢を見せた。それでも、最終的にヒミコの思い通りに決まった。それだけでなく、各国の王達は邪馬台国全体で行う政治、あるいは軍事の決定権などすべてをヒミコに委譲した。結果的に倭国大乱は邪馬台国を女王ヒミコの独裁国へと代え、それを機に、ますます国は繁栄していった。

今再び、伊都国に不穏な空気を感じた女王ヒミコは、タケハヤスクネを呼び出した。

切れ長の鋭い目で、目立つ事を嫌うかのような黒い衣装に身を包んだタケハヤ　スクネと呼ばれる男は、女王の前でも媚びへつらう姿勢すらまったく見せずに、ぶっきらぼうに立っていた。

ヒミコ「スクネ、元気にしておったか」

スクネ「命令は」

そう言ったスクネがヒミコの背後の闇に目を一瞬向けた。

ヒミコ「そなたは相変わらずせっかちな男よ。久しぶりに会うたと言うのに」

言葉こそ親しげだが、その言葉一つ一つに感情は一切感じられない。女王ヒミコの闇を連想させる黒い髪、濁った血を連想させる瞳、恐怖と言う名の面が、ただ言葉のみを発しているようだった。

ただ、スクネもまた、一切の表情を見せる事無くヒミコの言葉に応じる。

ヒミコ「……まあよい。それが今のそなたであったな。命ずる伊都国に赴き、王であるイブキシンムを亡き者にせよ」

スクネ「やり方は」

ヒミコ「それは、そなたの自由にするが良い。場合によっては、国そのものを亡き者にしても問題ない。力に制限もかけぬゆえ」

スクネ「了解した。すぐに終わらせる」

簡単な確認を済ませると、スクネは挨拶も何もせず、ヒミコの前から立ち去った。他の誰かがそれを見たとしたら、無礼と言う言葉が頭をよぎったであろう。だがしかし、当の本人達はまったく気にするそぶりを最後まで見せなかった。

大地に足を踏みしめる。すぐに、スクネは呪（じゅ）と呼ばれる数々の奇

跡を可能とする勾玉の付いた首飾りを外した。
呪(じゅ)は描かれた文字によって効力が違った。「火」なら炎を起こし、「雷」なら落雷を発生させる。ただ、呪(じゅ)は誰にでも使える代わりに、一回使うと効力を失う代物だった。
その呪(じゅ)を使って、スクネは邪馬一国(やまいこく)から空を飛行して、伊都国(いとこく)までやって来た。勾玉に描かれていた「飛」の文字が消え、役割を終えた飛行呪が灰色の石ころになる。
目の前に広がる伊都国(いとこく)の門に、スクネは目を向けた。

伊都国(いとこく)。すべての集落を合わせると人口三万人を超える邪馬台国第二の都市。都市の中央の周囲は塀で覆われ、塀の南西には川があり、その付近にも集落があった。また、北には高くそびえる山々が連なり、東以外からの出入りを困難にしている。東側には塀の間に門があるが、普段は開かれ、誰でも出入り可能となっている。東の門を潜り抜けると中央に大きな道が存在し、その左右には、倭国大乱(わこくたいらん)時に焼き尽くされたのが嘘のように、建物が乱立している。中央の道をまっすぐに向かうと、ひときわ大きな建物にたどり着く。王であるシンム達の住まう住居であり、この国の政治を執り行う中枢となっている。そして、その先には祭事用の社が二つ、山脈の手前にある小高い丘の上に小さな社、そのふもとに大きな社が建っていた。

伊都国(いとこく)の街に入ると、スクネは暗くなるのを待ってから行動に出た。闇夜にまぎれて標的の元へ向かう。その間、誰にも見つからないように細心の注意を払って向かったが、仮にそうでなくても、決して発見されることはなかっただろう。なぜなら、人が目視出来得る速度を越えて、スクネは動いていたのだから。
建物に侵入してすぐに、赤い布を頭に巻いた男を見つける。その男は女王より命じられた標的。背後から、音も立てず、スクネは空気と一体になり、殺気を完全に消して標的に近づいた。そして、自

らへの確認のために、標的の名を呼ぶ。
スクネ「おまえがイブキシンムか……」
シンム「おれは確かにシンムだぜ。そう言う、てめぇは誰なんだ？　知りもしない奴に、おまえ呼ばわりされたくねぇ」
スクネ「……死んでもらう」
シンム「そう言われて「はいわかりました」とか答えるわけねぇだろ。馬鹿じゃねぇのか」
スクネ「おまえがどう考えようとも関係はない」
シンム「こっちに関係があんだ、ごんべぇさん！」
場には標的が一人だけ。武器はその横に立て掛けてある剣のみ。任務遂行には何一つ支障がない事を、スクネは再確認する。
シンム「今度は黙りやがって。喧嘩を売りに来たんなら、その喧嘩買ってやるぜ！」
横に置いてあった剣を手に取り、シンムが振り向き様に斬りかかって来た。それを予測していたスクネは、その剣激を右手に持っていた矛（ほこ）で簡単に弾き、そのままの流れで矛先を眉間の先に突きつけた。
スクネ「これで終わりだ」
シンム「ふざけんな、これぐらいで終わってたまるかってんだ！」
スクネ「じっとしていれば一瞬で楽になる。でなければ、苦しむだけだ」
憎まれ口を叩きながら、シンムは弾かれた剣を拾うため手を伸ばしたが、手が届くより前に、スクネは剣を蹴り飛ばしす。それでも、あきらめた様子をシンムは見せない。別に恐怖を与えるのが目的ではないため、スクネは気にせず、止めを刺すために矛を引いた。
その刹那、矛先の前に、横から剣が割って入って来た。
剣の持ち主が、その口調からは想像も出来ないほどの殺意を放ちながら話しかけて来た。横から入って来た男は金色の長髪をした、長身の、整った容姿の、スクネもよく知った男だった。
長身の男「邪魔をしてすみませんが……あなたにシンム様を殺さ

せる訳にはまいりませんので」
スクネ「フツヌシタケヒコか……障害は何者であろうと排除する」
タケヒコ「あなたの好きなようにさせる気はありません」
対峙する二人の間に、シンムの声が割って入る。
シンム「タケヒコ、下がってろ！　こんな奴、おれ1人で戦える」
タケヒコ「シンム様、申し訳ありませんが、それは出来かねます。わたしは彼に用事がありますので」
剣を拾い上げていたシンムが更に何かを言おうとしたが、無言の圧力をタケヒコから感じ取ったのか、結局、剣を引いた。その間も、標的であるシンムの首を斬り落とす好機をスクネは狙っていたが、目の前のタケヒコから感じる殺意がそれを許さなかった。
タケヒコ「あなたに聞きたい事があります。ですからあなたには悪いですが、全力で倒させてもらいます」
スクネ「おまえには無理だ」
タケヒコ「そうですか。案外やってみないと分からないものですよ……ツクヨセイガ」
スクネ「その名を出すな、タケヒコ」
出された名を聞いてスクネは怒りがこみ上げ、感情的になってしまった。そして、その勢いに任せて、タケヒコの心臓目掛けて矛を突く。矛は簡単に避けられ、反対にタケヒコの剣が喉元にせまる。一瞬、感情的になった事を後悔しながらも、とっさに首を動かして、それを避ける。首筋を斬られてわずかに血がにじむ。すぐさまスクネは反撃の蹴りを放つが、後ろに飛び退かれ、タケヒコに避けられる。
間合いが開き、二人は向かい合った。
タケヒコ「やはり、やりますね。なるほど、さすがに実力は拮抗しています」
向かい合うタケヒコの言葉を聞きながら、切られた首筋の血をスクネはぬぐう。二人の力は完全に五分と五分。故に、このままでは戦闘は膠着（こうちゃく）して、何事も無ければ戦いは長引くだけ、そして、最後

には相打ちになるだろう。それはそれで、スクネには構わなかったのだが、任務が頭によぎる。ならば本気になるしかない。それでも確実に勝てる相手でないが、自分達が本気で戦えば巻き込まれた者の命はないだろう。それで任務は果たせる。そこまで考えて行動に出ようとする。

しかし、場に似つかわしくない声に出鼻を挫かれる。

声に目をやると、大草原を連想させる緑色の髪と、大きな明るい緑色の瞳をした、綺麗というより、かわいいといった感じの女だった。

女「騒がしいけど何かあったの?。また、シンムが何かした?」

スクネ「カグヤか、ここに……」

その女を見た瞬間、なぜか安堵感と罪悪感が同時に、スクネへ襲いかかって来た。

カグヤ「えっ?　この人……どっかで……」

驚いたように、カグヤが目を丸くする。

タケヒコ「カグヤ様、こちらに来てはいけません。すぐに、この場を離れてください!」

シンム「姉貴、何で来こっちに来たんだ!」

慌てたようにカグヤへ、シンムとタケヒコが声を掛けた。それによって、一瞬の隙がタケヒコに出来たにもかかわらず、スクネは動けない。まるで、待ち人に出会ったような奇妙な感覚に陥ったために。

それでも首を振り、無理やり奇妙な感覚を捨て、冷静になる。機を逸した事だけは後悔したが。

スクネ「これ以上の障害は任務の支障になる……ならば」

三人を見据えながらスクネは矛を構えた。

タケヒコ「いけません。本気を出す気です。二人とも離れてください。ここは、わたしがなんとか致しますから」

大声でタケヒコが叫ぶ。

本当はシンムだけを暗殺して消える予定だったが、スクネはその案を断念した。代わりに自らの矛の力を使い、その場にいる者すべてを殺す案に移行する。

その瞬間、記憶にない光景が目の前に広がった。

男は全身傷だらけで、更に疲れきったように肩で息をしている。よく見ると、男の身体を何かが貫いていた。その何かは血の色に染まっていた。男は紫色の髪をした女に何かを叫び、顔を涙で濡らしながら、剣で女の身体を貫いた。女が何か口にしているが、聞こえない。そして、女の髪の色が一瞬だけ変わったかと思うと、目の前が真っ白になった。

たった今、視た光景が何なのか、スクネは自分でもわからなかった。それについて考える間もなく、現実に引き戻されたから。

タケヒコ「戦いの最中に集中を乱すとは、あなたらしくないですね？　あなたともあろう者が、千年の間に戦いを忘れましたか？　それとも……」

意識が戻った時には、タケヒコの剣がスクネの目の前に突き出されていた。戦いの合間に、戦い以外のことに気を取られた自らを恥じつつも、敗北を悟る。

スクネ「……殺せ」

観念したスクネは担当直入に言った。元々、その覚悟はしていたから。

殺気こそ放ち続けるが、タケヒコは剣をひくりとも動かさずに、質問して来た。

タケヒコ「あなたに聞きたい事があります。彼女の目的をお聞かせ願えませんか？　正直、わたしには計りかねますので」

スクネ「早く殺せ、話す事など何もない」

タケヒコ「彼女が、人に刃を向け始めた理由を聞きたいのです。話せば……命は取りませんと言いましたら？」

スクネ「答えは同じだ……殺せ」

他にも何かタケヒコは質問して来たが、スクネはそれ以上何も語らず、目を閉じ、殺される瞬間を待った。しばらくして、タケヒコは質問をあきらめたのか、ため息をすると言った。

タケヒコ「わたしの記憶するあなたと若干の違いはありますが……やはり、わたしの問いには答えてくれませんか。仕方がありません。あなたには悪いのですが、死んでもらいます。それで、少なくともこの時代は人の代でいられるでしょうから」

スクネ「……」

剣が振り上げられる音が聞こえた。なぜかその音にほっとした様な安息感を感じながら、最後の瞬間を待った。

カグヤ「だめぇぇぇぇぇ」

そして、剣が振り下ろされるよりも早く、カグヤの声が世界を覆う。少なくとも、スクネにはそう感じられた。

鬼と妖鬼1（前書き）

このサイトの使い方を間違えてしまい、最初短編として出してしまいました。
勝手に消させてもらいましたので、迷惑をかけた方がいらしましたら、申し訳ありませんでした。

鬼と妖鬼1

この数週間、スクネは寝ては目が覚める。そんな日々を繰り返していた。体力の低下を抑えるため、多少の鍛錬を積んではいたが、拘束具を付けられたまま牢に捕らえられていて出来ることなど、限られていた。もっとも、こんな牢は出ようと思えばいつでも出られたのだが、不思議と牢を出る気になれなかった。

今日も朝起きてからしばらく経つと、牢の前にタケヒコがやって来た。数週間前にスクネは捕らえられて以降、会っていない日は記憶にない。

タケヒコ「あなたに聴きたいことがあります」

毎日やって来るたびに、タケヒコは同じ質問をした。飽きるには十分過ぎたが、他に出来る事もない。仕方なく耳で聞き流しながら、スクネは一言も話さず、タケヒコの方を振り返りもしない。ただ牢の中で、肩膝を立てて座していた。

タケヒコ「彼女……ヒミコが何を望み、何を成そうとしているのか、あなたは知りませんか？」

必ず最初に聞いて来るヒミコの目的。いつもの出だし。それは、スクネに取って知らない上に、興味もない問いだった。そもそも元来から、スクネは女王ヒミコに対して雇主としての価値しか見出していなかったから。

タケヒコ「まったく……あなたは本当に何も語らないのですね。わたしの記憶しているあなたならば、もっと饒舌だったのですが。まあ、わたしの覚えているあなたはうるさいぐらいだったので、あまり話をされないのは新鮮ではあるのですが」

自分とは別人を、スクネと勘違いしてタケヒコは話していると理解した。それなのに、まるでそれが当たり前の事の様に感じている自分に違和感を覚える。そのため、タケヒコに誰と勘違いしている

のか聞こうかと思いはしたのだが、結局は黙ったままの状態を選んだ。仮にそうだとしても、「それに何の意味があるのか」と、思ったために。

ため息を一回入れてから、タケヒコは質問に戻った。

タケヒコ「次の質問です。これも、いつもと同じ質問になりますが。あなたはなぜ脱走しようとしないのですか?。あなたならば簡単なはずですが?。もっとも、またシンム様を殺しに来たら、その時は容赦いたしませんが」

この質問には答える気になったとしても、答えようがない。なぜ捕らわれたままの状態を許容しているのか、スクネ自身が分からず、不思議と一回も逃げようという気が起きなかっただけなのだから。

タケヒコ「その拘束具も、この牢も、あなたには何の役にもたたないはずでしょうに? 昔から、このように大人しいのでしたら、わたしも苦労しなくて済んだのですが。しかし、わたしの知っているあなたとは別人のようですね。別人……」

自ら言った「別人」という言葉に何か感じたようでタケヒコの言葉が止まる。ほんの少し考え込むような仕草を見せた後、脅しを掛けるためか、タケヒコが殺意を放った。

殺意が肌を刺激するのを感じたが、スクネは対して気にもならない。仮に、本気で殺されてもやむを得ないという気になっていた。否、むしろ自らが殺される事を望んでいる気にさえ思えた。

タケヒコ「止めておきましょう。辛いのは同じでしたね」

殺意を消すと、タケヒコが頭を下げた。

タケヒコ「すみません、また明日にでも来ます。そうですね……明日は、あなたが好きな食べ物を持ってまいりましょう」

丁寧に頭を下げた後、タケヒコが牢の前から離れて行く。その足音が響き渡る中、スクネは違和感の理由を自問自答した。

スクネ「行ったか……おれはこんな所にいつまで居る気だ。タケヒコも言ったように、出ようとさえ思えば、こんな牢などいつでも出られる。しかし、出る気になれないのはなぜだ。まして、おれは

殺される気だった」

散々に自問自答した後、スクネは考えるのを止めた。いくら考えても答えが出そうにない行為を無駄と感じたために。ゆえに、スクネは「その気になればいつでも出られる。その事実だけで十分だろう」と、自分に言い聞かせた。

牢から外へと出たタケヒコに、出入り口の壁に寄りかかって立っていたカグヤが声を掛けた。どうやら、タケヒコが牢から出て来るのを待っていた様子だった。

カグヤ「今日もスクネに会って来たの、タケヒコ？」

タケヒコ「確かに、彼と会って参りましたが……。それよりもカグヤ様、ここには近づかないように申し上げましたはずです」

カグヤ「今日まで近づく気にはなれなかったよ。でも……どうしてだろ。今日は違ったんだよ？」

そう言ってカグヤは首をかしげた。自分の心情の変化に戸惑っている様子だった。とはいえ、他人であるタケヒコには、カグヤの心情の変化の理由を答えられるはずもない。その代わり、スクネの危険性は完全に把握していた。だから、言葉を繰り返した。

ただし、今度は少し強めの口調で。

タケヒコ「どのような理由があるにせよ、ここには近づかないでください！　一度申し上げましたが、彼は危険なのです」

カグヤ「怖い人だからだよね。でも……今日はここに来ないといけない、そんな気がしたんだよ」

タケヒコ「もう一度申し上げます。彼には近づかないでください！」

それでも首をカグヤは振り続けた。だから仕方なく、タケヒコは有無を言わせないように強く言った。強い言葉に反感を持ったのか、カグヤも強い口調で抗議する。

カグヤ「タケヒコは危険だっていうけど……あの人は捕まっているんだよ。武器も持っていないし……そんな人の何処が危険なのか

教えて！」

目を見据えながら、しっかりとした口調でカグヤは言い切った。思わず返答に困り、タケヒコは苦笑いした。そして、ゆっくりと言葉を探したが見つからない。その間、カグヤは目を逸らそうともしない。結局、仕方ないと思い、タケヒコは少しだ自分が引く事を決める。

タケヒコ「まいりましたね。ですが、今はまだ会わせるわけには参りません。わたしが大丈夫だと判断したら、面会出来る様にいたしますから、どうか、今はまだ近づかないようにお願いします」

カグヤ「いや！　今、会わないといけないんだよ」

タケヒコ「わがままを言われないでください」

カグヤ「わがままじゃないよ！　今じゃないとすべて遅いんだよ。なぜだかわからないけど、そんな気がする」

少しだけタケヒコが引いて見せても、カグヤは一歩も引かない、それで少しだけ言い合いになってしまった。頬を膨らませ、カグヤは徹底抗戦の構えを見せている。こうなっては勝ち目のないことをタケヒコは悟り、ため息まじりに、全面降伏することにした。

タケヒコ「わかりました。ただし、わたしもご一緒に……」

あくまでも会うと言い張るカグヤにタケヒコが折れ、言葉を続けようとした時だった。

一人の顔を青くした兵士が息を切らせながら駆けよって来た。

兵士「こ、ここにいらしたのですね。化け物どもが攻めて来ました」

そう言った兵士の両足は震えていた。

その兵士の言った化け物とは、妖鬼（ようき）と呼ばれ、巫女によってねずみなどの動物に印（いん）と呼ばれる刺青を彫って生み出される。その容姿はどのような動物に印（いん）を彫ろうとも同じ姿になり、人型で口が裂け、目玉が飛び出しており、牙も剥き出しで、猫背、三本しかない指には、鋭い爪を持っていた。

震える兵士の両肩に、タケヒコが両手を当てる。
タケヒコ「妖鬼（ようき）の群れは、どの辺りまで来ているのですか？」
兵士「まだ街を守る門より二十里ほど離れています」
タケヒコ「シンム様はご存知ですか？」
兵士「まだ話しておりません」
タケヒコ「わかりました。シンム様の下に行きながら、くわしい情報を聞きましょう。ですが……その前に」
震える兵士から簡単に話を聞いてからタケヒコは一旦打ち切り、カグヤの方へと向き直した。そして、カグヤの目を見据えながら、強い口調で、最大の懸念の釘を刺した。
タケヒコ「カグヤ様、くれぐれも勝手な行動はお慎みください。間違っても、一人で彼に会ったりなどなさらないように」
にこりと笑っただけで、カグヤから返事はない。おそらくは会いに行く気なのだろう。更に強く言っておこうと思ったが、最早ため息ぐらいしかタケヒコには出て来なかった。仕方なく後ろ髪を引かれる気持ちで、兵士とその場を後にした。

鬼と妖鬼2

妖鬼（ようき）の情報を聞いてからすぐさまタケヒコはシンムと合流していた。

街を守る門から数里ほどの場所で、迎え撃つ準備を整え待ち構えていた。いく刻か経過した後、妖鬼の群れがタケヒコの目に入る。群れの中央には巨体をした頑丈そうな男が一人、巨大な棍棒を持って地をふみつける様に歩いていた。

タケヒコ「あの方は確か……」

初老を迎えたばかりの男、弓兵を指揮するヤハズ　ヤカモチが答える。

ヤカモチ「敵はマヒトツナガスネだと思われます。妖鬼は二十体ほどのようです」

耳でヤカモチの情報を聞き流しながら、タケヒコは体の大きなナガスネを凝視する。頭を回転させ、ヤカモチの鬼（おに）としての能力に考えを巡らし、それ以外についても熟考する。

鬼は妖鬼と同じように、巫女から印を彫られることによって生まれる存在。印を彫られることによって、風を操る能力、火を生み出す能力など新たな能力を得られた。ただし、代償として寿命を差し出さねばならず、三十ぐらいまでしか生きることが出来なかった。

考えを巡らすタケヒコの頭を制止するかのように、ナガスネが妖鬼の群れの前に出る。その姿から想像出来る通りの低く野暮ったい声で、片言に大男は口を開いた。

ナガスネ「メイレイ　オマエラコロセ　イワレタ」

大男と同じ様にシンムが前に出る。挑発するのだろうと予想出来たが、タケヒコに止める気はなかった。

シンム「おまえ、ナガスネとか言うんだろ。命令で来たんだったら、おれが新しい命令してやる。カ　エ　レ」

ナガスネ「メイレイ　デキナイ　ヒミコサマ　イガイ　オデニ」

シンム「それなら、おれが今だけヒミコになってやる。命令を聞いてさっさと帰れ」
この辺りでタケヒコは見ていられなくなり、顔を手で隠した。
ナガスネ「ヒミコサマ　チガウ　オマエハ　バカ　タダノ」
シンム「何だと！。どっちが馬鹿か、今すぐに教えてやるから、ぜってぇそこ動くなよ」
正面に立つナガスネの言葉にシンムが顔を真っ赤にして応戦する。それを見て、タケヒコはため息まじりに、「やはり止めればよかった」と、少しだけ後悔した。
タケヒコ「シンム様、そこを動かれないでください。わたしが相手をしてまいります」
シンム「おれがあの馬鹿を張り倒してやるから、タケヒコは兵達を指揮して、他の雑魚共を頼むぜ」
制止するタケヒコを無視するかの様に、シンムは顔を眉間をひくりをさせながら言った。鼻息が荒く、今にも飛び掛かりそうな勢いでいる。仕方なく、無理やり制止しようかと考えるタケヒコを余所に……
ナガスネ「オデ　バカ　チガウ　オマエ　バカ」
シンム「また言いやがった。ぜってぇ後悔させてやるからな」
ナガスネ「オデ　コウカイ　シナイ　バカ　シヌダケ」
シンム「うるせぇ。てめえみたいな口だけの奴を馬鹿って言うんだよ。馬鹿でないなら、拳で語りやがれ！」
とうとう剣を握り締め、シンムはナガスネに飛び掛かった。冷静さを失っているシンムが巨大な棍棒で身体ごと簡単に弾き飛ばされる。尻から地面に落ちたシンムに、ナガスネがとどめの一言を言った。
ナガスネ「ケン　コブシ　チガウ　バカ　オマエ」
シンム「似たようなもんだろうが。いちいち、上げ足取ってんじゃねぇ！」
それを見てタケヒコは思わず下を向き、ため息を漏らした。とは

いえ、頭は冷静に状況を考える。
タケヒコ「シンム様が先に挑発を始めましたのでしょうに……。もっとも、この一騎打ちでしたら、丁度よい剣の訓練と……なによりも精神の鍛錬になるでしょうが」
ヤカモチ「一騎打ちなど……王をお止めならなくてよろしいのですか、タケヒコ様」
至極もっともなヤカモチの意見を聞き流しながら、ナガスネの背後にいる妖鬼の群れを、タケヒコは一望する。数はそれほどでもない。
考えがまとまり、結論を下す。あとは、すみやかに行動に移るだけ。
タケヒコ「一騎打ちでしたら大丈夫でしょう。仮にそうでなくても、何かが起こってからでも遅くはないと思います。もっとも、釘だけはさすがに刺しておきますが」
ヤカモチ「かしこまりました。それでしたら、わたしは剣兵も率いまして、妖鬼の群れを何とかいたします」
タケヒコ「そちらの方はお願いします」
目線を追ったのか、ヤカモチの新たな提案は、タケヒコの考えと一致した。故に、了承する。

手を上げてヤカモチが近くにいた兵を呼びよせ、何か指示を送る。指示を受けた兵から兵へ、そして全体へと指示が行きわたる。兵達はシンムとナガスネの二人から妖鬼を引き離すように戦い始めた。
戦場に一騎打ちのための空間が出来上がる。

作られた空間にタケヒコは残り、シンムの一騎打ちを見届ける事にした。何かあった時のためにも。
タケヒコ「シンム様、くれぐれも鬼の能力だけはお気をつけください」
シンム「鬼道って……どう見たって、こいつ若くは……」

タケヒコ「シンム様、油断は……」
シンム「わかってるって、封印呪を首にかけて、鬼道を封じればいいんだろ？」
任せると言いはしたが、タケヒコはシンムとのやり取りで不安になって、更に念を押そうと思ったが、それを止めた。集中を始めたシンムの邪魔をしないために。
全神経を集中させて、ナガスネとの間合いを詰めるべく、すり足でシンムがにじみ寄る。今度は簡単に飛び掛かったりなどせず、タケヒコが教えた通りに動いていた。
安心出来るかと思ったが、シンムの次の言葉がタケヒコを心配にさせた。
シンム「今度こそ覚悟しろよ、この大馬鹿やろう！」
そんなタケヒコの不安を余所に、一騎打ちは始まる。

首を慌ただしくタケヒコは左右に動かし続ける。一騎打ちの状況、兵達の状況、全体の状況を常に把握するために。
剣や矛を持った歩兵が妖鬼の爪や牙による攻撃を防ぎ、弓兵が確実に妖鬼を一体ずつ仕留めていく。徹底的にタケヒコ達が仕込んだ戦術。他の士官達と共に、妖鬼との戦いにそなえて兵達を調練し続けた成果が結果としてあらわれる。
幸いにも、兵達は統率された動きで戦果をあげていく。その点で安心を得ながらも、心配の種と化している一騎打ちにタケヒコは目を戻す。

力任せにナガスネが棍棒を振り回す。そのたびにシンムの体が宙を舞う。否、自ら剣で棍棒を受けると同時に後ろへ飛んで衝撃をそらす。
毎日のように、シンムがくたびれて動けなくなるまで、タケヒコは防御方法を教え続けた。故に、条件反射にまで昇華された受けの防御が、ナガスネに致命傷を許さない。

とりあえずは大丈夫だろうとタケヒコも内心では思う。それでも、このままではいずれは……

タケヒコ「シンム様、早く封印呪を首に掛けて下さい」

シンム「わかってる、だけど近づけねぇんだって。意外に、こいつつえぇしよ」

剣と棍棒が火花を散らすたびに、シンムが弾き飛ばされる。傍目にはシンムが押されているように見えるが、実際には双方とも決め手に欠け、互角の戦いを繰り広げていた。

責めあぐねるシンムを見ながら、タケヒコは自分が一人で教えられることの限界を感じていた。

タケヒコ「わたしのやり方は人には無理ですから……しかし、妙ですね？。ナガスネさんは鬼の能力を使う気配が見受けられません。何か目的でもあるのでしょうか……」

そこまで考えて、タケヒコは心当たりを思い出す。否、本来は、最初にタケヒコは心配すべきだったのだが。

タケヒコ「いけません。シンム様、戦いを止めてカグヤ様の所へすぐに行ってください。恐らく、この妖鬼達は陽動が目的です」

そう言うが早いか、タケヒコは一騎打ちの間に割って入った。そして、ナガスネに向かって小金丸という銘の曲線を描いた剣を抜き放つ。

シンム「今、なんて言った？　よく聞こえなかったけどよ……さっさとこいつを倒して戻れば問題ないだろ」

当然の疑問をシンムが口にする。人ならば、常識で考えるなら、シンムは決して間違ってはいない。だがタケヒコの心配は人の常識など意に介さない。だから、叫ぶ。

タケヒコ「ここはわたしがなんとかしますから、早く戻ってください。カグヤ様が危険です」

それが現実になってしまう前に、この戦いを終わらせる。そのためにも、シンムを遠ざけたかった。出来得るなら、永遠に見せたくない自らの本当の力を見せないためにも。

しかし、その思いは何処にも届かない。

時機を見計らったように強烈な轟音が響き渡った。その轟音と共に、タケヒコの表情から完全に余裕が消える。何が起ったのかわからず、轟音が響いた方向に向かってシンムが大声を張り上げる。

シンム「姉貴ぃぃぃーー」

悲鳴のようなシンムの叫びを耳にしながら、タケヒコも轟音が響いた方向を見ていた。

タケヒコ「今の音は落雷呪。落雷呪を好んで使うのは……まさか、タマモが来たのですか！」

焦りの表情がタケヒコに浮かぶ。心が最悪の事態に発展する可能性を否定させない。

その時、戦場に空気も凍りつくような女性の声が空から落ちて来た。その声はタケヒコのよく知っている人物の声。

声「そこにいるタケヒコ達を足止せよ、ナガスネ」

タケヒコ「彼女の声！」

声が止まるとナガスネの全身が焦げ茶色に変色していく。何者かの命を受けたナガスネが鬼の能力を使い始める。

ナガスネ「チカラガ　チカラガ　うぉぉぉぉーーー」

焦げ茶色に変色したナガスネがタケヒコに棍棒を振り回して来る。その攻撃をタケヒコは剣で受け流しながら左拳で正拳突きを浴びせた。何か硬い物を殴ったようだった。

それでナガスネの鬼の能力を理解する。

タケヒコ「シンム様、ナガスネさんは肉体を岩か何かに変えたようです」

シンム「姉貴　あ・ね・きーー」

助言に耳を傾ける余裕もないシンムは、ただ姉の身を案じ、落雷らしきものが落ちた方向に絶叫していた。

外が慌ただしくなっている。いくつもの足音が聞こえ、スクネは何かが外で起こっていると感じていた。ほとんどすべての足音が外に向かう中、足音が一つだけ近づいて来る。とはいえ、スクネには興味もなく、結局は、横になったまま天井を見上げていた。

牢の前で足音が一つ止まる。その足音の主が声をかけてきた。

カグヤ「ひさしぶりだよね。会ってから少し経っているけれど、わたしのこと覚えてる？」

声の主はトヨウ　カグヤだった。横になったまま、身体ごと顔を声の主の方へと向ける。両手を腰に当てて、カグヤは満面の笑みをしていた。

カグヤ「覚えてないわけないよね。だって、初めてあった時に「カグヤか」ってわたしの名前をいきなり呼んだし。しかも、わたし命の恩人だし」

内心でシンムは「恩人か、客観的にはそうかもしれないな」と思いながら、素直にスクネはそう感じた。最も、命乞いされたことには、特に感謝などしていなかったのだが。

カグヤ「ほんとにしゃべらないね、きみ。でもそれ失礼だよ、わかってる？。まず挨拶ぐらいちゃんとしないと。……って、わたしもしてなかったね。てへ」

腰から手を離して、カグヤが丁寧にお辞儀する。

カグヤ「はじめまして、トヨウカグヤと言います。本当はイブキカグヤじゃないといけないんだけどね、お母さんの姓をもらってトヨウと名乗ってます。こう見えても巫女なんだよ。すごいでしょ」

お辞儀を終えると、胸を張って、自慢げにカグヤはそう言った。

カグヤ「あとね。知ってると思うけど、この国の王であるイブキシンムはわたしの弟なんだよ。だから、殺す、なんて言ったらだめだかんね！　もちろん、言わないで実行に移すというのもだめ！　どっちかというと……そういう性格っぽいもんね、きみ。約束だよ。とにかく、次はきみの番だよ。挨拶ぐらい、もちろん出来るよね」

いっきにカグヤはまくし立てた。まくし立てている最中も、表情

がころころ変わる。おそらく感情が豊かなのだろうとスクネは思う。
その表情の変化が、内心「くだらない」と思いつつも、目をなぜか離せなかった。
　カグヤ「名前ぐらいきちんと言わないと、またシンムに「ごんべえ」とか言われるよ。まぁ、あれ、わたしが教えたんだけどね」
　期待の眼差しをカグヤは向ける。それに反応してスクネは声を漏らした。
　スクネ「スクネだ」
　笑みがカグヤの顔いっぱいに広がって行く。
カグヤ「いま、話したよね？　きみがまったく話さないって、タケヒコが言ってたよ。どういう聞き方をしてたんだろ？　あ、ごめんね。途中で口挟んじゃった。わたしのわるい癖だよね。てへ。いいよ、続きをお願いします」
　それ以上、何もスクネは言わなかった。最も、名前すら口にする気は当初なかったはずだったのだが。
　カグヤ「ひょっとして終わり？　名前しか言ってないよ、きみ。いくらなんでもそれはひどいよ。普通は姓も言うものだし、あと、少しぐらい自分の事を紹介ぐらいしてよね。わかった？」
　言われている事の真意が理解出来ず、スクネはわずかに混乱する。理解不能、それでも目だけは離せない自分が、更に不可思議だった。
カグヤ「うーーん。と言っても埒が明きそうにないから、わたしが質問するから、それに答えてね。ちなみに質問は三つだよ
　内心「よっとで本題か」と思いつつも、スクネはどこか寂しさを覚えていた。何が寂しいのかも理解出来ず、そういった心情の変化に自分でも驚きながら。
カグヤ「では、質問その一。あなたの生まれた国はどこですか？　わたしは狗奴国（くなこく）で生まれたんだよ、知ってた？　まあ、小さい時しかいなかったから、記憶が曖昧なんだけどね。でもね、今の狗奴国（くなこく）の大王アシハラシジョウコウって人はわたしの叔父さんなんだよ。すごいでしょ」

内心「生まれた国に何の意味がある」と思いつつ、スクネはカグヤの眼を見る。

カグヤ「きみは、どこどこ？　邪馬台国の一部だろうから、うーん、やっぱ都の邪馬一国（やまいこく）？　それとも、案外この国だったりして」

まったく理解出来ないが、カグヤは眼を輝かせていた。その眼を見ていると、催眠にかけられたかのようにスクネは言葉を口に出してしまう。

スクネ「おれに生まれた国などない」

カグヤ「これも教えてくれないか。まぁ、いいや。しゃべってくれたし。じゃあ、質問そのニ。あなたの好きな食べ物は何ですか？　ちなみに、わたしはりんごが好きだよ。小さい頃にお父さんとお母さんが、いっぱい、いっぱい取ってきてくれたんだよ」

スクネ「そんな無駄な質問はフツヌシタケヒコに聞くといい。あの男が知っているらしい」

カグヤ「えぇぇぇぇ！　タケヒコが知ってるの？　なんでだろ？。うーん、あとで聞いてみよう」

笑顔、驚き、思考、次々に表情を変えてから、遂に表情が真剣そのものになる。

カグヤ「質問その三……」

三つ目の質問をしようとすると、カグヤは頭を下に向け躊躇しているようなしぐさを見せる。声にも今までのような元気さがなくなる。表情と態度にあからさまな変化を見せるカグヤに、スクネは身構えて言葉の続きを待った。

そして、意を決したようにカグヤが恐る恐る口を開く。

カグヤ「ツクヨスクナって、だれか知ってる？」

その名を聞いてスクネは深い悲しみや絶望、羞恥心や罪悪感、他にも色々な感情が込み上げてきて、目の前が真っ白になった。そして、その名に対する怒りと憎悪で感情が一色に染まる。

スクネ「おれはスクネだ！　二度と……二度と、その名を口にするな！」

怒声。感情を爆発させてスクネは声を張り上げた。驚いたのか、カグヤの目が大きく見開かれ、泣きそうな表情になる。

怒りで我を忘れているスクネは言葉をまくし立てる。

スクネ「二度とその名を口にするな！　もう一度口に出してみろ。すぐに、その場で殺してやる！」

カグヤ「ごめん。でも、そこまで怒らなくていいじゃない！　わたしだって……わたしだって……なんでこんな事聞いたかわからないんだから！」

涙を流し、身体を震わせながら、カグヤは逃げるように去って行こうとする。その姿を見てスクネの頭が急激に冷える。

スクネ「……待て……」

思わず漏れたスクネの言葉にカグヤが踏みとどまる。

カグヤ「まだ何かあるなら早く言ってよ。わたしだって、わたしだって」

背中を見せたままカグヤは振り絞るように、泣きそうな声で言った。続ける言葉がスクネにはない。なぜか本人すら分からずに反射的に止めて、スクネ自身が動揺している位なのだから。

仕方なく、他に言葉も思い浮かばず、スクネは謝罪の言葉を出そうとした、その時だった。

スクネ「突然怒鳴ってすまなかっ……ふせてろ！」

轟音と共に天井から瓦礫が落ちてくる。拘束具と牢の格子を力ずくでスクネは壊し、落ちてくる瓦礫からカグヤを守る。それはまばたきするほどの一瞬で行われた。

鬼と妖鬼3

崩れ落ちた瓦礫が山を作り、無くなった天上から日の光が入る。
スクネ「さっきの謝罪代わりだ」
カグヤ「助けてくれたの？　ありがとう」
スクネ「カグヤ、死にたくなければおれから離れるな。敵は空から狙っている」
天からカグヤを隠すように手を広げて、スクネは天を睨みつける。
カグヤ「うん、わかった。離れなかったらいいんだよね。そのかわりきちんと守ってよ」
天から脅威が降りて来る。美しい白銀の髪に、艶やかな眼、くっきりとした眼鼻立ち、妖艶な美しさを持つ女性。その妖艶な姿に、空気すら凍りつくかのような寒気がスクネの肌を冷やす。降りて来たのはアメノ　タマモ。一体一で戦っても勝てるかどうかは運頼みになる相手。まして、今はカグヤを守りながら戦うしかない。
そして、その勝算が皆無に等しい事が頭を駆け巡る。

天を浮遊する脅威が笑みを浮かべる。
タマモ「ふふふ。さすがスクネ。でも、あなたにはもっと活躍して信用してもらわないと困るのよ。わたしの為に」
轟音を聞いて駆けつけたのだろう、兵士が数人やって来た。その中の指揮官と思われる兵士が口を開く。
兵士「カグヤ様、お怪我はございませんか。ないのでしたら、早くこの場をお離れください。この者はわたし達におまかせください」
号令と共に、兵士達が剣を突き付けるがスクネは気にも留めない。目を、全身を、脅威に対してだけ集中させる。
あからさまにスクネに敵意を見せている兵士達を、カグヤが言葉で制止する。
カグヤ「この人はきっとだいじょうぶだよ。敵じゃない。わたし

をさっき助けてくれたし、守ってくれるって」
兵士「ですが……その者は王を暗殺に来た者と聞いております。とても味方とは思えませんが……」
カグヤ「わたしがだいじょうぶと言ったらだいじょうぶなの！いい？わかった？　だから、わたしのことよりも自分の身を守る事に専念して」
スクネ「カグヤ、くだらない会話はやめろ。今は戦いに、タマモに集中しろ。そうしなければ、一人残らず死ぬことになる」
耳に入って来た不毛としか思えない会話に、スクネはいらつきを覚え、口を挟んだ。それでも目と意識は、タマモから決して逸らさない。否、カグヤを守る以上、それ以外の事を気にしている余裕など、スクネにはなかった。
タマモ「ふふふ。姫様は正義の味方さんの言うとおり、おとなしく隠れていなさい。でも……周りに散らかっている失敗作は、別に今のままでもかまわないわよ。面倒だからさっさと壊れてくれた方が、わたしも楽でいいわ」
余裕の笑みを見せるタマモの言葉一つ一つが、スクネの全神経を刺激する。必然的に、矛を握る手に力が入る。
タマモ「ふふふ。本気でわたしと戦う気かしら、スクネ？　そういえば、あなたとは戦う機会、千年前もあまりなかったかしら」
スクネ「そのために攻撃して来たのだろう」
タマモ「あたり。さすがスクネ、失敗作と違って賢いから、話が早くて助かるわ」
言葉と共に弓をタマモが構える。
カグヤ「あの人、矢を持ってないよ。さっきので、きっと撃ちつくしたんだよ」
背中にタマモが背負った空の箙（えびら）を見たカグヤが言った。その言葉に、タマモも、スクネも耳を貸さず、場の緊張は最高潮に達する。
タマモ「一（いち）にして百（ひゃく）なるもの天之羽々矢（あまのはばや）」
スクネ「全員ふせていろ」

空の箙からタマモが矢を取りだす。その矢を即座に射って来る。次の瞬間、一本しかなかったはずの矢が百本に増加して、天から降り注ぐ。逃げ場のないほどの矢が雨となって降り注ぐ。

冷静にスクネはそれに対処する。

スクネ「零にして無に等しきもの天之壽矛」

そう呟くとスクネは、天之壽矛と銘付けられた矛を頭上で回転させる。矛の軌道は円となり、その円は盾となり、降り注ぐ矢を防ぎ続ける。

百本の矢全てを、スクネは一歩も動かずに叩き落した。

カグヤ「なんで、矛の間合いに入ってもいない矢まで落とせたの？　あの人、矢を生み出したの？」

当然の疑問をカグヤが口にする。その問いにスクネは答えない。否、正確にはそんな余裕がない。すでに次の攻撃の準備に入っているタマモに備えるために。

タマモ「ふふふ。天之壽矛の能力を使ってまで守るわけね。今ので本当は、回りに散らかっている失敗作を壊すつもりだったのだけど……少しだけ予定がかわったみたい」

弓につがえた矢をタマモが引き絞る。第二射に備えてスクネも身構える。

その時、女の声が響き渡った。声の主はヒミコ。巫女が使い得る精神感応の力を使い、ヒミコは脳へ直接語りかけていた。

しかし、その強力の力ゆえに、その声の美しさゆえに、スクネ達には空間全体が響いているように聞こえた。

ヒミコ「タマモ、ナガスネがタケヒコに敗れた。気付かれる前に連れ帰って来てほしい」

タマモ「ふふふ。面白い冗談ね！　わたしにあんな物を持って帰れと？　あなたもあんな物にもう用はないでしょう？」

ヒミコ「それはそなたの考える事でない。あの者にもまだ役はある。それに……今はまだ知られたくない」

タマモ「わたしに命令でもする気かしら？　でも……あなたの気持ちも理解してあげる。いいわ、そのかわり、これは貸しにしとくけれどいいのかしら？」

ヒミコ「かまわぬ」

二人の会話の間隙をスクネは探したが見つからず、結局、タマモに手を出せなかった。

カグヤ「誰と精神感応の力で話しているのか知らないけど、そんなところに、いつまでもいないで降りてきなさいよ！　さっきみたいに矢を降らせてくる気！　だとしても無駄なんだから！」

天を浮遊するタマモに、大声でカグヤは言った。

タマモ「ふふふ。なにもできないお姫様が言う事でもないわね。あなたには悲劇の女主人公になってもらっても問題ないのだけれども……こちらも用事が出来たから、今日は見逃してあげる。感謝なさい」

弓につがえた矢を消すと、タマモは再び空高く舞い上がり始めた。

それを見たカグヤが叫ぶ。

カグヤ「そうやって逃げるんでしょうけど、逃がさないんだから！　スクネ、おねがい！」

スクネ「去るのなら、攻撃する理由がない」

タマモ「だそうよ？　スクネ、また会いましょう。お姫様も、生きていたら会いましょう」

そう言い残してタマモは去っていく。一応、タマモに意識を残しつつも、スクネは矛を消すと、適当に座れる場所を探した。

悔しがって地団太をカグヤが踏む。

カグヤ「なんか頭にくるよ。なにが「お姫様も生きていたらまた会いましょう」だよ……って、あの人が行った方向シンム達の所だよ！　スクネ、追うよ！」

何かに気付いたカグヤが、タマモの去った方向を指差しながら大声を出した。

スクネ「なぜ追う必要がある。少なくとも、今はおれたちにこれ

以上は害を加えない。だから、ヒミコはあからさまに聞こえるように精神感応の力を……」

座るのに丁度好さそうな瓦礫をスクネは見つけた。

カグヤ「いいから一緒に来るの！。いい？わかった？。わかったなら行くよ」

スクネ「あ、ああ……」

瓦礫の上に座ろうと、腰を下ろしかけていたスクネの左手をカグヤが掴んだ。そして、スクネは強引に引っ張られ、言葉の勢いに呑まれて仕方なく共に向かった。

轟音が轟いて以降、カグヤを助けに行こうとシンムは躍起になっていた。なのに、ナガスネが街への方向を塞ぎ通れない。あせりの色だけが、シンムの心に広がっていく。

シンム「邪魔だ……どいてくれ！　姉貴のところに行かせてくれ！」

強引に通ろうとして無防備になったシンムを、ナガスネの棍棒が狙う。間一髪のところで、タケヒコに飛びつかれて回避した。

タケヒコ「シンム様、落ち着いてください。カグヤ様はだいじょうぶです。ですから、この場をなんとかしましょう」

起き上がり、シンムは再び強引に行こうとして、タケヒコに手を掴まれて制止させられる。

シンム「何でそんな事がわかるんだ！　タケヒコ、いくらおまえでも適当なこと言って」

タケヒコ「心配いりません！　考えあってのことです。ですから、このナガスネを一刻も早く何とかしましょう」

掴まれた手をシンムは強引に引き剥がす。そして、大声で祈るような気持ちでシンムは言う。

シンム「タケヒコ、本当だな？　信じるからな！　嘘だったら、ぜってぇ許さないからな！」

目の前のナガスネを睨みつける。早く蹴りを付けるために。
タケヒコ「ええ……だいじょうぶです。カグヤ様はおそらく無事です。タマモが何を考えてあの様な行動に出たのかは分かりかねますが……スクネに敵対行為を取りましたから」
シンム「なんか言ったか？」
背後でタケヒコが「ええ」の後に、小声で何か言ったようにあったが、ナガスネが丁度吼えたのもあって、シンムにはよく聞こえなかった。
ナガスネ「チカラガ　チカラガ　うぉぉぉぉーーー」
シンム「さっきから同じ言ばっかり言いやがって。今黙らせてやるから、覚悟しやがれ！」
勢いよく威勢を張ってみたものの、シンムには実際どうやったらいいのか戦い方がわからない。迷っているとナガスネが棍棒を振り回す。それをシンムは受けて吹き飛ばされる。模写のような光景が繰り返されていた。
シンム「でさ、どうやったらこんな化け物……倒せんだ？」
タケヒコ「鬼の能力を封じてしまうのが一番いいのですが、ここまで強化されると、それもまた大変ですね。そうなると、こちらも鬼の能力を使えるといいのですが……使える人がいないですから」
何かつぶやきながら考え事を始めるタケヒコを見て、シンムは自らの行動を決める。そして、時間を稼ぐために、ナガスネへ跳びかかって行く。
少し経ってから、タケヒコが考え事を止め、眼で合図して来た。
シンム「何か考え付いたか？　このでかぶつを何とかする方法」
タケヒコ「ええ、だいじょうぶです。ナガスネの動きをわたしが止めます。その間にシンム様が封印呪の首輪を掛けて下さい。鬼の能力さえ封じてしまえば、どうとでもなりますから」
信じられない位、タケヒコは簡単に言った。手が付けられないほどの強さを見せる、ナガスネの動きを止めると。
シンム「「止めますので」って……こんな化け物みたいなやつ、

止めれんのか？」
　タケヒコ「それは問題ありません。どうやら身体を硬くしただけのようですので、動きを止める位なら可能です」
　内心で「本当かよ」と思いつつも、シンムはその言葉を信じる。
　シンム「なら、任せるからな？　おれも今度はきちんと首輪を掛けてやる。さっさと姉貴の所に行くんだ！」
　タケヒコ「ええ。まかせて下さい。この位なら……本気は必要ありませんから」

　僅かにタケヒコが殺気を放ち始める。その殺気に呼応してナガスネが咆哮する。
　ナガスネ「チカラガ　チカラガ　うぉぉぉぉーーー」
　その間に、シンムは封の字が書かれている呪の首輪を握り締めて、タケヒコとナガスネの戦いに巻き込まれないようにわずかに距離をおいた。
　タケヒコ「では、あなたには申し訳ないのですが、少しだけ本気にならせて貰います。ですから、先にあなたに謝っておきます、すみません」
　殺気を放ちながら頭を下げるタケヒコ。馬鹿にされたと思ったのだろう、咆哮しながら、ナガスネがタケヒコの頭上目掛けて棍棒を振り下ろす。横に動いてタケヒコがその一撃を避けたために、棍棒が地面を叩き、大きな音が打ち鳴らされる。そして、タケヒコが小金丸（ガネマル）と銘づけられた剣を一閃するとナガスネの腕に傷が入る。傷は浅い。棍棒を払うべく、振りかぶったナガスネの眉間を、タケヒコが蹴飛ばす。その反動で後ろに飛び退く。そして、咆哮と共に、タケヒコの着地点に目掛けてナガスネが突進する。着地と同時に剣を地に突きたてると、タケヒコは突進して来たナガスネの両手を掴み、腹部を蹴り上げ、（巴投げで）投げ飛ばした。
　投げ飛ばされたナガスネが、今度は自らの身体で地面を打ち鳴らす。
　タケヒコ「今です、シンム様！　首に封印呪を掛けて下さい」

シンム「タケヒコ！　あとはまかせろ」
立ち上がろうとするナガスネの首に、シンムは背後から近づいて封印呪を掛ける。直後、頭突きを胸に喰らい、シンムは飛ばされた。
呪の力で、ナガスネの強化が解けていく。
ナガスネ「ナクナル　チカラガ　ナクナル　オデカラ」
シンム「よっしゃあ。これで、だれが馬鹿か決定したも同じだぜ。やっぱ、おれじゃなくてこいつだった」
もがくナガスネを見ながら、シンムはそう口にした。
タケヒコ「シンム様、まだその様な事を気になされていたのですか」
シンム「うるせぇ。おれにとっては重要な問題だ！」
呆れ気味につぶやいたタケヒコの言葉に、シンムは本心からそう反応した。それを聞いたタケヒコが顔に手を当てて、何か小声でつぶやく。
タケヒコ「あとから、改めてお話しする必要がありそうですね。ですが、とりあえずこの戦いに決着を付けてしまいましょう」
封印呪の首輪をはずそうとして、もがくナガスネに近づくと、タケヒコが目を閉じ、頭を下げる。そして、タケヒコから表情が消える。
剣を振りかざし、タケヒコが止めの一撃を振り下ろそうとした瞬間、一本の矢が飛んで来た。剣はそれを弾くために振り下ろされる。
タマモ「はずれ、残念ね。わたしはそんな物に興味ないのだけど……ヒミコが連れて帰れと言うから、タケヒコの思い通りにはさせられないの。ごめんなさいね」
天に悠々と浮かびながらタマモはそう言った。そのタマモをタケヒコが睨みつける。あきらかにナガスネに放った以上の殺気を放ちながら。
タケヒコ「タマモ、やはり先程の轟音はあなたでしたか。それにしても、なぜあなたは彼女の側に付いているのです？」
タマモ「ふふふ。あなたにその質問をする権利があると思って？

裏切り者の、あなたに」

余裕なのか、それとも馬鹿にしているのか、浮遊するタマモは横になる。それも手が届く程の高さまで降りて来て。

タケヒコ「権利の問題ではありません。彼女とあなたの方が、そもそも敵どうしだったはずですが？」

タマモ「まだ聞いて来るの？　まぁいいわ。それならまた今度お話しましょう。お茶でも飲みながら、ゆっくりと」

タケヒコ「なぜわたしがあなたとお茶を飲む必要があるのです？」

不毛な会話をするタマモは楽しげだった。

シンム「タケヒコ、何を話してんだ？。あいつ敵だろ？。だったらさっさと倒しちまおうぜ！」

剣の切っ先を浮遊するタマモに向ける。その態度にも、その口調にも、シンムは無性に腹が立った。

タケヒコ「シンム様！　今すぐ出来る限り遠くに、皆さんと離れてください！　この場は、わたしが何とかいたしますから」

帰って来たタケヒコの返答には、明らかに動揺の色があり、その表情には今日まで見たことない程の焦りの色があった。

タマモ「怖い怖い。無知な坊やは本当に怖いわ。本当に怖いから今すぐ壊してもいいのだけれど……特別に壊さないで上げる。だから、わたし達の会話に口出ししないことね」

シンム「坊やって、おれのことかよ！　いいぜ！そんな簡単におれを殺せるならやってみやがれ！」

頭にきて、シンムは怒声を上げた。

タマモ「坊やは本当に死にたいようね？　でもいいわ、特別に許してあげる。だって今日から始まったのだから。ふふふ。いきなり配役を一人減らしてもつまらないでしょう？　脇役としてあなたも舞台に上がってくるのだから」

余裕の笑みをタマモが浮かべている。

タケヒコ「シンム様、お願いですからこの場を離れてください」

願う様に、祈るようにタケヒコは言う。それがシンムには余計に

腹が立った。少し位は自分よりも強いかもしれないが、何とかしてみせると強く思う。

シンム「何が始まったって言うんだ！　訳のわからねぇ事ばっか言ってねぇで、かかってきやがれ！」

威勢よくシンムは言った。いつ攻撃して来ても対処できる様に構えながら、こちらからいつでも仕掛けられる様に構えながら。

タマモ「ふふふ。もちろん、あなたのようなお馬鹿さんにはわからないでしょうとも、坊や」

シンム「馬鹿だと！　てめぇ、今の言葉、訂正させてやる！」

剣を強く握りしめ、シンムは飛び掛かろうとして止めた。遠くから走ってくる者が目に入る。だから、中断して大声で叫ぶ。

シンム「姉貴！　こっちに来んじゃねぇ！」

横目でタマモも、その者達に目をやる。

タマモ「ふふふ。時間切れみたいね。最期に無駄な失敗作と口を聞いたのは余計だけれど、有意義な時間だったわ。タケヒコ、また会いましょう」

軽い荷物を持つように大男のナガスネを片手で簡単に持ち上げると、タマモは天高く浮遊を開始した。

悠々と浮かぶタマモを包囲して、円になっていたヤカモチ達に、タマモを逃さないためにシンムは指示する。

シンム「逃がすか！。ヤカモチ、矢を浴びせてやれ！」

ヤカモチ「了解しました。総員……」

弓兵たちが矢をつがえて、浮上するタマモに一斉に向ける

タケヒコ「いけません、ヤカモチさん」

血相を変えながらタケヒコは制止した。その制止が聞こえたのか、弓兵達が攻撃を止める。

シンム「なぜだ！　この場で、あいつ倒してしまおうぜ！」

制止された意味がわからず、シンムは食って掛かった。

苦しげにタケヒコが答える。顔色を信じられない程に青くしなが

ら、はっきりとしない口調で。
タケヒコ「無理ですシンム様。あの高さでは届きません。それに……」
弱弱しく「それに」と言った後、タケヒコは何も言わない。ただタマモの消えた天を見上げたまま、立ち尽くしていた。

鬼と妖鬼４

近くにあった木に、スクネは寄りかかった。別段、疲れているわけでもなく、この場に留まる必要性も感じなかったが、なぜか動く気にもなれなかった。だから、木に寄りかかって会話を聞いていた。

全力でここまで走って来たためだろう、カグヤが息を切らしている。それでも声は元気だったが。

カグヤ「シンムが無事でよかったよ」

シンム「それはおれの台詞だ！　すげぇ音が聞こえて、一時はどうなることかと思ったぜ。ちょっと待ってくれ、姉貴。横にいるのは……おれを殺しに来た奴じゃねぇか！」

木に寄りかかっているスクネに、シンムが人差し指を差す。自分の事を何か言っているようだが、スクネは特に気にもならない。他人事にさえ感じる。なのに、不思議と耳に流れて来る会話は心地いい。

カグヤ「えっ、そうだよ。それがどうかしたの？　まさか、そんな事気にしてる？」

シンム「気にしないわけねぇだろ！　姉貴、なんでそいつといっしょにいるんだ？」

カグヤ「スクネがわたしを守ってくれたんだよ。だから、いっしょにいてもおかしくないでしょ」

シンム「なんで、そいつが姉貴を助けんだよ？」

カグヤ「うーん。そう言われたらそれもそうだね。そんなこと考えもしなかったよ」

漫談の様なシンムとの会話を中断して、大きな瞳をカグヤはスクネに向けて来た。理由を聞こうとしているのだろう。

なぜ助けたのか自分でも考えたが、スクネ自身よく分からない。確かに、あの時「謝罪代わり」とは言ったが、それが本当の理由かどうかは、実際の所よくわからない。ゆえに、質問の答えを持って

いない。
瞳を輝かせながらカグヤが近寄って来た。
カグヤ「スクネ、きみに今からいくつか質問します。なんで助けてくれたの？」
スクネ「……ついでだ」
だから、聞かれても、そう答えるしかスクネにはなかった。
カグヤ「「ついで」ってさ……」
諦め加減でカグヤは言った。どうやらスクネがそう答えるのを、勘か何かで感じていたのだろう。表情は「やっぱり」といった、色をしていた。
何かが気に障ったのか、顔を真っ赤にしてシンムも近づいて来る。
シンム「「ついで」って……ふざけてんのか！　そんな訳のわからない理由で、姉貴を助けてくれたって言うのかよ！」
明らかに怒りの色を見せているシンムは、大声を上げた。その表情の変化を見て、スクネは内心ため息を吐く。そもそも、本音を言ったから他に答え様がない。もっとも、その「ついで」という言葉が気に障ったのだろうが。
シンム「ふざ……な……んと……ゆ……あ……ろ」
拳を振り上げ、シンムが更に怒声を強め、何か言おうとしている。しかし、タケヒコから羽交い絞めにされ、更には口を塞がれているために、声にはならなかった。
その行動に対して、カグヤが「よくやった」とでも言いたげに、タケヒコに何回か頷いた。
タケヒコ「すみません、シンム様。話が進まないので少し黙っていてください。カグヤ様、続きをお願いします」
カグヤ「タケヒコ、シンムを黙らせといてね。うるさいから」
もごもごと動いて、シンムが何か言っているがまったく聞こえない。その姿をカグヤは確認してから、再び目をスクネへと向けた。大きな瞳を輝かせながら。
カグヤ「じゃあ、初めから。もう一回質問するよ。なんで助けて

くれたの？」
スクネ「ついでだ」
他に答えようがスクネにはないので、当然、返答は同じ。
カグヤ「それはさっきも聞いたよ？　さっき、確かわたしが気付く前に「ふせてろ」とか言ったよね？その後で牢壊れちゃったけど……ついでだったら、壊れるよりも先に、なんで言ったのでしょう？」
答えようもなく、スクネの返答は無言だった。
カグヤ「また、何も言わない気だね？　いいよ、絶対に聞き出すから！　それなら、次の質問です。矛を持ってたよね？　あれ、何処から出して、何処に置いたの？」
それなら別に答えても問題を感じなかったのだが、タケヒコが声を震わせながら横から口出しして来たので、答える機を逸した。
タケヒコ「な、な、そ、そんな事はどうだっていいでしょう。他の質問にしましょう」
何をタケヒコが動揺しているのかとスクネは思う。もしも、あれの事を知られたくないなら適当に流せばいいだけ。もっとも、昔からタケヒコはそれが出来ないのだが。
カグヤ「なんで、タケヒコがそんなに慌てるの？　タケヒコには関係ないじゃない。そういえばさっき、スクネが自分の好きな食べ物をタケヒコが知ってるような事を、言っていたような……」
タケヒコ「ほ、他の質問をお願いします、カグヤ様」
カグヤ「ははーん。さては、話題を変えようとしてるね。シンムの得意技を盗んでも、わたしには通用しないよ」
あらためてスクネは感心させられる。意外ではあったが、カグヤはどうやら勘が鋭いようだと。
タケヒコ「カグヤ様……あとから、スクネの好きな食べ物を何故、知っているかは話しますから。話を先に進めて、次の質問をお願いします」
カグヤ「仕方ないなぁ。スクネに最期の質問をします。きみ、ひ

ょっとして……わたしに惚れた？」

まったく予想出来ない質問に、スクネは文字通り言葉を失い、寄りかかっていた木からずれ落ちそうになる。おそらくタケヒコも動揺したのだろう、抑えていたシンムを放したようだ。

シンム「何言ってんだ姉貴！　それ質問なのか！」

何となく認めたくないが、シンムの言葉にスクネも同感だった。

カグヤ「なによ！　質問に決まってるでしょ！　だって他に思いつかなかったんだもん。助けてくれた理由」

シンム「理由は、べつに姉貴が考える事じゃないだろ！　今それを聞いてたんだろうが。まったく、姉貴は訳わからない事言い出すから」

カグヤ「あんたなんか、いっつも訳わからない事ばっかり言ってるし、そのうえ訳わからない事ばっかりやってるじゃない！」

二人が口喧嘩を始めた。くだらないと頭で思いながらも、不思議とそれを眺めるのが心地よい自分に、スクネは戸惑いを覚える。

タケヒコ「二人とも喧嘩はおやめください！　結局、二人して話を脱線させているじゃないですか」

カグヤ「ごめんなさい」　シンム「ごめん」

一括されたカグヤとシンムが同時に謝る。

場の空気を変える為だろう、あからさまに咳払いをしてから、タケヒコは話題を変えた。

タケヒコ「とにかく、スクネの処分を決めましょう。牢に閉じ込めておくのかどうかを」

カグヤ「今さら、牢に入れたり出来る訳ないじゃない。何言い出すんだよ、タケヒコ。わたし、助けてもらったんだよ」

内心「タケヒコの意見は当然だろう」と、スクネは思う。少なくとも、自分なら間違っても信用などしない。

これまでの会話から、そうはまったく見えない、この伊都国（いとこく）の王らしいシンムが、両手を頭の後ろに組みながら返答した。

シンム「どうしよっかなー。こいつおれを殺しに来た奴だからな。

やっぱさぁ、危険だから牢に閉じ込めてしまった方が安全じゃねぇかなー。だろ、姉貴？」

にやにやしながらシンムが、カグヤの反応を楽しむ様に揶揄しながら言った。

カグヤ「シンム！　わたしを助けてくれた人を閉じ込めてどうするの！だいたい、シンムを暗殺に来たけど失敗して、生きてるし」

シンム「生きてたら悪いのかよ！　だいたい、姉貴の方こそこいつに惚れたんじゃないのか！」

カグヤ「な、何言ってんの！　シンムの方こそ昔の事を気にするなんて人間が小さいでしょうが！」

シンム「姉貴が先に訳のわからない事を言い出すからだろ！　それに殺されそうになったのを、気にすんなとか無理に決まってんだろ」

再び、二人は喧嘩になる。

タケヒコ「二人とも、また喧嘩ですか。とりあえず、あの二人は放っておきましょう」

疲れたように言うが、二人を見るタケヒコの表情からは、それが伺えない。

タケヒコ「牢にはもう戻る必要はありません。基本的には、意味のないことですし。ところでどうです？　このままここに残って、スクネもわたし達の力になってくれませんか？」

スクネ「断る」

即答した。本当は断る理由もなかったが、受ける理由もなかったから、スクネは純粋に面倒だった。

タケヒコ「そうですか……仕方がありません。あなたはこれからどうするつもりですか？」

スクネ「何も決めていない」

タケヒコ「でしたら、この国の近くに住むところを用意しますので、とりあえずそこで暮らしたらどうです？」

スクネ「任せる」

住む場所などどうでもいいと思いつつも、タケヒコの最後の提案は妙案のように聞こえた。それでこの伊都国（いとこく）に残った。

邪馬一国（やまいこく）のはずれにある深い森の奥深くで、女が呪を耳に当てながら泉を眺めていた。
呪からは詩が流れていた。

いと思ふ　いとしの君に　木漏れ日で
出会ふた事も　いと悲しかな

呪から流れる詩に耳を傾ける女の瞳は優しさに満ち、その微笑に応えるように小鳥がさえずる。
能面をかぶった男が立っている。その男は、その存在自体が何処か虚ろで、景色に溶け込んで今にも消えそうだった。
背後に立ち尽くす男に、女は話しかけるようにつぶやいた。
女「あの日から何も変わらない景色。ここだけは、あの日々の美しさを残している。わたしも、あの人も、他の人も、変わりすぎるぐらい変わったのに……ここだけは千年経っても変わらない。救いとは、この景色を言うのでしょう」
立ち上がり、女、男を抱きしめ、決意するように言葉を強めた。
女「もう少しです。もう少しで血のない、暖かさのない身体から、完全に開放します」
人形のように無言で、男は女の為すがままとなっていた。

伊都国の日々

伊都国の街並みから少し外れた場所、周りには他に人影のない山のふもとに、スクネは家を建て住んでいた。邪馬一国に住んでいた時と違い、大陸から渡って来た渡来人の作る住居でなく、竪穴式の一般的な住居だった。とはいえ、雨風をしのげれば特に問題なく、住居の変化は気にする必要性などなかった。しかし、日々の生活は大きく変化していた。

邪馬一国にいた頃と同様、午前中は訓練に励み、それが終わると横になる。そうしていると、昼前には来客が毎日のように現われた。なぜ自分の所に来るのかスクネには理解しがたがったが、彼女にそれを聞いても「楽しいから来てるんだよ」としか言われない。結局は、日が暮れるまで一緒にいる日が続いた。

いつものようにスクネが訓練を終えて帰宅すると、家の中から気配を感じた。その気配に心当たりのあるスクネは特に警戒もせず家に入った。

カグヤ「あっ、帰って来たんだ……今日は寝てなかったんだね？それがいいよ、寝てばかりだとシンムになっちゃうし？」

何かを背後でごそごそとカグヤがあさっている。

スクネ「今日は、おまえがいつもより来るのが早かっただけだ。それよりも、ここに何をしに来た」

カグヤ「何しにって……いつものように暇つぶしに来たんだよ、てへ」

当然のようにカグヤは胸を張り、満遍の笑顔を見せる。その笑顔にスクネは調子を崩される。そのため、横を向いて出来得る限り顔を直視しない様にしながら、あきらめ半分で何度言ったかわからない言葉を口にした。

スクネ「……帰れ、ここに来る必要性はないはずだ」

カグヤ「まーた、そんなこと言うし。いつもいつも、きみも同じ事言ってあきないよね」

本気で感心したようにカグヤが頷く。それを聞いたスクネにはため息しか出てこない。会話かどうかもわからない会話の後、カグヤは後ろを向いて何かを再びあさり出している。そして、カグヤが背中に何かを隠しながら、うれしそうに声を弾ませ振り向いた。

カグヤ「今日は釣りに行こう、釣り。きみ、上手いらしいからね。タケヒコから聞いたよ」

スクネ「道具がない」

おそらく背中に隠しているのがそうだろうと内心思いつつも、スクネは言った。

カグヤ「じゃーん。そうだろうと思ったから、準備して来たよ。魚が好きって聞いたけど、一回も釣りしているの見たこと無かったからね」

予想通り、カグヤが嬉しそうに釣竿を見せる。

スクネ「別におれが好きなわけでは……」

カグヤ「川は、ここからだとちょっと遠いから、すぐに行こうね。急いでスクネも準備しないと」

あまり乗り気でないスクネを無視して話は進む。そして、カグヤの勢いに呑まれて、共に行くことに決めた。

日が天高く昇った頃に二人は川に着いた。着くとすぐに釣りを開始して、二時間あまりの間に、スクネは魚を数十匹釣り上げた。決して釣りが好きではないが、スクネの得意ではあった。そうなった理由は覚えていないが、かつて釣りばかりしていた日々があったから。

好奇の目で横から見ていたカグヤは、スクネが魚を釣り上げるたびに大声を上げて喜んだ。釣りの際の作法などあったものでなかったが、不思議と魚に逃げられる事もなかった。

カグヤ「あっ、また釣れてる！　すごーい、タケヒコが言ってたけど、ほんっとうにきみ、釣りの名人だね」
スクネ「おまえはやらないのか」
カグヤ「えっ、わたし？　だめだめ、わたし釣りなんてぜんぜんだめだよ。大地ならすぐ釣れるんだけどね」
手を何度も振ってカグヤが全身で無理と主張する。半ば無理やり、スクネはそんなカグヤに釣竿を手渡した。
スクネ「教えてやるから、やってみろ」
頬を膨らませ、カグヤが竿とにらめっこする。
カグヤ「うーん、仕方ないなぁ。一応やってみるけど、どうなっても知らないよ？」
針の先に付いた餌が水の中に消える。水の上で緩んでいた糸がその重りで水の中に引きこまれ、ぴんと張って止まった。その状態で十分程経つと、カグヤが横目で見て来た。
カグヤ「……大地釣っちゃった」
釣竿を強引に振り上げているためか、釣竿は今にも折れそうな曲線を描いていた。
スクネ「仕方ない……貸してみろ」
カグヤ「うん。もう糸を切るしかないと思うよ」
スクネ「その前に、それでは釣竿が折れ……」
カグヤ「はい。針、残ってるといいね」
幸いにもまだ折れていない釣竿をカグヤから受け取ると、スクネは川の底に引っかかった針を取るために釣竿を左右に動かす。針は予想に反して比較的簡単に外れた。
その動作を見ていたカグヤが素直に感心する。
カグヤ「すごーい。針、残ってる。ほんっとうすごいね、きみ」
スクネ「たいしたことない」
カグヤ「それって……わたしへの嫌味？　だとしたら、きみ、性格悪いよ」
どう返事したら良いのかわからず、スクネは口を歪ませて黙った。

カグヤ「じょ、冗談だよ。きみ、嫌味とか言いそうにないしね。気を悪くしたならごめんね」

スクネ「気にはしていないが……もう一回やってみるか」

釣竿を渡すがカグヤは受け取らず、空を見上げる。いつのまにか日が落ち始め、空が赤く染まっていた。

カグヤ「うーん、まだやりたいんだけど……今日は出来る限り早く帰って来て欲しいって、タケヒコに言われてるからね。それに、暗くなる前に戻らないと、きみに何されるかわからないしね。わたし、かわいいから」

スクネ「帰るぞ」

カグヤ「ちょっと待ってよ」

さっさと帰り始めたスクネを、あわててカグヤは追い掛けた。

伊都国の街にカグヤを送り届ける途中、ふとした拍子で倭国大乱の話になった。その戦いをスクネはまったく知らない上に、特に興味もない話だった。

カグヤ「これが倭国大乱って、向こうが勝手に言っている戦いなんだよ！　わたし達全然悪くないのに悪人扱い、ひどすぎるでしょ！」

無言でスクネは倭国大乱の概要を耳に流していた。特に興味を惹くような話ではなかったが、帰路の余暇をつぶすには丁度良い話だった。

邪馬台国の次期大王の座を、当時の伊都国王が有力視されていたが、結局は不繭国王が就任した。それは、謀略によるものらしく、大王を決める際、邪馬台国に加盟する王による会議の前に、伊都国派の者が一人残らず殺さていたのが要因らしい。

そして、新大王が就任後、当時は盟を結んでいた狗奴国に出兵する。出兵は狗奴国の大王アシハラシ　ジョウコウの前に失敗で終わる。敗戦後、土地や賠償の代わりに、なぜか当時の伊都国王の皇太

子が人質になって狗奴国に赴く。
狗奴国では皇太子がカグヤの母と出会い、契りを結ぶ。
数年の狗奴国滞在の後、邪馬台国に皇太子が帰ると邪馬台国の大王に妻を差し出せと言われたが、断りを入れる。結果、それが発端となり叛に発展する。そして、大王を討つまではよかったが、新しく女王に就任したヒミコに、親子共に討たれた。
それで倭国大乱は幕を閉じた。

話をしている間に、伊都国の街並みを守る大きな門が迫っていた。
カグヤ「ここまででいいよ。もうちょっとで着くから、一人でだいじょうぶだよ」
スクネ「ああ」
カグヤ「また今度、釣りしようね。今度はわたしも魚を釣るんだから。話聞いてくれてありがとね」
無理やり作った笑顔を見せながら、カグヤは手を振って門の中へと消えて行った。それを見届けてからスクネは帰路に着いた。

眠りを誘う。この言葉の意味を、シンムは自分ほど理解している者はいないだろうと思う。否、確信していた。なぜならば、現在の自分が置かれている状況がそうなのだから。
ヤカモチ「このように経済とは極めて重要であり、経済を無視すると国が混乱するため、とても注意が必要です」
教授するヤカモチの言葉の一つ一つが、子守唄のようで、脳に心地よい響きを与え、木簡の書を持った手の力を奪っていく。首が頭の重みに耐えかねるように、前に、横にと傾く。圧倒的な催眠効果の前に、抵抗空しく、シンムの眠気はすでに限界を超えかけていた。
ヤカモチ「シンム様。それでは、今日の講義をこれで終わらせていただきます」
シンム「寝寝寝寝寝寝……ああ。終わった?。よーし、これで今

日の作業終わったぜ！。長かった、実に長かった」
　そのヤカモチのうれしい一言が、シンムを睡眠の世界から叩き起こす。目が覚めると、すぐに肩の疲労を拭うようにシンムは背伸びをした。勉学の間は圧迫される様に狭く感じた空間が、その途端に無限の広さを持つようにさえ感じた。
　それを見たヤカモチがしかめっ面をする。
　ヤカモチ「それはよかったですね、シンム様。しかしながら、その様な言葉は、せめて、わたしが去ってからにしてもらえますか」
　シンム「ごめん。つい本音が出ちまったぜ。これからは、いなくなってからにするからよ」
　ヤカモチ「……わたしは帰ります。また明日来ます。では、失礼しました」
　あからさまに、当てつけがましく、ため息を吐いた後、ヤカモチは丁寧に会釈してから退出した。
　シンム「明日も、明後日も、別に来なくてもいいからなー。それじゃあーなー」
　元気よく手を振りながら、シンムは部屋から退出するヤカモチに聞こえるように大声で言った。

　何者かの不機嫌な声で、部屋の入り口付近から返答があった。
　タケヒコ「誰が来なくてもよろしいのですか？」
　勉学が終わるのを外で待っていたのだろう、声の主はタケヒコ。その声の主に、勉学が終わったばかりで気分のいいシンムは反射的に返答する。誰の声か特に考えもせずに。
　シンム「そりゃあ、おれの勉学のため、わざわざ毎日来てる、あいつに決まってんだろ」
　タケヒコ「なるほど……わざわざ、シンム様の勉学のために来られているヤカモチさんに、来なくても良いとおっしゃるのですね？」
　シンム「ああ、別に来なかったら、おれはそっちの方がいいに決まってんだろ。なっ、タケ……」

返答の主が姿を現したため、シンムは目を丸くして、それ以上の言葉に詰まる。返答の主であるタケヒコは明らかに怒っていた。

タケヒコ「シンム様、そこに座りなさい！　ヤカモチさんは、シンム様のために忙しい中、いらっしゃってくれているのです！　それを、今の態度はなんですか！」

シンム「……タケヒコ。おれも感謝してんだけど……だけどさぁ」

タケヒコ「だけど……なんなのでしょうか？　続きをおっしゃってくださいませんか、シンム様？」

姿勢を正して、シンムはちらりとタケヒコの表情をうかがう。怒りで震え、くだらない言葉や適当な嘘はいっさい許さないと、表情はもの語っていた。

シンム「おれが悪かった。もう2度と、こんな事言いません。だから許してくれ」

タケヒコ「許すのはわたしですか？　もしも、そのようにお思いならば……」

シンム「わかってる、わかってるって。明日、絶対謝る。今日のは、おれが悪かったと本当に思ってる」

必死にシンムは謝った。それが通じたのか、タケヒコが怒りの表情を緩めてため息をつく。

タケヒコ「勉学は、シンム様の父上はとても一生懸命だったというのに」

シンム「とうさん……」

父の記憶は、シンムが幼い頃に亡くなったため、人づてで聞いた話でしか知らない。それでも心から父をシンムは尊敬していた。

非業の死を遂げ、邪馬台国（やまたいこく）によって反乱の首謀者にされた父を……。

倭国大乱（わこくたいらん）と呼ばれた戦い。

祖母に何度も聞かされた戦い。

詳しい経緯まではシンムは聞いていない。軍略の天才と言われた

祖父の怒り、父の深い悲しみ、それを想像するだけで、シンムも胸が締め付けられるようだった。
そして、話の終わりには必ず祖母に同じことも言われた。

それだけに、タケヒコの口から洩(も)れた父という言葉はシンムを心底落ち込ませた。
シンム「とうさん……ごめん、本当にごめん。おれ、とうさんを超えると誓ったんだった」
自分の情けなさにシンムは泣きそうになった。でも、泣けない。こんな事で泣いたら父は絶対に許してくれないだろうと思うから。
タケヒコ「シンム様、どうなされたのです？」
シンム「ごめん、父さんの事を思い出してた」
タケヒコ「それはずいぶん、ひさしぶりですね。大奥様が亡くなられてから、嘆(なげ)かれなくなっておられたのですが……」
シンム「嘆いてんじゃねぇ！　ただ、四年前に王になった際に決心した事を思い出したんだ！　それで、何やってんだろと思ったんだよ」
心底シンムはそう思った。当然だが、ヤカモチが勉学を教えてくれているのも、タケヒコが剣を教えてくれているのも、すべて自分のため。それなのに……
タケヒコ「本当に、今回は反省されておられるようですね……」
そう言ったタケヒコの表情が若干曇る。落ち込んでいたシンムはその変化に気づかない。
タケヒコ「聞かれたいですか？　倭国大乱(わこくたいらん)の事」
シンム「おれも婆さんからさんざん聞かされてっから……とうさん達の事はだいたい知ってるぜ」
タケヒコ「確かにシンム様の知っていらっしゃる事もあります。ですが……大奥様があえておっしゃらなかった事もあります。そろそろ話してもだいじょうぶでしょう」
シンム「婆さんが話してない事？　タケヒコ、他に何かあるのか

？　おれの知らない事があんなら教えてくれ、タケヒコ！」
　衝動で思わず掴みかかった服をシンムが手放すと、やさしく、それでいて影のある笑みをタケヒコは漏らした。
　タケヒコ「そのつもりです。ですが……今の気持ちを忘れないでください」
　シンム「わかってるって。おれ、こんなんだから、すぐに忘れちまうけど……この気持ちは忘れない。だから、これからもおれが間違ったときは言ってくれ、タケヒコ」
　タケヒコ「その気持ちだけで十分ですよ、シンム様。明日、カグヤ様にもお話ししましょう」
　シンム「姉貴にも？　わかったぜ、だから明日、ヤカモチに謝り終わったら聞かせてくれよ」
　タケヒコ「もちろんです、シンム様」
　そう言ったタケヒコが一瞬だけ辛そうな表情を見せる。それにはシンムも気付いたが、あえて聞こうとは思わなかった。どうせ、その理由も明日わかるのだし。

崩壊1

毎朝の戦いを告げる法螺貝（ほらがい）の音。それは、タケヒコの第一声。戦いの勝者は始めから決まっているはずなのに、敵も中々に諦めが悪い。

故に、戦いは幕を上げる。爆睡するシンムを起こすための戦いが。

タケヒコ「シンム様、起きてください！」

シンム「寝寝寝寝寝寝寝寝寝寝」

必死に声を張り上げるタケヒコを無視して、シンムに起きる気配がない。このまま行けばいつも通りの凄惨（せいさん）な光景が待っているというのに。

戦いの幕開けを横で見守っていたカグヤが、満遍の笑みを浮かべながらタケヒコの肩を軽く叩く。肩を叩く際に音は出ない、それで起きたら全てが終わりを告げる。決してそのようなへまをカグヤは犯さない。もっとも、タケヒコが大声で起こしても起きない以上、いらぬ心配なのだが。

カグヤ「そんなんじゃだめだよ、タケヒコ。いつも言ってるけど、その位だとシンムは起きないよ。まだまだ、あまいよ」

明らかに肩を叩く音よりも大きな声でカグヤは言った。

タケヒコ「今日もやられるのですか……」

後ろに数歩下がるカグヤ。それを見るタケヒコはため息をつきながら横に下がって通り道を開けた。爆睡するシンムと距離を取ったカグヤとの間に遮（さえぎ）るものは何もない。

下がった所で一息着くカグヤ。それから一瞬の間を置いた後、いっきに駆け出した。一寸の狂いもなく腹に飛び蹴りが命中する。その凄惨（せいさん）な光景を目の当たりにしたタケヒコは、片手で頭を抱えながらため息をついた。そして、いつも通りの悲鳴が上がる。

悲鳴と共に、顔を歪ませながらシンムが目を覚ます。そんなシン

ムに、すっきりした顔のカグヤが嬉しそうに挨拶をした。
カグヤ「おはよう、シンム」
それだけで状況をシンムは理解する。いつも通りの事だから。
シンム「おはようじゃねぇ。姉貴いつも……いつも、言ってるだろーが。起こすたびに蹴るんじゃんねぇ！」
痛みに耐えながらシンムが言葉は必死の抵抗を試みる。それも残念ながら勝者には届かなかったようだが。
カグヤ「うん、そうだね。考えとくよ」
シンム「なにが「うん、そうだね。考えとくよ」だ。いいかげんに蹴り起こすのはやめてくれ、姉貴！」
その言葉ひとつひとつに敗者の怨嗟（えんさ）の念が込められているが、その言葉を勝者は簡単に避けて見せる。
カグヤ「じゃあ……検討しとくね」
シンム「検討もいらねぇから、蹴り起こすのをやめてくれ」
カグヤ「おはよう、シンム」
シンム「……おはよう、姉貴」
抵抗が無駄だと悟り、シンムは仕方なく勝者の軍門に下った。
そこまで話が終わってから、タケヒコはシンムに挨拶をした。
タケヒコ「おはようございます、シンム様」
シンム「ああ、おはよう、タケヒコ」
一度眠ると中々目覚めないが、シンムの寝起きは良い。起きたその瞬間からシンムの頭は回転を始める。それは何かが起こった時のためにタケヒコが訓練した成果だった。
起きたシンムに、タケヒコが軽く頭を下げる。
タケヒコ「では、あらためましてシンム様、申し上げます。今日は約束通り昨日の事をヤカモチさんに謝ってくださいませ」
シンム「いきなりその話かよ……」
表情が曇（くも）るシンム。朝、寝起きから聞きたくはなかったのだろう。
それは承知していたが、タケヒコはこういうことは出来得る限り早い方がいいと元来から思っていたため、朝から口に出した。本当は、

昨日の内に済ませて欲しかったのだが。
横目でシンムを見ながら、カグヤがすぐに反応した。
カグヤ「またシンムが何かしたの、ヤカモチに？」
タケヒコ「カグヤ様はご存じありませんでしたね。実はシンム様が昨日……」
シンム「わかってるって、タケヒコ。昨日の事はきちんと謝っておくからよ」
説明しようとするタケヒコの言葉、をシンムがすぐに遮る。
タケヒコ「その件に関しては、きちんとした対処をお願いします、シンム様。その後は、昨日申し上げましたお話しをしますので」
妥協を許さない様に真剣な表情で、タケヒコは一つ一つの言葉を丁寧に言った。
カグヤ「話し？　何の話をするの？」
前日のいきさつ知らないカグヤは首を傾けて、きょとんとした表情をしていた。
シンム「なんかよくわかんねぇけど、おれ達にまだ話していない大事なことがあるってさ」
全身でタケヒコがカグヤの方へと向き直る。
タケヒコ「カグヤ様に取っても大事な話ですので、今日はどこにも行かれないで下さい」
念を押すようにタケヒコは言った。
シンム「姉貴、どこにも行くなよ？」
カグヤ「シンムに言われなくても、すぐには行かないよ。終わったら出かければいいんだし」
えへんと胸を張るカグヤ。それを見て、タケヒコは頭を抱えながら心の中で「やはり」と思いながらも願い出る。あきらめ半分で。
タケヒコ「それも、遠慮願いたいのですが……」
心からの思いをタケヒコは口にした。その言葉に、カグヤはにっとしただけで何も答えない。本心はうかがえたが、タケヒコもこれ以上念を押すことはせず、シンムの方へ向き直った。

タケヒコ「シンム様はさっそく謝りに行かれて下さい」
シンム「わかってるって。今から謝りに言って来るからさ」
タケヒコ「行ってらっしゃいませ……」
にこやかにタケヒコはシンムを送り出そうとした。しかし、それは中断させられた。

送り出すタケヒコが言葉を終えるよりも早く、一人の兵士が血相を変え、今にも死にそうな顔をしてやって来た。
兵士「た、たいへんです！　よ、妖鬼の大群が、迫って来ています！」
必要以上の大声で、青白い表情をして、兵士は言った。その言葉にシンムがすぐに反応する。
シンム「大群って！　どの位の数が来たって言うんだ？」
兵士「およそ三万ほどです！」
シンム「三万！。そんなに妖鬼がいるのか！」
声を張り上げるシンム。その横で同様の思いをタケヒコも抱いていた。この国を落としに来たにしても、数が多すぎるとタケヒコには思えた。半分でも圧勝だろうと。それなら、「考えられるのは」と。そこまで思考して、最悪の可能性がタケヒコの脳裏によぎる。
タケヒコ「カグヤ様を狙いにいよいよ……」
そこまで考えてから思考を中断すると、二人にタケヒコは頭を下げた。
タケヒコ「すみません、シンム様、カグヤ様。話は、また次の機会にいたします」
カグヤ「仕方ないよ。向こうは、こっちの都合に合わせてくれないしね」
心配そうな表情をカグヤはいっさい見せず、にこりと微笑む。
タケヒコ「ありがとうございます。シンム様は、すぐにヤカモチさんの所に行ってください。兵を集結させているはずですので」

シンム「……ヤカモチ……タケヒコは来ないのか？」
小さな声で名をつぶやいてから、シンムがばつの悪そうな顔をする。理由を悟り、タケヒコは注意を促した。
タケヒコ「わたしには考えがありますので、先に行っていてください。それと、くれぐれも、ヤカモチさんと揉めないようにお願いします」
何も答えず、ばつが悪そうにしながら、逃げるようにシンムは兵士と戦場へ向かって行った。

結局「分かった」と言わなかったことに若干の不安を覚えつつも、タケヒコは最大の懸念を払拭するために、カグヤの目を見た。
タケヒコ「カグヤ様、念のためにスクネの所にでも避難していてください」
カグヤ「避難？　呼んで来るんじゃなくて？」
タケヒコ「そうです。戦いが終わったら呼びに行きます。それまでスクネの所を離れないようにお願いします」
カグヤ「……わかったよ」
タケヒコ「くれぐれもお願いします」
何処かすねているような表情をカグヤが見せる。
そんな表情のカグヤを置いて、タケヒコも戦場へと向かった。すべてが杞憂に終わることを、心底願いながら。

元来からヤカモチに対してシンムは苦手意識を持っている。それは勉学だけに限らず、ヤカモチは何かあるたびに小言があったから。それも何かある度に過去のことを持ち出す。もちろん、それが自分のために言っているのは重々承知していたのだが、嫌な事であることは変わらなかった。
それだけに、前日の事も手伝って、今日は非常に顔を合わせ辛かった。

ヤカモチ「シンム様、お待ちしておりました」
シンム「あ……ああ。待たせたな」
内心でシンムは違うと思う。言葉にすべきは謝罪の言葉のはずなのに。口から出て来る言葉がそれを大きく裏切る。
ヤカモチ「早速ですが。前線部隊の指揮をお願いします」
事務的なヤカモチの言葉が、シンムから謝罪の機を消して行く。
シンム「それはかまわないがさ。三万ってどのくらい来てんだ？」
ヤカモチ「とりあえず御覧ください」
三万が多すぎるのは少なくとも頭では理解出来ていた。それでも、やはり直感的には理解出来ない。だから、シンムが自らの目でその光景を視た時には愕然とした。

高台から遠くに見える三万の妖鬼の群れ。三万の妖鬼の殺意。砂埃を立てながら行軍する様は、まるで大地が音を立てて動いているようであった。その光景は、シンムから後ろめたさを取り払うには十分だった。
シンム「なんなんだ、あれは……妖鬼って、強力な巫女が、ねずみなんかから作り出すとか言っていたよな！」
言葉をシンムはいっきにまくし立てた。まるで詐欺か何かにあったような思いだった。嫌々ながらも勉学で聞いた、巫女が生み出す妖鬼。それは一体一体は人を凌駕する力を持っていても、生み出される数は少ないという話だった。それが数すらも遥かに伊都国軍を凌駕している。
伊都国は全軍を入れても三千に満たない、敵はその十倍。数の上では勝機などないに等しかった。
シンム「なんで、こんなにいんだよ！　この前までは多くてもせいぜい二、三十体位だっただろ？。それに、妖鬼を生み出すほど強力な巫女は、めったにいないとか言ってただろ？」
ヤカモチ「その通りです。おそらく、すべてヒミコによって生み出された妖鬼だと思われます」

シンム「女王ヒミコって奴は、そこまですげぇ奴なのか？」
ヤカモチ「申し訳ありませんが、私にはその問いについてはっきりと答える事ができません」
明晰さは得られない。曖昧なヤカモチの話し方も、シンムは嫌いだった。それゆえに、しゃくに障ったが、気を取り直して言いなおした。
シンム「なら違う聞き方するがさ。勝てるのか？」
ヤカモチ「タケヒコ様に何か考えがあられる様ですが、私にはどうにもなりません」
話し方も、話す内容も、シンムには自分を怒らせている様にすら感じられた。日頃なら、そろそろ嫌みの一つでも言っているだろう。それでも、それを堪える。
シンム「……とりあえずはどうすんだ？」
ヤカモチ「タケヒコ様から敵の右翼と戦闘に入るように命令を受けています」
シンム「じゃあ、おれ達は勝手にやってれば良いんだな」
ヤカモチ「敵の右翼とです、シンム様」
遂には苛立ちを隠しきれなくなった。だから、シンムはすでに敵の数なんかどうでもよくなっていて、早く戦いに没頭したかった。これ以上会話していると、また余計なことを言い出しそうだったから。
話を打ち切ると、ヤカモチが自分の持ち場に行き、戦端が開かれる。
矢の斉射が始まった。伊都国の街並みを守る高台から発射される矢は、妖鬼の群れの中へと消えていく。矢が消えるたびに、何体かの妖鬼も倒れているはずだったが、それを確認するには妖鬼の数があまりに多すぎ、そんな暇も当然ない。残念ながら矢は、この数の前では小雨だった。だから怯む様子も見せず、妖鬼は前進を続ける。
迫り来る妖鬼の群れを前に、シンムは剣を構えて兵達の先頭で仕掛ける機を待ち続けていた。

戦端はすでに開かれている。前線は矢で覆われていたが、そんな戦場に似つかわしくない会話が妖鬼の群れの後方では行われていた。

そこには巫女と思わしき女性と、鬼の力を得た影響で十代前半の子供に見える人物が二人いた。

金色の短髪をした男の子の名はアマン　ミケヌ、桃色をした髪を二つお玉に編んだ髪型の女の子はクレハ　イスズと言った。

子供のような容姿をしたミケヌが、妖鬼の肩の上に立って前線を眺めていた。

ミケヌ「あちらから始めたみたいです。気をつけて下さいね、イヨ様」

話しかけられた巫女と思わしき女性の名はスメ　イヨ。長い黒髪を後ろで束ね、小顔に、はっきりとした眼、小鼻のすっきりとした美人。そして、彼女は邪馬台国の女王ヒミコの養女。

声を掛けられたイヨが深々と頭を下げる

イヨ「心配は要りません、ミケヌさん、イスズちゃん。それよりも、無理を言って本当にごめんなさい」

すかさずもう一人の鬼であるイスズが胸を張って会話に参加する。

イスズ「そんなぁー。イヨちゃんの願いだったらこのぐらいイスズちゃん、朝飯サッサですぅ」

ミケヌ「イスズちゃん、それを言うのでしたら朝飯は早くですよ」

適当な訂正をしながら、ミケヌは妖鬼の肩から飛び降りた。

イヨ「朝飯前です」

正解を言ったイヨの言葉に、愛らしい顔を膨らませてイスズが抗議の声を上げる。

イスズ「えー違いますぅ。そんなことわりは聞いた事がありません！」

イヨ「ことわりでもないのですけど……」

イスズ「ことわりですぅ！　そんな事でイスズちゃん騙されたり

しません」
　この場は、本当に戦場とは思えない空気に包まれていた。だからからか、本気で言っているのかよくわからない調子で、ミケヌがイスズに注意を促す。
　ミケヌ「矢がここまで飛んでくる可能性も否定できませんから、イスズちゃんにはイヨ様をきちんと守ってもらわないと」
　イスズ「もちろんですぅ。イスズちゃんにまかせない。だから、ミケヌさんこそしっかりしてほしいですぅ」
　ミケヌ「ぼくも当然がんばりますよ」
　子供がこれから遊びにでも出かけるかのような調子で、二人は気勢を「えいえいおう」と上げる。
　そんな二人の子供に、イヨはやさしく微笑む。二人が醸し出す雰囲気がイヨはたまらなく好きだった。だからこそ、言っておきたい言葉を、この雰囲気がなくならないためにも、イヨは口にした。
　イヨ「わたしのことは心配しないでいいですから、自分の事に集中してください。そして、生きて帰って来てくださいね」
　ミケヌ「そんなぁ。イヨ様にそんな風に言われたら、間違っても死ねないですよ」
　イスズ「はい。間違っても死なないでほしいですぅ」
　二人に言った言葉を、イスズはミケヌだけに言ったと勘違いしたのだろうと推測して、イヨは苦笑した。そんな雰囲気の中、ミケヌが突然表情を引き締める。
　ミケヌ「そろそろ、ぼくも行ってきますよ」
　イヨ「御武運をお祈りしています、ミケヌさん」
　イスズ「がんばってください、イスズちゃんも応援してますぅ」
　頭を深々と下げるイヨ。両手を上げて、ぴょんぴょんと飛び回るイスズ。送り出す二人の言葉に、少し照れたように笑いながらミケヌは言った。
　ミケヌ「人気があると大変です。でもかわいい二人のために、ぼくは帰ってきます」

再び、ミケヌは妖鬼の肩の上に飛び乗り、手を何度か振ってから妖鬼の肩の上を跳び移り、前線へと上って行った。

敵の前衛との距離を押し測っていたヤカモチが限界に達したと察すると同時に、合図は上がった。予め準備されていた真っ赤に染まった布が振られる。

すぐさま、シンムは同様に赤い布を振り返した。

ヤカモチ「総員、一時撃ち方止め。シンム様が出られる」

一時的に弓兵の動きが止まる。こういったヤカモチの能力には、シンムも純粋に敬意と信頼を置いていた。もっとも、苦手なことも手伝って、本人にその事を言った事は一度もなかったが。

シンム「おっしゃ。みんな行くぜ！」

自分の頬を一回叩いて気合いを入れると、シンムは大声で叫んだ。その声に触発されたように兵達が声を張り上げる。

先頭に立つシンムに続いて、兵士達が妖鬼の群れに突撃を開始した。

シンム「敵右翼にみんなつっこめ！　絶対に、街に化け物を入れんじゃねぇ！」

剣と爪がぶつかり合う音が鳴り響く。

弓兵による斉射が再開される。矢は味方を射つ事なく、シンム達とは逆の左翼に降り注がれる。戦いは混戦へと移行された。

混戦の中、奮戦する者、混戦状態をいやがる者、泣き叫ぶ者、猛り狂う者、いろいろな思いが交錯する戦場。その様子を空高くから愉快そうに眺める者がいた。

タマモ「ふふふ。妖鬼を右に寄せる気ね。そして、混戦状態になった所を、左から爆炎呪か何かで一気に攻撃する。そして混乱している所をミケヌかイスズを狙うつもりかしら？」

自らの軍が壊滅（かいめつ）するのを楽しみしている様にささやくタマモを、

地上から見上げても、雲と日の光に遮られ見つける事など出来ない。まして、混戦の中で彼女の存在になど気付こうはずもなかった。

混戦の中、必死に剣を振るうシンム。

襲ってきた妖鬼の爪を剣で横に逸らし、体制を崩した妖鬼が無防備に腹を見せる。その隙を見逃さず、シンムはそこに一撃を加える。何度も習っている動作の一つだが、ここまで見事に、しかも簡単に決まったことは、一度も記憶にない。それだけに、勝利の手応えをシンムはわずかながら感じていた。

シンム「数が多いだけで、この前の奴らより弱いじゃねぇか」

これなら何とかなるとシンムは思う。自分程でないにしても、ほとんどすべての兵士の錬度は、この妖鬼達を上回っている。それならと思う。

上空で地上を眺めるタマモが顔を歪(ゆが)ませる。そんなタマモが口から発した言葉は、あきらかに戦況の不利に対する不満ではなかった。

タマモ「しかし、時間が意外にかかるわね。ヒミコにわざわざ弱い妖鬼を準備する様に伝えといたのに、もう少し上手くやれないのかしら。これだとタケヒコの活躍がなかなか見られないじゃない…仕方ないわね」

奮戦するシンム達を眺めながら、タマモは悪態をついた。暗に「弱すぎる」と言っているも同じ悪態を。第三者が見たら、劣勢に立っている側の将が、優勢に進めている側の将に言う言葉とは思えなかっただろう。または、負け犬の遠吠えぐらいにしか聞こえなかっただろう。しかし、タマモは本気でそう考え、彼女の言う時間を短縮するための手を打つ。

前線に上がって来て妖鬼の肩の上で指揮をしているミケヌに、タマモは目を向ける。

ミケヌ「こちらが劣勢ですね。でも、ぼくが思っているより妖鬼が弱く感じるのは気のせいでしょうか？」

妖鬼を指揮しているミケヌに精神感応の力を使って、タマモは話しかけた。

タマモ「ミケヌ、聞こえているでしょう。一刻も早く妖鬼をすべて右に寄せなさい」

ミケヌ「タマモさん、どうしてですか？」

タマモ「ふふふ。命令に理由は必要かしら？」

拒めば殺すだけ。暗にその意をタマモは言葉に含んでいた。

ミケヌ「……仕方ないですね。右翼の妖鬼は左翼に移動してください」

眉間を一回引きつらせた後、快活よくミケヌは返事した。

妖鬼がミケヌの命に従って左翼に固まり始める。それによって混戦状態は更に加速される。その光景を眺めるタマモの表情が緩む。まるで何かの劇を見るかのようにタマモは傍観していた。

一見すると伊都国軍が包囲されているかのような状況に推移した。本当に包囲されたのなら全滅は免れなかっただろう。だが実際はただの混戦状態にすぎない。状況が願った状態に、予めタケヒコから指示されていた状況に変化したのを見て、ヤカモチが隣に控えさせた弓兵に命令する。

ヤカモチ「予定通り敵は左翼に寄りつつある。合図の火矢を3本撃て！」

空高く三本の火矢が三回上がる。

殺気を殺してタケヒコは戦いを見守っていた。空高く火矢が上がる。その光景を見ながらタケヒコの脳裏に不安がよぎる。それが狙い通りであるにもかかわらず。

タケヒコ「合図ですか……少し展開が早すぎますね。こちらの意図に気づかれているのでしょか？　とはいえ、こうなっては考えている余裕はありませんね」

それまで傍観に徹していたタケヒコが動く。冷静にシンム達の戦

っている位置を確認した後、爆炎呪を妖鬼の群れめがけて投げつけた。

呪は一直線に、放物線を描くことなく妖鬼がもっとも集まっているところにたどり着く。次の瞬間、爆炎呪はうなりを上げて妖鬼だけを吹き飛ばした。

対象を決めるとその対象にしか効果を与えない、ヒミコによって作り出された特殊な呪。その呪をタケヒコは一つだけだが持っていた。

吹き飛ばされ燃えていく半数ほどの妖鬼を見て、タケヒコは溜飲（りゅういん）を下げる。

タケヒコ「どうやら杞憂に済みそうですね、タマモはいないようです。しかし……彼女の呪を、彼女の生み出した妖鬼に使うとは皮肉ですね」

そう言いながらタケヒコは動き出した。人の認知し得ない速度で。

戦いは伊都国側の思惑通りに進んでいた。

戦いはタマモの望む通りに進んでいた。

崩壊2

妖鬼を全体の半数ほど爆炎呪で葬った後、混戦状態の戦場へ急いで駆け付けた。そして、動きの速度をゆるめるとタケヒコは戦場の中を平然と歩いていた。その歩みを止められる者はいない。歩いた後には妖鬼の屍の山が築かれている。そんなタケヒコの視線の先には、一人の男がいた。男は子供のような容姿で、妖鬼の肩の上に立っている。男の名に、タケヒコは心当たりがあったから。

敵同士とは思えないほど気さくに、その男は話しかけた。

ミケヌ「今の爆炎呪ですか？　あんなの初めて見ました」

タケヒコ「そうでしょう。対象にしか効かない特殊な呪ですから」

男が妖鬼の肩から飛び降り、二人の距離はいつ戦闘になってもおかしくないほど近づく。

二人が面と向かい合うと、タケヒコは胸に片手を当てて会釈した。今から親睦を深めようとしているかのように丁寧に。それに対してミケヌが笑顔で返す。

タケヒコ「あなたは、アマンミケヌさんですね？」

ミケヌ「そうです。でも、だとしたらどうするのです？」

実際にはへらへらと笑っている様にミケヌは見えるが、視線が警戒の色を強めている。頭を上げたタケヒコの目も鋭くなっている。

タケヒコ「当然、覚悟してもらいます。そのために、遥々（はるばる）遠くまでいらしたのでしょう？」

ミケヌ「タケヒコさんの言うことは少しだけ違いますね。主語を、変えたら百点満点で合格です。おしかったですね」

タケヒコ「では、わたしは零点で不合格の様ですね、残念です」

ミケヌ「それなら心配いりません。ぼくが答案だけ書き換えて満点にします。そういうの得意なんですよ」

タケヒコ「せっかくですけど、遠慮しときますよ」

二人はにこやかに話し、口元だけは笑顔さえ見せながら会話した。

もっとも、その表情からは考えられないほどの殺気を滲ませている事を、両者の目が物語っていた。

言葉が終わるや否や、ミケヌが手に隠し持っていた小剣を投げつける。投げつけられた小剣を、体の軸をずらしてタケヒコは避けようと試みる。小剣が狙い通り体の横を通り抜けようとした瞬間、小剣はそれまでの慣性を無視して垂直に曲がり、タケヒコの頭部めがけて飛翔した。それに気付いたタケヒコが持っていた剣を振り、ミケヌめがけて小剣を弾き飛ばす。

弾かれた小剣をミケヌが何事も無かったように受け止める。

タケヒコ「なるほど、ミケヌさんは風を使うのですね。しかも自由に操っておられる。正直、これほど強力な能力とは思っても見ませんでした」

ミケヌ「ここまできれいに、返されたのは初めてです。できれば、味方同士で会いたかったですね」

受け止めた小剣を放り投げると、ミケヌは両手を後頭部に回しながら言った。馬鹿にしている様にも見えるが、タケヒコに気分を害した様子などない。それどころかタケヒコは口元を緩めた。

タケヒコ「今からでも遅くはありません。味方になったらどうです？　と聞いても遅いのでしょう」

ミケヌ「その通りです。悪いですけど裏切りはできません」

タケヒコ「それでしたら……一つしか結論はありませんね」

ミケヌ「まぁ、そうなるでしょうね。ぼくもそう思います」

二人が同時に呼吸を一瞬止める。そして、同時に空気を吐き出すように言った。

タケヒコ　ミケヌ「あなたに、死んでもらいます」

言葉と同時に、先ほど放り投げたばかりの小剣がミケヌの手の中に戻る。そして、まだ間合いに入ってもいないはずなのにミケヌは小剣を振りかざす。その動作に疑問を持ったタケヒコが、勘だけで動く。振りかざされただけの小剣の軌道を観察ししながら、軸をずらす。直後、動く前にタケヒコが踏みしめていた大地のすぐ後ろに、

鋭い何かに刻まれたような跡が突然出現する。
　それでタケヒコは理解する。
タケヒコ「今度はかまいたちですか……本当にミケヌさんはすごい方です。本心から敬意を払わせていただきます」
　そう言いながらも、次々にミケヌによって放たれるかまいたちの全てを、タケヒコは簡単に避ける。それはミケヌにとって脅威以外の何ものでもなかっただろう。しかし、タケヒコにとってはその位の力、子供が大人に戯(たわむ)れている位でしかない。そんな自分がタケヒコはよく嫌になる。まるで、努力をまっこうから否定するかのような自分の存在に。それを表に出したことは一度もない。しかし、それに気づいてくれた者が一人だけいた。今は敵となった者が……
　このまま行けば勝てるはずだった。それが近付きつつあることもタケヒコは肌で感じていた。しかし、そんなタケヒコをあざ笑うかのように、恐れていたことが現実のものとなる。

　上空高くで地上を観察するタマモには、悦の表情が明確に浮かんでいた。
タマモ「ふふふ。予想通りね。タケヒコの事ならなんでもわかるわ。でも、あんな呪なんか使わずにやってくれた方がよかったのだけど」
　視線の先にはタケヒコが立っていた。気配を完全に絶っているタケヒコを、今まで見つけることは出来なかったが、ついに彼の方から場所を教えてくれたから。これからがタマモにとっては戦いと言う名の劇の開演。今までは戦いなどでなく、タマモにとっては遊戯(ゆうぎ)にすぎなかった。
　人の力とは違う力の介入。人にはどうすることも出来ない力を持つ者の介入が始まる。
　何処からともなくタマモが弓を取り出す。空の箙(えびら)に、「魂魄強化(こんぱくきょうか)」と書かれた、禍々しい赤黒い色の呪を入れる。呪が矢に変化する。
それをタマモが弓につがえる。

タマモ「汝、力を欲するならば己の命を我に奉げよ」
ささやきながらタマモが矢を放つ。一本の矢が弾けた様に増えると、残り一万を切っていた妖鬼の群れに向かい、矢が豪雨となって降り注ぐ。
その矢も不思議な事に、妖鬼以外に刺さる事はなかった。
タマモ「これでタケヒコ、あなたも少しは楽しめるでしょう？」
そして、タマモは戦場を、タケヒコの戦いを見つめる。悦を浮かべながら。

その矢にタケヒコは心当たりがあった。否、正確には、その増えた矢にも、矢の持つ力にも心当たりがあった。
タケヒコ「いけません！　やはり、タマモもいたようです！　よりにもよって魂魄強化とは」
魂魄強化は忌むべきもの。魂魄強化「は圧倒的な力を得る代償に、最悪の場合は魂を消滅させるから。
それを知るはずのないミケヌは呆気に取られている。
ミケヌ「今のは、タマモさんですか？　こんなことも出来るなんて……」
矢に気を取られたミケヌの攻撃が単調になる。本来のタケヒコなら見逃すはずのない致命的な隙。しかし、魂魄強化を見て、目の前に敵がいた事をタケヒコは忘れていた。
自分がそうなることは、ただの人であるミケヌにとって最悪の事態であることさえも。
ミケヌ「何が起こったんです？」
タケヒコ「タマモあなたと言う人は……」
ミケヌ「……タケヒコさん！」
先に気を取り直したミケヌがタケヒコに小剣を投げると同時に、複数のカマイタチを放った。呆然としていたタケヒコは、それらすべてを無意識の内に一瞬で斬り捨ててしまう。
真っ二つに斬られた小剣を見ながら、予期せぬ事態を目の当たり

にして、ミケヌがつぶやく。
ミケヌ「かまいたちも斬ったのですか……」
無意識の内に、タケヒコは人の力を越える力を行使していた。人にとっては、絶望的で、圧倒的な力を行使していた。
無数の矢に気を取られているタケヒコは、魂魄強化に憤りを感じているタケヒコは、それに気付かない。

漠然となからも感じていた勝利の手応えが、たった今起こった爆発で確信となっていた。妖鬼一体一体の力は弱い。それでも数が多すぎたが、その数も爆発で激減した。後は各々の奮戦のみ。それならとシンムは思う。
シンム「なんか知らねぇけど、一気にたたみかけるぜ！」
激減した妖鬼に、士気が高揚した伊都国軍が畳みかける。最早、伊都国軍全体に勝利がちらつき始めていた。しかし、その勝利が一瞬にして遠いところへと消えてしまう。
天空から雨のように降り注ぐ矢。昼間で、快晴であるはずの空が矢で埋まり、日光を遮って戦場が薄暗くなる。
矢を受けた妖鬼達がうなり声を上げる。それは断末魔の悲鳴のように聞こえた。その声は殺してくれと言っているかのように聞こえた。ただ、その声とは裏腹に、妖鬼の爪は鋭さを増し、その動きはさっきまでの緩慢さからは考えられないほどに俊敏となった。
シンム「こいつ等……強くなったのか？」
訳が分からなかった。先程まで弱かった目の前の妖鬼が、いまや明らかにシンムよりも強くなっているのだから。

後方で妖鬼だけに矢が突き刺さる光景を目の当たりにしながら、シンムと同じようにイヨも理解出来ないでいた。自分達にも降り注いだはずの矢は刺さらず、溶けるように消える。
イヨ「これはいったい何が起こったの？　さっきの矢の後に、妖

鬼がこんなに強くなるなんて、どうして……」
イスズ「イスズちゃんにもわかりません。だけど……だけど、こんな事が出来るのはタマモさん位しかいないと思いますぅ」
首を何度も振ってイスズが答えた。
イヨ「タマモさん？」
その名がイヨの心を重くする。戦場に来る前に、何度もミケヌに気をつける様に言われていた。そして、幼い頃からタマモだけは、イヨはまったく信じる事が出来なかったから。
イスズ「はい。そうだと思いますぅ。だから、イヨちゃんはイスズちゃんの近くに居てください」
イヨ「お願いね。イスズちゃん」
イスズ「はい。大船にドーンな気持ちで構えていてください」
イヨ「それを言うなら大船に乗った気持ちでだけど……」
いつもの様にイスズと会話をしながらも、イヨの表情には不安の色がにじみ出ていた。

上空でタケヒコをじっと見続けていたタマモがじれったそうに声を出す。そもそも、彼女が妖鬼を強化したのも、我慢の限界に近付きつつあったからだった。
タマモ「ふふふ。まだ、そんな失敗作と茶番を演じ続ける気かしら、タケヒコ？　それなら……妖鬼は全て伊都国になだれ込みなさい。そして、あらゆる物を、あらゆる失敗作を引き裂きなさい」
うなり声を上げると、タマモの命令に従って妖鬼の群れは一塊（ひとかたまり）となって突進を始めた。それは平地に起こった土砂崩れのようだった。土砂となった妖鬼が抵抗する兵達を巻き込みながら、伊都国の中心めがけてなだれ込み始める。
タマモ「今度はどうする気かしら？　そんな失敗作と、いつまでも遊んでいたらこの国が壊れるのが早くなるだけよ。わたしはそれでも問題ないのだけど、来た意味がなくなるわ」
上空で笑みを浮かべながら、タマモは眺め続ける。

剣を握る手に力を入れながら、目の前のミケヌをタケヒコが睨みつける。すでに気を取り直したタケヒコが問う。その眼には答えによっては殺すといった色を明確に浮かべながら。

タケヒコ「ミケヌさん。あなたは今の矢が何か知っておられますか？」

ミケヌ「ぜんぜんわかりません。教えてくれるなら嬉しいんですけど」

眼を見る。嘘を言っている様には、少なくともタケヒコには見えない。

上空をタケヒコが見上げる。次の行動を決めたタケヒコからほんの一瞬だけ、戦いの緊張から殺気が溢れる。それだけで人を殺せるかと思えるほどに冷たい殺気が。

その殺気を感じ取ったミケヌが耐えるように大地を強く踏みしめている。そのミケヌに対して、タケヒコが頭を深々と下げる。

タケヒコ「ミケヌさん、この場は一時引かせて貰います」

ミケヌ「ぼくが……そこまで物分かりがいいと思いますか」

そう言うミケヌからは完全に無邪気さが消えている。代わりに、緊張がにじみ出ている。殺気を当てられたのが原因か、額からは汗が流れ、僅かながら手も震えている。

タケヒコ「わるいですが、今はあなたとのおしゃべりに付き合っている暇がありません」

頭を上げると、タケヒコはミケヌに背を向けて悠然と立ち去った。背後からミケヌがかまいたちを放つが、わずかに身体を動かして避けながら。

伊都国軍は魂魄強化された妖鬼の前に後退を余儀なくされ、伊都国の街を守る大きな門の前で踏ん張っていた。

数で下回り、各々の実力で下回る伊都国軍は、全面を防ぐ事かなわず、大きな門を破壊しようと突進を繰り返す妖鬼を防ぎきれない。

妖鬼が突進するたびに大きな門が揺れ、きしむ音が聞こえる。
祈りに似た叫びをシンムは上げた。
シンム「通させるな！　絶対に通させてたまるかーー」
大きな門に張り付いた妖鬼の頭上に矢が降り注ぐ。
ヤカモチ「撃て！　門に張り付いた前衛の妖鬼を集中して狙え！」
的確な指示のもと弓兵が妖鬼を迎撃するが、状況は好転するはずもなく、門がきしむ音は鳴りやまない。

上空を見上げ、一人走りまわるタケヒコ。探すのはただ一人。この状況を作り上げた者。
タケヒコ「タマモがどこかにいるはずです。この妖鬼を操っているのがタマモとわかった以上、一刻も早く見つけ出さねば！」
タマモ「ふふふ。もっとあわてなさい。そして見せなさい。あなたの、フツヌシタケヒコの本来の力を……」
地を走るタケヒコと、上空で眺めるタマモ。お互いの口に出した声が届いたはずはない。それでも、二人の間に会話は成立していた。
そして、その会話はタケヒコの願いを打ち壊し、タマモの望みを叶える方向へといざなう。
天之羽々矢（あまのはばや）と呼ばれる矢をタマモは取り出す。幾日か前に、スクネの捕まっていた牢を壊したのと同じく、雷撃呪から作った矢。それをタマモは八本ほど同時に、大きな門に向かって放った。すさまじい轟音と共に、大きな門が雷撃の衝撃で崩れ落ちる。あまりにもあっけなく、伊都国の街を守る防衛線は崩壊した。
壊れた門に妖鬼を防げるはずもなく、数と各々の実力で劣る伊都国軍に守りきれるはずもなく、ついに街中が戦場となり、街中が地獄と化していく。

崩壊3

夢を見た。夢はセイガと呼ばれる男とその弟の物語。なぜそんな夢を見たのかはわからない。ただ確信出来ることは、目が覚めたらこの夢を覚えてはいないのだろうということ。夢を見たことすら覚えていないのだろうということ。否、思い出したくない夢だということ。

人の侵入を拒む程に深い森の中で、若い男がぼやいていた。男は髪をすべて後ろになでつけ、切れ長の眼をして、細身に筋肉がしっかりと付いた身体をしていた。男の名前はツクヨ　セイガといった。

セイガ「いや、まいったな……どうやら迷った。おまえはどうしたらいいと思う?」

頭を掻きながら、セイガは自らが置かれている状況を、まるで他人事のような口調で弟に聞いた。

セイガの弟「どうしたらいいって……にぃさんが勝手に飛行呪使ったからだろ!」

必死に抗議をする男はセイガの弟。その抗議をセイガは冗談ではぐらかす。

セイガ「……悪かったな。だがおまえも止めなかっただろ?　という事は、おまえも同罪だ!」

セイガの弟「勝手すぎだ……おれは寝ていただけだろ!　目が覚めたら空を飛んでいたんだぞ」

セイガ「そんな目覚めも、たまにはいいだろ?」

弟の抗議を聞いたセイガは大笑いしながら答える。二人が迷った場所は他には誰もいない深い森の中。　木々が視界を遮り、草木が移動を困難にしている。実際、そんな森の中で迷った事に悩んでいるというよりも、セイガは楽しんでいる様子だった。

セイガ「勝手に来たのはまずかったかもしれねぇけどよ、謝っと

けば問題ねぇだろうよ。だから、帰ったら謝れよ、スクナ」
弟の名はスクナ。二人はほとんと似たような容姿と体型をしていて、髪型だけが二人の区別を可能としていた。兄はすべて後ろでなでつけ、弟は前髪を垂らしていた。
スクナ「ちょっとまってよ。おかしいだろ。にぃさんが勝手にやったことが原因だろうが！　だから、帰ったら、絶対にぃさんに謝って貰うからな、タケヒコに」
弟の出した名前を聞いて少しだけ怯んだセイガは、渋い顔しながら少しだけ折れた様子で答える。
セイガ「まあ、そう言うな、わかった、わかった、帰ったらいっしょに謝ってやるって」
スクナ「にぃさんが一人で謝れよ。それと言い忘れたけど、飛行呪……あれ作って貰うのって大変なんだぞ！　まさか、またおれに作って貰えなんて言わないだろうな」
セイガ「前回を思い出せ。もちろん、おれがそんな事を……言うに決まってるだろ。だから、がんばれよ！」
当然の様にセイガは笑いながら言った。
そして、スクナは遂に堪忍袋の緒が切れたのか、大声を張り上げて怒声で抗議する。
スクナ「ふざけるな！　おれに断りもなく、にぃさんが勝手に使ったくせに。おかしいだろ！」
セイガ「おれがおまえに断りを入れるような男に見えるか？　だとしたらおまえの勘違いだ」
スクナ「断りを入れろよ！　そして威張るなよ！　いつも俺が尻拭いさせられるんだぞ！」
セイガ「だから一回「悪かった……」と言っただろ。しつこい奴はもてないぞ」
スクナ「めちゃくちゃだ。タケヒコになんて言われるかわからないからな」
もう一度同じ名をスクナは出したが、セイガはこれ以上折れたり

はしなかった。それで、スクナが抗議の言葉を続けようとした時だった。突然、セイガはスクナの言葉を遮る。そして、表情を引き締め、冷静に言葉を発した。

緊張が伝わったのか、スクナの表情も真剣なものに変化する。

セイガ「わりぃけど、少し黙ってろ。油断した。向こうから水の音と人の気配を感じる」

そして、二人は気配を完全に消し、足音を消し、木々に隠れながら水の音の聞こえた場所を探った。

スクナ「人の気配って……こんな森の中に人がいるの？」

兄弟が木々の間から見た人物は女性だった……

目覚めたスクネの眼に飛び込んできたのは、わらぶきの屋根から漏れ込む日の光りだった。ぼんやりする頭を振りながらスクネは起き上がる。次の瞬間、スクネの肌をひりひりとする殺気が通り抜ける。臨戦態勢にスクネは瞬時に入り、家を警戒しながら飛び出した。

外には一人の老人が立っていた。

目の前に立つ老人から感じられる圧倒的な殺気。それだけでどの位の強さか、スクネには理解出来た。その老人から発せられる殺気に、スクネは自らの殺気をぶつける。両者の殺気を感じ、さえずる鳥達が何処かへと逃げ出す。両者を避ける様に風さえ止まる。結果、両者を静寂が包み込む。

目の前の老人が敵である事はまず間違いない。それならばと思い、スクネは隙を探して観察しようとした時だった。

男の声「スクナ、手を貸せ！　カグヤを救いたいなら、今すぐに！」

頭に何者かの声が響いた。何処か懐かしさもあったが、それ以上に、スクネをえも言われぬ恐怖が全身をさいなむ。

その恐怖が原因で、スクネは静寂に耐えきれなくなった。

スクネ「おまえは誰だ」

心の奥深くの何処かが「言葉が違う。おまえはこの男が誰か知っているはずだ」と、叫んでいる。その声はあまりに小さく、意識する前に消えて行く。そして、代わりに心を、スクネの全身を、怒りと理解不能な羞恥がさいなむ。

男「塩土の翁と呼ばれている」

少なくとも表面上では、スクネは冷静さを保っている。そして、自らを塩土の翁と名乗った男を改めて観察する。白髪まじりで髪をうしろになでつけ、顔にも多くのしわがある。歳は六十を越えているように見える。問題は歳などでなく、あきらかに強いだろうと思える事。それもタケヒコに匹敵するほどに。そんな者など、スクネ自身とタマモ以外に存在するはずないのに。

そこまで考えると、心の奥底から「否」と叫ぶ声が聞こえる。その声もあまりに小さく、泡の様に消える。いつの間にかスクネは頭を振っていた。日頃と違い、スクネは感情を自分で調節できなかった。

だから、その状況に耐えきれず、スクネは先に仕掛けた。表面上の冷静さを維持できなくなる前に。何処からともなく現われた矛を握り、塩土の翁の胸へと突き刺す。何の奇もてらっていないが、常人なら回避不可能な速度で突いた一撃を、塩土の翁は簡単に避けてみせた。

塩土の翁「命令でな。おまえと戦わなければならない。何、その代償に命まではとりはしない。肉片は増えるかもしれないがな」

声に抑揚が無く、文章を棒読みするように塩土の翁は言った。棒読みが終わると、蝿か何かを払う様に、塩土の翁は手首を軽く振る。手首の動きに合わせて、スクネは後ろに飛び退いた。何も起こらない。否、並みの者ならば、何も見えず、何も分からずに四肢を失っていたであろう攻撃。簡単に見ただけなら何も変わってない景色。しかし、スクネの立って居た場所にとても小さい、直径一厘に満たない穴が確かに開いている。その小さな穴が、スクネの飛び回った跡すべてに増えていく。数十個の穴が増えた後、塩土の翁が手首の

動きを止める。
塩土の翁「ほう、さすがに反撃してこないか……さすがだな」
止めた瞬間に反撃をスクネは試みるつもりだったが、それを中止する。隙がまったくなく、何よりも塩土の翁と名乗った男が口にした次の言葉にスクネは気を取られてしまったために。
塩土の翁「ほう、さすがに反撃して来ないか……さすがだな」
同じ言葉を塩土の翁は口にした。それがなぜかスクネの心に突き刺さり、左目から血が流れた。傷など負っていない。当然、攻撃はすべて避けた。ただ、自分ではわからない胸の痛みを感じ、呆然(ぼうぜん)とした。
塩土の翁「命令でな。少し、変化をつけよう」
日に反射して何かが光る。その光った何かは塩土の翁の動きに合わせて揺れ始める。手首の動きは単調に振り続けたのと違い、横に、縦にと、複雑な動きをしている。はっとしてスクネは手首の動きに合わせ、避け続けた。端から何も知らずに見た者がいたなら、スクネが塩土の翁の手の動きに合わせて踊っているようにしか見えない。しかし、スクネには確かに見えている。手首の動きと共に、白い線が複雑な動きをしながら、スクネを狙っていることに。
塩土の翁「正直、驚いた。これを避けきるか」
左目から流れた血は動いている間に止まっていた。それでも心の乱れは収まらない。
塩土の翁「使ったらどうだ?。そうでなければ、勝てはしない」
矛に塩土の翁は目をやっている。相変わらず、この老人がスクネには誰か分からない。それをすぐさま、相変わらず消え入りそうな声で心が否定する。「正確には思い出す事を否定している」と。確実にスクネが理解出来るのは、自らの心の乱れと、このまま塩土の翁と戦い続ければ確実に殺されるだろうという事実。
塩土の翁「使ったらどうだ? そうでなければ、勝てはしない」
台本を読む大根役者の様に、同じ言葉を棒読みで繰り返すと、塩土の翁は手首を動かした。またも血の涙がスクネの目から流れる。

今度は自分が悲しんでいるのがよくわかった。そして、死を覚悟した。この老人に自分を殺して欲しいと心が訴えたから。訳も分からず、それが正しいと思えたから。迫り来る攻撃を微動もせずにスクネは受けるつもりだった。その瞬間、脳裏をカグヤの顔がちらつく。そして、訳のわからない怒りも、恥辱も、胸の痛みも、悲しみも消え、身体が勝手に動いていた。

気が付いたらスクネは矛を握り締め、跳躍していた。途中、白い線が襲い掛かって来たが、スクネは矛で払いのけ、塩土の翁の背後に着地して、羽交い絞めにした。

スクネ「何をしに来た？」

塩土の翁「命令でな。おまえと戦わなければならない」

スクネ「ならば、このまま終わらせる」

首を捻じ切ろうとスクネは矛を振り上げた。振り上げたまま、矛を下ろそうとしても腕が自らの意思に反し動かない。そうこうしている間に、スクネは自らの両足が踏みしめるべき大地を失う。白い線の先に付いた針が、振り上げた腕の肩に刺さっているのをスクネは見つけた。世界が目まぐるしく円運動する中、スクネは針を抜いた。次の瞬間、激痛と共に、スクネの体が大地に再び戻ったことを教える。円運動からはじき出されたスクネは大地に激突していた。

警戒しながらスクネは立ち上がる。大地に叩きつけられたスクネが立ち上がるのを待っていたのか、塩土の翁は糸の先に付いた針で近くにあった大木を吊り上げ、放り投げて来た。放り投げられた大木をスクネは避けず、手に握った矛を縦に一閃する。不思議な事に、矛の間合いに入ってなかったはずの大木は二つに切り裂かれ、スクネの両隣をすりぬけて行った。

塩土の翁「始めから使っていれば、勝てたかもしれないものを」

返答代わりにスクネは矛を構える。構えに合わせて塩土の翁も糸を両手でぴんと張る。お互いの殺気が辺り一帯を包んでいく。

そんな空間を、二人の緊張を、破壊するような声が響く。

カグヤ「たいへんだよ！」

息を切らしながら駆けて来たカグヤに、白い糸が襲いかかる。その動きよりも早く動いたスクネが、カグヤと塩土の翁の間に割って入り、矛で白い糸を絡め取った。

塩土の翁「命令でな。邪魔ものは排除する」

スクネ「カグヤ、おれの側から離れるな」

カグヤ「スクネ、何と戦ってるの？　土のか……」

何か言おうとしたカグヤをスクネは制止する。すさまじい殺気が場に満ち始めたために。

塩土の翁「線を通り面となるもの」

肌を刺す殺気がスクネに本気を出せと催促する。その催促に答えるべくスクネも矛を構える。天之壽矛（あまのじゅぼこ）と銘づけられている矛を。

スクネ「零にして無に等しきもの」

空間の歪曲による距離の無効化。天之壽矛（あまのじゅぼこ）によって可能になる超常現象。故に必勝の一撃。勝負は一瞬に付くはずだった。しかし、その必勝の一撃は網目状となった糸の前に遮られた。否、遮られたのでなく捕まえられる。たとえ衝撃であろうともすべてを捕える。それが天露之糸（あまつゆのいと）の力。

白い糸の名をスクネは思い出した。そして、その恐ろしさも。

スクネ「カグヤ、離れていろ。近づいてすまなかった」

塩土の翁「あまい、弱い、やはり変わらない！　これが今のおまえか！　何のためにその身体を持っている！　それで、また繰り返す気か！」

表情にも、感情にも変化が無かった塩土の翁にも、変化が起こる。激昂しているのがよくわかる声だった。今までの台本を棒読みしているような抑揚のない声とは明らかに違った。

天之壽矛（あまのじゅぼこ）の力を使い、スクネは塩土の翁を前後・左右からほぼ同時に矛先で攻撃する。空間歪曲とスクネの身体能力を持ってして可能になる回避不可能な攻撃。

塩土の翁「無駄だ！　すべてが遅すぎる！」

激昂して塩土の翁は叫ぶと、天之壽矛（あまのじゅぼこ）の矛先が届く前に、糸の先

の針を掴み、自らの頭部に打ち込んだ。
塩土の翁「己にして他と……」
その瞬間だった。
カグヤ「ぜったいそれだけはだめぇぇぇぇー」
背後に隠れていたカグヤの叫び声と共に、白い光が塩土の翁を包み込む。白い光が消えた時には塩土の翁も消えていた。
何が起こったのかを理解して、背後で倒れそうになったカグヤをスクネはあわてて抱きしめた。
その瞬間、眼前に奇妙な光景が広がった。

やさしく、黒い長髪の美しい女性が立っていた。その女性の首筋に男が矛先をあてている。不思議な事に女性は目を閉じて微笑んでいた。
男「おれの負けだ、負け。しばらくやっかいになる。その間に奇跡でも考えといてくれ」
女性「分かりました。必ずや起こして見せます、奇跡を」
目を開いた女性はやさしいほほ笑みを浮かべて、そう言った。その笑顔に男は見とれていた。

その光景が消える。すさまじいばかりの喪失感が全身に襲いかかり、血の涙の代わりに本当の涙が一粒流れ落ちた。その理由もわからない。
気付いた時には両手に抱えたカグヤをスクネは呆然としながら見ていた。
カグヤ「スクネお願い……国が大変なんだよ。だから……」
スクネ「カグヤ・・・おまえは・・・」
今見た光景をスクネには理解出来ない。だから、その光景を、喪失感を、その場に置き去りにすることにした。光景は理解できなくても、カグヤが何をしたのかは理解出来たから。
スクネ「強制転移……」

先程、塩土の翁を包んだ光を理解したスクネは駆けだした。それが何を意味するかを理解しているから。
だから、スクネはカグヤを抱きかかえて駈け出した。

崩壊4

伊都国の街並みになだれ込んだ妖鬼が人々を次々に虐殺していく。ある者は体を真っ二つに切り裂かれ、ある者は臓器を喰いちぎられた。街には人々の喧騒の代わりに断末魔の叫びが木霊し、瓦礫が真っ赤に染まる。

妖鬼によって地獄と化した伊都国で、シンムは必死に剣をふるい続けた。剣の刃は真っ赤に染まり、ぼろぼろになった刃は切れ味を失っている。

シンム「おまえ等にこれ以上好き勝手にされてたまるか！」

突然強くなった妖鬼を一体倒すだけで、シンムには至難だった。それでも剣をふるい続ける。全身が汗と、帰り血と、自らの傷で覆い尽くされようとも。伊都国を守るために、伊都国の人々が逃れる時間を作るために、シンムに出来る事はそれだけだったから。

そんなシンムをあざ笑うかのように虐殺は続く。

ヤカモチ「シンム様、恐れながら、そろそろ撤退を。民も所定の場所へ向かっております」

近くに控えていたヤカモチが耳打ちをした。その表情はいつもの様に飄々（ひょうひょう）としている。それがシンムには腹立たしくてたまらない。シンム「全員、一人でも多く助けるんだ。そんな事も分からないはずないだろ！」

ヤカモチ「恐れながら……」

更に何か言おうとしたヤカモチの視線が一点で止まる。その視線をシンムも追い掛けた。二人の視線の先には子供が立っていた。

視線の先の子供がきょろきょろと首を動かしている。

ミケヌ「タケヒコさんは……よかった。いないみたいですね」

見た目はどう見ても子供だった。近くにいたヤカモチが気付かなければシンムはその子供を守るために、逃すために、戦っただろう。

だけどヤカモチの次の言葉がそれをありえないものにする。
ヤカモチ「邪馬一国のアマンミケヌ」
邪馬一国、その名詞がこの地獄を作りだしている。そう考えるとシンムは怒りで頭が張り裂けそうになった。
シンム「ヤカモチ、手を出すな！」
剣をシンムは強く握り締め、ミケヌに飛び掛かろうとした。その瞬間、肩を押さえられて動きを止められる。
ヤカモチ「タケヒコ様が居られないなら、どうなさいますか？」
激昂から顔を真っ赤にしたシンムとミケヌの間に、ヤカモチが移動する。
ミケヌ「悪い事は言いません。そこにいるシンムさんを置いて、何処か他の所に行ってください。後は追いませんから」
馬鹿にしているのか、ミケヌは両手を頭の後ろに置いて、にこやかな表情で語っている。それがシンムの心を余計に逆なでする。
シンム「ふざけ……」
ヤカモチ「断ります！」
今まで聞いた事がない大声で、今まで見た事のない憤怒の形相で、怒りを爆発させて言いかけたシンムの言葉を掻き消す程の勢いで、ヤカモチは断言した。
ヤカモチ「シンム様……失礼ですが、離れていて貰えますか？。ケヌはわたしが始末致します」
日頃ならシンムはすぐに反発していたはずだった。それなのに、シンムは勢いに気圧されたのか、日頃と反対の行動を取った。
シンム「なら、頼むぜ。おれ達は先に行ってるからな。おまえも絶対に後から来るんだぞ」
ヤカモチ「ありがとうございます」
伊都国の人々が逃れる川の方へとシンムは駈け出した。途中、途中で、人々に襲いかかる妖鬼と戦いながら、後ろ髪引かれる思いでシンムは駆けた。残虐だけが支配している街の中を。

川へとシンムが向かっている最中に、ヤカモチとミケヌの戦いは行われた。それはあまりにもあっけなく、戦いとすらも呼べないほどあっさりとしたものだった。

ミケヌ「そこどいてください。ぼくもすぐにシンムさんを追わないといけませんから」

笑顔でミケヌはそう言うと、右手で小剣を投げつけた。弓を構えもせず、ヤカモチは右手に矢を握り締め、小剣に向かって走り出した。次の瞬間、小剣はヤカモチの左手に突き刺さる。否、ヤカモチは左手で身を守った。鬼であるミケヌと戦う以上、ただの小剣に向かっていく方が安全だということをヤカモチは長年の勘によって理解していた。そして、右手でミケヌの首に矢を突き刺すべく接近する。

ミケヌ「たいしたものです。小剣を避けていたら、ここまでたどり着けませんでしたから。シンムさんは恵まれていますね」

ヤカモチ「無念」

矢をミケヌに突き刺そうとした時、すでに右腕には矢も拳も無かった。かまいたちによってヤカモチの右手は切断されていた。

ミケヌ「ヤカモチさんのことは、一生忘れません」

笑っていたミケヌの表情が一瞬だけ真面目な表情に変わる。小剣をミケヌは握り、ヤカモチの胸へと近づける。

一つの命が風前の灯と化した時に、タケヒコはたどり着いた。気配を完全に殺した状態で、ミケヌの背後をタケヒコは取っていた。そして、わざと気配を放つ。その時ミケヌに生じたわずかな隙を縫ってヤカモチが小剣から逃れ、ミケヌを突き飛ばす。突き飛ばされたミケヌは簡単に倒れ込まず、殺気をタケヒコに向けながら転がり、タケヒコと間合いを離してから立ち上がった。

ミケヌ「やっぱり来ましたか？」

タケヒコ「どうやら、間に合ったみたいですね」

ミケヌ「そのようですね。ぼくには困るんですけどね」

最大限の警戒をミケヌに示しながらも、タケヒコの視線は自然とヤカモチの失った右手にいく。その視線に気付いたヤカモチが面目なさそうに静かな声で言った。

ヤカモチ「タケヒコ様、この様な醜態を晒してしまって申し訳ありません」

痛みからからか、ヤカモチは息苦しそうにしながらも自分の手で応急処置を施していく。

タケヒコ「ヤカモチさん、シンム様はどうなされました？」

取り敢えず、タケヒコの見立てでは命には別状はなさそうだった。ゆえに、タケヒコは現状で優先すべき事象の話を振った。

ヤカモチ「先に行かれました」

無防備に、タケヒコはミケヌに背を向ける。まるでそこには誰もいないかのように。

タケヒコ「そうですか。でしたら、わたし達もすぐに向かいましょう。」

敵であるミケヌに背を向け、敵であるミケヌを無視した様に、タケヒコは動く。右手を失ったヤカモチに肩を貸そうとした。

ヤカモチ「ご迷惑はかけません」

肩を貸そうとしたタケヒコの行為を、ヤカモチがすまなさそうな表情で否定する。

タケヒコ「ヤカモチさんは、これからもシンム様に必要な方ですから」

小剣を握ったミケヌは、無防備になったタケヒコに殺気を放っている。それに気付き、タケヒコはミケヌに目をやった。

ミケヌ「ぼくも連れて行って貰えますか？」

にこやかな表情に戻して、ミケヌは気軽に言った。

タケヒコ「すみませんが、今はあなたと話している時間がありません。それに戦ったとしても……結果は、あなたには分かっていると思いますが」

ミケヌ「そうですか。でも、今度は違うかもしれませんよ」

そう言ったミケヌの目を見た。何かを決意した目をしていた。恐らく、死を覚悟している。そんな目をしている者をタケヒコには無視する事は出来ない。

タケヒコ「ヤカモチさん、大丈夫ですか？」

ヤカモチ「よしなに」

呼び寄せた兵士に支えられながら、ヤカモチが川の方へ向かう。その背中が見えなくなってから、タケヒコはミケヌと向かい合った。

タケヒコ「申し訳ありませんが、今度は一瞬で終わります。代わりに、わたしの実力の一端をお見せしましょう」

殺気をタケヒコが放つ。殺気に当てられたミケヌの額から汗が噴き出し始める。

ミケヌ「意外に対した事ないですね」

歯を食いしばりながらミケヌは言った。恐怖から立っているだけで辛い事が分かるほどに汗をかいている。それでも表情にはミケヌは決して出さない。その強さにタケヒコは心底感心しながら、同時に自らの強さが嫌になった。精神的な強さを見せるミケヌを圧倒的な力の差で粉砕してしまうことになるのだから。

腰に挿した剣、千金丸（チガネマル）にタケヒコは手を掛け、すり足でゆっくりとミケヌに近づく。横からタケヒコの動きを見た者がいたならば、あまりのゆっくりな動きにじれったさを覚えただろう。だが実際には、信じられないほどの速度でタケヒコは動いていた。故にミケヌは一歩も動けるはずなかった。迫り来る剣撃を前に成す術なく、斬られるはずだった。千金丸と銘づけられた剣が一閃される。しかし、戦いは終わらない。自らが生み出した風で、ミケヌは自らを吹き飛ばしてそれを避けたために。

ミケヌ「危ない所でした。でも今のいったい何ですか？」

タケヒコ「今のを……人であるあなたが避けれたのですか？」

本気でタケヒコは驚いていた。今の一撃を、恐怖で立ちすくんでいるミケヌが避けられるはずなどないと確信していたから。仮にそうでなくても、人には避ける事など不可能な速度で一閃したはずだ

った。

ミケヌ「一瞬では終わりませんでしたね」

タケヒコ「まさかあなたも魂魄強化(こんぱくきょうか)を……」

ミケヌ「それはなんですか？」

目を見る。澄んだ目をしていた。死を覚悟はしているだろうが、死を望んでいる様には見えない。焦っている様にも見えない。そんな目を見て、タケヒコは不安を一蹴する。

タケヒコ「すみませんでした。いくらなんでも一撃で終わらせようとは失礼でした」

ミケヌ「あんまり評価して貰っても何もあげられませんよ」

次の攻撃で、タケヒコはミケヌとの戦いを本当に終わらせるために集中力を高める。緊張が頂点に達し、タケヒコが一歩だけ踏み出した時だった。上空からミケヌの背に矢が襲いかかった。

その矢をタケヒコは何処からともなく現われた刃に七支の枝を持った剣で、ミケヌごと一閃した。矢が両断され、地面に落ちて消滅する。

タケヒコ「タマモ！　あなたは……あなたはあくまで、魂魄強化(こんぱくきょうか)を行うというのですか！」

空を見上げてタケヒコは叫んだ。視線の先にはタマモが微笑を浮かべながら弓を握っている。その姿を確認して、タケヒコは千金丸を腰に納め、刃に七支の枝を持った剣を牽制するようにタマモへ向けた。

微笑を浮かべたままタマモが舞い降りて来る。ぱっと見ただけなら、天女が天上から舞い降りたかと思わせるほどの美しさをタマモは持っている。だがタケヒコに取ってタマモは天女などでなく、最大にして最悪の敵でしかない。自然、七支の剣を握る手に力が入る。

タマモ「ふふふ。お帰りなさい、タケヒコ。あなたにはその姿の方が似合っているわよ」

言葉の代わりに、タケヒコは苦虫を潰した表情で応えた。本当は

この七支の剣を、この天之羽張を抜く気はなかったから。
七支の剣に、天之羽張に一閃されたミケヌは呆然と立ち尽くしていた。身体には傷一つない、それがミケヌを呆然とさせていた。
ミケヌ「何が今起こったんです？　それに、タケヒコさんのあの剣はいったい」
視線をミケヌは七支の剣に向けていた。
空からタマモはゆっくりと舞い降りて来ている。地上に降りて来る前に、タケヒコはミケヌを何とかしようと思い、無駄だと承知しながらも告げた。
タケヒコ「ミケヌさん、この国から。否、邪馬台国からも出来うる限り遠くへと離れてください。体なら心配いりません。触れていないのですから」
ミケヌ「いったい何をしたんですか？」
タケヒコ「その疑問には答えられません。ただ、あなたに触れなかったのは、わたしがこの剣で人を斬りたくなかった、それだけです」
ミケヌ「……それだけですか？」
呆然としたまま、ミケヌは動きそうにない。このままいけばタマモとの戦いにミケヌは巻き込まれるだろう。その前に斬ろうかとタケヒコは思った。だが、それが出来そうにない。それならばと、タケヒコは動いた。
タケヒコ「場所を変えます！」
タマモ「ふふふ。いいわよ」
他に誰もいない場所へとタケヒコは走り出した。走りながら何度かタマモを確認する。ゆっくりと舞い降りながら、タケヒコの後を着いて来ている。途中、タケヒコの殺気に当てられた妖鬼が怯えながら襲いかかって来たが、天之羽張で傷一つ与えずに倒していた。
街の中でかつて、稲作の為の田があった場所でタケヒコは立ち止まり、空から降りて来るタマモを待った。
弓を持った天女は、微笑を浮かべながら舞い降りていた。

伊都国の裏門までシンムはたどり着いていた。日頃は使う事などない開かずの門。裏門の先には川を渡るための橋が木々に隠れた見えにくい位置に掛けられている。そこを開放していた。

シンム「戦えない奴からどんどん逃がすんだ！」

妖鬼から辛うじて逃れた人々が門を通っていく。いつ襲ってくるかもわからない妖鬼を警戒しながら、シンムは兵達に指示を出していた。

そんなシンムを能天気な口調の声が呼び止めた。振り向くと女の子が一人で無邪気そうに立っている。

イスズ「伊都国は心配しなくてもだいじょうぶですぅ」

シンム「おまえ誰だよ？」

イスズ「イスズちゃんですぅ。イスズちゃんと呼んで下さい。他の呼び方は許さないですぅ」

地獄と化した伊都国で能天気きわまりない言葉。少しだけシンムは頭に来たが、今は取りあっている暇などあるはずない。だから追い払うように言った。

シンム「ふざけんな。おまえらと遊んでいられるか」

イスズ「イスズちゃんふざけてないですぅ。変な事言わないでください」

仕方なくシンムは剣を抜く。この伊都国を地獄にした張本人。普段なら怒り狂ってすでに襲いかかっていただろう。実際、アマンミケヌに会った時は怒りでどうかなりそうだった。それが、能天気な口調の為か、それとも他の理由からか、そこまでの怒りを覚えはしなかった。

剣を構えて裏門の方へシンムは目を向ける。人々が絶えず通っている。決して巻き込むわけにはいかない。更には、時間を掛けるわけにもいかない。ならばと思い、シンムはいっきに間合いを詰めるべく動き出した。

間合いを詰めようと近づくシンムに炎が飛んで来る。それを避けながら観察も怠らない。この時、日頃からは考えられないほどにシンムは冷静だった。よくよく見ると、イスズの指先から炎は飛んできている。だから、その指先の動きに注意を払いながらシンムは動いた。

頬をふくらませながら、イスズがとんちんかんな事を口走る。

イスズ「動かないでほしいですぅ。動くと当たりません！」

シンム「当たりたくねぇ！」

そう言い終わるや否や、シンムは封印呪の首飾りをイスズ目掛けて投げつけたが、当然の様にあっさり避けられた。ほんの一瞬前に見せたシンムの冷静さは、早くも何処かへと消えていた。

シンム「おまえこそ動くんじゃねぇ」

イスズ「こんな首飾り、イスズちゃんいりません」

シンム「いらなくても貰ってもらうからな！」

イスズ「むむむ。それならイスズちゃん本気だしますぅ」

第三者から見れば子供の遊び以外に見えない会話が続いた。この場にタケヒコが入れば頭を抱え込む様な会話の後、イスズが懐から小袋を取りだした。

お手玉か何かで使うような小袋を次々にシンムに向かって投げつける。単純に投げつけられるそれを、シンムは簡単に避ける。

シンム「何をしてぇのかしらねぇけど、避ければ何にも意味ねぇだろ」

イスズ「これからわかりますぅ。覚悟して下さい」

気付いた時にはシンムを囲むように小袋が落ちていた。その小袋に向かってイスズが指先から炎を飛ばした。次の瞬間、小袋から噴き上がった火柱にシンムは包まれた。

イスズ「これでイスズちゃんは勝ちましたですぅ。ですから、負けたので言う事を聞いてください」

シンム「こんな火ぐらいどうしたって言うんだ！」

多少の火傷を我慢しながら、シンムは火柱を突っ切ってイスズに

斬りかかろうとした。その瞬間、業火がシンムを包み込む。焼死。イブキシンムの死。伊都国の王の死。最早、勝敗がすでに決した中で、それを否が上でも伊都国に突き付ける事によって、戦いの終結が告げられるはずだった。

業火にシンムが包まれようとした瞬間、その行動にあきれながらもスクネはシンムの服を天之壽矛（あまのじゅぼこ）で貫くと、自らの後方に放り投げて火柱の中から脱出させた。

どすんと音を立てて、シンムが尻から地に打ち付けられる。顔を真っ赤にしたシンムがスクネに何か言おうとするが、横になっているカグヤに気が付き、怒声の内容が若干変化する。

シンム「いてて。てめぇ、いきなり何す……姉貴、どうしたんだ？」

スクネ「気を失っているだけだ」

シンム「気を失っているって……おまえが何かしたのか！」

答える気にもスクネはなれなかった。それが余計に勘違いさせたのか、シンムは声を強くして吠えた。

シンム「答えろ！　おまえが姉貴に何かしたって言うんなら絶対に許さないからな！」

ちらりとシンムを白い目で見ただけで、スクネは何も答えない。それが癇（かん）に障って、シンムは怒声を強める。その声に起こされたのかカグヤが目を覚まし、スクネの代わりに答えた。

カグヤ「違うよ、シンム。スクネじゃないから気にしないで」

シンム「スクネじゃないって……だったら誰が！」

怒声をスクネは完全に無視していた。そんなスクネを無視するように、緊張感のかけらもない口調で、緊張感のかけらもない言葉が続く。

イスズ「もう！　イスズちゃんを無視して話を進めないでほしいですぅ」

ため息交じりにスクネは天之壽矛（あまのじゅぼこ）を縦と横に払う。天之壽矛（あまのじゅぼこ）の空

間歪曲の力が奇跡を起こしだし、届くはずのない攻撃がイスズに襲いかかる。それで終わるはずだった。

天之壽矛（あまのじゅぼこ）の刃がイスズを切り刻む寸前、イスズをかばう様にイヨが飛び出した。

イヨ「危ない、イスズちゃん！」

意味のない行動のはずだった。意味があるとすれば、わずかばかりのイスズの延命の代償に、イヨが切り刻まれる。それだけのはずが、空間歪曲の力が消え、天之壽矛（あまのじゅぼこ）はむなしく空を切った。

今起こった事態に困惑したスクネは、天之壽矛（あまのじゅぼこ）に目をやった。天之壽矛（まのじゅぼこ）に異常はない。次に、スクネは疲れた表情で状況を見守っているカグヤに目をやった。きょとんとして目を返して来ただけで、何かをした様子など見当たらない。ほんのわずかの間にスクネはそこまで考えていた。

そんなスクネの真実など、シンムにわかりようはずもなく、スクネが素振りしているようにしか見えなかった。だから背後からスクネの肩を掴んで怒声を上げた。

シンム「ふざけんな、こんな時に何やってんだ、おまえ！　そんなところで矛なんか振っても当たるわけないだろ、そこどいてろ、おれが戦う！」

舌打ちしたスクネがシンムの手を振り払い、イヨに向かって駈け出した。

スクネ「あっちの女から先に始末する」

標的をイヨの心臓に定めたスクネが、天之壽矛（あまのじゅぼこ）を構える。

イスズ「イヨちゃん、何で出て来たんですか。約束が違いますぅ！」

心配そうに見ているイヨに、イスズが口をふくらませて抗議している。一見しているだけなら微笑ましい二人を死の刃が襲う。

スクネ「死ね」

寸分たがわずにスクネは心臓目がけて突いた。かばおうとしたのか、イスズが動く仕草を見せるが、それよりも遥かに早くスクネの

矛先がイヨの心臓へ襲いかかる。確実に突いた天之壽矛（あまのじゅぼこ）の一撃で、イヨの命は終わるはずだった。しかし、またもむなしく天之壽矛（あまのじゅぼこ）は空を突く。使用してないはずの空間歪曲の力が発生したため、心臓を貫くはずの矛先は、イヨの背中の後ろの何もない空間を貫いた。

予想外の事が起こり、わずかに動揺したスクネが突き飛ばされる。

イスズ「イヨちゃん、しっかり手をギュッとしてて欲しいですぅ」

横からスクネを突き飛ばしたイスズは、すぐにイヨを背負うと逃げて行った。

その行方を置き上がったスクネは見ているだけだった。

シンム「なんで追わないんだ！」

怒声を上げるシンムをスクネは無視して、疲れた顔をしているカグヤに話しかけた。

スクネ「……カグヤ、身体は大丈夫か」

カグヤ「うん。ありがとう、もうだいじょうぶだよ」

誰が見ても、大丈夫そうには見えない表情でカグヤは言った。

スクネ「そうか」

簡潔にそう言うと、スクネは街を暴れ回っている妖鬼に目をやった。

スクネ「あれを鎮（しず）めて来る」

カグヤ「……お願いね」

あまりにも簡単そうに言ったスクネの言葉に、当然の様にカグヤも答えた。二人にはそれで十分だったが、一人、それでは不十分なシンムが声を大にする・

シンム「一人で何が出来るんだよ！」

その言葉を無視して、スクネは歩き出す。

シンム「おまえ、人の話し聞けよ！」

スクネ「そこまで声を張り上げてよく疲れないな」

かちんと来て、シンムは背後からスクネを殴ろうと拳を振り上げたが、振り上げたこぶしを力なく下ろした。

シンム「……ヤカモチ」

正面からヤカモチが歩いて来る。右手を失い、応急手当に使用したと思われる真っ赤に染めた布を左手で押さえながら、兵士に支えて貰っていなかったら、今にも倒れそうにふらつきながら、ヤカモチが歩いて来るのがシンムの目に入った。

街を暴れ回る妖鬼に圧倒的な力が、天之壽矛（あまのじゅぼこ）を持ったスクネが襲いかかる。

効率よく、スクネは一撃毎に数体の妖鬼を貫いていく。天之壽矛（あまのじゅぼこ）による空間歪曲の力で、遠くであろうと近くであろうと関係なく、目に入った瞬間にスクネは貫いた。急所を確実に貫き、いっさいの余計な時間をかけない。圧倒的なスクネの力によって、伊都国を蹂躙（じゅうりん）していた妖鬼は短時間で全滅した。

崩壊5

空から木の葉が舞い散る様に降りて来たタマモを、タケヒコは睨みつけた。右手には、いつでも斬りかかれるように天之羽張（あまのはばしり）を握っている。斬りたい対象だけを斬る事が出来る、物質透過（ぶっしつとうか）の力を持つ天之羽張（あまのはばしり）だけが、タマモの弓矢に対抗できるから。

死を運び込む天女と本気で戦う決意を、すでにタケヒコは固めていた。

タケヒコ「もう隠れていなくてよろしいのですか、タマモ」

タマモ「ふふふ。おめでとう、タケヒコ」

上機嫌にタマモは言った。その意味はタケヒコには分からないし、興味もない。ただ、その態度に腹が立ち、歯ぎしりをしながら無駄だと承知しつつも、タケヒコは問うた。

タケヒコ「……タマモ。あなたに聞いておきますが、今すぐ自らの力を禁じる気はありませんか？」

タマモ「タケヒコのお願いなら聞いて上げたいのだけれど……出来ないわね」

予想通りの答えが帰って来た。それでも一縷（いちる）の望みにかけ、働きかける方法を変える。脅しを含んだ言い方に。

タケヒコ「今こちらには、スクネもいるにかかわらず、わたし達と戦うつもりですか？」

タマモ「戦い？　そんな事よりも喜びを分かち合いましょう。およそ千年ぶりに、全員が一つ所に揃ったのでしょう？」

タケヒコ「すみませんがそんな気分ではありません」

タマモ「あら、残念ね。なら続けるのかしら、この勝負の見えた戦いを？」

タケヒコ「この状況で、あなたに勝ち目があると思うのですか？」

タマモ「ふふふ。勝ち目？　何を考え違いしているのかしら？」

余裕の笑みを浮かべながらタケヒコの周りを、タマモは一周する。

散歩でもするかの様に、ゆっくりと、品定めするような視線を投げかけながら。

業を煮やしたタケヒコが言葉を強める。

タケヒコ「タマモ、回りくどい事はもうやめましょう。あなたが止めないというのなら……死んで貰わねばなりません」

タマモ「あら、回りくどかったかしら？　それに止めるって何のことかしら、魂魄強化だとしたらお門違いね。あれ、十四年前に初めて使ったのはタケヒコのはずよ」

タケヒコ「確かに……魂魄強化を初めに行ったのはわたしです。それを正当化するつもりも、否定するつもりもありません」

脳裏によぎるのは頭を下げ、伊都国を守る力が欲しいと必死に懇願する男の顔。頭を下げられ、他にやりようがなかったとはいえ、魂魄強化という禁に、タケヒコは手を染めた。

苦い記憶を噛みしめながら、タケヒコは頷いた。

タマモ「そう、いい事ね。前皇太子をあなたが殺した事も認めるのね」

タケヒコ「……ええ。ただし、あの時、あの状況を作り出したのはあなたのはずです」

確かに、魂魄強化を使ったのは、タケヒコも後ろめたかった。それでも、それを望んだ者の意志を、タケヒコは今も覚えている。だから、後ろめたさが多少存在しても、そこに罪悪感はいっさいなかった。

タケヒコ「わたしに精神攻撃は効きません！」

天之羽張を、タマモの言葉を払いのける様に、タケヒコは振るった。それを跳んで避けたタマモがつまらなさそうに言葉を口にする。

タマモ「タケヒコが罪悪に苦しむ顔を見たかったのだけど、残念ね。でも、その精神的に強いところも好きよ」

タケヒコ「あなたに好いて貰いたいとは思いませんが」

第二撃を繰り出そうとしたタケヒコを、一人の男が制止する。その男は童顔に笑顔を浮かべていた。

ミケヌ「お話中悪いですけど。ぼくの用事も聞いて貰えますか？」
先程の呆然としていた時と違い、ミケヌの表情は晴れ晴れとしていた。
タマモ「邪魔……消えなさい！　特別に、壊さないでいてあげるから」
目を向けもせず、タマモは蝿でも追い払うかのように手首を振った。それにも、怒った様子をミケヌは見せない。ただ晴れ晴れとした笑顔で答える。
ミケヌ「やっぱり怒られましたか。だから、先に断りを入れたんですけどね」
晴れ晴れとした笑顔が更に輝く。その笑顔にタケヒコは危うさを覚えた。その笑顔はタケヒコが何度も見て来た表情にそっくりだったから。死の覚悟を決めた者の顔に。
タマモ「壊れたいようね」
吐き捨てる様にタマモは言った。
ミケヌ「悪いですけど、簡単には殺されませんよ。みなさんといっしょに行くつもりです」
笑顔がミケヌから消える。同時にミケヌの手が輝き始める。手には呪(じゅ)が握られ、呪には「八」という文字と「岐」と思われる文字が半分描かれていた。
タケヒコ「ヤマタノオロチ！」
呪から溢れだす光に、ミケヌが包まれていく。
ミケヌ「イヨ様は……ぼくが守ります！」
タケヒコ「やめなさい！　それは、そんな呪では……」
止めようと手をタケヒコは差し伸べた。しかし、その手は永遠に届かない。
その呪の名はヤマタノオロチ。巫女において最高の力を持つと言われる女王ヒミコが作り出した火災・落雷・地震・吹雪・病気・乾燥・暴風・洪水の八つの災害を同時に開放する呪、ヤマタノオロチ。

開放した瞬間から、すべてに降りかかる蛇の形をした厄災の召喚。
　手を差し伸べたタケヒコの目の前で光は消え、ミケヌが倒れる。
呪には「八岐」という文字が刻まれていた。呪を使ったミケヌの命をヤマタノオロチは吸い、その魂を封じ込めた。結局、ミケヌが命の代償に得たのは、「岐」の文字の完成だけだった。
　ミケヌ「なんで……自分の命も自由に使わせてもらえないのですか……」
　倒れる瞬間につぶやいたミケヌの言葉が、タケヒコの脳裏から離れなかった。
タマモ「失敗作ごときが、わたし達の会話に介入した罰ね。ヤマタノオロチは八人分の魂を蓄えないと使えないものなの。そんな事も知らないで……馬鹿じゃないのかしら？」
　倒れたミケヌに向かって、タマモは吐き捨てるように言った。
　その言葉にタケヒコは嫌悪を込めた怒りをあらわにする。
タケヒコ「そのような言い方は、ミケヌさんに対して失礼です！」
　タマモ「失礼、何に対してかしら？　まさか、こんな失敗作に礼をつくしてもしょうがないでしょう？」
　タケヒコ「失敗作？　先ほども言っていましたが、あなたはまだそんな言い方を？　彼女がすぐ側にいると言うのに？」
　タマモ「彼女？　あなたの方がその言い方、いますぐ止めなさい！」
　至近距離からタマモは矢を放って来た。その矢をタケヒコは天之羽張（あまのはばしり）を振って弾き返す。矢がタマモの頬をかすめて通り抜ける。
　タケヒコ「最初に話しましたが、勝負は見えています。わたし達の力は拮抗しています。そして、すぐにでもスクネが駆けつけます。これが何を意味するか、あなたなら理解出来るはずですが？」
　タマモ「いいわ。教えてあげる。あなたの言うとおり、勝負がすでに付いている事を……」
　懐から首輪になっている紫色の勾玉を取り出すと、タマモはそれを首に掛けた。そして、再び空高くタマモが再び舞い上がっていく。

紫色の勾玉を目にして、思わずタケヒコは声を上げた。
タケヒコ「それは！」
タマモ「これが答えよ。神器（じんぎ）……五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）」
呆然とするタケヒコの肩を、何者かが掴んだ。
スクネ「何を呆けているタケヒコ。その暇があるなら、おれを急いで投げろ」
我を取り戻し、タケヒコは言われるままにタマモ目掛けてスクネを投げつけた。
加速力を得たスクネが、天之壽矛（あまのじゅぼこ）を構え上昇して行く。好機は一度だけ。五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）を使わせるわけにはいかず、飛行呪を準備していない以上、上空のタマモに対して、スクネはほ一瞬でもあるのかないのかわからない好機にかける。
天之壽矛（あまのじゅぼこ）の空間歪曲の力を駆使して、タマモの背後から放った一撃が弓によって防がれる。あきらめずスクネが第二撃を放つが、それも防がれる。
天之壽矛（あまのじゅぼこ）の2撃目を防がれた直後、タマモが矢を放つが、スクネは身体を捻（ひね）らせて避ける。その拍子に上昇する勢いを失い、スクネは落下を開始した。
タマモ「悪あがきにしかならなかったわね」
タケヒコ「どうでしょうか」
投げつけた直後に自ら跳躍して来たタケヒコが、天之羽張（あまのはばしり）を振るう。好機に掛けた一撃は、タマモを斬り棄てるはずだった。だが、その一撃は別の事に使われる。死角から後頭部に襲いかかって来た矢を落とすために。
タマモ「忘れたのかしら？　わたしの天詔琴（あまのりごと）の力を。わたしが狙いを決してはずさないことを」
跳躍時の勢いを失った二人は、地上へ落下して行く。落下していく二人は絶望の始まりを見ている事しか出来なかった。
両手でタマモがうやうやしく、五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）を持って天に向けて掲げる。

タマモ「大神のこと知るそのいみな八尺勾玉なる」

言葉と共に、金色に輝く紫色の後光がタマモを覆う。美しくもある悪夢の光景が上空を覆い尽くす。

二人は歯を食いしばりながら見上げる。悪夢を阻止できなかった後悔の念と共に。

神によって創られた神器、五百御統之珠。この時タマモは神その者となる。金色の紫。神の色の後光を纏ったタマモが、天之羽々矢を左手に取る。神によって与えられた神宝と呼ばれる武具、タケヒコの天之羽張、スクネの天之壽矛、タマモの天之羽々矢。五百之御統之珠は神宝を神の領域にまで引き上げる。天之壽矛ならば無限大の距離で空間歪曲の力が使え、天之羽張ならばあらゆる物質を透過出来るようになる。

神の領域に達した天之羽々矢を、同じく神の領域に達した天詔琴にタマモがつがえる。

タマモ「否なく当のみとなるもの・汝・一にして百万となるもの」

天詔琴と銘付けられた神宝。射た矢に念じた物を追尾する力を与える回避不可能な弓。

五百之御統之珠の力で百万にまで増えた矢を、タマモは天詔琴で放つ。伊都国で命ある者すべてに対して。

タケヒコ「させません！」

地上に降りたタケヒコが再び跳躍しようとする。

スクネ「無駄だ、もう遅い。それよりも出来る事をすべきだ。すべてを失いたいのか」

跳躍しようとしたタケヒコを、スクネは強引に阻止する。そう言ったスクネは、唇を噛み血で濡らしている。同じ様にタケヒコも唇を噛む。二人は後悔を、これから始まる絶望をまぎらわす術を、他に知らなかった。

百万の矢が放たれた。矢は暴雨のように降り注ぐ。その暴雨は意思を持っているかのように、命のある者全てを探しながら降り注い

だ。

必死にタケヒコとスクネは走り続ける。音速の領域で走る二人なら、シンム達の下まで一瞬でたどり着く。それが二人に今取り得る最善の策だと信じていた。だが神器の力で神の領域にまで高められたタマモの天之羽々矢（あまのはばや）は音速を超え、光速の領域に至っていた。光速で迫り来る矢を叩き落としながら二人はシンム達の無事を祈りながら目的地を目指した。

スクネ「数が多すぎるが、カグヤは無事だろう。問題は」

タケヒコ「シンム様……どうかご無事で」

伊都国の至る所で、命のある者を見つけては矢が何の慈悲を見せる事も無く死を与えていく。人も、虫も、動物も、あらゆる者へ等しく、死の事実すらわからないほどに一瞬にして、矢は死を与えた。

矢が降り注ぐ。それは空が落ちて来るかのような光景であった。その絶望を、シンムはその身に訪れる最期の時まで忘れる事はなかった。

空が落ちる光景をシンムは呆然と見上げていた。

シンム「いったい何が起こってんだ？」

呆然とするシンムの上に、何者かが覆いかぶさる。その際に頬についた血のぬくもりを、シンムは生涯忘れない。

ヤカモチ「お二方とも、決して動かれないでください」

そう言ったヤカモチが、シンムとカグヤの壁になるように立ち尽くすと、両手を大きく広げた。矢が次々にヤカモチに突き刺さる。身体で信じられないほどの矢を受けても、ヤカモチは決して倒れない。

そんなヤカモチの最期の言葉は、口から発せられたかどうかはわからない。だがシンムには、確かに聞こえていた。

ヤカモチ「この方達だけは、守り通して見せます」

わめく事も、怒り狂う事も、シンムには出来ない。謝りたいのに、その言葉が口から出てこない。泣く事も、動く事も出来ない。感謝

の言葉を口にしたいのに、それすらシンムには出来なかった。
カグヤ「……いや……もう……いやだよ……ぜったい……いやぁぁぁぁぁぁーー」
震えるカグヤの絶叫と共に、辺りいったいが真っ白に染まる。それが伊都国でシンムが見た、最後の光景だった。

崩壊　後

いつの間にか気を失っていたシンムが目を覚ました。空に広がる星が最初に目に入る。起き上がり、辺りを見回す。そこは伊都国（いとこく）でない、何処か別の場所だった。

シンム「ここ……どこだ？」

すぐ側にいたタケヒコが答える。

タケヒコ「正確な場所はわかりませんが……おそらく邪馬台国（やまたいこく）の外だと思われます」

シンム「邪馬台国（やまたいこく）の外？　今まで伊都国にいたのに？　どうやったら一瞬でこんな所まで？」

僅かの沈黙の後、目線を下げタケヒコは言いづらそうに答える。

タケヒコ「……転移させられたのです」

シンム「転移ってタケヒコ、そんな呪も持ってたのか？」

再び、僅かの沈黙の後、タケヒコは答える。目線は下げたまま、声の音調も下げながら。

タケヒコ「申し訳ありません、シンム様。その件に関しましては申し上げられません」

シンム「言えないって……なんで？」

またも僅かの沈黙を見せ、快活にタケヒコは返答しない。代わりに深々と頭を下げる。そして、声を振り絞る様に、謝罪の言葉を口にした。

タケヒコ「……申し訳ありません」

シンム「なんで言えないかも言えないってのかよ」

深々と何度も頭を下げるタケヒコの態度を見て、シンムはそれ以上の追求を諦めた。仕方なく周りを見回す。人が少ない。そして、その中に居るべき者がいない。居て欲しい者がいない。

本来まっさきに聞くべきことを思い出し、シンムは大声を出した。

シンム「伊都国は、みんなはどうなったんだ？」

タケヒコ「確認したわけではありませんが……おそらく伊都国は滅びました。ただ、ヤカモチさんが死んだ事は確かです。先に非難していた人々がどうなったかまでは……残念ながら」

頭を下げたまま、タケヒコは上げようとしない。そんなタケヒコから聞いた言葉は、シンムを愕然（がくぜん）とさせるのに十分だった。

シンム「ヤカモチが……死んだ？。おれ、まだ謝ってなかったのに……」

何となくわかっていた事を、ヤカモチの死を告げられ、シンムはその場に崩れ落ちる。目の焦点がぼやけ、目の前で頭を下げているタケヒコすら満足に見えない。心を後悔だけが支配する。

シンム「ヤカモチも、伊都国も、みんな……」

しばらく呆然としながら天を見上げていると、突然、頬に痛みが走った。頭を上げたタケヒコに、頬を叩かれたために。その場に尻をついたまま見上げるシンムに、タケヒコが手を差し出す。

タケヒコ「シンム様、失礼しました。お立ちくださいませ。これからどうするか決めねばなりません」

シンム「これからだって？　今更どうするって言うんだ！」

差し出された手を払いのけ、シンムはわめき散らした。その声を聞いたタケヒコが悲しそうな顔をしながら、さとし始める。

タケヒコ「生き残った人達が少数ですがここにいます。それに……今、気を失われているカグヤ様をこのままにしておくわけにも参りません」

シンム「タケヒコが決めればいいだろ！」

やけくそ気味に大声で叫ぶシンム。今にも泣きそうな顔を見せるシンムに対して、タケヒコは悲しそうな表情で首を横に振る。

タケヒコ「そう言う訳には参りません。王はあなた様なのですから」

シンム「ふざけんな！　王って何なんだ？　おれには何も守れなかった。タケヒコなら……守れたんだろ？」

今にも泣きそうな顔をしながら、シンムが怒声を上げる。立ち上

がると同時に、タケヒコを押し倒して馬乗りになる。
シンム「ふざけんなよ……答えろよ」
殴られながらも謝り続けるタケヒコの顔に、あざが増えて行く。
シンム「タケヒコが、最初っから、本気出してたらこんな事にならなかったんだろ！」
涙がシンムの目からこぼれ落ちる。
シンム「ヤカモチも、みんなも、もういないんだろ！。何もかも失って……何をしろって言うんだ！これからおれに、何も出来るわけないだろ！」
地面を渾身の力で叩いたシンムの左手が血で滲む。右手も同様に振り下ろそうとしたが、何者かに腕を掴まれて阻止される。阻止した何者かは、スクネだった。
スクネ「その通りだ」
いつも通りの冷静さでスクネはそう言った。そんなスクネを、シンムは睨みつけた。
シンム「てめぇに何が分かるんだ！」
涙で顔を濡らしながらシンムは掴まれた腕を払いのけようとしたが、強く掴まれていて出来ない。
スクネ「おれに分かる事は、自分では何も出来ないくせに、わめき散らしている男に、真実を言う必要があった事だ」
そう言うとスクネは掴んでいた腕を放した。
シンム「ふざけんな！　よそ者のてめぇに何も言われたくねぇ！」
すぐにシンムは立ち上がり、スクネに殴りかかるが簡単に避けられる。そして、足を掛けられ前のめりに倒れた。顔が土でまみれる。
すぐに起き上がると、シンムは再び殴りかかった。
今度は殴りかかった右手をスクネの左手に掴まれた。
スクネ「やはりおまえには何も出来ない」
心が崩れ落ちたような気がした。その言葉にシンムは何も反論できなかった。
シンム「みんな、ヤカモチも死んじまった。おれが未熟なせいで、

父さんと爺さんが命を賭けて守ったものを、全部だめにしちまった。婆ちゃん達が、がんばって蘇らせた国をまた失っちまった……」

涙と土で、シンムの顔はぐちゃぐちゃになっている。そんなシンムの目をじっと見たまま、スクネは何も答えない。

シンム「おれ、何も出来なかった。結局何にも……」

力が全身から抜ける。伊都国での日々が走馬灯のように駆け抜ける。まるで、それを全部シンム自信が壊してしまったような罪悪感さえ覚えていた。

腹に痛みが奔った。原因はスクネの拳。それに気付いた時には蹴り飛ばされていた。

スクネ「おまえには何も出来ない……ならば、何もしない事は出来るのか？」

蹴り飛ばされて倒れこんだスクネはそう告げた。

スクネ「このまま何もせず、今まであった事をすべて忘れ、寿命死するのを待つことを」

シンム「そんな事、出来る訳ねぇだろ！」

涙の代わりにシンムは怒りで顔を赤らめる。

スクネ「それも出来ないのなら、この場で殺してやってもいい。最も、どちらにしろ、おまえは何もしないがな」

シンム「冗談じゃねぇ！　おれが、絶対、ヤカモチ達の仇をとってやる」

怒りで狂いそうになるスクネの言葉は続く。

スクネ「仇？、何を言う？　何も出来ないのだろ」

シンム「何も出来なかったさ。だけどさ……仇ぐらいは討ってやる！」

スクネ「おまえにはそれも無理だ」

シンム「無理だろうと何だろうと知った事か！　てめぇに何が分かる！」

スクネ「タマモとおまえの絶望的な力の差だ」

シンム「それでもだ！。それでも……やる！」

我慢できなくなり、起き上ってスクネに殴りかかった。今度は眉一つ動かさずに、スクネはそれを右頬で受け止めた。そして、言った。

スクネ「なら、今後の方針は決まった。あとは好きにしろ」

真っ赤に充血した目を、シンムは見開く。何事もなかったかのように、スクネは横になっているカグヤの隣に片膝を立てて座った。そのスクネにタケヒコが深々と頭を下げる。

タケヒコ「礼を言います、スクネ」

空を見上げてシンムは咆哮(ほうこう)した。その咆哮(ほうこう)は、遥か黄泉のかなたへと届きそうなほどの強さを持っていた。

咆哮を終えると、シンムはいつも通りの表情に戻る。

シンム「姉貴はだいじょうぶなのか？」

タケヒコ「カグヤ様は心配いりません。眠られているだけです」

冷静になって辺りを、シンムは改めて見回した。生き残っている兵士も、民も、不安そうな表情を浮かべている。その表情を見ると、自分の愚かさが胸に突き刺さる。

どうしていいかはシンムには分からない。だから、聞いた。

シンム「とりあえず、これからどうしたら良いと思う、タケヒコ？」

タケヒコ「落ち延びる事です」

シンム「落ち延びるって……どこに？」

タケヒコ「狗奴国(くなこく)です」

その国の名を聞いたシンムの心には、理由も分からない懐かしさがこみ上げていた。

女王ヒミコ1

邪馬台国全土へ威厳に満ちた女性の声が鳴り響く。その美しき声は有無を言わせぬ説得力を持った楽隊の奏でる音色。その美しき音色に人々が陶酔する。

ヒミコ「善良なる邪馬台国の民達よ。屈強なる邪馬台国の兵達よ。偉大なる邪馬台国と共にあるすべての者達よ。聞くがよい」

邪馬台国の女王ヒミコは自らの幻影を人々の脳に直接投影して語りかけていた。すべての人々が自らの目の前に現れた幻影に跪く。

ヒミコ「伊都国において、イブキシンムなる者が数日前反乱を起こした。そう、その名を聞いて皆の脳裏に浮かんだであろう、かつて邪馬台国全土を巻き込み、ある者に飢えの苦しみを与え、ある者には重症を負わせ、ある者には死すら与えた。あの、倭国大乱の首謀者イブキヨシモチ、コジロウの一族に連なる者だ」

その名は邪馬台国の人々の脳裏に染みついた忌むべき名。その一族に対する怨恨が人々の記憶に蘇える。それだけに、次にヒミコが述べた最初の言葉が心の奥深くまで響き渡る。

ヒミコ「まずは自らの非を謝ろう。伊都国の王にイブキシンムを据えたことは過ちであった。しかし、その過ちはアメノタマモ・アマンミケヌ・クレハイスズ、三名の尽力によって是正された。彼の者達に惜しみない賞賛と栄誉を送りたい。彼の者達こそ事態を早急に解決し、過ちを是正させた英雄たちだ」

人々がヒミコと同じように幻影として現れた三人に感謝の意を述べ、拍手で持って讃える。拍手が終わると三人の幻影のうち二人が消えてミケヌ一人となる。目を閉じてからヒミコは次の言葉に移った。

ヒミコ「しかし……しかしながら、反乱を鎮める際、アマンミケヌが黄泉へと旅立つ事となった。最悪の事態から邪馬台国を救うために犠牲となった彼の者のために黙とうを捧げ、彼の者の魂に敬意

を払ってほしい」

人々が故人に敬意を示し、ヒミコの号令と共に黙とうが捧げられる。邪馬台国から人々の喧騒が消え、国中が静寂に包まれる。

ヒミコ「わらわから一つお願いがある。本来ならばアマンミケヌの変わりを誰か探すべきであろう。しかしながら、その儀は待って貰いたい。伊都国はすでに落ちた。だが、反乱の首謀者イブキジンムは残念ながらもまだ生き伸びている」

黙とうから目覚めた人々から嫌悪の声が上がる。「まだ生きているのか」「残酷に死ねばいい」などの声が。その声もヒミコが目を見開き、次の言葉を口にすると、まるでかき消されるかの様に簡単に収まった。

ヒミコ「皆の者が不安を抱く気持は、痛いほど理解できる。ましてや、首謀者が今も生きていると知らされたならば尚更であろう。ならばこそ、アマンミケヌの魂もまた黄泉からこの邪馬台国の行く末を心配しているであろう。だからこそ、イブキシンムが黄泉でアマンミケヌに懺悔する事となるその日まで、アマンミケヌの思いをこの胸に抱きながら共に戦い続けたい。それゆえに、新しきものを探すのを待って貰いたい。さすれば、アマンミケヌの魂がこの邪馬台国に勝利と永遠の繁栄をもたらすであろう」

人々が固唾を飲んでヒミコの言葉の続きを待つ。ヒミコは両手を天高く掲げた。

ヒミコ「皆の者達に約束しよう。アマンミケヌの魂に答えるためにも、わらわはイブキシンムを黄泉に送ることを！　夢も、希望も、未来も、邪馬台国にある事を証明し続ける事を！　邪馬台国が永遠ならん事を！」

人々が怒りと歓喜に満ちた言葉を叫ぶ。「邪馬台国ばんぜい」と……。

彼女の敬愛する養母（はは）の声を聞きながら、イヨは亡きミケヌを思い出していた。地獄と化した伊都国を救えず、ミケヌの風で外へ逃さ

れた日の事を。

抱きかかえられてスクネ達の前から逃げ出すイヨは、周りの流れていく景色を見ていた。家々は瓦礫と化し、右往左往しながら妖鬼から逃げ惑う人々。それらを見るたびにイヨは胸を痛める。

イヨ「イスズちゃん、そろそろ降ろしてよ」

イスズ「まだこの国から出てないからだめですぅ」

決して止まることなく、イスズは断固とした言葉で提案を否決した。彼女をよく知らない人が聞いたならば、ただ単に、頬を膨らませて駄々をこねているようにしか聞こえない独特の声と口調で。

仕方なくイヨは流れていく景色を眺めている。あいかわらず妖鬼が暴れまわり、その光景で心を潰されそうになりながら。

イヨ「どれだけの人が……犠牲に」

己の無力感をイヨは噛みしめる。最早どうにもならないという思いが、余計に心を痛めつけている。その流れる景色の中に、一人たたずむミケヌを見つけた。

虚ろな瞳でミケヌは石像のように身動きせずに立っていた。

イヨ「ミケヌさん！」

イスズ「ほんとですぅ。ミケヌさーん、イスズちゃん達はこっちですぅ」

名を叫んだイヨに反応して、イスズが大声を出す。声でミケヌも気がついたのか、イヨ達の方に向き直る。

ミケヌ「イヨ様……イスズちゃん」

子供のような容姿のミケヌの瞳孔（どうこう）がびっくりしたように開く。

イスズ「イスズちゃんはきちんとイヨちゃんの護衛をしてますぅ」

イヨ「ミケヌさんからも降ろしてくれるように言って貰えますか？　わたしもまだやらないといけない事が」

瞳孔が閉じ、イヨ達に気がついたミケヌが微笑む。そして、風が吹いた。風はイヨ達を包み込む。

ミケヌ「イスズちゃん、イヨ様をお願いします。ぼくは、ぼくに

出来る事を……あの人達はぼくがなんとしても……」
風は疾風となり、二人を伊都国の外へと運んだ。
それがミケヌを見た最後だった。

伊都国でミケヌが亡くなったと知った時、イヨは悲しかったが泣けなかった。泣き叫ぶイスズを慰(なぐさ)めるのに必死で泣けなかった。
そのせいか、養母(はは)の声を聞きながらミケヌを思い出して涙が一滴だけこぼれた。それでも、今は泣けないという思いがそれ以上の涙は許さなかった。
涙を拭(ぬぐ)うとイヨは養母のヒミコの元へ向かった。伊都国で見た事実を、妖鬼による惨殺の記憶を、敬愛してやまない養母(はは)に話すために。

演説が終わるとヒミコは腰を下ろし、横に控える塩土(しおつち)の翁を見る。無表情で一点を見つめ、石像か何かの様にひくりとも塩土の翁は動かない。その見つめる一点にはタマモが立っていた。呆れたようにタマモが話し始める。
タマモ「あいかわらずよくやるわね、偽善者もここまで来ると感心するわね」
ヒミコ「そなたか……何か用があるのか?」
無表情なヒミコの問いかけに、妖しく唇を歪ませ、眼光を鋭くしてタマモが答える。
タマモ「ふふふ。伊都国でおもしろいのを見つけたわよ」
ヒミコ「……トヨウカグヤか?」
タマモ「あら、やはり見ていたのね?。覗き見の趣味は治らないのかしら?」
眼光をますます鋭くするタマモは、口元では笑みさえ浮かべているが、殺意を持ってヒミコを睨みつけているのは、誰の目にもあきらかだった。
タマモ「あなたの連れているイヨと、伊都国にいたカグヤ、どち

らが神の器なのかしら?」

ヒミコ「その事か……どちらでもよいであろう。どちらにせよ、神代は訪れる。時期に、器がどちらかは判明する」

タマモ「ふふふ。だとしたら最初からカグヤの存在を知っていて、しかも、二人とも疑っていたわけかしら?」

ヒミコ「否定はせぬ」

真摯(しんし)かつ明瞭にヒミコは答えた。冷笑するタマモの目つきがこれ以上は有り得ないほどに冷たく、そして鋭くなる。必然的に緊迫感が部屋を包み込んでいく。

タマモ「あなたが、スクネをあの国にくれてやったのよね?」

ヒミコ「その件は了承済みだったはず。そして、その理由も話しているはず」

タマモ「ふふふ、確かに了承したわ。それにあなたの思惑通り、魂魄強化(こんぱくきょうか)を使ったら、タケヒコも本気になってくれたわ。……だけどわかっているでしょう?」

ヒミコ「それならば問題はなかったはずだが」

全身から殺気を放ちながら、タマモがもう一度唇を歪ませた。

タマモ「もう一度言うわ。今度は、あ・な・た・でも分かるように。カグヤが神の器の可能性がある事を、このわたしに黙っていたのが気に食わないのよ! 壊れなさい」

語尾を強め、タマモは冷酷に言い放つと、怒りを顕(あら)わにする。弓を構え、矢を弦に掛けて、ヒミコの額へ向ける。弓は天詔琴(あまのりごと)、矢は天之羽々矢(あまのはばや)、タマモの神宝(かむたから)を、ヒミコの社(やしろ)のせまい空間の中でタマモは構えている。避けようもなく、矢が放たれればヒミコに待っているのは死のみ。それでも、能面のような表情で、ヒミコは矢じりを見つめている。

石像のようにひくりとも動かなかった塩土(しおつち)の翁が、ヒミコとタマモの間に割って入る。

タマモ「あら……わたしの邪魔する気かしら? それなら、あなたもいっしょに壊していいのよ 自慰のための人形さん」

無言を貫く塩土の翁が行動で応える。天露之糸を手に巻くと、塩土の翁も殺気を放ち始めた。二人の殺気が部屋に充満する。その殺気だけで、おそらく普通の人は死ぬだろう。否、仮に死ななかったとしても、平常心でいられる者など誰もいないだろう。それほどの恐怖で満ちた空間が生まれる。その空間の中で、ヒミコは何事も無いかのように座椅子から立ち上がり、塩土の翁の肩に手を置いて口を開いた。

ヒミコ「翁、もうよい。タマモ、すまなかった。騙すつもりもなどなかったのだ。怒らせ、疑心を持たせた事は詫びる」

真摯に頭を下げたヒミコを、侮蔑の目で眺めながら、タマモは声にあからさまな威圧の色を帯びさせる。

タマモ「それで許すとでも？」

ヒミコ「ならば何か望む事はあるか？　出来得る限りの事はしよう」

タマモ「なら、もう一回聞くけど、スクネは本当に制御できるのでしょうね」

しばし沈黙した後にヒミコは答えた。その沈黙と言葉が何より雄弁に語っているのを理解しながら。

ヒミコ「予定通り、神代は訪れる」

タマモ「ふふふ。やはり、まだ他にも何かあるわけね」

疑問を正直にタマモが口にする。目は当然とばかりに鋭利で、あふれる殺気が部屋を極寒の空間に変えて行く。

極寒を温めるかのように塩土の翁が声を荒げる。

塩土の翁「タマモ、この場を去れ！」

声を荒げた際に口元を噛んだのか、それ以外の原因か、傷が頬に奔る。傷口から血は流れていない、だが傷口は次第に広がっていく。

タマモ「あら、あなたが横から話しに割り込んで来たということは……どう言う事かしら？」

問いを口にしたタマモは、塩土の翁でなく、ヒミコを睨みつけている。

ヒミコ「翁、心配の必要はありません」
傷の広がりが止まる。その様子を見ていたタマモが殺気を消すと、さげすむ様に苦笑する。
タマモ「まぁ、今回はいいわ。少なくとも、あなたが何かを隠している事はこれではっきりしたわ」
言葉ほどにタマモの表情は晴れ晴れとしていない。むしろ曇りの色を濃くしている。
タマモ「それにしても、あなたの思い通りに動くだけの人形の良さは、わたしには興味の対象にはならないけれど」
言葉と共に、矢がヒミコに向かって放たれる。矢を天露之糸（あまつゆのいと）で塩土（しおつち）の翁がはたき落とす。結果には目をくれず、タマモは背中を見せて悠々と場を後にする。去り際に消え入る様な声で、タマモが独り言を口にする。
タマモ「優秀な人形ね。行動はそっくり。そんなに過去が大事なら、もう一度、本当に繰り返せばいいのに。馬鹿みたい」
去り際の悪態を聞いたヒミコが小声で感想を口にした。
ヒミコ「それはそなたの願いであろう。そして、わらわの愚かなこだわりでもあるが……」
自嘲するようにヒミコは小さく声にした。そして、わずかな喜びの色を浮かべながら塩土の翁を見る。あいかわらずの無表情で、ヒミコの隣に戻った塩土の翁は石像のように立ったまま動かない。
ヒミコ「久方ぶりに会われた弟は、初めて会われた弟は、いかがでしたか？」
石像になった塩土の翁は何も答えない。ただ、指先がわずかに震えただけだった。それに気付いたヒミコはわずかの間、塩土の翁の手を強く握りしめた。
部屋を出たタマモと入れ違いで、何かを決意したような険しい表情をしたイヨが部屋に入って来た。
隣に立っている塩土の翁を、ヒミコは下がらせる。

イヨ「義母様にお話があります。アメノタマモさんの事です」
簡単な会釈の後、イヨはそう述べた。
ヒミコ「タマモがいかがした？」
言葉を続ける前に、イヨが大きく深呼吸する。それから、大きな瞳が数回瞬きする。わずかの静寂の後、イヨは自分の見て来た光景の一部始終を、事細かに話した。
話を終えると、イヨは自らの意見を付け加える。
イヨ「伊都国でタマモさんが矢を射掛けると、不思議な事に、突然妖鬼が強くなるのを見ました。あんな力は他に見たことありません。それに、妖鬼はまるで断末魔の叫びのような声をあげていました」
そこまで言い終えると、イヨはじっとヒミコの目を見つめた。
ヒミコ「そう……後は、わらわが調べておくゆえ、その件は、それまで伏せておきなさい」
イヨ「わかりました、義母様」
あまりの簡単な答えに、イヨは不満の残る顔をしながら答えた。それに気付いたヒミコが、イヨの両手を、自らの両手で覆うように握りしめて、優しく微笑む。
ヒミコ「イヨ、タマモの件はわらわにも考えがあります。ただ、もしもの時は、あなたの力を借りるかもしれません。その時は……」
イヨ「義母様……わたしに出来る事でしたら何でも」
快活にイヨが返事をする。その返事と共に、ヒミコは表情を引き締め直して、能面のような表情に戻る。それから握り締めた手を離し、座椅子にヒミコは腰掛けると、威厳に満ちた声で言った。
ヒミコ「イヨ、狗奴国へ行って貰いたい　わらわの名代として」
敵対国である狗奴国へ行けと言ったヒミコの黒い瞳は、光の加減からか、紫色に輝いていた。

女王ヒミコ2

伊都国崩壊から一年の月日が経とうとしていた。

狗奴国は邪馬台国のような連合国家でなく、一人の絶対的な大王アシハラシジョウコウによって統治された大国。総人口三十万人とまで言われるその大国は、邪馬台国からちょうど北東の方に存在した。現大王の即位後、急速に発展を遂げ、邪馬台国と倭国を実質的に二分する国家となった。

狗奴国の中央に位置する山々に囲まれた天然の要害の地に、名も無き神を祭るために建てられた大きな社があり、大王アシハラシジョウコウはそこを拠点として使っている。

伊都国から落ち延びたシンム達は、そのすぐ近くに居を貰い生活していた。居は大陸から訪れた人々が建てた住居で、柱を使った伊都国においては社などの一部しか存在しない住居だった。そこは、かつて人質となって狗奴国に来た、父イブキコジロウが暮らしていた場所だった。

精悍な顔つきの初老を過ぎた男が椅子に座し、目を閉じて語っていた。男の名はアシハラシジョウコウ。狗奴国の大王にして、倭国最強とも言われる男。静かにジョウコウは木刀を構え、身動き一つせずに、相対するタケヒコの動きを待っているシンムに語りかける。静かだが、はっきりとした威厳に満ちた声で。

ジョウコウ「構えたら動くな。眉一つ動かさず。汗もかかず。ただ感じろ。大気の熱を、大気の振動を、大気の流れを、大気の音を、大気の匂いを。目で、耳で、鼻で、肌で、ただ感じろ」

言われた通り、木刀を正面に構えたままシンムは動かない。正面には、今なお一本も取った事のないタケヒコが、同じ様に木刀を構

えている。
木刀を振り上げタケヒコが滲(にじ)みよる。木刀を正面に構えたままシンムは動かない。
更にタケヒコが滲みよる。両者の間合いに入るまであと一踏み。木刀を正面に構えたままシンムはまだ動かない。
最期の一踏みをタケヒコが動く。それでもシンムはまだ動かない。木刀がシンムの頭上の直前で止まる。
タケヒコ「勝負ありです、シンム様」
シンム「……今度は遅すぎた？」
木刀を構えたままシンムは座しているジョウコウに目をやった。呆れた表情も、残念そうな表情も見せず、ジョウコウはただ口にした。
ジョウコウ「まだ、体得出来ておらぬようだな」
そして、椅子から立ち上がり、シンムが心から尊敬する男は去っていった。
狗奴国に落ち延びて以降、毎日のように剣を、政治を、軍略を、タケヒコから、ジョウコウから、シンムは習い続けた。伊都国の落ちた日以降、シンムは一心に打ち込み続けた。大嫌いだった勉学でさえも。

狗奴国に落ち延びた日、シンムはタケヒコと共に、巨大な社でアシハラシジョウコウと面会した。あまりにも巨大な社を目にした時、シンムはその大きさに驚愕したが、社の中でアシハラシジョウコウに会うと、巨大な社でさえ小さく感じられた。
目の前に、狗奴国の大王アシハラシジョウコウが椅子に座している。そこには圧倒的な存在感があった。邪馬(やまい)一国で幼い頃、ヒミコに一回だけシンムは会った事があるが、すべてを見透かされているように感じたのとは違い、そこに座すだけで、威圧されているようだった。横に居るタケヒコは深々と頭を下げ、土下座のような姿勢のままでいた。

ジョウココウ「伊都国が落ちたか……」
天井を見上げてジョウココウはそう呟いた。彼の唯一の友が、命を欠けて守ろうとした国の落日の報を聞いて。
タケヒコ「ジョウココウ様、どうかお願いでございます。シンム様をこの国に置いてくださいませ」
頭を伏せたままタケヒコは懇願している。天井からシンムへと、ジョウココウが目線を移す。その眼は威厳に満ちている、そんな眼のはずなのに、その眼を見たシンムにはなぜか懐かしさがこみ上げて来る。会った事などなかったはずなのに。
ジョウココウ「その方が、伊都国の王イブキシンムだな」
シンム「ああ、そうだぜ」
気軽にシンムは答えた。最初に感じた威圧感は、いつのまにか何処かへと消えていた。すぐさまタケヒコがシンムに注意を促す。笑ってジョウココウがそれを制止した。笑い声にすら威厳があるようにシンムは感じた。
ジョウココウ「話し方など気にしなくてよい、タケヒコ」
タケヒコ「申し訳ありません」
頭を下げたままの姿勢で、タケヒコが更に頭を下げる。顔は地面にめり込みそうですらあった。日頃から低姿勢とはいえ、一見すれば卑屈にさえ見えるタケヒコの姿を、シンムは初めて見た。
視線をジョウココウに戻す。目と目が合う。二度と逸らす事を許されないような強さの視線が帰って来た。
ジョウココウ「シンムよ、何のためにこの国へ来た？　そして、何を望む？」
シンム「来たのは生き場のなくなったみんなのためと……仇を討ちたい」
目を見て、シンムは力強く言った。自分でも不思議なぐらいジョウココウの前では素直になれた。
ジョウココウ「仇とは誰の事を指す？」
シンム「アメノタマ……ちがう！　邪馬台国！」

ジョウコウ「なればシンムの仇は国そのものか？」
シンム「そうだ！」
ジョウコウ「なれば聞こう。その仇を討つのに何が必要だ？」
シンム「……全部。ありとあらゆる力が全部欲しい！」
ジョウコウ「力か……具体的には？」
シンム「政治力、腕力、軍事力、他にもあるかもしれないけど……わからない」
考え付く限りの力をシンムは述べた。自然と言葉が熱くなる。それと同時に怒りもこみ上げて来ていた。伊都国を滅ぼした者達への怒りが。
椅子からジョウコウは立ち上がると、シンムの両肩を力強く掴んだ。痛いぐらいに掴まれた肩から、熱いものがシンムの心の中へと入って来る。
ジョウコウ「なれば我が与えよう」
ほんの一瞬だがシンムは我を忘れていた。肩から入って来る熱いものが爆発しそうだったために。
ジョウコウ「其の方の言った力を、我が与えると言うのだ。ただし……死んでも知らんがな」
シンム「力をくれるって言うんならなんでもする！」
心からの思いだった。自分には何もかもが足りないから。今の実力のままでは、仇を討つ事など夢想にすぎないから。
ジョウコウ「よかろう……その言葉、ゆめゆめ忘れるでない！」
その会話の後、シンムは退出を言い渡されて、一人退出した。

一人ジョウコウの部屋に残ったタケヒコが、地面を向いたままの姿勢で、助けを求める様に具申する。
タケヒコ「ジョウコウ様、恐れながら申し上げます。置いていただけたのはありがたいのですが、シンム様の望まれているのは」
ジョウコウ「言いたいことはわかっておる。シンムが純粋な力を望んでいる事であろう」

タケヒコ「お分かりでしたら、なぜそれを与えると……」
ジョウコウ「破滅に向かうのなら……その時はタケヒコ、おまえが死を与えてやればいい。簡単であろう」
タケヒコ「わたしが？　何を申されます、ジョウコウ様？」
威厳がジョウコウから失われる事はない。だがその威厳の中に、優しげな色を見せながら、シンムの去った方向を見ていた。
ジョウコウ「あの者は……今、復讐者と貸す事をやめれば、心が砕け散る。そういう目をしていた。自らの死を望む目を」
タケヒコ「それは……」
ジョウコウ「しかし、復讐者としてではあるが、純粋な力を求めるその心を制御できれば、あの者は本物の王になれる」
タケヒコ「シンム様を信じろ……と？」
それ以上はタケヒコも何も聞けなかった。椅子に腰かけたジョウコウが目を閉じ、退出の合図を出したため、部屋を出て行くしかなかった。

狗奴国でジョウコウに会ったその日から、シンムは毎日、誰にも起こされずに起きるようになった。起きると最初に自らの右頬を殴る、悲しみを忘れないために。左頬を殴る、怒りを噛み締めるために。そして、朝食を摂るとすぐに、ジョウコウに与えられた課題をこなす。伊都国で王と言われた頃、あれほどまでに嫌った勉学にも、文句一つ言わずに力を入れた。昼食を摂り終わると、体力の基礎訓練。崖を上り、頂上に着くと反対から走って崖の下に戻る。最初の頃は一日一回で限界だったが、今は一日に十回は行う。それが終わると、その日、最も死に近づく。組み手で、タケヒコに徹底的に叩きのめされる。
半年程それを繰り返した後、ジョウコウから技の教えを受けた。
ジョウコウ「動かすな！　頭で考えてから動いていたら遅いわ！」
シンム「……頭を動かすな？」
訳が分からずシンムは問う。

ジョウコウ「誰が、頭を動かすなと言ったか！　頭は別の事に使えい！　相手を前にしたら、体と頭は完全に切り離せぃ」
シンム「切り離せ？　じゃあ、どうやって動けばいいんだ！」
ジョウコウ「ただ感じろ。大気の熱を、大気の振動を、大気の流れを、大気の音を、大気の匂いを、目で、耳で、鼻で、肌で、ただ感じろ」
シンム「感じるって？」
意味を理解出来ずに、シンムが問うと、頬を鞘で叩かれた。頬に激痛が走る。
シンム「いてぇーー」
痛みで上げた悲鳴を聞いて、ジョウコウが頷く。
ジョウコウ「よもや、今、頭で考えてから痛みを感じたわけであるまい」
シンム「当たり前だろ！」
ジョウコウ「それが感じると言う事だ」
技を教わる時、何度も叱られ、訳が分からず何度も食って掛かった。それが、シンムには幸せにさえ感じられた。
一日の終わりに、伊都国崩壊の日以来、目を覚ましていない姉トヨウカグヤに会う。手を握り、復讐を誓って目を閉じる。それから床に入った。
そうやってシンムは一年を過ごした。

今日もタケヒコからぼろぼろになるまで叩きのめされた。変な話だが、それに慣れたせいか、痛みはあっても、当初の頃のように疲労で動けなくなることはなくなっていた。
タケヒコ「シンム様、今からカグヤ様の所に行かれるのですか？」
シンム「ああ。姉貴が寂しがるといけないからな……」
会釈すると、タケヒコが巨大な社の方へと向かって行く。この後、ジョウコウに訓練の概要などを、毎日報告しているらしい。
急に不安にかられて、シンムはタケヒコを呼び止めた。

シンム「タケヒコ、姉貴……目を覚ますよな？　死んでないんだよな？」

タケヒコ「カグヤ様は死んではおられません」

断言するようにタケヒコは言った。何処から、その確信をタケヒコが得ているのか、シンムには分からない。それでも、不安を少し和らげるには十分だった。

シンム「それなら、おれ行って来るぜ」

少し何かを考えているような表情をタケヒコは見せた後に言った。

タケヒコ「そうですね、わたしも今日はご一緒します」

シンム「ジョウコウさんの所へ行かなくていいのか？」

タケヒコ「報告には後から行かせて貰います」

二人は眠るカグヤの下へと

夢を見た。倭国大乱と呼ばれる戦い。そして、その最期に起こる、最も思い出したくない夢を……。

幼いカグヤは泣きながら父コジロウを探した。母をすでに失っていたカグヤに取って、父も失うかも知れないという恐怖が心を覆っていた。妖鬼に襲われて地獄と化した伊都国の街並みを、散々歩き回って父を見つけた。

幼いカグヤ「お父さん」

コジロウ「カグヤ、どうしてここに？」

父を見つけてカグヤが声を出すと、コジロウが驚愕と心配の交じった様な表情で駆け寄ってきた。

幼いカグヤ「お父さん死んじゃ……やだ」

コジロウ「だいじょうぶ心配いらないよ。お父さんは必ずカグヤも、シンムも、守って……そして、みんなが笑顔で暮らせる日を取り戻すからね」

幼いカグヤ「うん……でも」

涙が止まらない幼いカグヤの顔を、コジロウが拭(ぬぐ)う。

コジロウ「だから、カグヤはお願いだから、タケヒコ君達といっしょに、避難していてね」
幼いカグヤ「死んじゃいやだよ……お父さん」
コジロウ「だいじょうぶだから、安心して待ってなさい」
幼いカグヤ「うん」
その時、空気が一変した様に一瞬だけ静かになった。カグヤはコジロウに「隠れていろ」と言われて、近くの瓦礫に身を隠した。
そうしてすぐに男が現れた。周りにいた命を持つ者は、人も、妖鬼も、すべて息絶え、それを一瞬の内に行った死神が声を出す。
塩土(しおつち)の翁「見つけた」
声には抑揚が無い。それが幼いカグヤを余計に怯えさせた。
コジロウ「誰か知らないが、今すぐにこの国から出て行け！」
塩土の翁「見つけた」
夢だとわかりつつも、カグヤは声を出す。出来得る限りの大声で。
カグヤ「だめ！　お父さん逃げて、その人と戦ったらだめだよ」
夢の中のコジロウに声は届かない。幼いカグヤにも目をやったが、震えてただ見守っているだけ。悪夢は続く。
自らの頭部に、糸の先端に付いた針を塩土の翁が突き刺す。針を確かに頭に突き刺したはずなのに、不思議と傷一つなく、一滴の血も流れていない。文章を棒読みするような塩土の翁の言葉が流れる。
塩土の翁「己にして他と同一なるもの」
言葉と共に、針と逆の先に付いたコジロウの剣がコジロウの胸を突き刺した。当時は何が起こったのか理解出来なかった。それが今のカグヤには理解出来る。天露之糸(あまつゆのいと)の能力を使ったのだと。
捕らえたものを自由に一回だけ操る事の出来る力、それが天露之糸(あまつゆのいと)のもう一つの力。
父コジロウは天露之糸に捕らえられ、塩土の翁の意のままに操られたのだとカグヤには理解出来た。なぜ理解出来るのかまでは、カグヤにも分からないが、不思議と確信を持って理解していた。
コジロウ「まだだ……まだやれる」

胸に突き刺さった己の剣を抜き、コジロウがふらふらとしながら立ち上がる。地面には血の海が出来ていた。

瓦礫の陰に隠れていた幼いカグヤは、それを見て泣きながら声を出した。

カグヤ「お父さん……大丈夫？」

コジロウ「カグヤ、逃げろーー」

絶叫が辺り一帯に木霊する。

塩土の翁「邪魔者は……消せと命令されている」

視線を、塩土の翁は幼いカグヤに向ける。天露之糸（あまつゆのいと）が生き物の様に動きながら、幼いカグヤに襲いかかる。糸の先に付いた針が、幼いカグヤの眉間に迫る。

それを夢で見ているカグヤは目を閉じたかった。だけど、それは出来ない。悪夢はその大詰めを迎える。

糸の針は、カグヤを助けようと身体を張ったコジロウに何度も突き刺さる。その度に血が噴き出す。それでもコジロウは剣を振り上げて、塩土の翁に斬りかかる。無力な幼いカグヤを守るため、幼いカグヤの逃げる時間を稼ぐために……。

コジロウ「この子だけは……この子だけは奪わせない！」

カグヤ「お父さん、お父さん？　いやだよ……死んじゃいやぁぁぁぁぁーー」

夢は一旦そこで途切れる。この夢に続きはない。この夢はあくまでも父であるコジロウの死の記憶。

夢は、カグヤの記憶している悪夢から、記憶にない新たな夢へと変わる。新しい夢に現われたカグヤも泣いていた。

夢の中のカグヤ「いやだよ……もういやだよ」

声「どうしたのです、カグヤ？」

優しい声が聞こえる。その声に導かれて、絶望の中に希望が生まれるような光がさす。悲しみは消えない。それでも涙を止めるには十分だった。近くにいた女性に、夢の中のカグヤが目を向ける。

夢の中のカグヤ「ヤマトト様は悲しくないのですか？　みんな、次々に死んで行きます……」

まただとカグヤは思う。この夢も、何度も見て来た。嫌な夢ではないが、なぜか辛かった、そんな要素など何もないはずなのに。

その女性の顔は、あいかわらず暗がりの中にあるようで分からない。それでも分かる事がある。その女性が美しいという事。そして、その女性の表情。

その女性が優しい頬笑みを浮かべている。

ヤマトト「確かにみなさんが旅立たれるのは悲しい事です。ですけど……」

何を言われているのか理解出来ず、首をひねる夢の中のカグヤ。

ヤマトト「人は大人になると子を作り、血を残します。そして生まれた子もまた繰り返していく」

夢の中のカグヤ「そんな事わかってるよ。でもそれがどうしたって言うんだよ。今そんなの関係ないよ」

ヤマトト「では血と同じ様に、夢は？　希望は？　意志は？　思いは？　人の心は紡いでいけないのでしょうか？」

きょとんとした表情で、夢の中のカグヤが女性を見つめる

ヤマトト「わたしは紡いでいけると信じます。ですから、わたしを信じてくれた、この国の人々すべての心を紡いで生きて行くつもりです。そして、みなさんの心を次代に紡いで行くためにも、生きているわたしが悲しんでばかりいられません」

夢の中のカグヤ「でも……わたし、そんなに強くなれないよ」

ヤマトト「カグヤ、あなたは今この場でなら、涙を流して良いのです。どうせなら思いっきり泣きなさい。でも、それで終わり。あなたもまた、公然と泣く事が許されないのだから」

女性に、夢の中のカグヤは抱きしめられ、その腕の中で涙をあふれさせる。

夢の中のカグヤ「ヤマトト様……うん……いっぱい、いっぱい泣くよ」

ヤマトト「ええ、泣きなさい……」
そこで夢は終わりを告げた。そして、わずかな休演の後に同じ夢が繰り返される。それは永遠かと思える程続いた。

月光が窓から照らす。眩しくなってカグヤは目を覚ました。
カグヤ「夢を見た気がするけど……どんな夢だったっけ？」
起きるとすぐにカグヤは「あれ？」と思った。しかし、それもすぐに忘れる。
スクネ「起きたか」
なぜか懐かしいと思えた声の方向を振り向く。すぐ近くで、壁にもたれながら片膝を立てて、スクネが座っていた。
スクネ「薬草だ。口に入れろ、少しは楽になる」
カグヤ「ありがとう……」
手渡された薬草をカグヤは受け取った。
スクネ「果物は横にある」
渡された薬草を、半分寝ぼけながらカグヤはいっきに口に含む。口の中で薬草から痺れた舌に空気を流し込んだかの様な味が広がる。あまりの苦さと、不味さに、たまらず絶叫した。
シンム「姉貴どうしたんだ！」
絶叫と同時に、血相を変えたシンムが部屋に飛び込んで来た。その後にタケヒコが続く。
タケヒコ「カグヤ様、目覚めはどうですか？」
伊都国でそうであったように、タケヒコが会釈する。
シンム「スクネ、おまえ姉貴に何しやがった！」
スクネ「薬草を飲ませただけだ」
シンム「嘘つくんじゃねぇ。眠ってた姉貴に、おまえ！」
入って来るなり、シンムはスクネの胸元に掴みかかっていた。めずらしくスクネも為すがままになっている。
痺れた舌を出しながら、カグヤはタケヒコと話した。

タケヒコ「カグヤ様お目覚めですか？」
カグヤ「……まずい」
タケヒコ「あの薬草を直接飲まれたのですか？」
カグヤ「うん……だめだったの？」
タケヒコ「だめではないのですが、果物か何かといっしょでないと味が……変らしいのですが？」
カグヤ「えっ、スクネ何にも……言ってた。もういいや……」
横にあった果物を、カグヤは口直しに詰め込んだ。隣ではまだシンムが、スクネに勘違いして詰め寄っている。
シンム「姉貴が起きないのをいい事に、くだらねぇ事しようとしやがって……覚悟しやがれ！」
スクネ「何を言っているのか意味がわからない」
シンム「おまえがやろうとした事を思い知らせてやる！」
片腕を振り上げ、シンムは今にもスクネを殴ろうとしている。
カグヤ「うるさーい。タケヒコ、取りあえずシンム何とかして！」
耳に手を当ててカグヤは言った。
タケヒコ「分かりました」
会釈をすると、タケヒコはシンムのみぞおちに拳を放った。口から泡を吹きながら前のめりにシンムが倒れ込む。
カグヤ「いくらなんでも……ここまでやってだいじょうぶなの、シンム？」
タケヒコ「心配は無用です、カグヤ様。シンム様は、これ位しないと、気を失いませんから」
倒れ込んだシンムは口から泡を吹きながら、白眼でうめき声を上げている。
カグヤ「だいじょうぶ、なんだよね。シンム、よかった」
うめき声が止まり、シンムの目が白く染まる。
スクネ「やりすぎだ」
ぼそりと呟いたスクネの言葉を聞いたタケヒコが、慌ててシンム

を起こした。
シンム「あれ？　何してたっけ、おれ？」
タケヒコ「カグヤ様のお目覚めを喜ばれておいででした」
うやうやしく会釈するタケヒコ。その姿は明らかにいつもよりも丁寧だった。
シンム「そうだったっけ？」
不思議そうにシンムが首を何度もひねる。
スクネ「便利な頭だな」
シンム「便利？」
鼻で笑いながら呟いたスクネの言葉を聞いたシンムが更に首をひねる。その様子を見たタケヒコが慌てて話を変えた。
タケヒコ「とりあえず、続きはジョウコウ様に報告の後にでも」
シンム「そうだな……」
釈然としない様子で、シンムはそう言った。

女王ヒミコ3

巨大な社は多数のたいまつの火と月の光で照らされ、夜の闇に溶け込むことなく、昼間よりもその存在を際立たせていた。壮大さと、雅さの双方において。

巨大な社の中に入ると、ジョウコウは執務中なのか、筆を持って木簡に何か書いていた。

ジョウコウ「何用だ」

筆を置いたジョウコウが、シンム達の方へと顔を向ける。

タケヒコ「カグヤ様が目を覚まされました」

深々と頭を下げてから、タケヒコが簡潔だが正確に報告する。

一通り報告を聞き終えたジョウコウが口元を緩める。狗奴国にやって来て以来、シンムが初めて目の当たりにしたジョウコウの笑顔だった。

ジョウコウ「カグヤ、久しいな」

カグヤ「ジョウコウ伯父様、お久しぶりでございます」

ジョウコウ「あいさつがうまくなったな」

カグヤ「もう、何歳になったと思っているんですか」

二人が談笑しながら会話を続けている。横で聞いていたシンムは、若干の嫉妬を覚えながら二人の話に入っていった。

シンム「姉貴知ってんのか？　ジョウコウさんの事？」

カグヤ「知ってるも何も……伯父さんだし」

呆れたようにシンムを横目で見るカグヤ。

ジョウコウ「我はお前達の父も……母も、よく知っておる。お前達の幼き頃も」

何処か影のある遠い目をしながら、ジョウコウは語った。何度もシンムが見て来た、ジョウコウの瞳の奥底に潜む闇。その闇が影に隠れ、その一瞬だけ消えたようだった。その理由にシンムは興味が沸いたが、それも泡のように消える。心の奥底に引っかかっていた

ものを一つ思いだしたために。
シンム「そういや、おれも姉貴も狗奴国で生まれたんだっけ……忘れてた」
心底呆れた様な眼でシンムを見るカグヤ。鼻で笑うスクネ。そんな二人にすぐ反応するシンム。ひたすらに頭を下げ続けるタケヒコ。
巨大な社の中のジョウコウの部屋で、シンム、スクネ、タケヒコ、カグヤの作り出した喧騒（けんそう）がわずかの間続く。その間、ジョウコウは天井を見上げていた。
数分後、目線を下げたジョウコウの威厳に満ちた声が、喧騒を掻き消す。。
ジョウコウ「タケハヤスクネ」
スクネ「ああ」
素っ気なくスクネは答えた。それでも、名を呼ばれたスクネはいつもと違い、姿勢を正している。そんな姿をシンムは初めて見た。
これもジョウコウの威厳が成せる技なのだろうと思う。狗奴国の大王に対するシンムの敬意は自然と大きくなっていく。
ジョウコウ「カグヤが目覚めた今、これからどういたす？　この国を去るか？」
その質問にわずかに考えるそぶりを見せた後にスクネは答えた。
スクネ「考えていない」
ジョウコウ「なれば、今しばらくこの国に居るが良い。その方が不自由はないはずだが？」
その提案に満遍の笑みを浮かべてカグヤが真っ先に反応する。
カグヤ「それがいいよ。どうせ、何処も行く当てないんだよね、きみ？」
しばしの沈黙が部屋を包み込む。自然、スクネに注目が集まる。
スクネ「……了解した」
その答えの後、わずかな雑談の後、巨大な社を出て、シンム達は自宅へと向かった。

巨大な社からの帰り道、シンムはこの狗奴国でもっとも嫌な奴と遭遇した。その嫌なやつは、感に障る笑みを浮かべ、二人の部下を携えて待ち構えていた。必然的にシンムの顔が引きつっていく。

嫌な奴の名はアシハラシモリヤと言った。大王アシハラシジョウコウの実子であり、狗奴国の次期大王。容姿は整っているといって良かったが、シンムには気分の悪さを引き立たせているだけだった。

モリヤ「うるわしのお姫様」

独特の高音で、上機嫌にモリヤが声を出した。

シンム「何で、よりにもよってこんな日に」

モリヤ「父上お気に入りの元王様は、僕に何か含みをお持ちのようで」

汚いものを見る様な嫌な視線を、モリヤに向けられる。見るのも嫌だが、それ以上に馬鹿にされるのはもっと嫌で、シンムは睨み返した。

シンム「含みって、そんなの山程あるぜ」

タケヒコ「申し訳ありません、モリヤ様」

嫌な奴に向かって、タケヒコが頭を深々と下げる。

モリヤ「気にしてくれて良いよ、タケヒコ。けど、今日は最高の日だからね。無礼も見逃して上げるよ」

シンム「おれはたった今、最悪な日になったけどな」

睨みつけながら、シンムはわざと聞こえるように言い返した。目の前の嫌な奴は、初めて狗奴国で会った日から嫌味ばかりだった。必然的にシンムが嫌な奴を、アシハラシモリヤを好きになれるはずもなく、今日までに、大嫌いになるには十分すぎた。

嫌な奴を知らないカグヤが首をひねりながら、興味なさそうなスクネに話しかけている。

カグヤ「スクネ、あれ誰？」

嫌な奴をスクネは一瞥しただけで何も答えない。

わざとらしくモリヤが両手を広げる。その動作でシンムは気分の悪さに拍車が掛けられていく。

モリヤ「そう言えば、姫様には自己紹介がまだだったね。驚き、敬うがいい。僕は、今の所はこの狗奴国の次期大王アシハラシモリヤ。まぁ、僕の代になったら、倭国は全部僕の物になるから、倭国の大王になるんだけど。決まっている事実だから、今からそのつもりでいてほしい」

カグヤ「タケヒコ……この人、頭だいじょうぶなの？

頭に指を当てながら口にしたカグヤの言葉が聞こえなかったのか、尊大なモリヤの自己紹介は続く。

モリヤ「僕は才能にあふれていてね。生まれてこの方、何をやっても負けたことが無いのが数多い自慢の一つさ。もちろん、この顔も自慢。顔と一言にいっても、目、鼻、口、耳など部品一つ一つが完璧な上に、それらが奏でる調和がまた完璧と、自分で言うのも何だけど美しすぎる。他にも、この天才的な頭脳が……」

自己紹介が続く中、面倒そうに「ふぅ」と漏らしたスクネが歩き出す。その歩みを強引に、タケヒコが制止する。それで「ふぅ」と漏らしながらもスクネは歩みを止めて、近くに立っている木にもたれかかった。

話がひときしり続いた後、ふっと我に返ったように、モリヤが額をつまんでから大げさに両手で髪を?き上げる。

モリヤ「……おっと、話が少しだけ脱線しすぎたようだね」

シンム「おまえの存在が一番脱線して……」

眉間をひくりと動かしているシンムの言葉は最後まで声にならない。言葉はモリヤの高音に、モリヤの言動に掻き消される。

モリヤ「そろそろ本題に入ろうか、お姫様。まぁ、光栄な事だから喜んでくれていいけど、僕の后に決まったから。かしこまる必要はないよ。なんせ后だからね」

シンム「なっ、何言ってやがんだ！」

拳を振り上げてシンムが殴りかかりそうになったが、タケヒコに止められる。にやけながらシンムの目の前をモリヤは通り過ぎると、カグヤの目と鼻の先で立ち止まった。

モリヤ「元王様には、何も関係ないから気にしなくていいよ。で、婚姻の儀はいつにするかい？　僕としては早いほうがいいと思うからさ。今この場で、仮の婚姻でもするかい？」

カグヤ「ひょっとして、わたしに言ってるの？」

大げさな動作でモリヤが辺りを見回す。

モリヤ「他に誰か、この場にいるとでも言うのかい？」

カグヤ「やっぱりわたしに言ってるんだ……でも、あなたの嫁にはならないよ」

首を振りながらカグヤは言った。

モリヤ「今なんと言ったのかい？　僕の完璧な耳が聞き間違いをして、断られたように聞こえたのだけど……変だなあ」

カグヤ「聞き間違いじゃないよ。そう言ったんだし」

モリヤ「照れているのかい？　まぁ、いいさ。今から僕の家に行こうか。返事はそこでいいさ」

手をモリヤが掴むが、すぐにカグヤが振りほどく。

カグヤ「行かないよ」

モリヤ「行かない？　強情だなぁ。僕も手荒な事は否だったのだけど。まぁいいさ、事後承諾でも。お前達、姫様を連れて来い！」

命令を受けた二人の兵士がカグヤの腕を取ると、強引に連れて行こうとする。

カグヤ「何するの！　放さないと酷いんだからね！」

振りほどこうとカグヤが暴れるが、兵士に強引に制止させられる。そして、あごにモリヤが指先を当てて、カグヤの顔を斜め上に持ち上げる。

モリヤ「姫様が悪いのさ。僕の誘いを一時の気の迷いから断ろうとするからさ」

目を閉じたモリヤの唇がカグヤにせまる。我慢の限界にシンムは達し、殴りかかろうとした。すぐさまタケヒコに腕を掴まれ、阻止される。

タケヒコ「シンム様は手を出さないでください。わたしが止めま

すので……」
スクネ「邪魔だ」
二人の横をスクネが通り抜け、モリヤの左頬を殴る。続いて、カグヤを捕まえている兵士のみぞおちに拳をぶつけて気絶させる。更に、もう一撃モリヤに浴びせるようとするが、間一髪の所でタケヒコが間に入って止めた。
タケヒコ「これ以上は止して下さい！」
シンム「そうだぜ、タケヒコ。だいたい、そいつが悪いんだろうが」
我慢の限界に達していたシンムは、スクネに同調したというよりも、今にも加勢しそうな勢いで言った。
モリヤ「く、来るのか？。ぼ、僕はこの国の次期大王だぞ」
左頬にあざを作ったモリヤが、尻もちをついたまま後ずさる。そんなモリヤにタケヒコが手を差し出して起き上がらせる。
タケヒコ「モリヤ様、申し訳ありませんが、今の内に、この場を離れて貰えますか？」
頭を深々と下げながらタケヒコは言った。
モリヤ「な、なんで僕が離れないといけないのさ。そいつに罰を与えればいいだけだろ！」
あざが出来た左頬を触りながら、モリヤは顔を真っ赤にして言った。
タケヒコ「モリヤ様……離れてもらえますか」
深々と頭を下げたタケヒコから殺気が放たれる。その殺気に当てられたモリヤが転がる様に尻もちをつく。
モリヤ「わ・分かったよ。特別に離れてやる」
怯えた表情を見せながら、モリヤは言い捨てた。
タケヒコ「ありがとうございます、モリヤ様」
気絶した二人の兵士をタケヒコが起こすと、その兵士に抱えられてモリヤはその場を離れて行った。

一年にも及ぶ眠りからカグヤが目覚めてから数日後、邪馬台国から使者が狗奴国に訪れた。使者との謁見の際、タケヒコが呼び出される。謁見の最中、使者からは目視する事の出来ない場所で、タケヒコは見守る。使者はクレハイスズ、女王ヒミコの義娘(むすめ)スメイヨ、女王ヒミコの妹を名乗るビミファと言う名の女性だった。

その三人の内、ビミファを見た時、タケヒコは一瞬心臓が止まりそうになった。その女性はタケヒコのよく知る女性と瓜二つだったから。

三人は正座したまま深々と頭を下げた後、中央に座したビミファがうやうやしく話を切りだした。

ビミファ「大王に会えた事、光栄至極にございます。わたしは邪馬台国女王ヒミコの妹でビミファと申します。両隣に居るのは付き添いのスメイヨとクレハイスズと申す者です。イヨ、イスズ、大王に挨拶を」

イヨ「お初にお目にかかります。スメイヨと申します」

礼義通りの挨拶だが、イヨの動きと言葉の自然さから、堅苦しさなど微塵も感じさせない。

イスズ「イスズちゃんですぅ」

礼義など何処かに置き去りにして、イスズは挨拶した。

ジョウコウ「ヒミコの義娘(むすめ)のイヨと、鬼のイスズは知っておるが……ヒミコに妹がいたとは初耳だな？」

冷やかに、ジョウコウはビミファを見ている。疑い、軽蔑、そして、憎悪を隠そうともせず瞳に宿らせて。並みの者なら動揺して何も言えなくなってしまうだろうが、ビミファは動じた様子など微塵もみせない。

ビミファ「それはとても喜ばしき事にございます大王」

ジョウコウ「喜ばしいとは？」

ビミファ「大王ほどのお方にも、わたしの存在を知られていない

事がわかったからです」
ジョウコウ「我が知らぬ事をなぜ喜ぶ」
ビミファ「最早、役目を終えた故に申し上げますが。わたしは姉であるヒミコの身代わりを今まで勤めてまいりました。最も、今回大王にお目通りした事によって、その役を終えましたが」
さらりとビミファは言ってのけた。表情は当然の事、態度からも嘘を言っている様には見えない。それでも、冷ややかに見るジョウコウの眼差しがより冷たさを増す。
ジョウコウ「我が、身代わりがいた事に気付かなかった事を喜んでいるわけか？」
ビミファ「恐れながら、その通りにございます」
ジョウコウ「場をわきまえぬ奴よ」
ビミファ「この程度の事でお怒りになられるお方ではないと踏みましたが？　それに、むしろ姉に影武者がいると言う情報を得た事をお喜びになられると思いますが？」
お互いに目を会わせる。その瞳の交叉（こうさ）にいっさいの情など誰も感じないだろう。あるのは、明らかすぎる腹の探り合い。
ジョウコウ「まぁ良い。わざわざ、表舞台に戻ってまでここに来た用件は？」
謁見が始まってから一回も動かさなかったまぶたをジョウコウは動かすと、「わざわざ」の部分を強調して問うた。
ビミファ「こちらの用件は簡単です。イブキシンムならびにその従者達を、わたし達に手渡して貰いたいのです」
ジョウコウ「引き渡したら、こちらに何を貰える？」
ビミファ「お渡しするものはございません」
ジョウコウ「なれば、伊都国から来た客人達を、ただで寄越せと言うのだな？　狗奴国が預かっている要人を」
ビミファ「結果的にはそうなると思います。ですが彼らは重罪人、それ相応の罰を受けるべきだと思われますが？」
ジョウコウ「重罪人のう……」

まぶたが潰れてなくなるのではないかと思えるほどジョウコウが目を見開く。威圧しているのは誰が見ても明らかだったが、ビミファには通用しない。

ビミファ「その通りでございます大王」

ジョウコウ「仮に邪馬台国でそうだとしても、我が国には何の関係もない。少なくとも、我と交渉したければ、それなりの物を準備するのが道理であろう」

ビミファ「されど大王、重罪を起こすような者達をかくまっていても良いことはないはずです。場合によっては、邪馬台国と同じ事態にもなりますがよろしいのですか？」

そう言ってビミファはほんの一瞬だけ殺気を放った。

その殺気に反応してしまい、タケヒコは一歩だけ踏み出した。恐らくビミファは自分の存在に気付いているのだろう、視線はジョウコウに向けたままだが、踏み出した瞬間、口元が少しだけ緩んだのが見えた。

殺気を当てられたジョウコウには変化が見られず、ただ冷やかにヒミコを睨みつけている。

ジョウコウ「あの者達が、この狗奴国に置いて反乱を起こすと？」

ビミファ「わたしは反乱とは申しておりません。ただ彼らは重罪人と申しているだけでございます」

ジョウコウ「ほぅ。その方の申す罪が、反乱の事を指すわけでないのなら何の事を指す？」

ビミファ「それは、わたしの答えられる範囲の質問ではございません」

ジョウコウ「答えぬか……なら他の質問をしようか。なぜこの国に、伊都国から客人が居る事を知っておる？」

ビミファ「姉上の力は、大王が一番ご存知だと思われますが？」

少し考えるそぶりを見せた後、ジョウコウは静かにぼやく様に口にした。

ジョウコウ「知っておる。あの鏡の力もな」

ビミファ「鏡とは何の事です、大王？」
ジョウコウ「鏡とは自らの姿を映すために使う物であろう」
ビミファ「それと力が、何の関係があるのですか？」
ジョウコウ「すまぬな、いい間違えたわ。鏡でなく鬼の力であったわ」
ちらりとジョウコウがイスズに眼を向ける。それがただの演出にすぎないのは明らかだった。鬼の力などジョウコウが恐れるはずないことを、ビミファと名乗った彼女は知っているはずだったから。
ビミファ「失礼いたしました。大王が言葉を間違えられた事に気付かずご無礼を」
それで、ジョウコウは確信したのだろう。立ち上がり、謁見を終わらせるべく、ビミファを見下ろしながら、反論を一切許さぬ強さを持った声で言った。
ジョウコウ「良い。ヒミコの妹ビミファとか申したな。その方が帰ってヒミコに伝えぃ。我、十五年前と同じ過ち、犯す事さぬ……とな」
空気を読み取ったビミファが頭をうやうやしく下げる。
ビミファ「わかりました、確かにお伝え申します。しかしながら大王、わたしも主であり、姉であるヒミコ様からの命を成し遂げられずに、ただ帰る事は出来ません。ですから、その代りに、この二人を、この国に、しばらく留める事をお許し願いたいのですが」
ジョウコウ「二人を留めるだと？　それを了承して何の利が我にある？」
ビミファ「大王におかれましては直接的な利はございませんでしょう。ですが、このイヨはヒミコ様の一族に連なる者でございます。またイスズにしても鬼です。もしもの時に、如何様にも使えると思われますが？」
ジョウコウ「我に人質を残すと言うのか」
冷やかな目の瞳に、ジョウコウが興味の色を宿していく。
ビミファ「それは大王の考え方の問題でございます」

ジョウコウ「おもしろい、許す。ただし……二人に言っておくが、無事に帰れるとはゆめゆめ思わぬ事だ。それで良きなら残るが良い」
ビミファ「二人ともわかりましたね」
謁見に同行して来て、最初に挨拶をしたきり、一切の言葉を発さなかった二人が頭を下げる。
イヨ「しばらくお世話になります、ジョウコウ様」
イスズ「い……イスズちゃんもイヨちゃんと居るですぅ」
ビミファ「二人を、よろしくお願いいたします」
深々とビミファが頭を下げる。頭を下げた動作にすら雅（みやび）さと美しさを宿しながら。その姿をジョウコウは凝視しながら、吐き捨てる様に許可の言葉を口にした。
ジョウコウ「よかろう。好きにせぃ」
ビミファ「ありがとうございます大王」
ジョウコウ「他に用件は？」
ビミファ「以上でございます」
ジョウコウ「なれば、これで終わる。二人の住居は追って伝えるゆえ、今日の所はここにでも止まるがよい。ただし、ビミファと言ったな。その方は即刻、この国を離れぃ」
ビミファ「わかりました。二人とも迷惑なき様に」
頭を下げた姿勢のまま、ビミファは言った。そして、三人は部屋を後にした。

三人が下がった後、一部始終を見ていたタケヒコは、ジョウコウに呼び寄せられた。
ジョウコウ「その方はどう思う？」
タケヒコ「あの応対の仕方も、何よりも容姿も、間違いなくビミファと名乗った者は……ヒミコだと思われます」
先程見た容姿も、一瞬だけ放った殺気も、彼女そのものだった。間違えようなど、タケヒコに取ってあるはずもない。
同様に怪しんでいたのだろう、ジョウコウも我が意を得たりとい

った表情をしている。
ジョウコウ「やはり、ヒミコか。このまま帰ると思うか？」
タケヒコ「このまま帰るとは思えません」
それは断言できた。それにしてもとタケヒコは思う。
ジョウコウ「狙いは鏡か……」
タケヒコ「わたしも真経津鏡（まふつかがみ）だと思われます、ですが……」
ジョウコウ「何かあるなら遠慮はいらぬ」
少し間を置いてから、タケヒコは言いにくそうに口にした。
タケヒコ「畏（おそ）れながら、それだけならば、タマモをこの国へ使わせば簡単な事のはずです」
ジョウコウ「なるほど、思い当たる事は？」
タケヒコ「カグヤ様は恐らく、まだ準備が出来ておりません」
それだけで両者には十分だった。ゆえに話題は次へ移る。
ジョウコウ「もうひとつ。他の二人は何のために来たと思う？」
タケヒコ「その理由は、わたしにはわかりかねます」
即答するタケヒコに目をやったジョウコウが「ふむ」と頷く。
ジョウコウ「ヒミコは今の内に殺しておくべきか……」
タケヒコ「わたしが殺してまいります」
命でもなく、問いでもなく、ささやきだと理解しつつも、タケヒコは即答した。
目を閉じ、何か考え始めるジョウコウの答えが出るまでのわずかの間、沈黙が部屋を支配する。再び目を開いたジョウコウは厳しい表情で答えた。
ジョウコウ「やはり、このまま泳がせておく」
タケヒコ「彼女は……ヒミコは危険です」
声の高さこそ普段通りだが、タケヒコの表情に陰りが生まれる。
納得が出来ていないのは誰の目にも明らかなほどに。それを察したジョウコウが言葉を続ける。
ジョウコウ「わかっておる。だが殺せば、タマモの動きが読めなくなる」

タケヒコ「お言葉ですが、タマモといえども五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）単体で神の降臨は……」

食らいつくようにタケヒコは言った。まるで、絶望から逃れるために祈りを捧げるように。

ジョウコウ「異な事を申すな。我は全てを聞いておる」

タケヒコ「しかし、あれの存在を、使い方を、タマモが知るはずが……」

言葉を口にしながら、その言葉が願望にすぎない事をタケヒコは理解していた。理解しているが故に、ジョウコウの問いに答えるタケヒコの声は勢いを潜めていく。

ジョウコウ「現に、あれは無かったのであろう？」

タケヒコ「確かに、スクネは何も無かったと……ですが、どうやって？」

ジョウコウ「知らぬ。しかし、そう考えればこそ、伊都国が落ちたのも理解出来るしな。とにかく、ヒミコはまだ泳がせておけ」

タケヒコ「分かりました。ですが、誰が彼女を監視するのです？もし、よろしければ……わたしがいたしますが？」

ジョウコウ「その儀にはおよばぬ」

タケヒコ「お言葉ですが彼女を監視出来る者など……」

ジョウコウ「その方には他に仕事があろう。それに、イヨとイスズの監視をしてもらいたい」

タケヒコ「……分りました」

不服気味にタケヒコは答えた。自らに課せられている、否、自らに課しているカグヤの監視と護衛。それを切りだされれば、他に答えようなどあろうはずもない。それでも、自分とスクネ以外に、彼女を、ヒミコを抑えられる者など考えられなかったから。

平穏の中で1

日が昇りきる頃には、日課としている夜明け前から始める走り込みが終わる。家路にシンムが入ると、手前の家に、三人ほど立っていた。遠目からでも一人はタケヒコだとかろうじて分かるが、日の光に顔が隠れているのもあり、他の二人は女性で、一人は子供である事以外に何者かがわからない。

狗奴国の大王ジョウコウの命を受け、貸し与える家を、邪馬台国からの二人の客人にタケヒコは案内していた。

タケヒコ「お二人には今日からここで暮らしてもらいます。それと、挨拶を申し遅れましたが、この国に居られる間のお世話をジョウコウ様より、このわたし、フツヌシタケヒコが申し付かっております。何かありましたらお申しつけください」

イヨ「お心遣い感謝します」

黒髪のほっそりとした女性が軽く頭を下げた。儀礼には申し分ないが、言葉ほどには感謝が感じられない挨拶だった。

イスズ「イスズちゃんは全然ありがとうじゃないですぅ！」

むっすりと童女が頬をふくらませたのと同じぐらいに、息を切らせながらシンムは三人に近づいた。

全速力で走って来たため、すぐには息が整えられないシンムは下を向いて、両手を膝に当てながら、タケヒコに声を掛けた。

シンム「そいつ等……いったい誰だ、タケヒコ？」

タケヒコ「シンム様、客人を宿泊先に案内している所です」

息が多少整ったシンムは、顔を上げて客人の一人に目を向ける。目が会うと同時に大声を上げた。

シンム「おまえ等、こんな所で何してやがる！」

その声にイスズが反応する。

イスズ「やっぱりこの国にいたですぅ！」
すぐに睨み合いが始まる。子犬の様に童女がうなり声を上げる。
童女はクレハイスズ。伊都国で対峙したシンムには、忘れようはずもない顔だった。
うなり声を上げる子犬に、イヨが声をかける。
イヨ「イスズちゃん、ひょっとしてこの人がイブキシンム？」
イスズ「そうですぅ。伊都国にいたエッヘンな人ですぅ」
シンム「何がエッヘンだ。おまえら何しに来やがった！」
もう一人も伊都国で見た顔だったが、誰かはくわしく分からない。
それでも、邪馬台国の人間である事ぐらいシンムにも理解出来た。
だから当然、もう一人の女性も睨みつけた。
タケヒコ「シンム様、落ち着かれてください」
慌ててタケヒコが場を鎮めようとシンムをなだめるが、その試みは失敗に終わる。胸を張って、イスズが当然のように答えた言葉に、シンムが怒りを強めたために。
イスズ「何って、もちろん反乱した人をボコボコしに来たですぅ」
シンム「反乱だぁ！　おまえらが勝手に反乱とかぬかして攻めて来たんだろうが！　それで……ヤカモチ達みんなを！」
拳をシンムは強く握り締め、握り締めた拳から全身が震え上がる。
怒りが沸々と煮えたぎり、伊都国で起こった事が頭を駆け巡る。
イスズ「エッヘンな人が起こしたのが反乱ですぅ。そのせいでミケヌさんが……」
シンム「おまえ、まだ言いやがるか！」
我慢は限界だった。拳を振り上げ、殴りかかるつもりだったが、タケヒコに腕を掴まれて止められる。
タケヒコ「これ以上はお止めください、シンム様！」
イヨ「イスズちゃん、止めて！　部屋で今日はゆっくり休もう、ね？」
舌を出して挑発するイスズをその女性はなだめた。それで場は収束するはずだった。

イスズ「むむ、イヨちゃんがそう言うなら、イスズちゃん今日は止めといてもいいですぅ」
シンム「何が「今日は」だ！　おまえらが十五年前にやった事、忘れやがったのか！」
その言葉に今度はイスズをなだめていた女性が反応した。
イヨ「今まで黙っていましたけれど……あなたの話を聞いていたら、こちらが一方的に悪いみたいに言われますけど。だとしたら、先に不繭国（ふまこく）に対してなされた事は悪くないと言うのですか！」
シンム「不繭国（ふまこく）だと！　その国の名を出すんじゃねぇ！」
イヨ「開き直る気ですか？」
声を強めた女性がシンムを睨みつける。その眼は恥を知りなさいとでも言っているようだった。その眼を見て余計に癇にシンムは怒りを強める。
腕をタケヒコに掴まれていなかったら、シンムは間違いなく殴っている所だった。
イスズ「イヨちゃんと喧嘩するなら、イスズちゃんが許さないですぅ！　見た眼通り、イスズちゃんはとっても強いんですぅ」
童女にしか見えないイスズが、シンムと女性の間に割って入る。
シンム「タケヒコ、放しやがれ！」
タケヒコ「失礼します、シンム様」
腕を放すと同時に、タケヒコはシンムの首筋に掌手をして気絶させると、右肩に抱きかかえた。場はそれで静まった。

次にシンムが目を覚ました場所は、自らの部屋の中だった。
首筋にわずかだが痛みが残っていた。
タケヒコ「先程は申し訳ありませんでした、シンム様」
カグヤ「謝る必要ないよ、タケヒコ。どうせ、シンムがまた馬鹿やらかしたんでしょ？」
目覚めたシンムに深々と頭を下げるタケヒコに、すぐ近くに座していたカグヤが決めつけたように言った。何かシンムは姉に言い返

してやろうと思ったが、気になる事を思い出して取りやめる。
シンム「そういや……さっきの奴ら、さっきの所に泊ってんだな？」
タケヒコ「邪馬台国からの客人、クレハイスズ様と女王ヒミコの義娘（むすめ）スメイヨ様ですか？」
二人の顔を思い出して怒りがシンムに蒸し返して来る。
タケヒコ「失礼ながら、それを知られて、どうなされる気ですか？」
シンム「決まってんだろ！　そいつ等に、自分達がした事を思い知らせてやる！」
タケヒコ「シンム様、恐れながら国を壊滅させたのはアメノタマモです。それとジョウコウ様に、人でなく邪馬台国そのものを憎んでいると申されたはずですが？」
あまりシンムは伊都国の名を口に出さない。一日たりとも忘れたことはない。だからこそ、再び復興させるその日までは思い口には出さなかった。それに気付いているのか、タケヒコもシンムの前では国の名を口に出さなかった。
伊都国で起こった事を思い出して、シンムは怒りと苦しみでおかしくなりそうだった。それだけにタケヒコの冷静さが余計に腹立たしかった。
シンム「確かに言ったけど、それがどうしたってんだ！」
タケヒコ「彼女達と、国の件は切り離して考えられてください」
すでにシンムは剣に手を掛けていた。今すぐに先程の家に行って、剣を振るうつもりだった。剣を握った手に暖かいぬくもりが重なる。
カグヤ「シンム……今はその事……考えるの止めよ？」
手を乗せたカグヤが泣きそうな顔をしながら言った。手に重なったぬくもりを払いのけると、シンムは姉にも食って掛かった。
シンム「姉貴も何言ってんだ！　あいつらのせいでヤカモチ達がどうなったか忘れたって言うのか！」
カグヤ「忘れてないよ……忘れたくたって、忘れられるわけない

よ」

シンム「だったらなんで！」

カグヤ「それでもだよ……それでも、その人達に怒りをぶつけちゃいけないんだよ」

頭を垂らし、何度も首を振りながら言っているカグヤは、自らに言い聞かせているようだった。

シンム「わけわかんねぇ！　姉貴も、タケヒコも、何言ってんだ！」

怒りの矛先を、シンムはいつの間にかカグヤとタケヒコに向けていた。その方向も一瞬で別の方向になる。素知らぬ顔で部屋の端に片足立てて座っていたはずのスクネが立ちあがって言った一言で。

スクネ「本当に理解できないほど馬鹿ではないだろう」

シンム「オレはばかじゃねぇ！」

スクネ「馬鹿でないなら証明して見せろ」

シンム「うるせぇ！」

怒りに任せてスクネに殴りかかろうとしたが、急に頭が冷めたのでシンムは途中で拳を止めた。反応して逆に拳を放っていたスクネの一撃がシンムの頬に入る。

シンム「やっぱ、まずはてめぇをぶっ殺す！」

拳を頬で受けたシンムが眉間をひくひくさせながら叫び、一瞬で二人は取っ組み合いの喧嘩になった。喧嘩を始めた内容などすぐに忘れ、シンムは夢中でスクネを殴り続けた。殴ったのと同じ回数だけ頬にあざを作りながら。

平穏の中で2

邪馬台国の使者としてイヨが狗奴国（くなこく）に来てから、およそ二週間が経過した。その間、幸か不幸かは分からないが、予想に反し、何も起こらないでいた。

毎日の報告に向かうさながら、タケヒコはかつての記憶を思い起こしていた。女王の妹ビミファと名乗った者。すなわち、現在ヒミコと呼ばれる邪馬台国の女王は、タケヒコが記憶する彼女とは別人でないかと思う事がよくあった。それが願望にすぎない事を自覚しながらも。

彼女に初めて会ったのは千年前。当然だが彼女は本当の名で呼ばれていた。彼女の本当の名はヤマトト。記憶の中の彼女はやさしく、気高く、美しかった。

殺気を完全に消し、タケヒコは暗闇に溶け込み、息を殺して潜んでいた。

いくばくかの時が過ぎ、標的が現れた。標的は暗闇に潜むタケヒコに気付かず、目の前で髪結（かみゆ）いを始める。そこまではいつも通り。後は命を遂行して終わるだけのはずだった。だけど彼女は、ヤマトトは髪を結いながら言った。

ヤマトト「貴方様は？」

一瞬だがタケヒコは動揺した。他に誰かいるのかと疑いもしたが、残念ながら他には誰もいなかった。とはいえ、気付かれたのならその瞬間に斬ればよいはずだった。実際、もしも気付かれた時の想定は、ずっとそうだった。しかし、タケヒコは別の選択をしてしまう。

タケヒコ「名など……あなたには死神で十分でしょう」

ヤマトト「その死神さんがわたしに何の御用でしょうか？」

タケヒコ「死神に、死を与える事以外の仕事があるとでも？」

ヤマトト「貴方（あなた）様が本当に死神ならそうなのでしょう。ですが、

貴方様も所詮は人、ちがいますか？　でしたら、他にもする事があるでしょう？」

髪を結うのを止めて振り返ると、微笑みながらヤマトトは言った。まるで親しい者に語りかけるように。仕方なくタケヒコも笑みで返す。出来得る限りの皮肉をこめて。

タケヒコ「残念ですが、わたしの仕事は目の前のあなたに死を与えるだけです。それにしても、わたしに向かって「所詮は人」とは、よく言えたものです。それでしたら、あなたはただの物として生まれた、人にすぎないでしょう？」

ヤマトト「そうですね……わたし達は今はまだあなた方の所有物にすぎない。ですけど、貴方様はわたしの事を「あなた」と呼ばれた。他の方なら最初から「物」と呼ぶか、「失敗作」かのどちらかでしょうに」

そう言って、ヤマトトは吸い込まれそうなほど美しく気高い笑顔を見せる。

タケヒコ「それがどうしたと言うのです？　わたしの二人称の呼び方などはどうでもよい事でしょう」

鼻で笑いながらタケヒコは言った。嘲笑して、ヤマトトの言葉をそしり笑っていないと立っていられない気がしたために。そんなタケヒコを逆にあざ笑っているのだろうか、ヤマトトは「失礼しますね」と言って、無防備に背中を見せると、髪結いを再開した。何を考えているのかタケヒコにはまったく理解できない。暗殺者である自分に、まるで殺してくれと言っているかのようなその行動が。

背中を見せながらヤマトトは落ち着いた声で語りかける

ヤマトト「「どうでも良い事」ですか。そうですね……あなた達にとってはそうなのでしょう。けれども、わたし達にとっては、神の御使い、すなわち四魂である貴方様が「あなた」と呼んでくれた事は喜ばしき事ですから」

タケヒコ「なるほど……わたしが四魂だと知っていてなお、平然としていらっしゃったのですね」

ヤマトト「わたしも四魂の方を一人よく知っています。それに、貴方様からは怖さを感じませんので」

タケヒコ「わたしから怖さを感じない？　それは残念ですね。どうせ粉々に切り刻むのなら、恐怖で顔を引きつってくれた方がわたしも楽しめるのですが」

若干の苛立ちがタケヒコを襲う。殺しに来たヤマトトが、自分を四魂だと知りながらも見せる、落ち着いた態度に一種の不条理を感じて。

更に続くヤマトトの言葉の内容が、苛立ちに拍車をかけた。

ヤマトト「無理はなさらぬ方がよろしいですよ。貴方様は、そのような方でないはずですから」

タケヒコ「わたしの人となり等知らぬでしょうに。まぁいいでしょう……おしゃべりは終わりです。もう、あなたには粉々になってもらいます」

ヤマトト「おしゃべりは終わりですか……でしたら、なぜ語られたのです？　初めから無言でわたしを殺せばよいものを。貴方様がその気なら、すでにわたしは粉々です。そうでしょう？」

タケヒコ「おしゃべりは終わりと申したはずですが？」

ヤマトト「でしたら、なぜまだわたしは粉々でないのですか？」

タケヒコ「一秒後ですよ」

天之羽張の描く軌跡がヤマトトを切り刻む。本来ならば、細切れに刻まれたヤマトトの屍だけが残るはずだった。それなのに、タケヒコは斬らなかった。ひょっとしたら斬れなかったのかもしれない。どちらにせよ、精神を粉々に砕くには十分なはずだった。だけど彼女は恐れた様子も、抵抗すらもせずに、髪を結っているだけ。丁度計ったようにタケヒコの動きが終わると、髪を結い終わる。そして、彼女はゆっくりと振り向きながら、この世のものとは思えないほどに美しく慈愛に満ちた笑みを浮かべながら言った。

ヤマトト「粉々にするのではなかったのですか？　すでに一秒以上経過したはずですが？」

ほんの一瞬、その頬笑(ほほえ)みを見て、まだ会ったことのない自らが仕える神とは、彼女の事かもしれないとさえタケヒコは思った。その思いを強引に振り解きながら、タケヒコは氷のような冷たい表情で、感情と抑揚を最大限に排除した言葉で、ヤマトトの問いに答えた。

タケヒコ「あなたに恐怖はないのですか？。もしも……ないのでしたら、あなたは本当に物（者）か失敗作なのでしょう」

ヤマトト「わたしにも恐怖はもちろんあります。自らの身体を刃が次々に通り過ぎていくのも気持ちのよい物ではありません。ですけど……」

タケヒコ「ですけど……何だと言うのです」

ヤマトト「貴方(あなた)様はお優しい方なのですね。やはり、わたしを粉々にされなかった」

タケヒコ「あなたには、粉々にされている様な錯覚を起こすように切り刻んだのですが？」

ヤマトト「貴方様を信じていた……と申したら、信じてもらえますか？」

タケヒコ「あなたがわたしを信じる理由などないはずですが？」

揺れ動く心を制止させるためにも、タケヒコはヤマトトの眼を殺意を宿らせた眼で睨みつけた。その凍てつくような眼を、ヤマトトは太陽の様な微笑みで返して来る。

ヤマトト「でしたら、貴方様の人となりがそう思わせるのでしょう、または……」

タケヒコ「または？」

ヤマトト「わたしが自分で思っている以上に鈍感で、刻まれている事が大変な事に気付かなかったのでしょう」

タケヒコ「では後者でしょう。わたしは少なくとも、あなたの心を本気で粉々に砕くつもりでした。もっとも、それはどうやら茶番にすぎなかったようです。ですから、今度こそ一刀で死んでもらいます」

頭がこれ以上の抵抗は不可能だと判断を下した。だから、言い終

わると同時に、タケヒコは剣を振り上げた。そんなタケヒコの内心を見透かしているのか、太陽のような頬笑みから悲しく辛そうな表情へと変化したヤマトトが、あわれむ様にしみじみと声をかけた。

ヤマトト「もう、お止めになられたらどうです……貴方(あなた)様は迷われているのでしょう？　だからまだ、わたしが生きている、違いますか？」

精神を無にして、心を闇の奥底に閉じ込め、タケヒコは完全に死神と化す。語りかけられた瞬間には、タケヒコは無心で剣を振り下ろしていた。空間が四つに割れる。死神となったタケヒコの振り落とした一刀は、突如目の前に現れた矛の一撃によって払いのけられた。瞬時に状況を理解したタケヒコは、すぐさま返す刀で後ろの闇を一閃する。

金属音が響きわたる中で、ヤマトトが静かに口を開く。まるで駄々をこねる子供を諭すように。

ヤマトト「もうよろしいでしょう？」

一滴の血がしたたり落ちる。背後に突如現れた者の頬から流れた血が。対してタケヒコには傷一つない。首筋に矛を突き付けられているのに。矛を持つ男はタケヒコのよく知る男だった。

タケヒコ「なぜ止めたのです？　セイガ、あなたなら今の一撃で、わたしの命を終わらせる事が出来たでしょうに」

セイガ「仕方ねぇだろ？　そいつが眼で止めやがったから」

矛を持つ手とは逆の手でヤマトトを指差した後、面倒くさそうにセイガは頭を掻きながら言った。いい加減に認めちまえと態度で言っているかの様だった。

タケヒコ「ではヤマトト、あなたに質問します。なぜ止めさせたのです？　今の一刀で、もしセイガが間に合わなければ、確実にあなたは真二つになっていたものを」

ヤマトト「貴方(あなた)様の申された通り、セイガを待ってくださったからです」

タケヒコ「待っていた、などと言った記憶などないのですが」

ヤマトト「そうですね。貴方(あなた)様は言葉でなく行動で示されただけですから。あの森で、わたしとセイガが会った日のように……」

はっとしてタケヒコはそれ以上何も言えず、何も出来なくなってしまった。

記憶の海から思い起こしている間に、タケヒコはジョウコウの部屋の目の前まで来ていた。そこで頭を切り替えるためにも、タケヒコは首を一回だけ振ってから部屋に入った。

その日、タケヒコはジョウコウの部屋で定期報告を聞いた。狗奴国に使者として偽りの名でやって来たヒミコの現状を、見張りをしている女士官から。

女士官「今の所、ビミファなる者に動きはまるでございません」

直接、報告をタケヒコが聞いたのは、今回が初めてだった。内容はジョウコウから間接的に聞いていた通り。それだけに違和感がある。

タケヒコ「何も動きがないなど考えられません」

少なくともタケヒコの知る彼女は、無駄に時間を使ったりしなかった。だからこそ断言出来た。

ジョウコウ「そんな事はわかっておる。タケヒコは何故動きが無いと思う?」

口に出して良いのかどうか分からず、タケヒコは女士官に眼をやった後、目くばせをした。すぐにジョウコウが無言で頷く。それで、タケヒコは思った事を口にした。

タケヒコ「狙いがやはり真布津鏡(まふつかがみ)でしたら……」

ジョウコウ「あの鏡なら何だと申す?」

タケヒコ「ヒミコの力でも、何処にあるのか正確な場所までは特定できないでしょう。考えられますのはタマモが来るのを待っているか。あるいは……」

ジョウコウ「あるいは、利用出来そうな人間を探しておるか……

か」

元々その可能性を考えていたタケヒコは、同様の考えをジョウコウが抱いているのを聞いて確信した。そうに違いないと。

タケヒコ「ビミファの好きにさせることは危険です。やはり監視はわたしが」

改めてタケヒコは自分でなければと思い進言した。その進言に気分を害したのか、女士官が睨みつけてきた。

ジョウコウ「己の役を第一とせよ」

タケヒコ「申し訳ありません」

有無を許さない強さでジョウコウは言った。故に、タケヒコもそれ以上は何も言えない。心の中では「やはり自分が」と、強く思っていたが。

それからわずかな時間だが場が静まり返った。目を閉じ、何か思案し始めたジョウコウの答えを待って、ただ黙々と待つしかなかった。

再び目を見開いたジョウコウの瞳には確信めいた力強さがあり、それが語る言葉の強さをより引き立たせた。

ジョウコウ「だが、このままにしておいても拉致が開かぬ、タケヒコ」

タケヒコ「どういたしましょうか？」

ジョウコウ「収穫祭が近い。今年の祭りは大々的に開こう。民も喜ぼうしな」

その言葉の意味を理解したタケヒコは、驚愕しながら言葉を返した。

タケヒコ「まさか、わざわざビミファが動きやすくなるようにするため、混雑を起こすのですか？　しかし、そのような事をしたら被害が……」

ジョウコウ「被害は最小限に食い止める。それに、あの女は無差別攻撃などしない、違うか？」

タケヒコ「確かにそうですが……それにしても、監視も難しくな

りますが？」
真意を掴みかねてタケヒコは質問した。それをジョウコウは片手で制止すると、立ち上がり断を下した。
ジョウコウ「監視の人数を増やせ」
女士官「それでは気付かれませんか？」
平伏する女士官の問いに、静かだが力強くジョウコウは答える。
ジョウコウ「かまわぬ、どうせ最初から気付いておろう。タケヒコは出来る限り祭りに専念せよ。ビミファが動きやすいようにな」
タケヒコ「……わかりました」
危険すぎると内心は思いつつも、タケヒコは異を唱えるのを止めた。厳格なまでに、ジョウコウの眼がこれ以上は「止めよ」と、強く語っていたために。
ジョウコウ「タケヒコ。イヨ、イスズの二人も共に参加させよ。この意味は分るな？」
タケヒコ「二人のことはわたしが責任を持って監視いたします」
その意味は理解出来た。彼女達は表向きは客人で、狗奴国としては人質だが、間諜の可能性が一番高いのだから。そして、その二人をジョウコウは人質として本当に使えと言っているのを。
ジョウコウ「最悪の事態にそなえて準備も急いでおいた方が良い。少し早いが、邪馬台国に攻め込むための用意もな……」
場合によってはこちらから仕掛ける。この時初めてジョウコウは攻勢の可能性を口に出した。それでも、タケヒコの心配は消えない。しかし、下された命に異を唱えても仕方がない。それならば己が出来る事をするのみだった。

平穏の中で3

収穫祭の事をタケヒコは話していた。他人事でしかない話だったので、スクネには大して興味が湧くはずもなく、いつものように片膝を立て、窓際の壁に寄りかかって座りながらタケヒコ達の会話を聞き流していた。

タケヒコ「もうすぐ収穫祭が行われますが、シンム様はどういったものかご存じですか？」

シンム「収穫祭？　いくらおれでもそのくらい知ってっけど、あの巫女が祈りをささげるやつだろ？国でもやってただろ？」

何を考えるでもなく、窓際で片膝を立てて座りながらスクネは部屋の中の三人を眺めていた。収穫祭の話を聞いたシンムは「何でそんな事を聞くのか」といった感じで、タケヒコを見ている。その隣でカグヤは興味津津といった顔つきだった。

収穫祭の話は続く。

タケヒコ「国で行っていたのとは規模が違います」

シンム「規模が違う？　祭りに規模とかあんのか？」

タケヒコ「その日になればわかりますよ」

首をひねっているシンムに笑顔でタケヒコはそう告げると、カグヤの方を向いた。

タケヒコ「ジョウコウ様が祭り日に、カグヤ様に手伝って貰いたいことがあるとのことです」

カグヤ「手伝うって何するの？」

タケヒコ「手伝うとは言っても難しい事をやってもらうわけではありません。巫女として、カグヤ様に祈りをささげて貰うだけです」

カグヤ「あれ、わたしがするの？」

タケヒコ「この国には巫女も少ないですし。それに、カグヤ様以上の方は、この国にはおられませんから」

難しい顔をしてカグヤが何か考え始める。その表情が何を指すの

かを確信した様な笑顔で、タケヒコが言った。
タケヒコ「当然、カグヤ様にはこの国の祈りの内容を考えてもらわないとなりません」
カグヤ「あれ、やっぱり考えないといけないの……」
嫌そうな顔をカグヤがする。口に出してはいなかったが「面倒だよ」と、続けている様だった。
興味津津な表情から嫌そうな表情に一瞬で変化する。そういったカグヤの表情の変化を、ぼんやりと眺めているだけで、スクネは時間がつぶれた。それは、最近のスクネの日課ともなっていた。
収穫祭の話は続く。嫌そうな顔をしたカグヤの望みを断つように、タケヒコは断言してから言葉を続けた。
タケヒコ「当然です、カグヤ様。もっとも、この国では二人で祈りを捧げていただくので、一応は半分でだいじょうぶですよ」
カグヤ「二人って事は、もう一人はだれなの？」
タケヒコ「カグヤ様と同様に巫女として素晴らしい方です」
カグヤ「この狗奴国には巫女自体少ないし、わたしが一番なんだよね？」
タケヒコ「ええ……確かにそうなのですが。たまたまなのですが、現在この国におられるので」
きょとんとしているカグヤを押しのけてシンムが話に割り込んだ。
シンム「姉貴みたいなのが二人もいるのか？」
にやけながらシンムが言った。今まで窓際で黙って眺めていたスクネだが、思わず言葉が漏れた。
スクネ「おまえの好きな意味で取ってろ」
シンム「なんだと！」
怒ったシンムが立ち上がろうと片足を立てて腰を浮かせた。それを視認したが、スクネは無視して外に目をやった。朝早いせいか、外に人通りはまったくない。
シンム「無視かよ！」
目を部屋に戻すと、怒鳴るシンムをカグヤが手を掴んで阻止して

いた。
カグヤ「二人ともそこまで！　話が進まなくなっちゃうよ」
不満そうにシンムが腰を下ろす。それを見ていたタケヒコが、何か感動した様に声を震わせて言った。
タケヒコ「カグヤ様が喧嘩になりそうな事態に参加されず、逆に止めていただけるとは……」
カグヤ「タケヒコ、それどういう意味だよ！」
口を膨らませてカグヤが抗議する。にやけながらシンムがタケヒコの言葉に賛同の意を示す。
シンム「どう言うも何も……いつもなら喧嘩煽（あお）るのが姉貴だろ？」
カグヤ「わたしがいつ喧嘩を煽ったって言うの！」
シンム「何時って……ついこの間だって煽ってただろ！」
途端にカグヤが立ち上がり大声を張り上げた。
カグヤ「あんたねぇーー」
タケヒコ「結局こうなってしまわれるのですか……」
立ち上がったカグヤが腰に手を当て、シンムを見下ろしながら大声を張り上げる。それを見たタケヒコが下を向いてため息まじりにつぶやく。
そういった光景にスクネは既視感の様なものを感じる。気のせいだと思いつつも、懐かしさと哀愁を感じながら聞き流す。話に自分が参加しているのか、していないのかさえ曖昧なまま。
両手を頭の後ろにしてにやけているシンムが言った。
シンム「人間、簡単に性格が変わるわけ無いだろ」
その言葉にカグヤが大声で抗議する。
カグヤ「そう言うんだったら、シンムなんかいつまでたっても子供のままじゃない！」
シンム「それは姉貴もだろ！」
カグヤ「わたしのどこが子供だって言うの！」
いよいよ本格的に喧嘩になりそうな気配になった。いつも通り「このまま喧嘩に突入するだろう」と思いつつ、外にスクネは目をや

った。二人の女性が玄関の前に立っている。
スクネ「誰か来たな」
喧嘩を始めた二人の興味が一瞬で移り変わる
タケヒコ「参られましたか……少しお待ちください」
会釈をすると、タケヒコは玄関へ向かった。

客人との会話もスクネは聞き流した。別に聞くつもりなどなかったのだが、朝早くゆえの静けさと、生来の耳の良さゆえだった。
客人の一人が訪問を告げる。顔までは窓際からは見えなかったが、声でイヨだとわかった。
イヨ「ごめんください」
イスズ「あんまり出て来るのが遅いと、イスズちゃんが火事にして強制的に出て来てもらいますぅ」
声が高く、子供の様な声が訪問の挨拶に続く。
タケヒコ「物騒な事はしないで貰えるとありがたいのですが」
訪問を告げた二人の声からほとんど間髪を入れずに、タケヒコの声は聞こえた。
イスズ「出て来るのが遅いですぅ。もっと早く出て来なさい」
タケヒコ「申し訳ありません。中が少し騒々しかったもので」
すぐに出て来たとはタケヒコは言わない。相変わらずだと内心思いつつ、スクネは部屋の中に目をやった。部屋の中のカグヤとシンムがなぜかにらめっこをしている。鼻で笑いそうになったのを堪え、スクネは窓の外に目線を戻して、ぼんやりと空を眺めながら玄関での会話を聞き流す。
呼び出された理由をイヨが尋ねる。
イヨ「呼ばれたから来ましたが……何か用事でも？」
タケヒコ「お願いしたい事がありましたもので。本来でしたら、こちらから出向くべきだったのでしょうが……」
イヨ「それはかまいません。そのお願いとは何でしょうか？」
タケヒコ「とりあえず中にお入りくださいませ。お引き合わせし

たい方々がおりますので」
イヨ「……分りました。上がらせていただきます」
家の中にタケヒコは二人を招き入れた。

イヨ「失礼します」
儀礼通りの綺麗なお辞儀をイヨがした。その後ろからイスズがどたばたと入って来る。そして、部屋の中に入って来た二人を見たシンムが、顔を真っ赤に染めて眉間にしわを寄せる。
イヨ「失礼します」
シンム「なっ、なんなんだそいつら！」
タケヒコ「客人のイヨ様とイスズ様です」
部屋に入って来た二人を丁寧に、タケヒコが紹介した。
シンム「そんな事はわかってんだよ。そいつ等が、なんでここにいるのかって聞いてんだ！」
タケヒコ「わたしがお招きいたしました」
シンム「なんで、よりにもよってそいつ等を呼んだんだ！」
怒鳴り声を上げるシンムに、強い口調でカグヤが注意した。
カグヤ「失礼だよ、シンム」
言葉とは裏腹に、カグヤも複雑そうな顔をしていた。とはいえ、シンムと違い怒っているというよりも、困惑しているといった感じだったが。
シンム「何が失礼だ。そいつ等は……」
それ以上の言葉をシンムが続ける前に、タケヒコが丁寧に深々と頭を下げる。続く言葉が伊都国に関する事であるのは明白だったからだろう。
タケヒコ「申し訳ありませんが、お願いしたい事がございましたので、わたしがお呼びしました」
イスズ「めんどうだけど来てあげたですぅ。だから感謝してくださいです」
言葉を止められたシンムが、胸を張るイスズを恨みがましく睨み

つける。一色即発しそうなほどにシンムは顔を歪ませ、握りこぶしは怒りからか震えていた。

タケヒコ「ありがとうございます、イスズ様」

場の空気を変えようとしているのか、タケヒコは笑顔で言ったが失敗に終わる。

シンム「タケヒコ、こんな奴に感謝なんかすることねぇだろ！」

罵声を浴びせる様に、シンムは指差しながら怒声を上げた。

イスズ「むむむ、エッヘンな人のその態度はひどいですぅ。イヨちゃんからも何か言ってやってください！」

争いの場にならないように、タケヒコが努力したのもむなしく、シンムの言葉によってイスズが不快感をあらわにする。そんな二人を余所に、イヨはカグヤとスクネの顔を大きな瞳を丸くして、交互に凝視している。

怒り狂いそうなシンムをなだめると、タケヒコがカグヤとスクネを紹介した。

タケヒコ「申し遅れました。この方はシンム様の姉上で、トヨウカグヤ様でございます。その隣は付き人のタケハヤスクネと申します」

カグヤ「トヨウカグヤだよ」

イヨ「カグヤ？」

丁寧にカグヤは名乗った。途端にイヨの目がカグヤだけを見据える。瞳が飛び出るかと思えるほどに眼を見開きながら。

スクネ「タケハヤスクネだ」

続いてスクネも名乗った。外を眺めながら目を合わせる事もなく、そっけない声だけで。

イスズ「イスズちゃんですぅ」

二人が自分の名を告げると、イスズがつられる様に名乗った。続いて簡単に頭を下げてイヨが挨拶する。

イヨ「邪馬台国の女王ヒミコの義娘（むすめ）スメイヨです」

挨拶が終わるとイヨは絞り出すような声で言った。

イヨ「なんで……なんで、こんな所に居るのですか？」
驚いているのは誰の目にも明らかだったが、それが何に対してか誰も分からず、部屋にいるスクネ以外の誰もが目線をイヨに向けた。
そう、頭から湯気が出そうなほどに怒りの色を見せているシンムさえも。
イスズ「イヨちゃんどうしたんですぅ？」
イヨ「わるいけど、イスズちゃんは黙っていて！」
イスズ「……はいですぅ」
誰もが思った問いを、口に出したイスズがしゅんとなる。
タケヒコ「イヨ様、カグヤ様がどうかいたしましたか？」
しゅんとして縮こまってしまったイスズと同様の問いを、タケヒコは口にした。
イヨ「フツヌシさんも少し黙って……えっ？」
そこまで口にして、イヨは言葉をつまらせた。丸くしていた瞳がたちまち元に戻っていく。ようやくカグヤから眼を放したイヨが言葉を繕うように再開した。
イヨ「なんでこんな所に……スクネさんが居るのですか！」
明らかに話題を変えているが、タケヒコはそれに付き合った。
タケヒコ「……その事でしたか。元々、スクネがそちらの人間でした事は承知しています。ですが、今はこの国の人間です。まぁ、そちらにも思う所もあるでしょうけれど、この場は引いて貰えると助かるのですが」
すぐに、こくりとイヨが頷く。あまりにも簡単なその仕草が、先程の驚きがただ事でないことを何より物語っていた。それでも、誰もその事に触れない。答えてなどくれないだろう事は、火を見るよりも明らかだったから。
シンム「スクネは、おまえ等の所なんか糞っくらえってさ！」
睨みながら、侮辱するように、唾でも吐きかけるかの様な仕草で、シンムは言った。そんなシンムにカグヤは明らかに怒っている口調で言う。

カグヤ「シンムはちょっと黙ってなさい！」
シンム「なんで黙っとくんだ！　こいつ等のやったこと、姉貴も知ってんだろ！」
我慢の限界が近いのか、それとも超えたのか、シンムは黙ろうとは決してしない。それどころか、放って置いたら今にも襲いかかりそうなほどのけんまくだった。
カグヤ「タケヒコ、抑えといて！」
タケヒコ「分りました、カグヤ様」
激昂するシンムを、タケヒコは羽交い絞めにして押さえつけた。それでもシンムは何かを言おうとしている。そんなシンムをカグヤがたしなめる。
カグヤ「シンムは少し頭を冷やしなさい」
羽交い絞めにされながらも、シンムは眉間にしわを寄せて睨みつけている。それでも、カグヤにたしなめられたのが原因か、少しだけ大人しくなった。
イスズ「エッヘンな人はうるさいですぅ」
耳に手を当ててイスズは言った。今度はイヨがたしなめる。
イヨ「イスズちゃん、お願いだから少し黙っていて」
イスズ「はいですぅ」
いじけたようにイスズは下を向いた。途端に場が静かになる。
カグヤ「よしっ、静かになったね。イヨさんだったよね？」
イヨ「はい」
静かになった場でカグヤとイヨの二人は向かい合った。先程、瞳が落ちそうなほどにイヨが目を見開いていた時とは違い、きちんとした対面の形を作りながら。
カグヤ「呼び方はイヨさんでいいかな？」
イヨ「わたしの事はイヨでかまいません、カグヤ様」
カグヤ「なら……わたしの事もカグヤでいいよ」
イヨ「さすがにそれは出来ません、カグヤさん」
カグヤ「ま、それでもいいよ」

訂正された呼ばれ方に、不本意そうにカグヤが納得する。場は此処まで来てやっとで本題へ移りかけたが。

カグヤ「それで、イヨ達をなんでここに呼んだの、タケヒコ？」

タケヒコ「それはですね……」

本題に入ろうとしたタケヒコが、誤って羽交い絞めにした手を緩める。

シンム「そうだぜ、タケヒコ！　なんで、わざわざこんな奴等呼んだんだ！」

手が緩まった瞬間、シンムが怒りを爆発させた。静かになった場が、再び元の騒々しさに戻りそうになった。

カグヤ「シンム、さっきからうるさい！　スクネ！　タケヒコあてにならないから即交代」

眉間にしわを寄せて怒り声を上げるシンムよりも大きなカグヤの声が場を包み込む。

スクネ「とりあえず落としておく」

何となく聞き流していたスクネは、シンムを落とすべく立ち上がった。

カグヤ「なんだかわかんないけど、シンムがうるさくなくなるなら早くして。さっきから話が進まないよ」

返事と共に即動いていたスクネは、カグヤの言葉が言い終わるや否やシンムの首を絞めた。顔がみるみる青くなり、終（しまい）には一言も話さなくなった。

急に心配になったのか、カグヤが怖々とした声でスクネに尋ねた。

カグヤ「……大丈夫なの？」

スクネ「死んでは無い」

なぜかカグヤは不安そうな表情を増した。

タケヒコ「気絶なさっているだけですよ、カグヤ様」

カグヤ「タケヒコがそう言うなら、大丈夫そうだね」

理由も分からない若干の不満がスクネを襲ったが、すぐにどうでもよくなり、気絶したシンムの横で壁に寄りかかって座した。

背を伸ばし、正座をタケヒコが組み直す。
タケヒコ「イヨ様にお願いしたことがあります、近々この国で収穫祭を行いますので、その時にカグヤ様と祈りを捧げて貰いたいのです」
イヨ「祈りですか……」
嫌がっているというよりは、考え事をしているといった感じで、イヨは言葉を詰まらせた。
カグヤ「タケヒコ……わるいけど、イヨと一緒には出来ないよ。みんなに……悪いから」
下を向いて、かすれたような声でカグヤは言った。横顔が明かに暗い。理由を察したタケヒコは、黙とうするように眼を閉じる。静かな場を完全な静寂が支配する。重い空気が音を押しつぶしているかのようだった。
イヨ「わたしは……受けさせてもらいます」
静寂を最初に破ったのはイヨだった。
イスズ「そうですぅ。イヨちゃんがダメならダメですぅ！」
イヨ「いえ……イスズちゃん、わたしは受けるっていったの」
イスズ「なんでですか！　イスズちゃんは反対ですぅ」
口をふくらまして抗議するイスズに、イヨが苦笑いする。
タケヒコ「ありがとうございます、イヨ様」
深々と頭を下げてタケヒコが礼を言った。
イヨ「別にフツヌシさんのためにお受けしたわけではありません。この国の神様が、少しでも喜ばれるならと思っただけです」
タケヒコ「……神……ですか」
イヨ「どうしたのですか？」
その言葉に何か思うところが合ったのだろう、タケヒコは一瞬だけ眉を引きつらせた。
タケヒコ「いえ、なんでもありません。それよりも、イヨ様もお受けされたのですから、なおさらカグヤ様にも受けてもらわないといけないのですが」

カグヤ「でも……」
表情が暗い。日頃の明るさが嘘の様にカグヤはうつむいている。
タケヒコ「亡くなったヤカモチも、他のみなさんも、イヨ様と祈りを捧げる事を、決してお怒りにはなられませんよ」
カグヤ「ごめん……やっぱり無理だよ」
うつむいたままカグヤは首を横に振った。
イスズ「イヨちゃんがダメじゃないのに、ダメなのはダメですぅ」
童女のような表情のイスズが、子供が駄々をこねる様に振る舞っている。両手で床を叩きながら、はげしく首を横に振る。
イスズ「イスズちゃんはイヨちゃんがこの人達といっしょに何かするのはイヤですぅ。でも、イヨちゃんの言う事を聞かないのはもっとイヤですぅ」
イヨ「どんな理由でも、賛成してくれてありがとうイスズちゃん」
にこりとイヨが微笑む。その頬笑みを見たイスズが満面の笑みを浮かべる。そんな二人とは対照的に、カグヤは暗い表情で下をうつむいていた。
そんなカグヤの姿を見ていると、スクネは不可思議な感情にさいなまれる。その感情をいつものように振り落とそうとしても、振り落とせない。そうしていると、自らの感情を制御出来ない事が原因か、スクネは苛立ちを募らせて行く。
恐らく今は無理だと判断したのだろう、タケヒコが話をひとまず締めに入った。
タケヒコ「カグヤ様、祈りの件は今すぐに結論を出されなくても結構ですので」
カグヤ「でも……」
暗い表情でカグヤはつぶやいた。そのつぶやきを聞いたイスズが顔をふくらませる。
イスズ「むむむむ。まだイヨちゃんに逆らう気ですか！」
イヨ「逆らってはないから……」
ばつの悪そうな顔をしながら、イヨはイスズの肩に軽く手を置い

た。
　タケヒコ「カグヤ様が迷われるのは当然だと思われます。ですが……」
　イスズ「当然じゃないですぅ。イヨちゃんがイイって言ったらイイと答えないとダメですぅ」
　タケヒコ「ですが結論は急がれずに……」
　イスズ「頭を早くコクンとしないとイスズちゃんが強制的にさせちゃいますぅ」
　話を進められずにいるタケヒコが思わず頭を抱える。その原因を悟っているイヨが慌てて立ち上がる。
　イヨ「フツヌシさん、わたし達はこれで失礼します。どうなるのかは後日教えてください」
　タケヒコ「分りました、イヨ様。お受けいただき、真にありがとうございました」
　儀礼通りの挨拶を、イヨとタケヒコの二人が簡単に済ませる。
　イヨ「それじゃあ帰ろう、イスズちゃん」
　イスズ「待ってください！　まだコクンしてないですぅ」
　イヨ「いいから……」
　なぜか本気の眼をしているイスズの手を、イヨは無理やり掴んで帰っていった。出口までイヨ達を見送った後、タケヒコはカグヤに改めて話を振った。
　タケヒコ「落ち着いてから、もう一度考えてみてください、カグヤ様」
　カグヤ「分ったよ、一日だけ……」
　タケヒコ「ありがとうございます、カグヤ様」
　カグヤ「しばらく一人になりたいんだけど……」
　タケヒコ「分りました。シンム様にはこのまま訓練に付いてもらいますので」
　気絶したままのシンムをタケヒコが肩に担ぎあげる。
　カグヤ「そうしてくれると助かるよ」

タケヒコ「では明日に……良い返事を期待しています」
深々と頭を下げてタケヒコは部屋を出た。続いてスクネも部屋を出た。部屋を出る際にちらりと見たカグヤの表情は暗いままだった。

平穏の中で４

絞め落とされて気絶していたシンムは、人里離れた場所でたたき起こされた。

シンム「ここどこだ？」

起きると見慣れない風景が広がっていた。訳が分からず辺りを見回す。辺りには何もなく、荒れた平野が広がっている。地面に生えた草花すらも枯れた様にしおれていた。

スクネ「……地獄と化した地だ」

遠い目をしながら、何処か影のある表情でスクネは言った。そんなスクネをシンムは初めて見た。それだけに、スクネの言葉に違和感を覚えた。

シンム「地獄？　何言ってんだ？」

遠い目をしたスクネは何も答えない。代わりに、別の人物の声が背後から聞こえる。

タケヒコ「スクネ、その表現は若干違います。「地獄の方が良かったと思える所」と、言われた方が正しいですよ」

シンム「どういう意味だ、タケヒコ？」

いつの間にか背後に立っていたタケヒコの言葉に、シンムは困惑しながら聞いた。冗談を言っているようには見えなかったから。

タケヒコ「今日から、スクネも組み手に参加します」

シンム「二対一でやるのか？」

タケヒコ「その通りですシンム様。わたしとシンム様対スクネで組み手します」

シンム「こっちが二人で訓練になんのか？」

ますますシンムは困惑した。明らかにタケヒコは本気で言っている。そして、その意味がシンムにはまったく理解出来なかったから。

タケヒコ「訓練になるかどうかよりも、死なないで済むかどうかの方が問題になるかもしれません」

シンム「タケヒコの本気とやり合う時の様に？」
タケヒコ「いつもの精神的に死にそうになるのと違って、物理的に死なずに済むかどうかの問題です、シンム様。それに……」
シンム「それに？　どうかしたのか？」
一瞬、何かに躊躇（ちゅうちょ）したのかタケヒコは言葉を詰まらせた後、振り絞るように言葉を続けた。所見なら誰も気づかないぐらいに眉を歪めながら、何処か辛そうに
タケヒコ「そろそろタマモの事を考えると……わたし達の本当の意味での本気を体験して貰わないといけなかったもので」
スクネ「了解した」
まったく真意が理解できないシンムを余所に、スクネは納得した様に言った。
シンム「本当の意味での本気？」
タケヒコ「これ以上無駄な事ばかり考えていると、一瞬で死にますよシンム様。とにかく、すぐに意味は分ります」
シンム「無駄な事も何も、意味わかんねぇ……」
話を続けようとするシンムの視界からスクネが消える。右肩が何者かに叩かれた。ほんのわずかの後、左肩を同じように叩かれた。
そして、姿をスクネが見せると無愛想に告げた。
スクネ「すでに二度死んでいる。伊都国で生き残ったのは奇跡だな」
タケヒコ「いきなりは無理ですよ」
呆然（ぼうぜん）とするシンムを余所に、タケヒコが苦笑している。
シンム「……何がどうして、どうなってんだ？」
タケヒコ「たった今、シンム様をスクネが背後から攻撃したのですよ」
シンム「さっきの肩を叩かれたやつか？」
タケヒコ「そうです。今から、それを本気で避けながら、スクネに反撃をして欲しいのです。わたしがスクネと組み手をする中で」
シンム「タケヒコとスクネが組み手？　意味が全然わからねぇ」

タケヒコ「わたしと戦っていたらスクネの手加減も散漫になりますから……打ち所が悪いと死にます」
シンム「それより、そんな余裕がスクネにあるのか？」
タケヒコ「現状では……余裕がないのはシンム様と共に戦うわたしの方ですよ」
話はそこまでだった。そして、シンムはタケヒコが言った「地獄の方が良かったと思える所」の意味を理解させられる事になった。
スクネ「話は終わりだ。本気で行くぞ」
またたく間にスクネが視界から消える。軽く頭を下げると、タケヒコも同じように視界から消えた。二人の動く速度が速すぎて視界に捕らえられないだけだったが、シンムにとっては文字通り「消えた」に等しかった。
二人が消えた後に、タケヒコの声が聞こえた。
タケヒコ「シンム様、集中してください。スクネを感じるのです」
シンム「感じるって……何がどうなってんだ？」
タケヒコ「右に跳んで下さい！」
そうタケヒコに言われて、シンムは何がなんだかも分らないまま取り敢えず右に飛んだ。すると次の瞬間、シンムの立っていた場所にスクネが現われる。次にタケヒコが現われ、スクネの拳を受け止めていた。
タケヒコ「今です！」
なんとなく理解したシンムは、スクネを横から殴ろうとする。しかし、スクネとタケヒコはすでにその場にいなかった。背後で鈍い音が聞こえる。音に気が付いて後ろを振り向こうとすると、タケヒコから「かがんでください」だの、「次は左に」と言った指示が、この日何度も飛び交い続けた。
この日、スクネとタケヒコの姿を、シンムは二度と目視する事はなかった。
その日の夜。屋敷を出てすぐ近くにある小川のほとりに、星空の

下、カグヤは座り込んでいた。昼間は洗濯などで人の多い小川も、夜には誰もいない。川を眺めながらカグヤは背後の暗闇に向かって話しかけた。

カグヤ「……シンム、今何してる？」

暗闇が声を返す。正確には、すぐ近くで気配を消して忍んでいたスクネが返した。

スクネ「伸びて、寝ている」

カグヤ「……そっか」

それきりしばし沈黙する。何処かで鳴くこおろぎの声だけが響く。少し経ってスクネは姿を現して沈黙を破った。

スクネ「起こして来るか」

カグヤ「別にいいよ。シンム、今日かなりきつい事したんでしょ？」

スクネ「……なぜそう考えた」

カグヤ「なんとなく……かな。スクネも今日はいっしょだろうと思ったし」

スクネ「何をやっていたか知りたいか」

カグヤ「それも別にいいよ。どうせ言われたってわかんないだろうし……シンム、がんばってた？」

スクネ「……あいつなりにな」

カグヤ「明日も同じ事するの？」

会話をしながらもお互いに顔を見合わせたりはしない。お互い、小川に写った顔に向かって話しかけていた。こおろぎの鳴く声も、時のながれすらも止まったような空間の中で会話していた。

小川に写る何処か影のあるカグヤに向かって、スクネは答え返す。

スクネ「それはあいつ次第だ。だがおそらく、明日もだろうな」

カグヤ「シンムの事お願いね。あれでも弟だし」

小川に写ったカグヤの表情がわずかに緩む。それでも影は消えない。

スクネ「考えておく」

カグヤ「またそんな言い方するし。もっと素直な言い方出来ないかな？」
スクネ「言い方……例えば」
カグヤ「うーん普通は「はい」とかだけど」
スクネ「はい」
カグヤ「あはははは。全然、似合わないね」
本当におかしそうにカグヤは笑った。いつも通りの無表情のままスクネは黙り込む。横に立つスクネを見上げるようにカグヤは顔を向けた。
カグヤ「ひょっとして怒った？」
ちらりとカグヤを見てから小川に目を向けたスクネは、やはり黙ったままだった。
カグヤ「やっぱり怒ってるし。感情出してないつもりだろうけど、まる分かりだよ」
おそらく他に誰も、ひょっとしたらスクネ当人にすら分からない感情の変化を読み取ったようにカグヤは言った。
カグヤ「あっ、そういえばきみ「了解した」とかも言ってたよね？」
スクネ「考えておく」
カグヤ「治りそうにないね……あはははは」
無表情のスクネを見て、カグヤは腹を抱えて力いっぱい笑った。ひときり笑った後で、カグヤは突如表情を一変させる。何処か悲しそうな笑顔を見せた後に、再び小川に顔を向けた。
カグヤ「わたしね、夢をいっぱい……いっぱい、寝ている間に見たんだよ」
スクネ「……夢か」
カグヤ「そうだよ。ほとんど夢を見たって事以外は忘れちゃったけどね」
スクネ「ひとつも覚えてないのか」
カグヤ「うん？　そうだね、少しぐらいは覚えてるかな」
スクネ「どんなだ」

カグヤ「お父さんがね……わたしがりんごが大好きって言ったら「それなら今から取りに行こっか」って言ってね。いっしょに森に入ってりんごを取りに入ったまでは良かったんだけどね、一個もないんだよ。そしたらね「ごめん今の季節は生ってないの忘れてた」とか言うんだよ。わたしね、その時いっぱい泣いてしまって……お父さん、ずっと謝ってた。「ごめんな。今度生っている時にお母さんと三人でまた取りに行こう？　ごめんな」って、ずっと謝ってたんだよ」

一気にまくし立てたカグヤは一呼吸置いてから言った。

カグヤ「お父さん、どじだったからね」

夢の話を、スクネは真剣に聞きながら考え事をしていた。それに気付いたカグヤが苦笑する。

カグヤ「あんまり深く考えるような話じゃないよ……」

そう言って、またカグヤは苦笑した。しかし、スクネはカグヤにとっての真顔で問いかけた。

スクネ「本当にあった話か？」

カグヤ「うーん、どうだろう？　本当にあったっぽいけど……わたしも小さかったと思うし」

スクネ「そうか……母親の夢は？」

カグヤ「お母さんの夢？　あれ？」

スクネ「どうした？」…

カグヤ「うーん…たぶん見たと思うけど覚えてないや。てへ」

それをスクネは聞いた瞬間、誰がどう見ても真剣だとわかる顔に変わる。そして、自分でも信じられないぐらいスクネは恐怖を感じながら言った。

スクネ「神は見たか」

カグヤ「えっ？　神様？　何で？」

困惑するカグヤの表情を見て、スクネは心底ほっとした。

スクネ「……なんとなくだ」

カグヤ「変な質問だよね。うーん、見てないかな」

スクネ「見てないなら問題ない。母親の記憶はあるのか」
ほっとしながらもスクネの恐怖心は完全には拭えない。それゆえに、鬼気迫る様な表情で、スクネは質問を続けた。
カグヤ「お母さんの思い出ならいっぱいあるよ」
そこまで言ってカグヤがはっとしたように眼を見開いた。
カグヤ「今思い出したけど。さっきの夢、きっと事実だよ」
スクネ「何か思い出したのか」
カグヤ「うん。結局その後、わたし中々泣き止まなかったんだよ。そうしたら、お母さんに怒られたんだっけ。「いつまでも泣いていたってしょうがないでしょ」って……あれ？」
困惑した様にカグヤが首を捻っている。そんなカグヤに何か質問しようとスクネは思ったが言葉が出てこない。会話がとぎれ、こおろぎの鳴き声が二人を包み込む。
次にこおろぎの鳴き声を遮ったのは今日の朝方の話題だった。
カグヤ「今日ね。本当はイヨやイスズに会って……正直言うと、わたしもシンムと同じ気持ちだったんだよ」
スクネ「わかっている」
朝と違ってカグヤは下をうつむいたりせず、スクネの足に寄りかかって来た。
カグヤ「祭りの事、どうするか聞きに来たんだよね？」
スクネ「否定はしない」
カグヤ「分っては……いるんだけどね、イヨ達が悪いわけじゃないって」
スクネ「ならどうする……やはり断るか」
カグヤ「どうしたらいいと思う？」
わずかに間を置いてスクネは返事をした。
スクネ「自分で決めろ」
カグヤ「突き放すよね……きみ」
スクネ「なぐさめてほしいのか」
カグヤ「やめとくよ。きみだと……なぐさめてくれるどころか、

ぼろくそに言われそうだし」
月の淡い光が二人を包みこむ中、抑揚のない声色で、お互いに小川に映った顔を見ながら話を続けた。
スクネ「ここに来た時には、すでにどうするか決めていると思えたが……」
カグヤ「なんでそう思うの？」
スクネ「表情が考え事しているように見えなかった……それに」
カグヤ「それに……なに？」
スクネ「決めていたから、自分から話し掛けてきたのだろ」
カグヤ「そうだね……そうかもしれないね」
スクネ「もう一度聞く。どうする」
カグヤ「やるよ」
スクネ「そうか」
最後は簡単な受け答えだった。再び二人は沈黙する。こおろぎは何処に消えたのか、鳴き声はいつのまにか無くなっていた。
その日、結局二人はそれ以上何も会話せずに別れた。

星の光り以外に明かりが何もない闇夜の中、カグヤの部屋の前に何者かがいた。気配は二人。一人は辺りを見張っている。もう一人がカグヤの部屋に侵入しようとしていた。
半分呆れたようにタケヒコが声を掛ける。
タケヒコ「まったく、モリヤ様も懲りないお方だ。あなた方も大変ですね」
二人の歓迎されない来客が殺気を放ちながら、顔を見合わせた後にタケヒコを睨みつける。次に出る行動は明らかだった。だから、二人の侵入者が動くよりも早く、タケヒコが動く。二人の侵入者には何が起こっているのかを自覚する時間すら与えられない。侵入者の一人の左腕を右手で掴んだまま後ろに回りこむ。左腕の折れる音が聞こえる。そして、左手で首筋を強く打つ。すぐに二人目に取り

掛かった。今度も左腕を右手で掴むとそのまま地面に投げ落とした。地面に激突する音と左腕の折れる音がする。二人とも一瞬の内に気絶させられていた。

タケヒコ「起きた時にかなりの痛みを感じるでしょうが、きれいに折ったので後遺症はないはずです」

そう言って、タケヒコが侵入者二人の応急手当てを始める。

その場にスクネがたどり着いた時には、タケヒコが二人の手当てを終えていた。

スクネ「やるなら、もっと徹底的にやった方がいい」

タケヒコ「見ていたのですかスクネ」

スクネ「見てはいない。だが」

応急手当てされた左腕に目をやった。きれいに腕は折られているようだった。恐らく変に曲がったりしない様に注意しながら折ったのだろう。

目線に気付いたのかタケヒコが苦笑いする。

タケヒコ「本気でやらないとかなりの痛みを伴うでしょうから…それに恐怖も」

スクネ「あまいな」

タケヒコ「こんな事で非情さを見せても仕方ないでしょう」

スクネ「この程度なら同じ事を繰り返すぞ」

タケヒコ「モリヤ様はそこまで馬鹿じゃありませんよ」

そう思いたいだけだろうとスクネは内心思いつつも、言葉には出さなかった。代わりに先程聞いたばかりの情報を口にする。

スクネ「カグヤが祈りを受けると」

タケヒコ「それはよかった。カグヤ様がお受けになるなら、シンム様も断れないでしょうし。実は、今日言い出せませんでしたが、祭りの前日にシンム様にはジョウコウ様とこの国のお偉方達の相手をして貰いたかったので」

特に興味もない話題だったのでスクネは何も答えない。会話がな

くなると、タケヒコは侵入者二人を両肩に担ぎあげた。
タケヒコ「わたしはこの二人をモリヤ様の所にお返しして来ます……もし他に何かあったらお願いします」
無言でスクネは頷いた。そして、何かあった時の事を考えながら自らの部屋へと向かった。もっとも、スクネが恐れる何かが会った時には、手立てなど何もない事を自覚しただけで終わったのだが。

収穫祭前夜

収穫祭の前夜。
巨大な社の中にある閉ざされた一室。机も椅子も装飾する物は何もない。床すらもない部屋。豪華さとは無縁の部屋に、狗奴国の中心人物達が集結していた。
当初は緊張するとシンムは思っていたが自分でも意外なほど自然体でいた。
ジョウコウ「アシハラシ　マサノリ、イナバ　ハルモチ、カカシ　ショウセン、イブキ　シンム……全員揃ったようだな」
円を作って土の上にじかに座す男達の中央で、ジョウコウが一人一人の顔を見ながら名を告げた。一人だけ名を呼ばれて無い男がいたが、誰も気にしてはいない様子だった。
名が呼ばれるたびに、シンムはそれぞれの顔を眺めた。興味深そうに見ている者、いぶかしそうに見ている者、あきらかに不快そうに見ている者など、それぞれが表情ゆたかに見返して来た。
各々の名を告げ終わったジョウコウが腕を組んで座り、円に加わると、真っ先にショウセンと呼ばれた人物が口を開いた。
白髪交じりで、片目に眼帯をつけていて、顔を横断する深い傷が印象に残った人物だ。
ショウセン「ジョウコウ殿、その横におられる御仁はどなたかのう？」
ジョウコウ「邪馬台国が国の一つ、伊都国の王イブキ　シンム」
シンム「よろしく」
お辞儀をしながらも、シンムは無愛想に挨拶をした。無愛想だったのは、緊張した訳でも、含む事があるわけでもなかったが、慣れ合うつもりもなかったから。
癖なのか、何度も頷きながらショウセンが言葉を口にする。
ショウセン「やはりシンム殿であったか……話は伺(うかが)っておる。さ

ぞ、つらきことがあったであろう」
　同情なら必要ないと思ったが、シンムは口には出さず簡単に「いや別に」とだけ言った。先程と同様にショウセンが「うむうむ」と言いながら、何度も頷く。
　頭髪が年のためか失われているハルモチと呼ばれた老人が、次に口を開いた。
　ハルモチ「シンム？　はて……どなた様じゃったかのう？」
　シンム「じぃさんには今日初めて会ったぜ」
　ハルモチ「そうじゃ、そうじゃ。シンム殿はずっと昔に亡くなられたのじゃった。うっかりしておった」
　左手で何度もひたいを叩きながらハルモチは言った。
　ショウセン「亡くなられた方とは違う方ですぞ、ハルモチ殿」
　どう答えたらいいのかわからないシンムを助けてくれた訳ではないのだろうが、ショウセンがハルモチの言葉に答えた。
　ハルモチ「なるほど……それで目の前のシンム殿はわしに何用ですかな？」
　シンム「別にじぃさんに用事があるわけじゃねぇ」
　呆けているのかとシンムは内心思ったが、それを声に出すわけにもいかないのでそう答えた。
　ハルモチ「呼び出されて用事がないとは……はて？」
　シンム「おれが呼び出してもねぇ！」
　ハルモチ「そうじゃったような、そうでなかったような……」
　ショウセン「お呼びになられたのは親方様ですぞ、ハルモチ殿」
　またも出されたショウセンの助け船に、シンムは内心で感謝する。
　ハルモチ「そうじゃ、そうじゃ……マサノリ殿、何用ですかのう？」
　あまりにも不毛な会話にシンムは心の中でため息をついた。とはいえ、瞬時に心を引き締める。ぎょろりと睨みつけられたためにその人物は大柄で大きな顔、手入れしていないのかぼさぼさの無精髭で、右の耳の耳たぶに噛み蹴られたような痕があった。そして、

あからさまに敵を見るかのように、シンムを睨み続けている人物だった。

マサノリ「わしがイナバ老を呼ぶわけがなかろう！」

体格から連想される通りの低く鈍い声でマサノリは言った。すぐさま助け舟をショウセンが出す。

ショウセン「マサノリ殿あまり激昂なされるな、ハルモチ殿に悪気はない」

マサノリ「そんなことは分っておる！」

恐らく、今までもずっとこんな感じだったのだろうとシンムは内心で思う。

ジョウコウ「ハルモチ、とりあえず今日の所は聞いておけばよい」

ハルモチ「親方様がおられましたか……」

本気で驚いた様にジョウコウを見るハルモチを見て、シンムは「この国だいじょうぶか？」と、疑問が脳裏によぎった。

場の空気を変えるためだろう、わざとらしく一度咳をしてから、ショウセンが頭を軽く下げて提案する。

ショウセン「親方様、本題に入っていただけますかな」

モリヤ「その前に父上！　なぜこの場に、何処の馬の骨とも知れない奴がいるのです？」

最初に名を呼ばれていなかった人物が初めて口を開いた。極力目を合わせない様にしていたアシハラシモリヤが口を開いたため、シンムは危うく嫌悪感を顔に出しそうになった。

父であり、狗奴国の大王であるジョウコウがモリヤを一瞥（いちべつ）する。

ジョウコウ「シンムが参加する事はあらかじめ伝えてあったはずだが？」

マサノリ「従兄！　なぜに保護しているだけの奴が、この場にいるのかモリヤは聞いておるのだ！」

明らかに不満げな顔でシンムを睨みつけ、指差しながらマサノリが大声で言った。その声を受け流すようにショウセンが答える。

ショウセン「今日は邪馬台国の件であろうから、そのため元邪馬

台国の人間をこの場に呼んだのじゃろうて」
マサノリ「カカシ老には聞いておらん！　従兄に聞いておる！」
更に大声をマサノリが張り上げると、今度はハルモチが口を開いた。
ハルモチ「はて……そうじゃったかのう？」
マサノリ「イナバ老にも聞いておらん！」
怒声をマサノリが張り上げる。
ハルモチ「そんなに怒る事もなかろう、ツネヒサ」
ショウセン「ツネヒサ殿は十六年前に亡くなられたであろう」
ハルモチ「そうじゃ、そうじゃ」
相変わらず焦点のずれたハルモチの言葉に、やはり今までと同様に助け船を出したショウセンが答える。
マサノリ「話が進まん！　とにかく従兄から説明願おう！」
腹立たしさを紛らわすためか、両手で地面をおもいっきり叩いてから、マサノリは鼻で息をしながらジョウコウを見た。
ジョウコウ「マサノリ、シンムをこの場に呼んだのは邪馬台国の情報の提供のため、ならびにその方等に顔を覚えてもらうためだ」
静かで、それでいて全ての声を遮断するかのような強さを持った声で、先程のショウセンの言葉を補足する様に、ジョウコウは語った。
舌打ちをしてから、モリヤは汚いものを見る様にシンムに横眼を向ける。
モリヤ「なんで僕たちがこんな馬の骨の顔を覚えないといけないんだい？」
腕を組んだままジョウコウがモリヤを一瞥する。
ジョウコウ「とにかく覚えておけばよい。近々、必要に迫られる」
ショウセン「必要に迫られるとは……情報を提供してもらう事から推測して構わぬのかのう」
自分の考えをショウセンが述べる。
ジョウコウ「何のために、その方等を呼び寄せたかを考えれば分

ろう」
マサノリ「あの女狐、捕まえて思う存分なぶりつくしてくれる！」
その会話を聞いたマサノリが突然嬉しそうに、豪快に笑い声を上げた。同時にシンムが思った事をそのまま口にする。
シンム「じゃあ、ついに邪馬台国に攻めるのか？」
モリヤ「なにが「ついに」さ。馬の骨が聞かれもしないのに口を開いていい場だと思っているのかい」
シンム「なんだと！」
明らかに侮蔑するモリヤの視線と言葉に耐えきれず、思わずシンムは声を張り上げた。すぐにショウセンがぎろりと片眼を光らせるようにシンムを見る。
ショウセン「シンム殿、おとなしくなされよ。場をわきまえなされ」
マサノリ「従兄、こんな負け犬から得られる情報など知れとるだろう」
笑い声を止めたマサノリがまたも指を差しながら言った。笑うのを止めたはずなのに何処か笑っているような口調で。それがあざ笑いである事は明らかだった。だから、シンムはその言葉に反応してかっとなった。
シンム「負け犬っておれの事かよ！」
モリヤ「他に誰が居るって言うのかい？。情けない国の王様」
汚物でも見る様な視線でモリヤは言った。
シンム「情けない国って伊都国の事かよ！」
本気でシンムは怒り狂いそうになった。父や母が守ろうとした、愛すべき人々と作った国を馬鹿にされたから。
シンム「ふざけんな、てめぇ。なんにも知らないくせに勝手な事言いやがって」
ジョウコウ「黙れぃ、シンム！」
眉間にしわを寄せながらジョウコウが怒声を上げる。有無を言わせぬジョウコウの怒鳴り声を聞いて、シンムは下を向いた。息が出

来ないほどの悔しい気持ちを閉じ込めながら。
モリヤ「元、王様はおとなしくしているんだね」
マサノリ「よく吼える負け犬だわい」
嫌な笑みを見せながらモリヤが言うと、それにマサノリが続いた。
あまりの悔しさでシンムの握り締めた手から血が滲む。
マサノリ「ショウセン、ぬしはこの負け犬をどう思っておる」
ショウセン「わしに親方様の来客を評価する資格などございますまいて」
首を横に振りながらショウセンは答えた。
モリヤ「評価？　くだらない。こんな馬の骨なんか負け犬で十分」
マサノリ「まことにそうじゃわい」
気が狂いそうなほどの屈辱に耐える為に唇を噛みしめながら、シンムはうつむいたまま嫌味なモリヤと大笑いするマサノリの声を聞いた。
ジョウコウ「静かにせぃ！」
マサノリ「従兄、黙るのは構わんが、その前にこの負け犬をここからつまみ出してよいかのう？」
気分よさげに笑いながらマサノリは言った。静かに、日が陰るような声でジョウコウが言葉を返す。
ジョウコウ「マサノリ、その負け犬の祖父に煮え湯を飲まされたのは誰だったかを思い出してみろ」
マサノリ「従兄、古い話を持ち出すな」
ジョウコウ「古い話？　その方にとってどれ程の月日までが新しく、どれ程の月日までが古いか、具体的に聞かせぃ！」
その途端、今までの威勢が嘘の様に、マサノリが下を向き、言葉にならない声だけになる。それで、急に雲行きが変わったのに気付いたモリヤが言葉を差し込む。
モリヤ「父上、僕も叔父上の意見に賛成です。馬の骨がこの場にいても、なんの役にも立たないでしょう」
ジョウコウ「モリヤ、呼ばれもせずにこの場に来て置きながら、

くだらない言葉しか出ないのなら、この場を立ち去れ」
モリヤ「なら聞きますけど父上。この僕が呼ばれてないのに、なんでそこの馬の骨は呼ばれてるのさ」
ジョウコウ「シンムをこの場に呼び寄せた理由は先に述べたが？よもや、聞いていなかったわけであるまい」
モリヤ「うそだ！　そいつを呼んだのは別の理由があるに決まってる！」
ジョウコウ「モリヤ、なればその理由とやらを述べぃ」
雲行きがどんどん変わっていく。それに伴いモリヤの表情から笑みや余裕が隠れていく。遂には、モリヤが感情をあらわにする。
モリヤ「理由なんかわかりきっているだろ！」
ジョウコウ「我が言った以外の理由など知らんな。モリヤ、この場で言えぬならこれ以上、その話を口にするな」
モリヤ「父上はそんなにこいつがいいのかよ！」
ジョウコウ「聞いていなかったのか？　これ以上くだらない話をこの場に持ち出すなと言うておる」
モリヤ「どこがくだらないって言うんだ！。父上は僕をないがしろにする気だろ」
ジョウコウ「今すぐこの場を立ち去れぃ！」
遂に稲妻が落ちた。轟音が鳴り響き、自らの頭上に落ちたわけではないのに、シンムも一瞬身体を震わせた。
モリヤ「なぜ僕が消えないといけないのさ！」
ジョウコウ「マサノリ、こやつをつまみ出せ」
汗が引く様な冷淡な声で、ジョウコウは言った。
マサノリ「従兄、何もそこまで……モリヤにはわしから」
先程までのマサノリの大声が嘘の様に弱弱しい声で言った。その声にジョウコウは耳を貸そうともしない。
ジョウコウ「ショウセン、モリヤをつまみ出せ」
言葉をわめき散らしているモリヤをショウセンは羽交い絞めにして外に連れ出した。その際ジョウコウはモリヤをいっさい見ようと

もせず、無言で目を閉じていた。
その後会議は再開されたが、シンムの頭の中には伊都国を侮辱された言葉だけが駆け巡り、話題の内容が頭に入ってこなかった。

収穫祭

夕日も落ち、夜の闇に包まれ始めようかと言う時間なのに町は明明としている。先程まで神輿が荒々しく通っていた中央の通りには人々の行列が出来、その周りをたいまつが照らしている。

昼前にジョウコウと別れてからシンムはタケヒコと二人で街中をぶらぶらと歩き回った。祭りを楽しむ人々の笑顔を見ているだけでもシンムには楽しかった。

行列は名も無き神を祭る巨大な社へと続いていた。行列の先頭では巨大な社に各々が供え物をしている。そして、狗奴国の大王アシハラシジョウコウが行列の横に立ち、供え物をしている者達一人一人に声を掛けている。

シンム「この行列はいったい何なんだ?」

タケヒコ「この行列は今年、厄に見舞われた人々が神に供え物をして、厄を祓って貰っているのです」

特に興味があった訳でもないが、他にする事もないので、シンム達はずっと厄払いを眺めていた。

タケヒコ「厄払いが終わられた様ですね。いよいよ始りますよ」

行列が無くなると、ジョウコウが立ち上がり口を開いた。精神感応の力だろうが、脳にジョウコウの重厚な声が直接語りかけて来る。

ジョウコウ「皆の者! 収穫の感謝と来期の豊饒を願い、更には厄災のない事を願い、名も亡き神に共に祈りを捧げよう」

簡潔だが重みのあるジョウコウの言葉が終わる。その間に移動したのだろうカグヤとイヨの二人が巨大な社の手前に準備された、井桁に組まれた薪の前に立っていた。二人の姿がジョウコウと同様に、精神感応の力で脳に直接映し出される。

祈りの言葉が始まる

カグヤ「掛けまくも畏き大神の大前にカグヤは恐み恐みも申さく」

祈りを一度止めて、井桁に炎をカグヤが灯す。炎が天高く舞いあがると、イヨが祈りの言葉を口にした。

イヨ「掛けまくも畏き大神の大前にイヨは恐み恐みも申さく」

二人の心地よい祈りの声が鳴り響き、高々と燃え上がる炎のゆらめきが、何ともいえない郷愁を生み出す。

ただ、ただ、しばしの時、シンムはその流れに身を任せ、その美しい光景に見とれていた。

そして、美しい光景が終わりを告げる。二人が同時にかがみ込み、巨大な社に向かって深々と頭を下げる。井桁の高々と燃え上がっていた炎が一瞬で消え、たいまつも消され、暗闇が辺りを覆い尽くす。

空高く火の玉が打ち上がった。火の玉は上空で星々と重なり合うと破裂して、天に花開く。火の玉は次々と打ち上がって行く。他の多くの人々と同じようにシンムも空を見上げていた。

最後の火の玉が星空に消える。それでもシンムは余韻にひたりながら、夜空を呆然と眺めていた。そんなシンムを、脳に直接響く重厚な声が現実に引き戻す。いつの間にか巨大な社の壇上の上に移動していたジョウコウの声が。

ジョウコウ「皆の者！　今宵はすべてを忘れ、朝日の昇るまで歌い、踊り、飲み明かそう。名も無き神に感謝を！」

周りの人々の歓声と同時に、辺りが再びたいまつの明かりに包まれる。通りの至る所で焚き火の炎が上がり、その周りで男は飲み明かし、女は踊り狂う。盛大な宴が始まった。

これからどうするかを聞いていないシンムは、隣に目をやった。

シンム「これからどうすんだ？」

めずらしく呆然としていたのか、タケヒコは驚いたような顔をした。

タケヒコ「シンム様、どういたしました？」

シンム「やっぱ、タケヒコもさっき空に上がった奴に驚いたのか

？」

何かを考える様なしぐさをタケヒコが見せる。他愛もない会話のはずなのに真面目な顔をしながら。

タケヒコ「これからの事でしたね。それはカグヤ様達が合流されてからで」

シンム「それも聞いたけどさ」

タケヒコ「どうされました？」

シンム「何にも言ってねぇ」

タケヒコ「もう少しお待ちしましょう」

まったく会話になっていない。それゆえに楽しく成りようもなく、シンムもさすがに会話をするのがどうでもよくなった。とはいえ、他にする事もないので、仕方なくその場で周りの宴（うたげ）を眺めながら、カグヤ達が来るのを待った。

しばらく経ってからシンムはカグヤ達と合流した。

合流後すぐにタケヒコに案内されるままに、何処へ向かうとも知らされずに、シンム達は移動を開始した。その間、タケヒコは何か別の事を考えているのか、心ここになしといった感じで、黙々と先頭を歩き続けた。不思議なことにイヨも同様だった。

しばらく歩いていると、何かを思い出したようにタケヒコが立ち止まる。

タケヒコ「ところでシンム様、先程二人で居た時のご用件は何だったのでしょうか？」

シンム「そうそう、さっき空に打ち上がってたやつ何だ？」

ずっと聞こうと思ってたが、タケヒコが話をまったく聞いていない事が原因で聞けなかった話題をシンムは持ち出した。

カグヤ「あれ、すっごい綺麗だったよね」

大きな眼をカグヤが輝かせ、いつもの笑顔をタケヒコが見せる。

子供が遊戯している姿を眺めている親の様な笑顔を。

タケヒコ「あれはスクネが特殊な呪を使って打ち上げていたのです」

カグヤ「あれスクネがやってたんだ」
輝かせている瞳を、カグヤはこれ以上開いたら目が落ちてしまいそうに広げながらスクネに向けた。
スクネ「ああ、タケヒコに頼まれてな」
さして興味もなさそうにスクネは無愛想に答えた。瞳を輝かせていたカグヤの期待した答えではなかったのか、がっくりとカグヤが肩を落とす。
シンム「あれも呪？」
きょとんとしながらシンムが疑問を口にした。
タケヒコ「ええ、あのような使い方も出来るのです、呪は」
カグヤ「戦いとか物騒な事以外にも役に立ったりするんだ」
肯定したタケヒコの言葉を聞いたカグヤは、肩を落とす前ほどには瞳を輝かす事もないが、感動している様で、声は高かった。
スクネ「他にも使い方はある。詩だ」
めずらしく自分から話題を振ったスクネに、タケヒコのすぐ後ろを歩いていたシンムが振り返る。
シンム「詩？　書けばいいだけだろ？」
タケヒコ「正確には……詠っている声を届けるのですよ」
これまでタケヒコと同様に会話に付いて来ていなかったイヨが参加した。
イヨ「わたしも一回だけ聞いたことがあります」
シンム「どんな詩だったんだ？」
一同がシンムの問いの返答を無言で聞いた。
イヨ「確か……こんな詩です」
眼を閉じてイヨが一言一言を思い出すように詠っていく。

いと思ふ　いとしの君に　木漏れ日で
　出会ふた事も　いと悲しかな

その詩は悲しい恋の詩だった。その詩を聞いたスクネが目線を逸

らし、苦痛に満ちた表情をタケヒコが見せ、カグヤが首をかしげる。
シンム「どうしたんだ姉貴？」
首をかしげたカグヤにシンムが不審げに聞いた。
カグヤ「なんか聞いたことあるんだよね……今の詩」
スクネ「姉気が？　気のせいだろう？」
カグヤ「気のせい？　そう言われれば気のせいのような……」
きょとんとするシンムの言葉にカグヤは答えながらも首を何度もかしげる。代わりに、なぜかイスズが何度も頷く。
イスズ「イスズちゃんは聞いた事ないですぅ」
シンム「だれもおまえに聞いてねぇ！」
当然の突っ込みをシンムが入れると、一同はいっきに静けさを何処かへ置き去りにして、喧騒（けんそう）の中へと包み込まれていく。
イスズ「むむむむ。エッヘンな人はなれなれしくイスズちゃんとか言わないでほしいですぅ！　イスズ様と言ってください！」
シンム「なんでおれがおまえを様付けで呼ぶんだ！。だいたい、そもそもイスズちゃんとも言ってねぇ！」
イスズ「今間違いなく言ったですぅ！」
シンム「今言ったのとは違うだろうが！」
喧嘩というにはほほえましい言い合いを、シンムとイスズの二人が始める。その言い合いを見ていたタケヒコが笑みを浮かべながら再び足を動かし始めた。
タケヒコ「もうすぐ着きます。行きましょう」
そう言ったタケヒコの後ろを一同は喧騒の中、付き従って行った。

通りからはずれた小高い丘に宴の用意がしてあった。そこは一望で巨大な社が見える、眺めのよい場所だった。
予め用意されていた焚き火に、タケヒコが火をつけると、料理を中心に半円になって五人は座した。右端からスクネ、カグヤ、シンム、イヨ、イスズの順に。
五人の正面で一人だけ立ったままのタケヒコが、両手を広げなが

ら嬉しそうに言葉を口にする。
タケヒコ「今日は皆様のために、久方ぶりにわたしが料理しましたので、どうかご賞味ください」
驚いた表情でカグヤとシンムがお互いに顔を見合わせる。そして、二人の表情が曇っていく。
タケヒコ「皆様に喜んでもらえたら幸いです」
カグヤ「喜ぶね……誰が？」
目の前に並べられた料理とタケヒコを、交互に睨みつけながらカグヤがつぶやいた。
カグヤ「シンム、先に食べてよ」
シンム「今回は姉貴が先に食べろよ」
二人が肘で小突き合っている。
タケヒコ「皆様どうぞ召し上がりください。お酒も準備いたしましたので、今日は楽しみましょう」
そう言いながら並べられていた酒をタケヒコが手に取る。
イスズ「イスズちゃんおなかぺこぺこですぅ」
腹部をさすりながらイスズがよだれを垂らして料理を見つめている。
イヨ「わたしも……お酒ください」
空の椀（わん）をイヨが酒を持つタケヒコに差し出した。
酒がタケヒコから椀に注がれるとイヨは一気に飲み干した。飲み干すと、すぐにまた注いでもらい、いっきに飲み干す。三杯ほど飲み干すとシンムが声を掛けた。
シンム「いきなりそんなに飲んでだいじょうぶなのか？」
イヨ「料理もいただきます」
少し赤くなった顔で、イヨは箸で料理を取った。その動きをシンムがにやけながら眺めている。明かに何かあるのだが、酔って火照っているイヨは気付かない。
イスズ「イスズちゃんも」
箸を動かしたイヨと同じ料理を、イスズが手でわしづかみにする。

カグヤ「それは止めといた方が」
行儀ではなく、カグヤは恨めしそうに料理を睨みつけながら言った。
イスズ「とってもおいしいですぅ」
イヨ「本当においしいですね」
料理を口に入れた二人が幸せそうに言った。
カグヤ「じゃあ、わたしもそれ貰おう」
たくさんの料理の中から、カグヤがイヨやイスズが食べたのと同じ料理に箸を伸ばす。
シンム「姉貴ずるいぞ！」
隣のカグヤを睨みながら、シンムも負けずに手を伸ばした。
タケヒコ「シンム様もカグヤ様も他にもたくさんあります。喧嘩をなさらずにお召し上がりください」
嬉しそうにタケヒコはそう言うと座した。
三人が食べたのと違うものを、スクネは口に運んだ。
あまりの味にスクネは思わず吐き出しそうになるのを堪えながら呑みこんだ。
イスズ「きたないですぅ」
顔をしぶめながらイスズは言った。
カグヤ「あれは、はずれ。シンム、食べて良いよ」
一回頷いてから、スクネが食べた料理をカグヤが指さす。同様にシンムもそれを忘れないためか、睨みつけていた。
イヨ「こんなにおいしいのにどうなされたのですか？」
カグヤ「イヨ、それ食べちゃだめ！」
箸を伸ばしたイヨをカグヤが制止するが、それよりも早くイヨが口に料理を運ぶ。
イヨ「ごほっ。こんなまずいものが……」
病気になったのかと見間違えるほどに青い顔して、イヨはせき込んだ。
イスズ「イヨちゃんどうしたんですぅ？」

そう言いながら、嬉しそうにイスズは新しい料理に手を出した。
手に掴んだ料理を、イスズはせき込んでいるイヨの見守る中、一口でほおばる。
その結果、言葉にならない言葉をイスズが口にしながら後ろを向いて噴出した。そんなイスズの背中をイヨがさする。
イヨ「イスズちゃんだいじょうぶ？」
イスズ「ドドドドドーンな人は、イスズちゃんをこの場で亡き者にする気ですか！」
頬をふくらませながら、イスズは怒りの声を上げた。
まだ少し青い顔をしたイヨが恨めしそうに料理を睨む。
イヨ「カグヤさんこれはいったい？」
カグヤ「タケヒコは何種類も料理作れるけど……はっきり言って味覚がまったくないんだよ。だから、とんでもなくおいしいものもあれば、とんでもなくまずいものもあるんだよ。てか、どっちかしかないけど……」
悪夢のような事実を目の当たりしているタケヒコを除く五人が、目の前に広がる多彩な料理を恨めしげに睨みつける。
シンム「だから、タケヒコが料理作ってんの嫌だったんだ！」
スクネ「理解した」
中央に座るシンムの魂の叫び声に、スクネと同様に、他の三人も頷いて同意を告げる。
タケヒコ「どうぞ、どんどんお召し上がりください。わたしもいただいていますので」
一人タケヒコが次々に料理を口に運んで行く。その姿を全員が一堂に「どういう味覚をしているのか」といった目で見ていた。
突然、カグヤが手を叩いた。視線がカグヤに集まる。
カグヤ「そうだ！　おじさんに言ってなんか貰って来よう」
イヨ「そうして貰えると助かります」
救いの手を差し伸べるカグヤの提案にイヨがすぐに同意すると、一人を除く全員が手を叩いてその提案を祝福する。

タケヒコ「その必要はありませんよ。まだまだ、たくさんありますので」

心底嬉しそうに、現在の状況では他の者達には気味が悪い笑顔で、タケヒコは言った。五人の殺気に似た視線を余所に。それで仕方なく、五人は酒だけを飲み始めた。

すべてを忘れて宴を皆は楽しんだ。喜びと楽しさに満ちたひと時だった。その間、永遠に誰もが続いて欲しいと思える程、幸福に満ちていた。

さんざん騒ぎまわった後、スクネとタケヒコ以外の全員は寝静まった。夜の寒さから身を守るため何処からか持って来た毛布をタケヒコが掛けて回っている。

スクネ「よく寝ているな」

タケヒコ「疲れたのでしょう」

少し顔を赤らめているタケヒコは、優しい目で疲れて眠った者達を見回していた。夜の寒さも忘れてしまうほどにゆったりとした時間は終わりを告げる。

スクネ「タケヒコ、気が付いたか」

巨大な社の方をスクネは睨みつけた。

タケヒコ「スクネ、すみませんがお願いします。ここにはわたしがいますので」

同様の方向をタケヒコも見ている。

スクネ「了解した」

簡単な会話を終えると、すぐにスクネは駆けた。全速力で、すさまじい力と力が衝突する場所目指して。

収穫祭　裏

小さな鳥の形をした妖鬼がシンム達の家の中を徘徊していた。それはイヨが生み出した妖鬼。ヤマタノオロチを探し出すために生み出した妖鬼。

現在、家の中には誰もいない。なぜならイヨ本人の目の前に家主達は今いるのだから、誰一人いるはずがない。しかも、外では宴が催されており、多少音を立てても誰かに気づかれる心配は少ない。

イヨ「ここに必ずあるはずです。今の内に探し出さないと」

祈りが終わった直後から、妖鬼に自らの意識の一部を移してイヨは行動を始めた。それでも時間はかけられない。いつ何らかの理由で気付かれるかわからないから。

それを薄暗い物陰から見ている小さな妖鬼がいた。

タケヒコ「やはり動き出しましたか……本当は、罠を張って待っているのはあまり好きではなかったのですが」

あらかじめタケヒコも妖鬼を生み出して隠れさせていた。

自分を見つめる妖鬼の存在に気づかずに、イヨは家の中を探し回る。一部屋探しては次に移る。そして、最後の部屋でイヨは予想もしてなかった第二の来客の存在に驚愕する。

その来客は妖鬼も何も使わず、そのままの姿だった。

ヒミコ「イヨ、あなたですね」

敬愛して止まない養母（はは）の姿がそこにはあった。予想だにしなかった対面に、小さな鳥の形をしたイヨが驚きの声を上げる。

イヨ「お母様なんでここに？」

ヒミコ「ヤマタノオロチを回収するために」

実際には二人は声を出したりはしていない。養母（はは）であるヒミコが、イヨに精神感応の力で直接語りかけただけ。鳥の形をしたイヨの生み出した妖鬼に表情などない。それでも、何イヨの意思を反映してか、どこか驚いた様な顔をしていた。

イヨ「それでしたらわたしが」
ヒミコ「あとは任せて、あなたはこの場を早く立ち去りなさい」
イヨ「お義母様が堂々と行動されていたら目立ちませんか？」
ヒミコ「その心配はありません」
イヨ「でしたら、共に探した方が早く見つかりませんか？」
ヒミコ「場所はもう分かっていますから、これ以上探す必要はありません」
イヨ「そう言われるのでしたら……でもどこに？」
義母であるヒミコの言葉はイヨにとって絶対。いつでも義母は間違わない。そして、すべてを包み込む様な優しさがあった。だから、少しでも力になりたかった。棄てられて、幼い頃に死ぬしかなかった自分を拾い、大事に育ててくれた義母の力に。
ヒミコ「ヤマタノオロチはタケヒコが持っています。それに……」
他の者が誰一人見た事ないだろうとイヨが思う表情を、ヒミコが見せている。もっとも、イヨだけが知っているのは表情だけではない。昔負った傷が原因らしく、醜く半身がしおれているが、それでも義母の美しさは変わらないとイヨは思っている。とはいえ、幻覚の力でそんな姿を表に出した事はないらしい。
そんな義母にイヨが話の続きを促した。
イヨ「それに？　どうかなされたのですか？」
ヒミコ「それに、あなたにこの場で言って置くことがあります」
イヨ「何でしょうかお義母様？」
ヒミコ「タケヒコ！」
その名を口にした途端ヒミコの言葉使いが強くなって、義母の温かい表情から邪馬台国の女王としての冷たい表情へと変わる。
ヒミコ「話はまた今度にします。イヨ、あなたは早くこの妖鬼との連結を解いて戻りなさい」
イヨ「突然どうしたのですか？」
何が突然起こったのか分からずにイヨは困惑している。そんなイヨを余所に、ヒミコが冷たい声で突き放す。

ヒミコ「イヨ、あなたがこの場にいては邪魔だと言っている」
イヨ「お義母様どうしたのですか？　何がいったい気に障られたのですか？」
ヒミコ「仕方ない」
そう呟くとヒミコは氷結呪を取り出した。氷結呪は輝きを発すると、イヨが生み出した鳥型の妖鬼を凍らせた。そして、凍った妖鬼を呪の中に封じた。

部屋の隅でそんな二人を眺めていた妖鬼がいた。それはタケヒコの妖鬼。
ヒミコ「そろそろ出て来たらどうだ」
冷たい目に能面のような表情で、ヒミコが妖鬼に視線を向けている。その視線から逃れようとはせずに、堂々と正面からタケヒコは出て行く。
タケヒコ「やはり、気付かれましたか」
ヒミコ「そなたには感謝した方が良いか？」
タケヒコ「あなたのお好きな様にお取りください」
二人の会話はそれだけで成立していた。名を変えても、タケヒコに取っては彼女が彼女のままであれば、その欠片でも残っていれば、感謝の意味が先程の鳥型の妖鬼であることは明白だったから。
ヒミコ「なれば止めて置こう」
目を細めながらヒミコは言った。殺気を放ってはいない。その気にヒミコがなれば、この妖鬼なら一瞬で殺されるだろう。そうされないのはありがたかった。一瞬で殺されれば会話など不可能だったから。
タケヒコ「あなたには聞きたい事があります」
ヒミコ「今さら何を聞く？」
断りをヒミコは入れたりはしていない。だから、タケヒコは彼女の真意を知り得る恐らく最後の好機だろうと思いつつ問い始めた。

タケヒコ「なぜ、キサラギ様を殺されたのです」
ヒミコ「他には？」
タケヒコ「なぜ、あなたが神を降臨させようとするのです」
ヒミコ「まだあるか？」
タケヒコ「他にも聞きたいことは山ほどありますが……とりあえずは」
そこまで言ったタケヒコの小型の妖鬼を、ヒミコは手の平の上に乗っけると顔の近くに近付けた。彼女の顔がタケヒコの眼前に広がる。
ヒミコ「なるほど……先程の礼だ、一つだけ答えよう。どちらか選ぶが良い」
わずかの間タケヒコは真剣に思考してから選択した。
タケヒコ「なぜ神を？」
ヒミコ「愛するが故に」
あまりにも簡単にヒミコは一言で答えた。だが、それだけでタケヒコに理解出来るはずもなく必死に問いただす。
タケヒコ「愛とは何のことです？　かつて、神をも敵に回したあなたが神の降臨を望む理由が知りたいのです」
ヒミコ「一つだけ答えると申したはずだが？」
タケヒコ「それだけで答えになると本当に思っているのですか」
ヒミコ「他に理由は無い」
彼女に関する過去の記憶をどう呼び起こしても、これ以上は答えてはくれないだろうとタケヒコは観念しながらも、問いを止めたりはしない。
タケヒコ「あなたは、本当にあの神を降臨させる気ですか！」
ヒミコ「逆に聞き返すが、降臨させないでどうする？」
彼女にタケヒコは言いたくは決してなかった言葉があった。その言葉を彼女に対して使う事は、初めて会ったあの日だけのはずだった。それでも、とうとうその言葉を口にする日が来てしまった。
タケヒコ「ヒミコ、あなたがどうしても神を再び降臨させるとい

うのなら……わたしはあなたを斬る！」

ヒミコ「すまないが、まだそれをさせる訳には行かない」

小型の妖鬼を近くにあった机の上にヒミコは乗せると、背中を見せて遠ざかって行く。彼女の、ヒミコの背中目がけて小型の妖鬼が、タケヒコが、一縷（いちる）の望みを抱きながら追いかけて行く。自ら情けないと思いながらも、タケヒコはすがるように言葉を口にした。

タケヒコ「斬られたくないのでしたら止めて下さい。それが出来ないのでしたらせめて訳だけでも」

ヒミコ「訳は言ったはず。今そなたと話す事はこれ以上ない」

タケヒコ「この場にはわたしとあなたしかいません、ですから！」

小型の妖鬼が机の上から落ち、床の上に倒れ込む。どうしても諦めきれないタケヒコが、決して口に出す事がなかった名を口にする。彼女の名を出来ればヒミコに対して出したくはなかったのだが、他に言葉が思い浮かばなかったから。

タケヒコ「あなたは希望だったはずです。ヤマトト！」

ヒミコ「また、近いうちに会おう、タケヒコ」

一瞬だけ振り向いてそう言うと、ヒミコは消えた。呪の、転移呪の輝きと共に。

巨大な社の裏側、藪（やぶ）で隠された場所にある井戸。そこには表からは入れない巨大な社の宝物庫（ほうもつこ）へと続く隠し通路があった。通路を進んでいくと、扉が行く手を塞ぐはずだった。しかし、本来ならば来客を拒むはずの錠（じょう）は壊され、決して開かれないはずの扉は、その本来の目的を忘れたかのように風に揺られていた。誰かが入った事は明白だった。そして、それが誰かも、ジョウコウには予想が出来た。

入り口を塞ぐ様に、ジョウコウは扉の前で侵入者が出て来るのを待った。そして、一人の男が目の前に現れた。予想通りの男が。

ジョウコウ「それをどうする気だ、モリヤ」

男は息子のモリヤだった。一瞬、驚いた表情を見せた後、表情を

繕うと、モリヤはいつもと同じ様に接し始めた。もっとも、ジョウコウからしたら動揺が手に取る様にわかっていたのだが。

モリヤ「父上、ここにいらしたのですか？　てっきり僕は叔父上達と御一緒に飲まれているのかと思いました」

ジョウコウ「その鏡をどうするのかと聞いている、モリヤ」

モリヤ「父上は何の事をおっしゃっておられるのです？」

ジョウコウ「モリヤ、その左手に握り締めている鏡をどうするのかと聞いておる！」

怒声を無視して、素知らぬ顔でモリヤが横を通り過ぎようとしたが、ジョウコウは右手を強引に掴んで止めた。

モリヤ「……父上には関係ないでしょう」

ジョウコウ「ヒミコにたぶらかされおったか」

掴まれた手が振り払うと同時に、モリヤは後ろに飛び退いた。間合いを広げたのは明らかだったが、ジョウコウは無理して詰めようとも、更に開こうともしない。ただモリヤの視線だけを見つめていた。

口元を醜く歪めるモリヤの右手の手の平が、ジョウコウへ向けられる。無数のつららがモリヤの手の平から発射された。その全てのつららを、わずかな動きでジョウコウは避けて見せる。

ジョウコウ「ヒミコの力で鬼となったか……モリヤ」

モリヤ「そうさ。僕は僕に見合った力をようやく手に入れたのさ」

ジョウコウ「この国では、法で鬼となる事を禁じていたはずだが？」

モリヤ「だから、どうしたって言うのさ？　どうせ僕の国になるだろ？　それなら誰も僕に何も言えない」

目の前の息子の目を見る。息子の目はいつの日からかジョウコウが願ったのとは違う目をしていた。少なくとも、生まれたての頃は別人のように澄んだ目をしていたはずだった。育児などしたことのないジョウコウには、モリヤの教育を別人の手にゆだねて来たジョウコウには、息子を本気で責める気にはなれない。だからといって

許すわけにもいかなかった。
ジョウコウ「この国のはずれに家がある。何一つ不自由させぬ、そこへ行って余生をすごせ」
モリヤ「この国のはずれだって？　まさか、あのキサラギとか言う糞ばばあの住んでいた所に。あの売女の居た所に。よりにもよって、この僕に行けって言うのかい」
憎しみを込めてモリヤが睨んで来た。その目をジョウコウは見る。ただ見る事しか出来ない。それしかジョウコウには応え様がなかった。
ジョウコウ「そうだ。この国に鬼は必要ない」
モリヤ「冗談じゃない。第一そんな事をしたらこの国はどうするのさ？。跡継ぎがいなくなってこまるだろ？」
ジョウコウ「モリヤ……知っておろう。我にもう一人息子がおることを」
モリヤ「そんなに、そんなにあの馬の骨がいいって言うのかよ！」
叫びながら、後ずさりながら、モリヤはつららを撃ち続けた。先程と同様に、ジョウコウはそのすべてを最小限の動きで避ける。ただ先程と違い、ゆっくりと前進しながら。
一歩また一歩とジョウコウは歩み寄る。遂にはモリヤの背中に壁が当たる。下がる所がなくなり、モリヤはその場に座り込んだ。
そして、手の届く程の距離までジョウコウは近づいて、歩みを止める。
ジョウコウ「モリヤ、その左手の鏡を置いて立ち去れ。あの家に行く気が無いのなら、邪馬台国へ行け。あの女なら最低限の生活は保障してくれるだろう」
モリヤ「さすが父上、この程度なら必ず近づいて来ると思ったよ。最期に、最期に僕の気持ちに応えてくれてありがとう」
気が狂ったように笑いながら、モリヤは左手に持っていた鏡を右手に持ち替えた。そして、左手をジョウコウの足に添えた。するとジョウコウの両足が青白くなっていく。両足はモリヤの右手の力に

よって凍り始めていた。
モリヤ「父上が悪いのさ。僕がいるのに、あんな馬の骨にこの国をやろうとするから」
ジョウコウ「モリヤ、すぐに手を離せ！　我に剣を抜かせる気か！」
凍りつく足に気を配ることなく、ジョウコウは背中に背負った剣の柄に手を掛けて、モリヤを睨みつけている。
モリヤ「抜きたければ抜けばいいだろ」
狂喜しているモリヤは気付かない。父であるジョウコウの剣の柄を持つ手が震えている事に。大王ジョウコウが情けをかけようとしている事に。
ジョウコウ「もう一度言う。手を離せ」
モリヤ「だから、抜けば良いだろ？。剣を。もう遅いだろうけどさ」
ジョウコウ「やむをえぬか」
背中に背負った自らの剣をジョウコウは抜いた。あまりにも大きな剣を。都牟刈之太刀という銘の美しい曲線を描いた剣を。抜き去った剣で、凍りついた両足の皮を切り裂く。すると何事もなかったかの様に両足は赤みを取り戻していた。
モリヤ「何なんだよ、それ……」
ジョウコウ「愚か者！」
叫びながらジョウコウは剣を縦に振り下ろした。剣を咄嗟に防ごうとしたのか、恐怖から逃れようとしたのか、モリヤは頭上で両手を交叉させた。どちらにせよ何の意味もない行動には違いないはずだった。この剣の切れ味の前では。それなのに剣は両手の皮を斬った所で止まった。それ以上剣を、ジョウコウには振り下ろせなかった。
ジョウコウ「鏡を置いてすぐに立ち去れ。最早、どうにもならない事が分らぬ訳でなかろう」
怯えた眼をした息子を見下ろすジョウコウを現在支配しているの

は、自らの情けなさへの思いだけだった。そんな感傷に浸っている時間もわずかにすぎなかったが。
時がそれを許さなかった。

背後から声が聞こえた。よく知った女の声が。
ヒミコ「もう少し出来ると思ったのだが……」
ジョウコウ「ヒミコか」
息子であるモリヤと戦った時と違い、ジョウコウの表情が一変する。
モリヤ「お、遅いだろ。来るのが」
背後に警戒を強めた瞬間、モリヤがヒミコの背後に移動して隠れた。そんなモリヤにジョウコウは一瞬だけ目をやる。そして、すぐにヒミコを凝視した。瞳にあからさまな敵意を宿しながら。
その敵意に満ちたジョウコウの目を、ヒミコは笑みさえ浮かべながら見返している。
ヒミコ「久しいな、ジョウコウ」
ジョウコウ「あいかわらず口がよく回るようだ、ビミファとやら」
何者かを理解しながら、ジョウコウは偽りの名を口にした。
モリヤ「ビミファ、言われた通り鏡はここに」
ヒミコ「……そう」
左手を広げて鏡をモリヤが見せる。それをちらりとも見ずに、ヒミコは冷たそうに返事した。視線はあくまでも、ジョウコウに対して向けられていた。
薄笑いを浮かべながらモリヤが言葉を続ける。
モリヤ「約束通りこの国とカグヤは貰うからな」
ヒミコ「そんな約束した覚えが無いが？」
モリヤ「何言ってるのさ？　鏡を手に入れたら、僕に国と女をくれるって言っただろ」
ヒミコ「確かに言ったが、狗奴国とも、カグヤとも言っていないはずだが？　最も、カグヤに手を出せば、そなたの首など一瞬で吹

き飛ぶだろうが」
それを聞いたモリヤの目の色が見る見るうちに怒りの色に変わる。
モリヤ「約束が違うだろ！」
ヒミコ「そんなにカグヤと狗奴国が欲しければ、自分の力でなんとかするのだな。少なくとも邪魔はしない」
モリヤ「騙したな、殺してやる」
叫ぶと同時に、モリヤがヒミコに右手を向けた。それを気にする様子も見せずに、ヒミコはモリヤを蹴飛ばした。同時にヒミコは火炎呪をいくつか懐から取り出す。火炎呪がヒミコを包み込む様に回り始める。
それを見てジョウコウは剣を正面に構えた。
ジョウコウ「我と戦う気か？」
ヒミコ「然り、鏡は貰う」
部屋の四方八方に火炎呪が飛んで行く。
ヒミコ「連鎖せよ」
懐からヒミコは同じ呪を出すと口にした。言葉と同時に、部屋中の火炎呪が輝きだす。輝きは順番に起こり、炎はそれぞれが生き物の様に暴れだし、部屋は炎に一瞬で包まれた。彼女の呪は対象にしか効果がない。ゆえにヒミコの呪ならば、自らも、部屋も、いっさい燃える事はない。このままならジョウコウだけが燃やされる。それを知りながらも、ジョウコウは平然としていた。
そして、冷静かつ速やかに動いた。
ジョウコウ「唯我独尊汝無意味哉（ゆいがどくそんなんじむいみなり）」
剣で、ジョウコウは自らを中心に円を描く。あまりにも早い剣の振りによって出来た軌跡は、ジョウコウを覆い尽くす。軌跡に当たった炎は消えていった。炎がすべて消えてなくなると、ジョウコウは剣をヒミコに向けて正面に構える。
ヒミコ「ほぅ、あいもかわらず強い」
ジョウコウ「化け物が何を言うか」
勝負は簡単に着かないはずだった。二人の力は拮抗していたから。

その力関係を、この場にいたもう一人の人物が崩壊させる。
モリヤ「いくら父上でも、利き腕が使えなかったらそんなにでかい剣使えないだろ」
いつの間にかモリヤがジョウコウの腕を掴んでいた。目の前のヒミコに集中していたジョウコウがそれに気付いた時には、凍結はすでに腹のあたりまで達していた。
顔以外の全てが凍りつくと、モリヤは手を放した。そして、口に笑みを浮かべながらモリヤはヒミコに目を向けた。
ヒミコ「鏡をよこせ」
冷酷に命令するヒミコに、モリヤが口元を歪めながら悦楽の表情で言い放つ。
モリヤ「否だね。これ、大事なんだろ？　だったら僕を蹴った事を、土下座で、まず謝って貰おうか」
ヒミコ「国と女をやるという約を違えるつもりはない」
モリヤ「聞こえなかったのかい？　僕は土下座しろと言っているだろ！」
怒声をモリヤは上げるが、ヒミコに従う様子はまったく見られない。
ジョウコウ「鏡はやるな」
身動き一つ取れないジョウコウが言った。
モリヤ「黙れ！　父上は凍って、今何も出来ないだろ？　だったら、横から口を開くなよ」
顔を殴られ、ジョウコウの口から血がにじむ。それでもジョウコウは眉一つ動かさなかった。それが気に障ったのかモリヤはもう一度顔を殴る。
ヒミコ「もう一度言う。鏡をよこせ。約は違えぬ」
目を細くしながらヒミコが言った。それが最後忠告だと、ジョウコウには否が応にも理解出来ていた。しかし、モリヤは別の受け取り方をした様だった。
モリヤ「おまえ、頭おかしいだろ？　僕の言っている事理解して

いないだろ？」
ヒミコ「仕方ない。あまり時間を掛ける訳にも行かぬ。鏡の場所が分かった礼だ。今後生きている間の保障ぐらいはしてやる」
モリヤ「これ欲しくないのか？　欲しくないなら、渡さなくても僕には構わないからね。どうするかって聞いてんだよ！」
鏡を手の平に広げて見せびらかすモリヤ。
ジョウコウ「そうだ、鏡は……渡すな」
それでもジョウコウにはそう言うしかなかった。鏡を渡せばどうなるか知っている者としては。
モリヤ「父上は、黙れ！」
遂にジョウコウは頭も凍らせられて意識を失った。

力の衝突を感じてスクネが駆けつけた時には、ヒミコが背中越しに呪を手に持っていた。持っていたのはおそらく爆炎呪。だから、おそらくぎりぎりだったのだろう。少なくともスクネはそう判断した。
スクネ「それはおまえにはすぎたる物だ」
瞬時にスクネは敵と味方を判断する。否、仮に判断が間違っていたとしても、その後発生する問題が最低限で済む様に対処した。すなわち、モリヤの腹に拳を一撃食らわせ、気絶させてから鏡を取り返した。
ヒミコ「そなたが来たか、スクネ。丁度良い。タケヒコはどうしている？」
スクネ「おまえが知る必要は」
目の前のヒミコの黒い瞳が紫色に輝く。そして、一瞬だけ気を失った様にスクネの記憶が抜け落ちる。
ヒミコ「なるほど、カグヤと共に居るのか。それに、予想通りうまくやっている様だ。これならば」
そこで頭が再び動き出した。もうろうとする意識をはっきりと取

り戻すために、スクネは自らの頬を強く叩いた。
ヒミコ「鏡はまだ預けておく。また会おう」
意識をはっきりさせたスクネは、天之壽矛（あまのじゅぼこ）でヒミコを貫いた。貫いたヒミコの姿が揺らめきながら消える。幻影だった。
スクネ「逃げられたか。しかし、いったい何が起こった」
記憶が抜けた辺りの事を思い起こす。いくら思い起こしても何も思い出せない。ただ一つだけ脳に奇妙な記憶があった。その前後がまったく記憶にないのに。
スクネ「鏡を使え？　どういう意味だ」
少し考えてからスクネは思考を止めた。意味をいくら考えようとしても参考にする材料がない以上は、時間の無駄遣いにしかならないのだから。

倭国大乱

その日シンムは、何も知らされないまま呼び出しを受けた。
祭りの次の翌朝、帰り着くとすぐに狗奴国では戒厳令が引かれた。
それによって人々は丸々二日間外出を禁じられ、シンムもそれに従った。不思議とタケヒコはその間まったく姿を見せない上に、スクネは一言も口を開かなかった。それゆえに、何か大事が遭った事ぐらいはシンムにも想像出来ていた。
タケヒコ「シンム様達が参られました」
ジョウコウ「左様か」
対面と同時にシンムは驚愕した。精悍（せいかん）だったはずの顔は青白く、右肩が垂れ下がり、筋肉質だった腕は信じられないほどにやせ細っていた。目の前のジョウコウが、ついこの間会った人物と同一人物とはとても思えなかった。それでもただ一つだけ、目の鋭さだけは、シンムの記憶と変わらないままだった。
シンム「その体はいったいどうしたんだ？　おれのしらねぇ所で何が在ったんだ！」
ジョウコウ「今から話す」
静かだが、力強い声でジョウコウは言った。
カグヤ「伯父（おじ）さん、起きてだいじょうぶなの？」
共に呼び出しを受けていたカグヤが心配そうな顔をしている。もう一人スクネも付いて来ているが、いつものように無表情で無言のままだった。
ジョウコウ「心配ない」
青い顔したジョウコウは笑みさえ浮かべながらそう言った。横でタケヒコが支えられていないと、座ってさえいられないだろうに。
ジョウコウ「タケヒコ、シンム達はどのくらい知っておる？」
タケヒコ「簡単な概要ぐらいしか話しておりません。シンム様は大奥様から聞かれましたので」

ジョウココウ「左様か……」

そう言ってジョウココウは天井を見上げた。何処か辛そうな、寂しげな表情を浮かべながら。その眼には天井以外の何かが映っているようだった。

カグヤ「わたし達も聞いていいの？」

タケヒコ「わたしが、あの日に御二人に伝えようとした事もありますので、カグヤ様も聞いていてください」

首をかしげながらカグヤがタケヒコの言葉の思い当たる節を口にする。

カグヤ「あの日？　ひょっとして十五年前の話をするって言っていた事？」

タケヒコ「はい。あの日、話せなかった事も語られると思います」

きょとんとカグヤはしていた。何かに耐える様な表情をタケヒコはしていた。さして興味なさそうにスクネはしていた。何が話されるのか、シンムの心は期待と不安が入り混じっていた。

ゆっくりとジョウココウは口を開き、語り始めた。

不繭国（ふまこく）のタダヒラは王として生まれたが、決して当初は野心家ではなかった。残念ながら伊都国王イブキヨシモチの様に才には恵まれてはいない。とはいえ、暴君でもなく、暗愚と言うほどひどくもなく、王として平凡そのものだった。故に何事もなく不繭国（ふまこく）の王として、何不自由もなく、一生を終えるはずだった。一人の女性に会うまでは。

女性の名はトヨウキサラギ。邪馬台国の特使として、タダヒラは狗奴国に行った際に出会った。そして、一目惚れをした。その話をタダヒラはヒミコに相談する。その日を境に、タダヒラは狗奴国への侵攻を考え始めた。

己が目的のために、タダヒラはまず当時の邪馬台国の大王を暗殺した。次に、自らが次期大王に立候補すると、目下の敵は当然の様にヨシモチとなった。そのヨシモチを謀略で退け、大王に就任する

と、狗奴国への侵攻を行った。結果は大敗に終わる。
その後タダヒラは講和にヒミコを狗奴国へ遣わした。
数年後、タダヒラは伊都国の皇太子コジロウが伴(ともな)って帰った女性を見て、再び驚きの声を上げた。彼女はキサラギにあまりにも似ていた。それもそのはずで、彼女の名はトヨウサクヤ、カグヤの母であり、キサラギの妹。
一目惚れした、美しいキサラギがすでにこの世にいない事を聞かされていたタダヒラは、これを最期の好期としてしか捉える事が出来なかった。行動はすぐに実行へ移される。邪馬台国の大王としてイブキコジロウに妻サクヤを差し出す様に要求した。
しかし、断られた。
焦心して、下を向いたままのタダヒラの前に死体が転がっていた。
彼女は、ついさっきまで確かに生きていた。手の届く所まで来ていた。それなのに、彼女は彼の部下によって殺された。隠し持っていた小剣でタダヒラを刺そうとしたために。
死体の手には強く小剣が握られ、タダヒラの頬には血が滴(した)っていた。

何処か遠くを見る眼で語り続けたジョウコウが、視線をシンムに向ける。
ジョウコウ「その後、タダヒラがヨシモチに敗れ、死した事は知っているな」
シンム「知ってるけどよ、結局どっちにしろ、タダヒラの片思いが原因じゃねぇか。だからどうしたって言うんだ」
その話から、シンムには怒り以外の何かを感じる事は出来なかった。
タケヒコ「確かにその通りです」
肯定するタケヒコの表情に変化はなく、何かに耐える様に辛そうだった。
カグヤ「キサラギおばさん、お母さんにそんなに似ていたの？」

タケヒコ「性格以外は似ておられましたよ」
辛そうな表情に、無理やり笑みを浮かべながらタケヒコはカグヤの質問に答えた。
シンム「くだらねぇ！　そんなくだらねぇ事のために父さん達は死んだ上に、悪人の様に扱われてんのかよ！」
怒りから、吐き捨てる様にシンムは言った。そんなシンムを、ジョウコウが諭すように言葉を口にする。
ジョウコウ「確かにくだらぬかも知れん。だが事実には違いない」
シンム「そりゃあ、事実かもしれないけどさ」
ジョウコウ「その事実がすべてだ。そして、どんな理由で始まったにせよ結果は出た。故に、敗者と勝者に別れた」
そう言って再び天井をジョウコウは見上げた。何処か悲しげな表情を浮かべながら。
再び正面を見据えたジョウコウの眼は、何処か優しげだった。
ジョウコウ「話を続ける。ここからが本題だ」

不繭国には首飾りがあった。その首飾りは中央に勾玉があり、それは美しく透き通り、青紫色に輝くそれは、たえがたいほどに魅力的だった。勾玉の回りには管玉が付いていた。それは鏡の様にきらめき、純白のそれは、何物よりも魅力的だった。管玉と勾玉を結ぶ紐は、丈夫でどのような力であろうとちぎれず、どの様な刃物であろうと切断できず、管玉と勾玉の魅力を引き立てる様に浅黒かった。首飾りは五百之御統之珠と呼ばれる。呪などではなく、そのままではただの首飾りにすぎなかった。
不繭国の王であるタダヒラの一族は、その首飾りを代々受け継いでいたが、それの存在を一族以外の誰にも知らせなかった。それをタダヒラはヒミコと言う名の巫女に見せてしまう。一目惚れしたキサラギへの貢物にふさわしいか占って貰うためだけに。
それはヒミコが千年の間探していた物。それは千年前に行方がわからなくなっていた神器。

その日からヒミコは五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）の覚醒にすべてを捧げ始めた。
五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）の覚醒に必要な二つの条件、高貴な者の血と大量の血。その二つを得る為に、倭国大乱（わこくたいらん）は起きた。否、ヒミコによって引き起こされた。

最初にヒミコはタダヒラを扇動して狗奴国を攻撃させた。
それでもヒミコ自らは最後までこの戦いには直接には介入せず、静かに戦いを見守りながら高貴な者を探し出す事に全力を尽くしていた。

そして、邪馬台国と狗奴国の戦いが終わると、ヒミコは一人の男に目を付けた。王の一族に生まれながら、あまりにも優しかった男、イブキコジロウ。

その男にヒミコは近づいた後、次々にコジロウの周りの人間を葬（ほうむ）り始めた。心の美しさを見極めるためだけに。

始めに殺されたのはキサラギ。

人でありながら、神宝（かむたから）を加工する事が出来た存在。四魂（しこん）のように、天人（あまびと）として生まれた存在。

そこまでジョウコウが語ってからシンムが疑問を口にした。

シンム「ちょっと待ってくれ、四魂（しこん）っていったい何なんだ？」

タケヒコ「話を遮るのは失礼ですよ、シンム様」

そう言ったタケヒコの表情は、これ以上ないほどに辛そうだった。

ジョウコウ「よいな、タケヒコ」

静かに口にしたジョウコウの言葉に、タケヒコが無言で辛そうに頷く。

ジョウコウ「シンム、四魂（しこん）とはタケヒコやスクネの呼称にすぎぬ。そして、天人（あまびと）とは、千年前までこの世界を支配していた者達の事だ」

シンム「タケヒコとスクネの……」

二人を交互にシンムは見た。辛そうに目を逸らすタケヒコ、相変わらず無表情のスクネ。二人が何かを隠しているのは分かっていたが、今まで何も教えてくれなかった。

シンム「じゃあ、タマモって奴も？」
辛そうにタケヒコが頷く。
ジョウコウ「話を続ける」
再びジョウコウが語り始めた。それにシンムは聞き入る。青い顔をしたカグヤに誰一人として気付かぬまま。

殺されたのはトヨウサクヤの姉キサラギ。彼女はコジロウの狗奴国に置ける数少ない親しい人物。そして、アシハラシジョウコウの愛人。
殺害時に、ヒミコはその子の殺害も試みたが失敗に終わった。それでも、結果的にその事実が、コジロウを狗奴国から遠ざけた。
そして、悲劇は続く。邪馬台国に戻ったコジロウに待っていたのは妻サクヤの死、父ヨシモチの死。それを乗り越えたコジロウは、完全にヒミコから認められる。高貴な血の持ち主として。そして、コジロウは命を落とした。
高貴な者の血を吸った首飾りは中央に勾玉があった。それは汚くにごり、赤紫色に輝くそれは、たえがたいほどに眩惑的（げんわくてき）だった。勾玉の回りには管玉（くだだま）が付いていた。それは闇さえ遮られ、赤黒いそれは、何物より眩惑的（げんわくてき）だった。管玉（くだだま）と勾玉を結ぶ紐は、存在さえしているのかわからなかった。首飾りは五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）と呼ばれる。神によって天人に与えられた神器。

聞き終えたそれぞれの表情に、別々の色があらわれていた。相変わらず無表情のスクネ、眼を閉じ何かに耐えている様子のタケヒコ、顔を青くするカグヤ、怒りと驚きに満ちたシンム。
ジョウコウ「これが倭国大乱（わこくたいらん）と呼ばれる戦いの意味だ」
長い話の終わりがジョウコウによって告げられると、いの一番にシンムが声を荒げた。
シンム「五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）とかいうのを覚醒させるためだけに起きたって言うのかよ！」

あまりに不条理だとシンムは思った。訳のわからない物のために父と母が見た地獄。そして、その延長上で滅ぼされた国。これが不条理でないのならばと。

タケヒコ「ですけど、いろいろと他にも理由が合ったのも本当です。あの戦いはあくまで、カムタダヒラという人物の個人的な感情が巻き起こしたのも事実です」

慌てた様に、タケヒコが言葉をいっきにまくし立てた。

シンム「それでも、最初っからヒミコが裏にいたって言うんだろ？」

まくし立てたタケヒコの言葉を聞いても「だからどうしたって言うんだ」という思いしか、シンムには沸いてこない。怒りの矛先としては、ヒミコもタダヒラも同じだったから。

ジョウコウ「タダヒラをたきつけ、扇動したのもヒミコだ。ただし、勘違いするな」

諭すようにジョウコウは威厳に満ちた声に、優しさを混ぜながら言った。

シンム「勘違い？　勘違いって何を」

ジョウコウ「倭国大乱はあくまでイブキヨシモチの野心あってこそ成り立つ。イブキコジロウの優しさあってこそ成り立つ。タダヒラ一人ならば乱などにならず、圧政が引かれて終わる」

シンム「じゃあ、父さんや爺さんも悪いって言うのかよ！」

思わずシンムは怒声を上げた。その怒声がタケヒコによってすぐに否定される。

タケヒコ「そうではありません。ジョウコウ様は彼等の意志が、イブキ親子の意志が、タダヒラの圧政を許さないからこそ起こったと言われたのです。決して、善し悪しの話しではありません。それに、すべてがヒミコの思い通り進んだ訳ではありませんから」

シンム「思い通りいかなかったって？」

ジョウコウ「言ったはずだ。覚醒には高貴な者の血と、大量の血が必要だと」

口にしたジョウコウの言葉は、日頃よりもわずかに荒々しかった。
そのためにシンムの声が小さくなる。
シンム「それは聞いたがさ。両方とも……」
言いかけた言葉を、タケヒコが首を横に振って否定する。
タケヒコ「十五年前の戦いでは、覚醒に必要な血の絶対量が足りなかったのです」
シンム「でかい戦いの連続だったんだろ？　だったら、なんで？」
タケヒコ「順番の問題です。先に高貴な者の血が必要なのです。故に、コジロウ様の命が断たれる前の血は覚醒には影響しません。そして、コジロウ様の後にはほとんど血が流れていませんから」
シンム「でも覚醒したんだろ、だったら？　だいたい覚醒したらどうなんだ？」
わめく様にシンムは言った。理解がまったく出来ないから。そんなシンムをタケヒコは何処か辛そうな眼をしながらも、しっかりと見返した。
タケヒコ「今からその件も話します。あれは確かに覚醒していました。ですが、十五年前ではありません。三年ほど前、不繭国が壊滅しました。女、子供、関係なく、一人として生き残りませんでした」
初耳だった。伊都国の王であったシンムには当然の様にそんな事があったのなら、耳に入ったはずなのに。
タケヒコ「ありました。但し、ヒミコは不繭国の一件を隠蔽すると、邪馬台国すべての人々に催眠を掛けて、不繭国に近づけなくしたのです。四魂の一人であるタマモの力を借りて」
シンム「……タマモ」
その名を聞いて思い浮かべるのは、あの日の光景。一瞬で地獄と化した伊都国で、何も出来なかった自分に対する嫌悪感。
辛そうに声を震わしながら、タケヒコは言葉を続けた。
タケヒコ「伊都国で、タマモは覚醒した五百之御統之珠を使ったのです。あれは神宝の力を増大化させますから」
シンム「さっきも言ってたが神宝って何だ？」

タケヒコ「それも今から説明します。まずはタマモの神宝（かむたから）、天詔琴（あまのりごと）。その弓で射られた矢は、対象を決めるとその対象に向かって追尾します。不繭国（ふまこく）での件は、普通の矢の代わりに、催眠呪から作った矢を使えば問題ありません」

シンム「呪から矢を？　そんな物が……」

タケヒコ「論より証拠、神宝（かむたから）をお見せしましょう。シンム様、少し失礼します」

天之羽張（あまのはばしり）を抜くと、タケヒコはシンムの頭目掛けて振り下ろした。それは空気でも切っているかの様に、シンムをすり抜けた。

タケヒコ「これがわたしの神宝（かむたから）、天之羽張（あまのはばしり）です。どの様な物だろうと透過して、切りたい対象だけを斬る事が出来ます」

シンム「そんな事が本当に出来るのか？　本当にそんな武器があんなら、おれにもあれば……」

本心からそう思った。そんな武器が本当にあれば。そう、あの日に何か出来たかもしれなかったのにと。

一瞬タケヒコがジョウコウに眼を向ける。無言でジョウコウが頷く。そして、タケヒコは言葉を絞り出すように言った。

タケヒコ「あります」

シンム「そりゃあねぇとは思ってっけどさ……今、何て言った？」

予想外の一言がタケヒコから帰って来た。何かに耐える様にタケヒコが言葉を続ける。

タケヒコ「冗談でもなんでもなく、本当にあります。但し、神宝（かむたから）とは言えない代物ですが」

そう言うとタケヒコが剣を差し出した。

その剣は美しい曲線を描いていた。その剣の柄には美しい装飾が施されていた。その剣を受け取ったシンムの目には、なぜか涙が滲んでいた。

それまでの怒りなど一瞬で消え去った。剣を、都牟刈之太刀（つむがりのたち）を受け取ったシンムには、なぜかわかないが、懐かしさと、悲しさが心を揺さぶった。

そんなシンムに告げられる。
タケヒコ「母上様が最期に打たれた剣です……シンム様」
声を振り絞る様にタケヒコが言った言葉は、シンムの心臓の鼓動を加速させた。
シンム「母さん……何言ってんだ？」
恐る恐るシンムは聞き返した。加速する鼓動がシンムに襲いかかる。下を向き、目を閉じているタケヒコの代わりに、ジョウコウが答えた。
ジョウコウ「サクヤは巫女。鍛冶を行って、剣を打ったりは出来ぬ」
シンム「母さんが打てないんなら……まさか！」
怖かった。ただ、ただ、シンムは怖かった。これから、恐らく言われる名を、出来れば聞きたくないと思った。
ジョウコウ「シンム、おまえの本当の母親の名は、キサラギ」
師であるジョウコウの言葉を聞いて、鼓動が止まるかとシンムは思った。聞きたくない事実は続く。
ジョウコウ「シンム、モリヤは乱心した。この国はおまえが継げ」
シンム「ジョウコウさんも突然何言ってんだ！」
訴えるようにシンムは言った。冗談だと誰かに言って欲しかった。
シンム「おれの父さんはコジロウだ！　母さんはサクヤだ！　姉貴からも何か言ってやってくれ！」
祈るような気持ちでカグヤの方をシンムは見た。
辛そうに青白い顔をしたカグヤが声を絞り出す。
カグヤ「シンム……伯父さんの言った事は……本当だよ」
言葉を出し終えると、カグヤはその場に倒れこんだ。

神代と呼ばれる時代
人は神の掌（てのひら）で踊り続ける
天人（あまびと）は神を称え続ける

四魂（しこん）は神の降臨にそなえ神器を探し出す
五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）は神を呼び出す
真布津之鏡（まふつかがみ）は神を映し出す
神の器は神を向かえる準備を始める
一つ。人の知識は無意味
一つ。人の経験は無意味
一つ。人の感情は無意味

神は新しい世界を創造する
始まりに。大地は葦（あし）の芽から生まれる
次に。四魂（しこん）が神に帯同して現れる
最期に。天人（あまびと）が新しく生まれ変わる

新しい世界に人の住む場所はない
人が新しい世界への移住など許されない
人は生まれ変わりなどしない
神にとって人は一瞬の戯（たわむ）れにすぎない

神を失った世界に未来など存在するはずもない
……それは永遠に繰り返される……

最後のやすらぎ（前書き）

残り半分ほどですが、付き合って貰えると幸いです。

最後のやすらぎ

朝日が昇ると。呆然としながらシンムは一人で家を出て、外を当てもなくぶらついていた。すべてが嘘のようで、何もかも忘れたい気分だった。そうしていると、ふとイヨ達の事が気になった。一度気になると、自ら気にした事自体を否定しても忘れられず、結局イヨ達の元へと向かう。

巨大な社内にヒミコが現われていながらも二人は牢には入れられず、家に監禁されている事をタケヒコから聞いていた。それはジョウコウの指示らしい事も。

家の前には衛兵が十人ほど監視のため立っていた。その中央にいる衛兵達の指揮官とおぼしき女性から許可を得て家の中に入った。

家の中には、封印呪の付いた首輪によって鬼の能力を封じられたイスズと、同じ様に巫女としての力を封じられたイヨが食事を取っていた。監禁されているとは思えない笑顔を浮かべながら。

シンム「入るぜ」

イスズ「エッヘンな人、何しに来たですぅ！　イスズちゃん呼んだ覚えありません」

真っ先にイスズが頬をふくらませる。我ながらシンムは当然だと思う。

イヨ「呼んでなくても来られるよ。わたし達捕まっているし」

平然とイヨはイスズにそう言った。

シンム「意外と、普通にしてんだな」

正直、シンムは二人が暗い顔していると思っていた。最悪、二人とも死刑に処せられる可能性も十分にあるのだから。

真摯な態度で、イヨが辛らつな返事をする。

イヨ「どういう訳かは知りませんが、殺されるわけでもなく、力を封じられ、監禁去れてこの家から出ることを許されません。ですが、あなたみたいな人が、勝手に入って来ることを除いたら、普通

に生活しています」
シンム「とげのある言い方だな」
イヨ「この状態で、どなたであろうと歓迎するのは無理です」
それも当然だとシンムは思う。自分が逆の立場ならば入って来た瞬間に殴りかかっているだろうとも。
イスズ「エッヘンな人が突然やって来るのが悪いですぅ。コクンとしたなら出て行きなさい」
シンム「そうだな、突然来て悪かった……」
最初から自分に居場所などあるはずのない、この場にシンムは理由もわからずに来た。それだけに、出て行けと言われれば、それを簡単に受け入れられた。だから、背をイヨ達に向けて立ち去ろうとした。肩を落とし、なぜか分からない寂しさを感じながら。
イヨ「待ってください。何かあったのですか？　今日は様子がおかしいですよ」
背後から聞こえたイヨの言葉に、思わずシンムは足を止めて振り返った。そこには口を膨らませているイスズと、なだめているイヨが座していた。
イスズ「イヨちゃん、なんでエッヘンな人を止めるですぅ」
イヨ「何か、いつもと違って寂しそうだったから」
図星を指された様な気がして、シンムは思わず大声でそれを否定する。
シンム「別に寂しくてこんな所来たわけじゃねぇ！」
大声を上げた事をシンムはすぐに後悔した。そんなつもりなどなかったから。そんなシンムの心を察しているのか、気にした様子など微塵も見せずにイヨが微笑む。その笑顔は天使の様だった。
イヨ「それでしたら、何をしに来られたのですか？　わたし達を笑いに？　それとも慰み者にでも？」
イスズ「イスズちゃんが、イヨちゃんをエッヘンな人から守りますぅ」
間に入って立ち塞がるイスズに、その背後のイヨに、シンムは大

声で否定する。
シンム「どっちも違う。おれがそんな事すんわけねぇだろ！」
イスズ「むむむむ。エッヘンな人はイスズちゃんに変な事する気ですぅ」
部屋の隅に移動して、イスズが自らの身を抱え込んで震える。
シンム「違うって言ってんだろ！　やっぱ、来んじゃなかったぜ」
正直、シンムは泣きそうだった。何を望んでここに来たのかわからず。来てみれば当然の様に言い合いになる。そんな事、今はまったくする気になれないのに。
正座したイヨが目を合わせて来て、再びにっこりと微笑んだ後、真摯に言った。
イヨ「それでしたら……もう一度聞きます。何をしに来られたのですか？」
シンム「そこらへんぶらぶらしてたら、たまたま寄ろうと思っただけだ」
正直に答えた。他に理由など最初から何もない。やりたい事も、やるべき事も何もない。あるのはどうしていいか分からない思いだけ。
目線をイヨは放さず笑顔を見せる。その笑顔からシンムも目線を放せない。
イヨ「分かりました、そうしときます。それならそれで、少し話でもして行きませんか？　見た通り、わたし達はここから出られませんから、暇ですし」
イスズ「イヨちゃんの話し相手ならイスズちゃんがいますぅ」
部屋の隅からイヨの隣に移動したイスズが、イヨの服のすそを掴んで、頬をふくらませる。
イヨ「イスズちゃんとはいつでも話せるから。たまには、他の人と話そう？」
目線をイスズにイヨは移して言った。すると、頬をふくらましていたイスズがシンムに目を向けて来た。

イスズ「イヨちゃんがそこまで言うなら仕方ないですぅ。エッヘンな人はイヨちゃんと今すぐ話しなさい」

なぜか命令口調でイスズは言った。落ち込んでいるせいか、不思議といらついたりはしなかった。

シンム「特に、話なんかそれに、なんか対応が突然変わるんだな」

何と言っていいかわからずに捻りだした言葉がそれだった。

イヨ「あまり気になさらないで、それよりもイブキさんでよろしいですか？」

他人行儀なイヨの言葉を聞いて、今更の様にシンムは思い出した。今までは自分の怒りをぶちまけるばかりで、この二人とは満足に何も話をしてなかった事を。

シンム「名前でいいぜ」

イヨ「わかりました。シンムさん、よろしかったらこの国の話でも聞かせて貰えないですか？　今まで、ゆっくり出来ませんでしたから」

シンム「おれの知っている事でよかったら別に構わないぜ」

イヨ「でしたら、何もお持て成しは出来ませんけど、とりあえず座ってください」

シンム「ありがとよ」

二人の面向かいにシンムは腰を下ろして狗奴国の話を始めた。とはいえ、シンムも狗奴国に関してそんなに知っている訳ではなかった。それでも、この一年程で知ったかぎりの話をした。自分が訓練している時に見た山頂からの光景、綺麗な湖の光景、国の人々を見ていて思った活気、それは当たり障りのない簡単な話だった。そんな話を聞いてイヨが苦笑する。たまに話を止めてはイスズが間の抜けたことを言った。

今まで、イヨ達は伊都国を滅ぼした憎いだけの存在のはずだった。ひょっとしたら、ここに来たのはうさばらしのために来たのかもしれなかった。だがそんな気にならず、どうでもいい話をした。そして、どうでもいい話を聞いてくれるイヨ達の存在が嬉しかった。も

ちろん、タケヒコにしろ、姉にしろ、シンムの話を聞いてくれただろう。それが分かってはいても、彼等と顔を合わせる事が、今のシンムには出来なかったから。

シンム「話聞いてくれてありがとよ」

イヨ「少しは元気が出ましたか？」

シンム「また来ていいかな？」

本当に、心が少しだけすっきりした気がした。

イヨ「お好きな様に。わたし達はどちらにせよここにいますので」

笑顔でイヨは言った。それを見て、シンムも上手く出来たかよくわからなかったが笑顔で返した。

イスズ「イヨちゃんがコクンしたので、特別にシンムさんはここに来て構いません。イヨちゃんに感謝してほしいですぅ」

自信満々に両手を腰に当てながら言ったイスズの言葉の違和感に、すぐシンムは気付いた。

シンム「シンムさん？　おまえこそ、いきなりどうしたんだ？」

イヨ「イスズちゃんは好きな人は名前で、嫌いな人は変な呼び方をするから」

シンム「そうなのか？」

隣のイスズを見ながら言ったイヨから説明を受けて、シンムはイスズにも問うた。

イスズ「むむむむ。イスズちゃんはシンムさんの事別にキューンとなってないですぅ。勘違いしないでください」

シンム「別にそんな事考えてねぇ！」

大声を出した。かつて姉のカグヤ達に出していたのと同種の大声を。出した後、ついこの間まで出していたはずなのに、随分と久しぶりの事に感じられた。

翌日も朝からシンムは、イヨ達の家へと向かった。足取りも、表情も、前日よりは幾分かましになっていた。

神の足音

何時の間に眠りに着いたのか、カグヤは夢を見ていた。その夢は当初、夢とわかりながらもすぐに現実として認識が変わっていく。夢はカグヤでなき者の記憶。それは世界に刻まれた創世の記憶。

夢の中でわたしは台座に座っている。隣には何者かが三人立っている。目の前には荒野らしき大地が無限の広がりを見せる。そこは白と黒だけの世界。そこには何も存在しない。あまりに寂しい世界。台座に座るわたしは心のそこから寂しいと思う。突然大地が一部下がって海が出来た。まだ寂しい。大地が再び寂しさに答える様に木が生まれ、やがて森になる。大地がせり上がって山となる。山が割れ川となる。そこに色が生まれ、見た目は華やかになった。それでも寂しい。大地ではこれ以上寂しさにもう答えられない。あまりにも寂しい世界。人が誰もいない。誰かいてほしい。

そう考えていると、隣に誰か立っていたのを思い出して話しかける。言葉は出ない。振り向く事も出来ない。力がまったく入らず、体が自分の意思に答えてくれない。自分でどうにもならないなら話しかけて欲しい、心からそう思う。

その願いが何者かに通じる。

声「目を覚ませ。いつまで寝ている」

台座に座る者「誰がいるの？」

声「目を覚ませ。目を覚まし、その両目で確認せよ」

台座に座る者「わたし今寝ているの？　だったら、やっぱりこれ夢なんだ……よかったよ」

あらためて夢である事を思い出して、わたしはほっとした。

何処からともなく聞こえる声は続く。

声「目を覚ませ。目を覚ませば寂しさなど消え失せる」

台座に座る者「本当？　だったらすぐに起きるよ。一人はいやだ

から」

声「目を覚ませ。目を覚ませば最早寝る必要すらない」

その言葉を信じて、わたしは必死に「起きろ」と自分に念じ続ける。

目を覚まそうと必死になるカグヤに声が聞こえる。その声は何度も聞いた事のある声。その声は彼女が最も世界に望む者の声。

スクネの声「カグヤ聞こえるか」

カグヤ「スクネ？　今話してるのスクネなの？」

スクネの声「聞こえているなら問題ない」

カグヤ「スクネどこ？　近くに居るの？　遠くにいるなら、すぐに行くから待ってて」

そう言ってから、カグヤはすぐにスクネを探しに行こうとしたが、どういうわけか手足にまったく力が入らず、身動きが取れない。

スクネの声「おれはここにいる。すぐ隣にいる」

カグヤ「ほんと？　隣にいるの、本当にスクネなの？」

スクネの声「本当だ。おれはおまえの隣にいつまでもいる。心配する必要などない」

カグヤ「うスクネがいるのなら寂しくないよ。だからいなくならないでよ」

スクネの声「それなら目を覚ますな。目を開ければ、おれはいなくならねばならない」

カグヤ「目を覚ましたらスクネいなくなるの？」

スクネの声「そうだ……いなくなる」

カグヤ「そんなの嫌だよ。でも、わたしどうしていればいいの？」

何も声が帰って来ない。それでカグヤは不安になった。今までのはただの幻聴だったのかもしれないと。

カグヤ「スクネ？　なんで黙ってるの？　なんか悪い事言った？」

不安が大きくなっていく。隣にいるのなら姿を確認しようと思うが、やはり身体が意思どおりに動かない。

カグヤ「スクネ、目を覚まさないよ。だから……お願いだから、

何でもいいから、答えてよ！」
声は再び答える。その声は二つ、スクネの声と女性の声。それでもカグヤには一つの声しか聞こえない。
スクネの声「まだ寝ていろ。時間はまだ早い」　声「もう少し寝ていなさい。時間はまだあります」
カグヤ「分ったよ。でも寝ている間にどこか別のところに行って、いなくなったりしないでね」
スクネの声「心配ない」　声「心配いりません」
その言葉で不安は消え、カグヤは再び眠りに着いた。眠りに着くと寂しい夢は終わる。

夢の終わりと共に、また自分に何者かが話し掛けている。その声に導かれる様に目を覚ました。
喜びの目覚め。元気よくカグヤは起きた。
カグヤ「スクネ……えっ？」
タケヒコ「カグヤ様だいじょうぶですか。しっかりなさってください」
起き上がってすぐに隣を見ると、心配そうにタケヒコが見守っていた。予想と期待を大きく裏切られたカグヤが目を丸くする。
カグヤ「タケヒコが何で隣にいるの？　何かおかしいよ？」
そう、あまりにも変。なぜか分からないけれども、スクネが隣にいないといけないはずなのに。
タケヒコ「うなされていましたのが、気になったのですが……それにしても、おかしいとはいくら何でも」
苦笑いをしながらタケヒコは言った。
カグヤ「うなされてた？　わたしが？　何で？」
タケヒコ「わたしに聞かれましても、わかりかねますが」
カグヤ「あれ？　たしか、叔父さんの話を聞いてなかったっけ？」
少し頭を動かしてみて記憶が蘇えって来た。確かに伯父であるジョウコウの所で話を聞いていたはずだった。

タケヒコ「ジョウコウ様の話を聞いていらした時に倒れられましたので、そのため、スクネがここに運び込みました」
カグヤ「そうなんだ。叔父さんの話聞いてたら何か頭がぼやけて来たんだよね。その後はよく覚えてなかったけど……倒れちゃったんだ、わたし」
そう言われてもよく分からない。それでも、倒れたのなら仕方ないとカグヤは認識した。それよりも問題なことが一つあったから。
カグヤ「シンムはどうしてる？」
苦しげな表情でタケヒコが答える。
タケヒコ「困惑しておられるようです。とはいえ……この件に関しましては、シンム様が自ら解決されるしかありませんから」
カグヤ「そうだよね……わたしは元々知っていたからいいけど」
タケヒコ「知っておられたのですか？」
驚いたような表情をタケヒコが見せた。そんなタケヒコに、カグヤは少しでも明るい表情でいてほしいと思い、にこりとしながら首を縦に振って答えた。そして、話題を変える。もう一つの大事な話題に。
カグヤ「そうだ！　スクネは何処にいるの？」
タケヒコ「すぐそばにいますよ。スクネ、カグヤ様がお呼びです」
目線をタケヒコが窓際に向ける。
スクネ「目を覚ましたか」
声の聞こえた方を、タケヒコの視線の先に目を向けたら、そこにはスクネがいた。
カグヤ「よかった、いなくなったりしなかったんだ。起きた時はびっくりしたよ」
スクネ「何の事を言っている。寝ぼけているのか」
カグヤ「そうじゃないけど……とにかく、いなくなってないならいいよ」
自分で言っていて、何でそうなのかはよく分からない。それでも、心からそうカグヤは思った。

それを聞いたスクネが困った様な顔を見せる。その顔を見て、カグヤは何とも言えないほど嬉しかった。

そんなスクネがいて、タケヒコがいて、シンムがいる。そんな世界こそ、カグヤが望む世界だったから。

人で無き者1

その日も朝からシンムはイヨ達の所にいた。それが、それだけが日課となっていた。
この間の祭りの日の話になって、タケヒコの料理の話に及ぶと、シンムは姉であるカグヤの料理の話にも飛んだ。
シンム「姉貴、料理すげぇ上手なんだけどさ、面倒臭がって全然作らないんだぜ」
イヨ「カグヤさんはそんなに料理がお上手なのですか？」
目を丸くして驚くイヨ。この場にカグヤがいたなら、怒って実際に料理を作って見せたかも知れないと思いつつ、シンムは会話を続けた。
シンム「ああ、タケヒコが作った美味い方ほどじゃないけどな」
イスズ「むむむむ。ドドドドーンな人のごはんは、難しいからイスズちゃんもう欲しくないですぅ」
不味い方を思い出したのか、イスズが舌を出しながら苦い顔をする。
シンム「タケヒコは料理好きだからよく作ってたけどさ。あいつ、自分に味覚がない事にまったく気付いてねぇし」
イヨ「あの美味しくない方は、もうさすがに……」
やはりイヨも苦い顔をしながら言った。
シンム「タケヒコの不味い方は冗談じゃねぇ。確か、前にその話したら「味はついてます」とか言ってたな。だいたい姉貴が料理覚えたのも、タケヒコの料理から逃げるためだったっけ」
話をしていていると、舌にタケヒコの料理の味を思い出して、シンムも苦い顔をした。確かに、美味しい方は最高だった。それなのに、それを一瞬で忘れさせてしまうほどの味を思い出して。
イヨ「逃げ出したい気持ちはよくわかります」
頷きながらイヨは言った。

シンム「料理を覚えてから一時、姉貴が作ってくれてたっけ。まぁ、結局めったに作らなくなったけどさ」
姉の料理をシンムは思い出す。確かに上手だった。当初、タケヒコに教わっていた時は不安にもなったが。
イヨ「カグヤさんが作られなくなってから、料理はフツヌシさんに戻られたのですか？」
心底心配そうな顔をイヨがしている。
イスズ「イスズちゃんはドドドドーンな人が毎日ごはん作って来たら、消し炭にしますぅ」
本当に火を出しそうな手振りでイスズが言った。
シンム「いや、ちょうど、タケヒコもいろいろと忙しくなってさ。結局は、別の奴が来て作るようになったんだ」
懐かしさを覚えながらシンムは言った。
イヨ「忙しく？　何かあったのですか？」
シンム「妖鬼が定期的に現れて国を襲うようになったからさ。それもナガスネとか言う奴が伊都国に来やがって、終わったけどさ」
きょとんとするイヨの質問に答えながら、ふと、苦々しさがシンムの脳裏に蘇える。あの頃の、己の未熟さと共に。
イヨ「ナガスネさんが、妖鬼を？　何時頃の事でしょうか？」
シンム「一年位前だぜ」
初めて聞いた話しだといわんばかりに、イヨが首を捻っている。
それで、隣のイスズに目を向けると予想だにしない答えが帰って来た。
イスズ「イスズちゃんはそんな人聞いたことありません」
机を両手で叩くと、イスズが自信満々に胸を張る。
シンム「知らねぇ？　じゃあ、鬼は五人いたって聞いたぜ？　他には誰がいたってんだ？」
イスズ「まずイスズちゃん、それとミケヌさんに、タマモさん……あれ？」
親指から順に、指を一本づつ折って数えながら、イスズは名前を

挙げていった。そして、中指を折った所で首をかしげた。
シンム「三人？　二人もたりねぇだろ」
思わず突っ込みを入れたシンムの言葉に、首をかしげて、うなり声を上げながら必死に考えているイスズに、イヨが助け船を出す。
イヨ「ナガスネさんと、もう一人はスクネさんです」
シンム「スクネ、そういやそうだったっけ」
無表情で、自分を殺しに来た日をシンムは思い出す。今考えたら「生きているのが奇跡だな」と。
イヨ「ついこの間は塩土の翁という名前に変えてましたけど」
誰とイヨが言ったのか、シンムにはよく聞こえなかった。頭を抱えていたせいだろうか。それで、今度は二人の会話に耳を澄ました。
イスズ「名前を変えてた？　イヨちゃん誰ですぅ？」
イヨ「誰って……ミケヌさんといっしょに会ってたよ、邪馬一国で。確か二年近く前だったと思うけど」
イスズ「ミケヌさんといっしょに？　誰とですぅ？」
イヨ「塩土の翁さんと」
やっぱりよく聞こえない。仕方がないのでシンムは聞き返した。
シンム「さっき、スクネが名前変えてたとか言ってたけどさ、何て名前だ？」
イヨ「だから塩土の翁さんです」
妙な名前を付けたなと、シンムは内心で思いながら、いつも片膝立てて座っているスクネの顔を思い出す。すると、思わず吹き出しそうになるのを堪えながら、言葉を口にした。
シンム「だからとか言う変な名前、よくスクネの奴付けたな。あいつ、何考えてんだ？」
馬鹿だろうと思い、今度スクネに会った時に、からかってやろうとシンムは決めた。そんなシンムを余所に、イヨが珍しく顔を真っ赤にして声を張り上げる。
イヨ「二人とも何を言っているのですか！　スクネさんの名前は、「だから」でなくて、「塩土の翁」です！」

何を言っているのか「スクネさんの名前は「だから」でなくて」以降が、シンムにはよく聞こえない。同じ様に聞こえなかったのか、イスズがイヨの肩を軽く叩いて尋ねる。

イスズ「イスズちゃん、イヨちゃんの言っている事が分かりません。イスズちゃんでもわかるように言ってほしいですぅ」

シンム「おれもわかんねぇ。何言ってんだ?」

同意して、シンムも質問を繰り返した。二人の目線が、何を言っているのかわからないイヨに集中する。

イヨ「何で、わからないのですか……」

目を点にして、イヨが独り言を言い始めた。話しかけてみても、まったく反応がない。仕方がないので、シンムはイスズと二人で別の会話を始めた。そして、しばらくして。

イヨ「ちょっと、待ってください。やっぱり変です」

いきなり大声をイヨが出した。

イスズ「イヨちゃんどうしたんですぅ。そんな大きな声出さなくても、イスズちゃん聞こえますぅ」

うるさそうに両耳を指で押さえながら、イスズが隣に座るイヨに言った。いつもなら、イヨが一回詫びの言葉を入れそうだが、それもなく、自分の言葉をつづり始める。

イヨ「鬼になった人が、倭国大乱の時に一人亡くなったと聞きました」

突然の大声にすこし驚いたシンムの質問に、イヨが何かを訴える様に、何かを思い出す様に、丁寧に一言一言を口にする。

シンム「一人死んだって……どうかしたのか?」

イヨ「鬼は欠員が出ても、本来は次の方を見つけてすぐに新しく入ってくるのです。その証拠に、三年前に起こった不繭国(ふまこく)壊滅の時に二人亡くなりましたけど、イスズちゃんとミケヌさんが就任しました」

シンム「それがどうしたんだ? 不思議でもなんでも……」

イヨ「ナガスネさんがにわたしが初めて会ったのも三年前なので

すが。問題は倭国大乱の時に死なれた方の中に確かナガ……」
そこまでイヨは口を開くと、それ以上言葉を発さなかった。続きをシンムは催促したが、イヨは続きを語らずに沈黙したままだった。
諦めて、シンムはしばらくの間イスズと二人で話をしていた。

時々頭を抱えながら、一人考え事をするイヨが横目に見える。邪魔をするのも悪いので、シンムは声を掛けたりはせずに、イスズと話を続けた。
シンム「でさ、おれ朝が苦手で、いっつも姉貴が蹴り起こしに……」
言葉の途中で突然立ち上がったイヨに、シンムは羽交い絞めにされた。
イヨ「動かないでください！」
シンム「いきなり、何すんだ？」
イヨ「すみません、シンムさんには、わたし達がここから出るための人質になって貰います」
強い口調だが、何処か弱弱しいイヨの声が、背中越しに聞こえる。
シンム「人質って……だいたいイヨ達は力を封じられてんだろ。しかも、呪の素材になる勾玉もここにはないはずだろ？」
背中に何か付きつけられる。
イヨ「これは鎌風呪（かまいたち）です。あなたの首を一瞬で落とす位の力があります。だから、勝手に動かないでください」
シンム「鎌風呪？　どうやったら、ここにそんなものがあるってんだ。呪に使う石なんかあるわけねぇだろ」
イヨ「わたしにも封印呪を掛けられたので。それを消去して、書き換えました」
シンム「消去？　書き換え？　そんな事出来るなんて聞いた事ねぇ」
イヨ「わたしにしか出来ないと、お母様に言われました。本当は転移呪が作れれば、このようなことしなくてもいいのですが……わ

たしには作れませんので」
シンム「本気で言ってんのか？」
なぜかわからないが、嘘であって欲しいという願いを抱きつつ、シンムはそう言った。答えは願いを裏切ったが。
イヨ「本気です。イスズちゃん、こっちに来て、封印呪を消去するから」
イスズ「はいですぅ。まかせてください。すぐに行きますぅ」
手を上げてから元気よく返事をして、イスズが移動する。
イヨ「シンムさん、お願いですから動かないでください。動くと、本当に使います」
背中に当てられた呪を、イヨに強く押しつけられる。
刃の刺さっていない柄をイヨは懐から取り出す。それをイスズの首に掛けられた呪に当てる、瞬時に呪はただの石となった。
イスズ「イヨちゃんすごいですぅ。こんな事出来るなんて、イスズちゃん知りませんでした」
封印呪を外されたイスズが無邪気に走り回って喜ぶ。
イヨ「シンムさんも立ち上がってください。すぐ外に出ます」
口調は柔らかい。まるで、外に遊びに行きましょうとでも誘っているかのように。だが現実は、呪を背中に押し付け、イヨは脅迫している。
シンム「おれの首を落とすんなら、早く落とせばいいだろ！」
得も言われぬ怒りと共に、シンムはそう言った。本心からの思い。
イヨ「立ち上がってください」
呪を持つ手は震え、イヨの言葉には何処か痛々しさがあった。それに、怒りに身を焦がしているシンムは気付かない。
シンム「勝手にしろって言ってんだろ。どうせ今さら……どうしろってんだ」
腕を組んでシンムは動かない。絶対に動かないという意志を全身で示す。やけくそ気味だが、本心から死んでもいいと思っていたから。

イヨ「それなら……イスズちゃん、この家、燃やせる？」
イスズ「燃やすのは出来ますぅ。でも火事になったら、イスズちゃん達も燃えてしまいますぅ」
怖い話をしているのだが、それをイスズの子供のような口調の言葉がまったく感じさせない。それでも、イスズは女王ヒミコによって印が彫られた鬼の一人。その力は常人のそれとは、一線を画している。　その力の前では、こんな家など燃え尽きてしまうだろう。
やけくそ気味にシンムは怒鳴る。内心で「やるなら勝手にやれよ」と思いながら。
シンム「燃やしたって巻き込まれんだけだろ！」
イヨ「あなたが座ったままでいる気でしたら……それを利用させていただきます」
シンム「利用、おれを？　どうせ、それが最初から目的だったんだろ。好きにしろ！」
イヨ「外の監視の方々があなたを助けに来たところを……全滅させます」
辛そうで、それでいて真実味を持った口調でイヨは言った。
シンム「そんな事出来んわけが……」
イヨ「イスズちゃんなら簡単に出来ます」
火事の中で倒れて行く兵達の姿が、シンムの脳裏に浮かんだ。
イスズ「まかせてほしいですぅ。イスズちゃん頑張りますぅ」
腕を振り回しながら、イスズはやる気に満ちた表情で言った。
シンム「仮にそんな事したって、タケヒコが来て、一瞬におまえ等の首が飛ぶだけだぜ」
想像した際に出た結果がそれだった。それをシンムは強い声で脅迫気味に、背後のイヨに言った。
イヨ「外にさえ出れば無差別攻撃で……一時的に混乱を起こさせて、飛行呪で逃げれば終わりです」
呪を押しつける手が震え、イヨの顔は今にも泣きそうになっている事に、シンムは気付かない。

シンム「そんな事出来るわけ……」
イヨ「出来ます。呪は使用される前の物さえ手に入れれば、わたしが作るか、書き換えるかします。その少しの間だけ、イスズちゃんが何とかしてくれれば」
シンム「おまえ本気で無差別攻撃なんかやる気か」
イヨ「します。しないとお義母様の下へいけないのならば」
言葉に痛々しさがある事に、やっとでシンムは気付いた。それが余計にイヨの本気を表している様だった。自分の命に対しては投げやりになっている。それでも、自分以外の命が少しでも危険に去らされる事を、自らに納得させることは、シンムには出来なかった。だから、無言で立ち上がった。

黙ってシンムは歩いた。背後にはイヨが呪を背中に当てている。その後ろには、イスズも続いていた。
外に出ると衛兵達がすぐに駆けつけて来た。
背後のイヨ達を見て、剣を抜こうとする女士官。
イヨ「動かないでください。動くと、この人を殺します」
背後から聞こえるイヨの声に、先程あった痛々しさも、迷いの色もない。
苦々しい表情を見せる女士官。
イヨ「イスズちゃん、ちょっとでも動いた人がいたら……その人、燃やして」
イスズ「燃やすのだったら、イスズちゃんに任せなさい。動かなくても出来ますぅ」
後ろを歩いていたイスズが前に飛び出した。その動きに呼応するかのように、衛兵達も後ずさりする。
シンム「約束がちげぇだろ」
身体を燃やされる兵士達の姿が脳裏に浮かんで、シンムは声を上げた。
イヨ「あなたは黙っていてください。イスズちゃん、動いた時だ

けでいいから」
すぐにでも実行に移しそうな勢いのイスズを、イヨが制止したその時だった。一人の兵士が、女士官の制止を無視して飛び出して来た。
兵士「呪などないはず。鬼も、封印呪で力を封じられているはず。誰が騙されるか」
飛び出して来たへ死にイヨが指を差す。
イヨ「イスズちゃん、あの人の足下燃やして」
イスズ「わかりましたですぅ」
飛び出して来た兵士の足元が燃え上がる。その光景を見た女士官が、驚愕の表情を浮かべる。
イヨ「これでわかったはずです。わたし達が本気だと言う事が。そこを通していただけますか？」
燃え上がる炎を見て、一歩後退する兵士達に向かって、イヨは言った。
その時だった。遠くから大きな音が響き、建物が瓦解した。誰もが、何が起こったのか理解出来ずに混乱が広がる。ただ一人シンムには、その原因が何となく理解出来た。そんな事が出来る者など、他に思い浮かばなかったから。
シンム「今のはタケヒコ？　誰かと戦ってんのか？　まさか……タマモとか言う奴が来てんのか！」
思わず声を出したシンムの言葉に、イヨが反応する。
イヨ「タマモさんが？　どちらにせよ好機のようです」
この場にいる誰よりも早く混乱から復帰したイヨが、誰よりも早く行動に移る。
イヨ「イスズちゃん目を閉じて、耳を塞いで！」
再び大きな音が同じ方向から鳴り響く。今度は先程よりも手前から鳴り響いた。混乱が加速して、兵士達の注意が完全に音の方へと向けられる。
呆然と、シンムもその方向を眺めていた。気付いた時には押し倒

され掛けている最中だった。倒されながらもシンムは、イヨがイスズに言ったように目を閉じ、耳を塞いだ。

鎌足呪とイヨが偽っていた催眠呪が光り出す。激しい光と共に、催眠音が流れる。同時にイヨはイスズの手を取って走り出した。

イヨ「イスズちゃん走って！」

シンム「待ちやがれ！　逃してたまるか！」

催眠に掛からなかったシンムは起き上り、慌てて二人を追い掛けた。

悲鳴を聞いてタケヒコが駆けつけた時には、すでに数十人の命が散っていた。

血だまりの中央に、殺気を放つ老人が一人立っている。

タケヒコ「あなたは何者です」

塩土の翁「塩土の翁という」

タケヒコ「こんな愚かなことをして、許されると思っているのですか！」

老人は、塩土の翁と名乗った男は何も答えない。代わりにぎょろりと目を動かして、殺気を放つ。その動作を見て、その殺気を感じて、不思議な既視感をタケヒコは覚える。何処かで会った事がある気がした。

放つ殺気を徐々に増やしながら、塩土の翁は口元を緩めた。

タケヒコ「わたしと戦う気ですか？　なぜ戦おうとするのか分かりかねますが、元より、許す気はありません」

手が動いた。一瞬でそれをタケヒコは見切り、指先に連動する糸を避けながら翁の懐に入る。天之羽張を横に一閃する。その一瞬で終わるはずだった。何人も避けられないはずの速度で一閃したために。

そして、避けられる以上に考えられない光景を、タケヒコは目の当たりにした。

タケヒコ「防いだ！」

不可避以前に、物質透過の力によって防ぐ事が不可能なはずの一撃は、網状に組まれた糸によって防がれていた。

タケヒコ「剣が透過せずに……なぜ？」

疑問の答えがタケヒコの頭によぎる。

タケヒコ「防御など不可能なはずです。それが唯一可能なのは……まさか、天露之糸ですか！」

無言で塩土の翁は殺気を放ち続けている。その顔をタケヒコは注視する。そして、記憶の中に似た存在を発見した。年を取り過ぎているが、容姿にはかつての面影がある。

タケヒコ「セイガ！」

老人は、かつての友は、ただ殺気を放つだけで何も答えない。

タケヒコ「だとしたら、なぜあなた方が二人、別々に存在するのです」

やはり塩土の翁と名乗った老人は、何も答えない。

かつて、心からそれを望んだ日々があった。彼女がいて、カグヤがいて、友とその弟が側にいた。幸福と言って良かった日々。その日々の崩壊は、それも原因の一つだったのだから。

だけど、友は何も答えない。代わりにぎょろりと目を動かす。その視線を追うと狗奴国の兵達が駆けつけて来たのが見える。よく訓練されているのだろう、兵達がタケヒコの予想よりも遥かに早く集まって来た。それだけに彼等は運が悪かった。

タケヒコ「わたしに任せて離れてください！　わたし達の戦いに巻き込まれます」

駆けつけて来た兵達に、タケヒコの言葉に耳を貸した様子は見えない。それでも、これから起こる可能性を考え、タケヒコはそうならないためにも、言うしかなかった。

駆けつけて来た兵達は、塩土の翁とタケヒコを囲むように布陣を取った。それを確認した塩土の翁が、指先で天露之糸（あまつゆのいと）を生き物の様に動かし始める。

天之羽張（あまのはばしり）に針が刺さっていないのを確認してから、タケヒコも身構える。

無表情な塩土の翁が腕を振り下ろす。腕の動きに合わせるように、天露之糸（あまつゆのいと）が縦に波を立てながら、タケヒコに襲い掛かる。その糸を天之羽張（あまのはばしり）で防ごうとした瞬間、糸が先端から無数に裂かれて、タケヒコに襲い掛かる。その糸の動き一つ一つに目をやり、タケヒコは反応する。一本ずつ剣で切り裂き、間に合わない場合は、自らの体

で致命傷を避けながら受け続ける。
攻撃が止んだ頃には、タケヒコは傷だらけになっていた。
タケヒコ「あなたは本気で皆殺しに……」
今起こった事は、すべて刹那の瞬間にすぎなかった。だから、何が起こったかも理解出来ないはずの兵達が、囲みを小さくして、傷付いたタケヒコを守るように背にする。兵達は間違いなく一流といってよい動きだった。
やりきれない思いが心に圧し掛かる。本当は、恐怖で逃げ出して欲しかったから。
兵士「タケヒコ様を援護しろ！」
隊長とおぼしき者の合図によって、兵達は一斉に塩土の翁に襲いかかった。
無常にも、塩土の翁が腕を振り下ろされる。必死にタケヒコは口を動かして制止したが、言葉は兵達の雄たけびにかき消される。
圧倒的な塩土の翁の前に、兵達は一人残らず死に絶えた。
タケヒコ「セイガ！　本当にあなたならば、殺さずともよかったはずです。殺人が目的ではなかったのでしょう」
息絶えた兵達を見ると、タケヒコは胸が痛む。目の前の男を、四魂の一人ツクヨ　セイガを相手にすれば、助ける事が不可能に近い事は、始めから分かっていたはずなのに。
無言の塩土の翁をタケヒコは睨みつけた。そして、息絶えた兵達の一人から剣を譲り受け、強く握り締める。
タケヒコ「こうなった以上、あなたにも代償を支払っていただきます」
凍てつく殺気を放ち、タケヒコを中心に円を描く様に動き始めた塩土の翁を睨みつけた。目の前の老人を、かつての友を、倒す事を心に誓いながら。
招かれざる客人がカグヤの所に訪れた。窓際で膝を立てて座して

いたスクネは、臨戦態勢に入る。
カグヤ「あなた……初めて見るけど、誰なの？」
恐る恐るカグヤが来客に声をかける。
ヒミコ「確かに、今世（こんせ）では所見であったな、失礼した。邪馬台国の女王ヒミコと呼ばれている」
軽く会釈をしながら客人は名乗った。優雅という言葉が似合う仕草。その挙動一つ一つが品に溢れていた。
警戒を強め、スクネは天之壽矛（あまのじゅぼこ）を握る。
カグヤ「あなたがヒミコなの？」
スクネ「カグヤ、下がっていろ。おれが相手する」
一瞬で二人の間に、スクネは割り込んだ。
ヒミコ「戦いに来た訳ではない。カグヤと話し合いに来た」
天之壽矛（あまのじゅぼこ）に目をやりながらも、動揺する所か、ヒミコは思わず吸い込まれそうな笑顔を浮かべる。
カグヤ「話し合い？　わたしと？」
首をかしげながら、カグヤが興味といぶかしさの交じった眼をヒミコに向ける。
ヒミコ「戦いを、悲劇を、いい加減に終わらせたくはないか？」
カグヤ「悲劇を終わらせるって……でも、どうやって？」
ヒミコ「神の力でこの世界から悲劇そのものをなくす。そのために手伝って欲しいことがある」
カグヤ「神様の力？　わたしに手伝えること？」
興味の色を濃くしながら、カグヤがヒミコを見つめる。
スクネ「それ以上口を開くな、ヒミコ」
興味を持ち始めたカグヤを御するのは無理と判断して、スクネはこれ以上の会話を止める為、天之壽矛（あまのじゅぼこ）をヒミコの胸を突き刺した。
手ごたえはない。目の前のヒミコは幻体にすぎなかった。
ヒミコ「何の備えもなく、スクネ、そなたの前に一人で現れるほど、わらわは自惚れておらぬ。この間も言ったが、そなたと正面から戦って勝てるとは、始めから思っておらぬゆえな」

天之壽矛（あまのじゅぼこ）で貫いたヒミコの身体が揺らめく。その身体を見たカグヤが部屋の中をきょろきょろと見回す。

カグヤ「幻体？　でも、生の声が聞こえてるよね？」

ヒミコ「カグヤ、そなたの想像通りこの部屋の中にいる。もっとも、正確な場所は教えられぬが」

気配を探ると、確かに、カグヤ以外にも誰か存在した。それでも見つける事が出来ない。この狭い部屋の中で、ヒミコは気配を消す所か、強くしていたためカグヤと気配が交じり、正確に特定出来なかった。

仕方なく、細心の注意を払ってヒミコを探しながら会話をする。

スクネ「何をしに来た」

ヒミコ「先程、話し会いに来たと言ったであろう？　聞いておらなかったのか？」

スクネ「戯言（たわごと）はいい。なぜ、話し会いに神が出てくる」

ヒミコ「それも言ったはず。神の力で戦いを終わらせると」

スクネ「まだ言うか」

天之壽矛（あまのじゅぼこ）を思わず振り回したが、ヒミコの身体は揺らめくのみで、相変わらず手ごたえはない。

カグヤ「きみは、少し黙ってて！」

今度はカグヤが間に割って入る。

カグヤ「神様の力でどうなるの？」

ヒミコ「神がこの世界に降臨し、人々を桃源郷へ導く。桃源郷には争いも、いがみあいもない。あるのは幸福のみ」

カグヤ「それが神様？」

瞳の色がカグヤから消える。

スクネ「聞くな、カグヤ。桃源郷など存在しない。こいつの言っている事はすべてでたらめだ」

叫ぶスクネの声が次第に小さくなっていく。大声で叫んでいるはずなのに。

ヒミコ「神はこの世界の創造者。桃源郷は」

虚ろな表情をしたカグヤが、ヒミコの言葉に続いていく。

カグヤ「新たな世界」

二人は抑揚もなく、たんたんと言葉を発していく。

ヒミコ「五百之御統之珠の目覚めと、四魂の出現が神代の訪れを告げる」

カグヤ「神代は……四魂から開放された力が器を満たす事で始まる」

ヒミコ「神代において、神の器が神を向かえる準備を始める。器に反応して、真布津鏡が輝きを放ち始める」

カグヤ「神代は……四魂の存在が、世界の理が、器の破壊を許さない」

ヒミコ「神の器が夢を見る。その夢の中で、人の知識の代わりに神の知識を得る。人の経験の代わりに神の力を得る。人の感情の代わりに神の愛を得る。神の器が人の生を終えることによって、天之岩戸が開く」

祈るような思いで、スクナが二人の会話に言葉を挟み込む

スクネ「何も答えるな。すべてヒミコの与太話だ」

声を振り絞ってスクネは言った。その声は最早、音を立てていなかった。

カグヤ「……天之岩戸」

虚ろな表情のカグヤが浮遊を始め、ヒミコとの会話が続く。

ヒミコ「問う。天之岩戸はどうしたら開く?」

カグヤ「五百之御統之珠と真布津鏡で岩戸を開く」

浮遊したカグヤと同じ目線まで、ヒミコも浮上して行く。

スクネ「姿を見せろ、ヒミコ」

声が届かない事を悟り、スクネは天之壽矛を縦横無尽に振るう。

それも次第に制限されていくのを感じながら。

そんなスクネをあざ笑うかのように、二人の会話は続く。

ヒミコ「問う。天之岩戸とは?」

カグヤ「……私自身の心」

ヒミコ「問う。天之岩戸（あまのいわど）が開くとどうなる？」
カグヤ「……わたしが目覚める」
ヒミコ「問う。そちは何者？」
カグヤ「わたしは大いなる者。世界の創造者にして、世界を終焉に導く者。すなわち……」
浮上したカグヤが言葉を続けようとした時だった。
虚ろなカグヤの姿に、同じ顔をしながら、髪の毛の色と、瞳の色だけが違うカグヤの姿が重なる。血の涙を流しながら微笑んでいるカグヤの姿が。
スクネ「やめろ！　また……今世（こんせ）でも、おれにおまえを殺させる気か」
最早、スクネは指一本すら動かせない。声は音にならず、誰にも伝わらない。だから、これは心の叫び。
心の叫びがカグヤに通じたのか、瞳に色が戻る。
カグヤ「わたしはシンムの姉で、トヨウカグヤに決まってるよ」
そう言ったカグヤが気を失ったのか、横に倒れながら落ちて来る。
あわててスクネは受け止めた。
スクネ「カグヤと言ったのか……今」
その瞬間、何が起こったのか理解出来ず、スクネは受け止めたカグヤを強く抱きしめながら、ヒミコを睨みつける。
スクネ「ヒミコ、カグヤに何をした」
意外にもカグヤはすぐに目覚めた。そして、状況を理解していないのか、頬を赤らめたカグヤが、スクネの胸を叩きまわす。
ヒミコ「今世（こんせ）では、仲良くするがよい」
そう言って、ヒミコは慈愛に満ちた笑顔を一瞬だけ見せて消えた。

今までヒミコが存在した方向を睨みながら、スクネは横にカグヤを下ろした。
カグヤ「まったく寝込みを襲うなんて、きみは……」
顔を赤くしながらカグヤは口を動かしていた。

スクネ「ヒミコはいったい何をしに来た」
カグヤ「ヒミコ？　邪馬台国の女王の？　そのヒミコがどうかしたの」
その言葉を聞いて、驚いたスクネがあらためて問い返したが、カグヤは完全にヒミコの事を忘れていた。

落ち着きを取り戻すためにも、スクネは呼吸を整えなおした。それで気付いた。家全体が呪の力で覆われ、幻覚を見させられていた事に。
スクネ「完璧に隔離されていたか。どおりでヒミコがどこから話しかけて来たか分からないはずだ」
カグヤ「隔離？」
状況が呑み込めないのか、カグヤが目を丸くしている。
スクネ「一応聞いておく、おまえはカグヤだな」
カグヤ「そんなの当たり前だよ。他にわたしがいたら、たいへんだよ」
声を大にしながらカグヤが抗議する。
スクネ「……まったくだ、二人も必要ない」
カグヤ「今、わたしが考えているのと違う意味で笑ったでしょう、きみ」
声も、仕草も、すべてカグヤそのもの。それを見て、スクネはもう一度苦笑した。
スクネ「捕まってろ、破壊する」
左手でカグヤを抱きかかえると、右手に天之壽矛（あまのじゅぼこ）を握りしめて、縦横無尽に空間を切り裂く。激しい音と共に、空間が切り裂かれる。家が一瞬で瓦礫と化す。

青空の下でカグヤは唖然（あぜん）とした顔をしていた。
カグヤ「なんで……いきなり家壊したの？」
スクネ「呪を切り裂いただけだ」

カグヤ「呪？　なんの事言ってるの？」
スクネ「おそらく、外で今何か起こっているのだろう。家の中に、幻影呪と催眠呪で隔離されていた」
目をカグヤから逸らして、少し離れた場所に目を向ける。殺気と殺気がぶつかり合う方を。
カグヤ「それなら、理由を先に言ってくれたら……わたしが呪を解除したのに」
スクネ「……ヒミコは向こうの力と力が衝突している所に行ったみたいだな。おれ達も行くぞ」
カグヤ「ごまかそうとしているでしょ、きみ」
呆れ気味にカグヤは言った。その後、更にカグヤが何か言おうとしたが止めた様だ。見覚えのある人物が目に入ったために。

少し離れた所を三人が通り過ぎていった。
カグヤ「ちょっと待って……あれ、イヨ達だよね？」
スクネ「そのようだな。どうする、連れてくるか」
少し離れたところを、必死の形相でイヨとイズズの二人が駆け抜けていった。
カグヤ「別にいいよ、急いでいる見たいだし」
二人の後を追いかけるようにシンムも駆けて行く。
スクネ「あいつも何をしている」
カグヤ「やっぱ、なんか様子が変。わたし、あっちに行っていい？」
気配を探る。少なくとも、スクネに取って脅威になりそうなほどの気配はなかった。むしろ、スクネがこれから行こうとしている場所の方が危険ですらあった。だから……
スクネ「了解した。他にも誰かいるかもしれん、気をつけろ」
そう言った瞬間、本気で驚いた表情をカグヤが見せる。なぜ驚いているのかスクネには理解できず、理由を聞いた。
スクネ「どうした」

カグヤ「きみに「気をつけろ」なんて言われると思わなかったよ」
スクネ「勝手にしろ」
カグヤ「うそうそ、ありがと。うん、きみも気をつけてね」
三人の後を追ってカグヤが駆けていく。その後ろ姿を見てからスクネは動き始めた。殺気のぶつかり合う場所目指して。

人で無き者3

身構えるタケヒコを中心に円を描きながら、塩土の翁が動き続ける。生き物の様に、複雑な動きを続ける天露之糸。その攻撃はタケヒコからしたら単調そのものだが、天露之糸の能力が問題だった天之羽張といえども、天露之糸の先端に付いた針を打ち込まれれば、自らの剣が自らに襲い掛かる。ゆえに、タケヒコは先端に付いた針に注意しながら、左手に握った天之羽張で防ぎ、針自体は細かな動きで避け続ける。

右手には、倒れた兵士達が持っていた武器を握っている。ある者は剣を、ある者は矛を、ある者は弓を握って倒れている。それらをタケヒコは投擲武器として使う。次々に襲い掛かる天露之糸を防ぎ、避けながら、好機を見つけては、右手に握った武器を塩土の翁目掛けて投げつける。それは糸と糸の攻撃の間隙を狙う。投擲した武器を避けるために、塩土の翁が動きを一瞬だけ止める。投擲した武器が塩土の翁の横を通り抜ける。その一瞬をタケヒコは見逃さず、塩土の翁に接近する。すでに、右手には次の新たな武器が握られている。右手に持った武器を塩土の翁の眉間に振り下ろす。後転してそれをかわすと塩土の翁は再び円運動を始める。

戦いは完全に膠着していた。

タケヒコ「スクネ、何をしているのです。早く来てください」

膠着する事は、目の前の男の名を悟った時から予想出来た。だから、タケヒコは一刻も早く膠着する様に仕向けた。打開するための切り札は、こちらが握っているのだから。

円運動が加速する。自らへの攻撃が更に熾烈になる事をタケヒコは覚悟する。その攻撃に備えて身構えた瞬間だった。

突然、塩土の翁の動きが完全に止まる。理由を察したタケヒコは、身構えたまま動きが凍りつく。音速で動く塩土の翁の円の間を、一人の女性が平然と入って来たのだった。

その姿を見て、二人とも動きを止めていた。彼女はあの頃のように悠然と、慈愛に満ちた表情で塩土の翁に語り掛ける。

ヒミコ「感謝いたします。どうやら、こちらの思い通りに行きそうです」

何も塩土の翁は答えない。それなのにヒミコは語り続ける。

ヒミコ「貴方が針を打ち込んでいらっしゃるのでしょう？　それを使いましょう」

まるで二人は本当に会話をしているかのようだった。相変わらず塩土の翁は無言のままなのに。

ヒミコ「そのためにも……そろそろ、一旦お暇（いとま）しましょう」

不覚にも、タケヒコは一歩も動けなかった。目の前に、夢にまで見た、ヤマト自身がいたために。

凍りついたタケヒコの横を突風が横切る。風を受けてタケヒコは我を取り戻す。

風は矛を握り絞め、塩土の翁に襲い掛かった。

スクネ「逃すか！」

不意を突いたスクネの一撃が、塩土の翁の左肩に突き刺さる。あと少し力を入れていたら、左肩を貫き、切り裂いていたであろう一撃は、天之壽矛（あまのふぼこ）に絡みついた天露之糸（あまつゆのいと）によって遮られていた。

塩土の翁「少しは、まともな不意打ちが出来るようになったな、スクナ」

無言だった塩土の翁が名乗って以来、初めて口を開いた。

スクネ「黙れ」

天之壽矛（あまのじゅぼこ）を消し、絡みついた天露之糸（あまつゆのいと）からスクネが抜ける。抜けるとスクネはすぐさま天之壽矛（あまのじゅぼこ）を具現化させる。狙いは翁の左肩。空間歪曲の力で、背後から死角を付いて狙った。

その一撃を、塩土の翁はまたも天露之糸（あまつゆのいと）で防いだ。

塩土の翁「負傷した場所を狙うのは良いが……単調すぎる、もう少し考えた方がいい、スクナ」

スクネ「黙れと言っている」
塩土の翁「名を変えて何がしたい」
スクネ「それはおまえの方だ」
スクネ「セイガ」塩土の翁「スクナ」
二人は同時にお互いの名を叫んだ。睨み合う二人、一色即発の状況は瞬時に回避される。
呆然とした状況から立ち直ったタケヒコが、塩土の翁の首筋に肘を落とす。肘を落とされた翁は倒れ掛ける。
タケヒコ「この状況で一人に集中するとは……油断しましたね」
いち早く気付いたヒミコが、塩土の翁の身体を支えている。
ヒミコ「さすがタケヒコ……一瞬の隙すら許さぬ。だが、なぜ剣でなく肘を使う」
確かにとは思う。それでもタケヒコにその考えは浮かばなかった。
ヒミコ「タケヒコは優しすぎる。それでは……」
そう言ったヒミコの眼が、何処か悲しげに見えた。
タケヒコ「これで、ゆっくりと話が出来ます。あなたは二人にいったい何をしたのです？　どうしてセイガとスクナの両方が存在するのです」
ヒミコ「そなたに話すことなど、今はまだ何もない」
冷徹な眼をして、突き放す様にヒミコは言った。
タケヒコ「わたし達二人が同じ場にいるこの状況でなら、無理やり聞くことも出来ますが？」
言葉に真実味を帯びさせるため、タケヒコが天之羽張（あまのはばしり）を構えて殺気を放つ。
ヒミコ「果たしてそれが可能か……のう、タケハヤスクネ」
その殺気を無視して、ヒミコはスクネの方に眼を向けた。黒いヒミコの瞳が、一瞬だけ紫色に輝く。それに、タケヒコは角度の関係から気付かない。
その瞳に反応するように、スクネの瞳に色がなくなる。
ヒミコ「勅命をくだす。わらわのために、しばし時間をかせげ、

四魂（しこん）」

タケヒコ「勅命？　スクネが聞くとでも……」

問いが終わるよりも早く、タケヒコは動く事になった。もし動かなければ、天之壽矛（あまのじゅぼこ）の餌食となっていたために。

殺気を放ちながら、スクネが天之壽矛（あまのじゅぼこ）をタケヒコに向けている。

タケヒコ「スクネ、何を！」

驚いたタケヒコの言葉が終わるよりも早く、頭部目掛けて天之壽矛（あまのじゅぼこ）が振るわれる。それを、タケヒコが咄嗟に天之羽張（あまのはばしり）で払いのける。

更なる攻撃を繰り出そうとしたスクネは、手に握った天之壽矛（あまのじゅぼこ）を落とし、頭を抱えて倒れ込んだ。

倒れ込んだスクネの瞳には色が戻っていた

ヒミコ「わらわでは、一瞬が限界。とはいえ……それでも十分すぎるか」

何か思う所があるのか、倒れ込んだスクネを、ヒミコは複雑な表情で見ていた。

タケヒコ「ヒミコ！　スクネに何をしたのです。なぜ、あなたの言う事を聞くのです」

倒れ込んだスクネと、それを見つめるヒミコを、交互にタケヒコは見合わせている。

ヒミコ「しかし、使うつもりはなかった。タケヒコに、この場で会ってしまった事といい、さすがに全部が全部は、うまくはいかぬな」

懐からヒミコが呪を取りだす。

タケヒコ「待ちなさい、逃げられるとでも」

転移呪を使い、この場から去ろうとするヒミコに、タケヒコが阻止しようと、襲いかかろうとした瞬間だった。

辺りにカグヤの悲鳴が響き渡ったのは。

悲鳴を聞いたスクネが、頭を押さえながら、這（は）いつくばって、必死に立ち上がろうと始める。顔色はすぐれず、身体を支える両手は

震え、今にも崩れ落ちそうになりながら。
ヒミコ「スクネ、わらわの所に来い。場所は分かっておるであろう」
起き上がろうと這いつくばるスクネに、ヒミコは毅然（きぜん）とした態度で言った。
タケヒコ「そうはさせません、ここで終わらせます。鏡を、わたしに貸して下さい」
真布津鏡（まふつかがみ）を受け取ろうと手を差し出したタケヒコに、ふらつきながらも立ち上がったスクネが首を横に振る。
スクネ「カグヤが先だ」
転移呪が輝きを放ち始める。
ヒミコ「よいな、必ず来い」
転移呪の輝きがヒミコと塩土の翁を包み込み、二人は消えた。呆然としながらタケヒコは、二人の消えた一点を見つめていた。
立ち上がったスクネが頭を振りながら詰め寄り、倒れそうになりながらも、タケヒコの両肩を掴む。
スクネ「早く……行くぞ。カグヤの悲鳴が聞こえたはずだ」
掴んだ両手を振り解き、怒りの表情を浮かべるタケヒコが、倒れかかるスクネの衣服の胸元を強く握り締めて睨みつける。
タケヒコ「あなたに聞きたいことが、山ほどあります」
スクネ「話しはあとだ、手遅れになる前に急げ」
タケヒコ「スクネ、なぜ鏡を渡さなかったのです。なぜわたしに攻撃を」
スクネ「攻撃はわからない。とにかく、今は急ぐしかない、カグヤに何かがあったら……わかるはずだ」
足に力は戻ってもスクネはタケヒコの手を力ずくでは振りほどかない。それに気付いたのか、そうでないのか、タケヒコの手から力が抜ける。
タケヒコ「まさか、再びあれの力が暴走すると言うのですか……あの日の様に」

スクネ「暴走ならまだましだ。今は神代（かむよ）だと忘れたのか」
タケヒコ「あれが一時的に目覚める可能性も……わかりました。仕方ありません、今は急ぎましょう。但し、鏡を今すぐわたしに渡しなさい！」
状　況を理解しながらも、怒りが収まらないのだろう。強い口調でタケヒコは言った。
スクネ「了解した、受け取れ」
鏡を渡すと、タケヒコがすぐに動き出す、それにスクネも続く。

辺りには誰一人いない。例え誰かがいたとしても、近づいて来る可能性の非常に低い場所。崩壊した建物の瓦礫の上で、イヨは立ち止まった。
後ろから追い掛けていたシンムも追い付き、立ち止まる。
イスズ「イヨちゃん、どうしたですぅ？」
立ち止まったイヨに、イスズが不思議そうに尋ねた。
イヨ「イスズちゃん……少しだけ待って」
追い付いたシンムを、イヨは大きな瞳で見つめている。
シンム「てめぇ、なんで止まってんだ！　馬鹿にしてんのか」
立ち止まり、シンムをしっかりと見据えるイヨに腹が立った。怯えも何もない、先程まで話をしていた時と同様の眼を見て、余計にシンムは腹が立った。
イスズ「シンムさんはさっき「待て」って言ったですぅ。間違わないでください」
シンム「間違いとか、そんなんじゃねぇ！」
横からイスズが口を挟んで来たが、シンムはイヨを睨みながら、そちらには目を向けない。
悲しそうで、それでいて強い意志を秘めた眼を、イヨは返してくる。
イヨ「シンムさん……ひとつだけ、どうしても聞きたい事があり

ます」
シンム「なんだよ」
思わず目をシンムは逸らす。目を見合わせる事が出来ずに逸らしたのだが、それに気付かれるのが嫌で、シンムはそっけなく答えた。
大きな瞳を瞬き一つせず向けながら、イヨは言葉を口にする。
イヨ「あなた方が起こした反乱の事です。どうしても、なぜあなた方が、そんな事を起こしたのかがわかりません」
シンム「反乱って……ふざけんな。そっちが勝手に攻めて来たんだろ」
瓦礫の破片を強く蹴飛ばした。怒りを何かにぶつけたくて。
蹴られて跳んだ瓦礫の破片を目で追ったイヨが、表情をわずかに歪める。大きな瞳に、何処か悲しそうな色をにじませながら、イヨは話を続ける。
イヨ「被害を最小限で留める為と聞いています」
シンム「本気であれだけのことやっといて、そんなこと言ってんのか！」
イヨ「確かに、結果的に、伊都国に対してはやりすぎでした……」
シンム「あれが、あの地獄が……やりすぎで済むと思ってんのか！　何人、死んだと思ってんだ！」
あの日を、伊都国が絶望に沈んだ日を、シンムは忘れた事はない。
あの日、何も出来なかった自分に、腹が立たなかった日もない。
その思いが、シンムの心に溢れて来た。
イヨ「それについては……わたしからは言葉もありません」
悲しみと苦しみの色を、イヨの瞳が強くする。
イスズ「むむむ。イヨちゃんをこれ以上怒るなら、イスズちゃんがぜったいに許さないですぅ！」
頬をふくらませて、イスズが腕を振り回す。
イヨ「怒られてないから、心配しないでイスズちゃん」
イスズ「わかったですぅ」
明らかな作り笑いではあったが、イヨの笑顔を見てイスズは引い

た。頬をふくらませて、うつむき加減に。
作り笑いを止めたイヨの表情が引き締まる。
イヨ「シンムさん達は、不繭国(ふまこく)が壊滅した事は御存知ですか？」
そう言ったイヨの大きな瞳が、嘘を許さないと訴えかけて来た。
シンム「それは聞いたけどよ。てめぇ等がやったんだろ」
イヨ「とんでもありません。お義母(かあ)様が行かれた時には、妖鬼の大群が好き放題暴れ回っていたと」
シンム「化け物共を、おれ等が送り込んだっていうのか！」
訳のわからない言い掛かりに腹が立った。まして、その言い掛かりで伊都国を地獄にされたならと思うと、シンムの心に、我を忘れそうな程の怒りが襲う。
イヨ「当然、そう考えます。いえ、わたしもそう思っていました」
シンム「ふざけんな。だいたい、誰が妖鬼とか言う化け物共を生み出すっていうんだ！」
イヨ「当初は、カグヤさんが生み出して送り込んだと思っていましたが……」
シンム「そんなわけねぇだろ！」
大声で怒鳴った。目の前のイヨは、邪馬台国は、姉であるカグヤが全て悪いとでも言いたいのか、言い掛かりにも程がある。怒りで拳が動く。
拳は結局、イヨの次の言葉で止まった。
イヨ「わかっています。ここに来て、あなた方がそのような事をされそうにないことは、十分に理解出来たつもりです」
シンム「なら、誰がやったってんだ」
拳を引っ込め、歯を食いしばり、大声を無理やり引っ込めて、シンムは言葉を口にした。
頭をイヨが深々と下げる。
イヨ「それを確かめるためにも、逃してもらえませんか？」
シンム「逃すも何も……てめぇ、おれを人質にして逃げ出したんじゃねぇか。勝手なこと言ってんじゃねぇ」

イヨ「シンムさんは……何か変だと、おかしいとは思わないのですか？　お義母様は、絶対に何かを隠しています」
シンム「そりゃあ、おれだってタケヒコとかが……」
イヨ「だから、逃してください。それか、これ以上追って来ないでください」
頭を下げたままイヨは上げない。正直、シンムにはどう答えていいのか、どう答えたいのか、自分の気持ちすら分からなかった。

その時だった。悲鳴が、姉であるカグヤの叫びが響いたのは。
頭を上げて、イヨが悲鳴の方向に目を向ける。
イヨ「今のはカグヤさん？　どこから……」
シンム「こんな時に……なんで、姉貴が悲鳴を上げてんだ！」
悲鳴の方向へ、シンムは身体ごと向き直る。
シンム「行きたければ、さっさと行けよ！」
投げ捨てる様にシンムは言った。
イヨ「ありがとう。これ……持っていてください。幸運のお守りです」
シンム「いらねぇ」
そっけなく言い捨てたシンムの手を、イヨが握る。
イヨ「早く行ってあげて下さい。また会いましょう」
手を放すと、イヨはイスズと共に駆けて行った。
一人になったシンムの手には、刃のない柄が握られていた。やけくそ気味にそれを投げつけようとして、途中で止める。
そして、シンムは迷いながらそれを睨んだ後、懐に入れると、カグヤの悲鳴の聞こえた方向へ走り出した。

人で無き者４

建物と建物の隙間、わずかに光が差す暗がりで、カグヤは倒されていた。両腕と両足を氷で拘束され、モリヤが馬乗りになっている。その顔には嫌な笑みを浮かべ、頬が紅潮していた。

先程、スクネと別れてシンム達三人を追い掛ける途上で、物陰から突如現れたモリヤに拘束され、連れ込まれていた。

モリヤ「やっと僕のものに出来る」

カグヤ「放して！」

目が血走っているモリヤが、嫌がるカグヤの髪に触れる。

モリヤ「なに、すぐによくなる。この僕に抱かれるのだから、感謝してもらいたいぐらいさ」

鼻息を荒くして、カグヤの衣服にモリヤが手をかける。

カグヤ「誰があなたなんかに！」

両腕と両足を拘束されているカグヤが、唾を吐きかけて抵抗を試みる。

モリヤ「うるさい！」

唾を吐きかけられたモリヤが、必死に叫ぶカグヤの頬を叩くと、叩かれた頬が赤く染まる。それを見たモリヤが、手を上げた本人が、気が狂ったように笑い声を上げる。

モリヤ「ぼくに逆らうからこうなるのさ。さぁ、分かったなら、ぐずぐずするな！」

最後の抵抗で、カグヤは必死に大声で叫ぶが誰にも届かない。

何かに取りつかれた様に胸元に焦点を合わせているモリヤによって、衣服が破り千切られる。

モリヤ「もうすぐ……もうすぐだ」

恐怖がカグヤを包み込んだ時だった。

声「目覚めよ」

その声の直後、カグヤは瞳から色が消え、ぐったりした様に顔を

横に傾け、身動き一つしなくなった。
抵抗を止めて、あきらめたと勘違いしたモリヤが残りの衣服を破るべく、手を掛ける
悲鳴を上げる。ぐったりしたカグヤの口は、唇は、まったく動いていなかった。

やむを得ずイヨ達と別れた後、悲鳴の聞こえた方へと全力で駆けたシンムは、幸運にも、すぐにカグヤを見つける事が出来た。
二人を見つけると、モリヤが馬乗りになっていた。ただでさえ遣り切れない気持ちになっていたシンムは、迷わずモリヤに体当たりする。いろいろな感情をぶつけるかのように。
馬乗りになったモリヤを押し退けて姉に目をやると、まずカグヤの衣類が引きちぎられているのが目についた。更には、気を失っているのか瞳に色が無い。最早、制御など出来ない怒りと共に、シンムは腰から剣を抜く。
睨みつけるシンムを、同様にモリヤは恨めしげに睨み返してくる。
シンム「てめぇ、姉貴に何やってやがんだ！」
モリヤ「また馬の骨か！　馬の骨なら、馬の骨らしくしてればいいんだよ！　そんな事もわからないのか！」
シンム「今度と言う今度は頭に来たぜ！　ぜってぇぶった切ってやる！　てめぇのせいで、見失っただろうが！」
気を失っている姉を背にして、シンムはモリヤと向き合う。激昂するモリヤは周りが見えなくなっている。二人はお互いに意識を集中させていた。怒りという感情をむき出しにしながら。故に、二人とも気づかなかった。否、仮に気づいていたとしても、何が起こっているのかまではわからなかっただろう。髪と瞳が紫色に染まるカグヤに、何が起こっているのかを。
かつて、伊都国で五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）をタマモが使った時と似た様な光景が広がり始める。金色に輝く紫色の後光が広がって行く。

我慢の限界をとっくに超えているシンムとモリヤが、戦闘態勢に入る。

モリヤ「死ね、馬の骨！」

シンム「てめぇこそ、黄泉に送りつけてやる！」

二人が同時に跳びかかろうとした、その時だった。拘束している氷を簡単に砕いて、カグヤが起き上がったのは。

カグヤ「あまり目覚めがよろしくないな」

声はカグヤそのもの。それでも、響きと口調に、何処か男性的なものがあった。

シンム「姉貴？」

別人のようなカグヤの声の響きに、シンムは後ろを振り返った。

カグヤ「はて、辺りの雑音がひどいからであろうか？」

蝿でも追い払うかの様に、うっとうしそうにカグヤが手首を動かす。衝撃波が走る。衝撃波はシンムとモリヤに襲い掛かり、二人を吹き飛ばした。二人が同時に身を打ち付けられる。頭を強く打って、シンムは気を失った。

紫色の瞳をしたカグヤが、不満そうに辺りを見回す。

カグヤ「余が目覚めたと言うのに……四魂（しこん）は何をしておる？」

無慈悲な紫色の瞳。暗黒さえ美しいと思えるほどの瞳を見たモリヤが、恐怖に怯え、尻もちをついたまま後ずさりするが、背後の建物がそれを阻止する。

モリヤ「あ、あいつはなんなんだ」

気味が悪いほど鮮やかな紫色に光る髪をしたカグヤが、モリヤの声に耳を澄ます。

カグヤ「はて、耳障りな雑音がまだ聞こえるな」

すでにカグヤはモリヤなど見ていなかった。正確には、今のカグヤに取って、モリヤの存在は路上に落ちた石ころにすぎない。

そんな事など分かるはずもないモリヤが、震えながら気を失っているシンムを指差す。

モリヤ「ぼ、僕はなにもしゃべってない。そうだ、そこの馬の骨がうるさいから」
耳を貸す事もなく、再び衝撃波がモリヤを襲う。それを左手でモリヤが受け止める。受けた左手が、一瞬にして肩からもぎ取れて、その場に落ちた。
不思議と血は一滴も流れず、モリヤは痛みも感じていなかった。
恐怖でモリヤが自分を見失う。そのモリヤが、助かりたい一心で、場に現れた人物を求めた。
ジョウコウ「……モリヤ」
その人物は狗奴国の大王。その人物は倭国最強と呼ばれる男。
モリヤ「ち、父上、助けて」
険しい顔でモリヤ、シンムの順に、ジョウコウは見回してからカグヤに目を止める。
ジョウコウ「愚かな……カグヤを襲ったのか」
青白い顔をしながらも、ジョウコウの眼に強さと鋭さが宿る。肩で息をしながらも、対面するカグヤに向かって殺意を放ち始める。最後の生気を解き放つかのように。
カグヤ「やはり雑音がひどい。どれ、調律してやろう」
目を閉じて、カグヤが手をかざす。指を、音楽でも奏でるかのように動かし始める。指が動くたび、場に声が、音が木霊する。その音はこの世のものとは思えない。音の数だけ惨(むご)たらしく死ぬ姿が、惨たらしく死んだ自らの姿が、場にいる者達の脳裏に映し出される。自らが死ぬたびに、全身を強烈な痛みが襲う。耳を塞ぎ、目を閉じても繰り返された。永劫かと思える死は続く。
ジョウコウ「くだらない、幻覚だ」
都牟刈之太刀(つむがりのたち)を抜いて、ジョウコウが声を斬り払う。音が斬り裂かれる。
丁度その時だった、シンムが目を覚ましたのは。
シンム「今……何か遭ったよな?」

打ち付けた頭を触りながら、シンムは置き上がる。
モリヤ「い、いやだ・もう、死にたくない……死にたく」
耳を塞ぎ、眼を閉じ、縮こまってモリヤは震えている。

頭を抱えてもだえ苦しむモリヤ。剣を構えて殺気を放つジョウコウ。そして、その二人を楽しげに見ながら笑みを浮かべるカグヤ。
カグヤ「実に愉快。余の調律の邪魔を、よもや失敗作にされようとは」
ジョウコウ「カグヤは消えたか？」
品定めするかのように、ジョウコウは睨みながら聞いた。
カグヤ「邪魔だけでなく、奏上まで？　これは、愉快。愉快。特別に答えてやろう。余も、岩戸の隙間から顔を出しておるだけ。ゆえに、この芸術品の魂もまだ消えてはおらぬ」
心底愉快そうにカグヤが笑う。その眼には、ジョウコウを新しい玩具とみなし、興味の色を宿らせていた。馬鹿にしたように手を叩きながら。
ジョウコウ「なればカグヤに変わるがよい……変わらぬなら、斬り捨てる！」
都牟刈之太刀（つむがりのたち）を上段に構えながら、ジョウコウは脅す様に言った。
それが、ただの脅しなどでない事を悟ったシンムが声を上げる。
シンム「何言ってんだ！　姉貴を斬るだと？　ふざけてんのか？」
近くに落ちていた自らの剣をシンムは握り締める。
カグヤ「愉快、愉快、愉快。斬る？　余を？　実に愉快、ゆえに、斬らせてやろう。余を愉快にさせた褒美をとらす、斬りたいだけ斬るがよい」
手を叩くのを止めると、カグヤは両手を広げながら無防備に歩み出した。
ジョウコウ「カグヤ……逝くがよい」
両手を広げるカグヤが、ジョウコウの前に歩み寄る。目を閉じたジョウコウが都牟刈之太刀（つむがりのたち）を振り下ろす。次の瞬間、金属と金属が

ぶつかり合う音が鳴り響く。
姉を守るために、シンムは慌てて割って入り、剣を受け止めた。
シンム「あんた、姉貴を本気で殺そうとしやがったな！」
ジョウコウ「シンム……邪魔をするな」
シンム「いくらあんたでも」
剣を受け止めたシンムは、本気でジョウコウを睨みつけた。師である男は、父と名乗った男は、唯一の姉を本気で斬ろうとしたから。
カグヤ「つまらぬ。余の芸術品を失敗作が斬るのも愉快であったのに……やはり、先に雑音は消しておくのであった」
広げていた両手をカグヤは下ろすと、右手の指先をシンムの心臓付近に向ける。
カグヤ「壊れよ」
凍りつく様な声でカグヤは、目の前のシンムをつまらなさそうに見ながら言った。
シンム「姉貴？」
あまりにも冷たい声を聞いたシンムは、ジョウコウの剣から守った背後のカグヤを見た。そこには恐怖そのものが立っているかのようだった。
凍りつくような声で言ったカグヤの右手の爪が一寸ほど伸びる。爪よりも早く動いたジョウコウに、シンムは突き飛ばされる。爪は伸び続け、二〇寸程の長さまで伸びた。
倒れたシンムが気付いた時には、真っ赤に染まったカグヤの爪が、ジョウコウの左わき腹から右肩へと突き抜けていた。
シンム「ジョウコウさん？」
爪でその身を貫かれたジョウコウの顔は、なぜか笑っている様だった。少なくとも、シンムにはそう見えていた。
カグヤ「所詮は失敗作か……余を結局、失望させる」
爪を元の長さに戻すと、カグヤはつまらなさそうに言った。侮蔑するように、汚いものを見るように、ジョウコウに目を向けながら。
シンム「姉貴何したんだ？　ジョウコウさん？」

混乱するシンムに、理由を、状況を説明する者など誰もいない。
ジョウコウ「逃げよ、シンム」
今までにシンムが見た事のない優しい笑みを、ジョウコウが浮かべている。苦痛からか、実際には表情が歪んでいるのに、シンムにはそう見えていた。
カグヤ「目障りだ」
言葉と共に、カグヤから衝撃波が奔った。その衝撃波で、近くにいたシンムとジョウコウは吹き飛ばされた。
モリヤ「ば、ばけもの。いやだ、これ以上死にたくない。ははは、ははははははは」
耐えきれなくなったモリヤが狂ったように笑いながら逃げ出す。それに目を一瞬だけカグヤはやるが、興味なさげで、気に留めようともしない。代わりに、モリヤの逃げた方向へ、カグヤが語りかける。
カグヤ「遅すぎるな、それに余と臣の謁見の場としてはせますぎる」
そう言って広げたカグヤの指先から赤い光が放たれ、赤い光を受けた建物が消滅する。建物が消えたお陰で、シンムも二人が駆けつけて来るのが見えた。

やっとで駆け付けて来た二人に向かって、カグヤは語りかけていた。
カグヤ「ようやく出迎えか、四魂(しこん)？」
駆けつけて来たスクネは品定めするようにカグヤを見た。
スクネ「おまえは」
天之壽矛(あまのじゅぼこ)をスクネは構えて、矛先をカグヤに向ける。すでに状況は最悪の事態と化しているとスクネは判断を下す。
カグヤ「四魂(しこん)、余に述べる事はないのか？」
尊大にカグヤが言い放つ。

タケヒコ「カグヤ様、もし聞こえるのでしたら、カグヤ様自身の意識を取り戻してください？」

目の前のカグヤに語りかけていながら、もっと遠くの別人に語りかける様にタケヒコは言った。

スクネ「言うだけ無駄だ。やる事は理解しているな」

何も答えず、辛そうな表情でタケヒコが頷く。それを合図に、スクネとタケヒコが同時にカグヤへ飛び掛る。二人の行動に動じた様子も見せず、カグヤは両腕を高く掲げると一気に振り下ろした。二人は、スクネとタケヒコは、カグヤの目の前でうずくまった。

立ち上がろうとスクネはもがくが、立ち上がる所か指一本動かない。何か見えない力に押さえつけられている。それはまるで、何か重いものでつぶされているような感覚だった。

タケヒコ「重力を……変えたのですか」

同様にもがいているタケヒコが言った。

カグヤ「このたわけが。余がこの場にいるであろう。遅れたのを恥じる気持ちを表すのならば、その姿こそふさわしい。余が寛大でなければ消しておる。相違あるまい？　弁明はあるか？」

うずくまってもがくスクネとタケヒコの表情を楽しむ様に、カグヤが覗きこむ。

シンム「姉貴！　さっきから冗談もほどほどにしろ！　なんでジョウコウさんを！」

立ち上がったシンムがカグヤに詰め寄ろうと一歩踏み出す。

タケヒコ「シンム様、逃げてください」

祈る様な叫びをタケヒコが上げた。

カグヤ「しばし待つがよい四魂（しこん）。まだ雑音が残り、余達の語らいの邪魔をしているようだ」

一歩踏み出したシンムにカグヤが目を向ける。景観を壊すだけのゴミでも見るような眼で。

タケヒコ「早く、お逃げください、シンム様」

祈るタケヒコの声は届かず、シンムが更に一歩踏み出すと、カグ

ヤの瞳が深淵に続くかのような紫色に輝く。直視したシンムが震えだす。震えが足に来ると、体中から力が抜け、その場に座り込んでしまった。

全身が震えているシンムに向かって、カグヤが左手をかざす。するとシンムは震えが止まり、気を失った。そして、カグヤの左手から黒い渦巻きが出現する。

カグヤ「壊れぬまま黄泉に送られること、幸運と思え」

冷酷にカグヤは言い放った。

タケヒコ「や、やめてください」

乞う。辛そうにタケヒコが乞う。絶望と化したカグヤに、タケヒコはシンムの許しを乞うた。その情けないまでの乞いは届かない。

カグヤ「却下する。余が寛大でいられるのは四魂（しこん）に対してのみ」

無慈悲にカグヤは断を下した。

その間、スクネは考え抜いていた。状況を打破する手段を。

カグヤ「喜び、敬え、祈れ、失敗作」

紫色の瞳のカグヤには何の慈悲もなく、黒い渦が少しずつシンムに近づき始める。

その時、声が何処からともなくスクネの頭に聞こえた。

声「鏡を使え。あれを傷付けぬなら……時は戻せる」

一瞬、スクネは躊躇するが、その声を信じる。迷っている暇はなかったから。他に何一つ方法が思い浮かばなかったから。

実行に移す事に決めたスクネが、真布津鏡（まふつかがみ）を持つタケヒコに声を掛ける。

スクネ「仕方ない。鏡を使え、タケヒコ」

タケヒコ「鏡を？」

スクネ「重力を、この空間を、元の時間に戻せ」

理由を察し、頷くタケヒコ。解放の時に備えて、次の行動に向けてスクネは頭を切り替える。刹那の時間さえも無駄にする事は出来ないから。

タケヒコ「大神のこと知るそのいみな八尺鏡（やたのかがみ）なる」

渾身の力を振り絞り、タケヒコが懐に締まっていた真布津鏡（まふつかがみ）を取り出す。そして、真布津鏡（まふつかがみ）にスクネが写し出されるように向ける。その身を封じている重力の中、最期の希望にすがるようにタケヒコが神器の力を解放するための言葉を紡ぐ。

鏡に映し出されたもの全ての時間の法則を自由に操れる神器が、金色に輝く紫色の光を放ち始める。

金色に輝く紫色の光は、スクネを包み込んだ。空間の時間が逆流して、重力が元に戻る。

間一髪だった。黒い渦がシンムのたどり着く寸前に、自由を得たスクネが、カグヤを抱えて空高く跳躍したのは。

周りに誰もいない、障害物も何もない所に、スクネは着地する。同時にカグヤが腕の中から逃れる。

逃れたカグヤが目を細めながら言葉を口にする。

カグヤ「真布津鏡（まふつかがみ）の使用を許した覚えはないが？」

スクネ「おまえの許しなど必要としない」

カグヤ「まぁ、よい。余は慈悲深い。して、このような場所で何をする？」

向き合うカグヤが周りを見回しながら言った。そのカグヤにスクネは質問した。答えは帰って来るかわからないが、助ける為の情報を少しでも得ようとして。

スクネ「ひとつ聞くが」

カグヤ「よい、許す。余が答えてやろう」

スクネ「その身体は、今、誰の物だ」

カグヤ「四魂（しこん）には残念であろうが、余は降臨したわけではない。ゆえに、今はまだ管理者の物である」

スクネ「カグヤはどうしている」

カグヤ「芸術品の管理者の魂など気にしてどうする？」

スクネ「カグヤはどうしていると聞いている」

カグヤ「答える必要を認められんな」

確証はない、それでもカグヤの無事を確信してスクネは天之壽矛を構え、臨戦態勢に入る。それを気にするでもなく、カグヤが語りかける。

カグヤ「はて、矛を構えて余に立ち向かうか？　それならそれでよいが……ゆめゆめ、四魂ともあろう者が余を失望させるでない」

無言でスクネは駆けた。目の前の敵を倒すために、絶望と化したカグヤに向かって。

カグヤ「余に勝てるかどうか、余が教授してやろう、参れ」

駆けながら、天之壽矛の矛先を手前にしてスクネは持ち替える。柄の部分をカグヤに突き出しながら、自らの持てる身体能力の全てを駆使して左右に払う。空間歪曲の力によって、前からカグヤのすねを、後ろからカグヤの後頭部を、天之壽矛の柄が襲う。表情一つ変えず、カグヤはその場にたたずんでいる。

柄は空気でも払ったかのように、カグヤを簡単にすり抜けた。

スクネ「攻撃を、その場に一瞬だけ転移してかわしたか」

何が起こったのかをスクネは瞬時に理解した。転移の力を使い天之壽矛の攻撃を避けたのだと。

カグヤ「気付くとは、すばらしい。さすがは余の臣たる四魂」

馬鹿にしたようにカグヤが手を叩く。

カグヤ「余に褒められてなお無言か？　仕方ない、四魂の喜ぶ顔が見たかったが……参れ」

間を図る。わずかの隙をスクネは探す。

カグヤ「四魂、参れと言っている。それとも、手立てがまったくないのか？」

図星だった。間違いなくカグヤがそれを分かっているとスクネは確信しながら言った。

スクネ「自分で確認しろ」

隙はまったく見つからない。それでも……

カグヤ「すばらしい。それでこそ四魂」

再び、カグヤの言葉が終わるよりも早く、スクネは接近する。頭

部を狙った一撃は再び転移によって避けられてしまう。転移直後を狙いすまして、柄を横から払う。柄がカグヤの左手に直撃する。鈍い音と共にカグヤの左手の骨が折れる。嬉しそうに笑みを浮かべながら、カグヤは右手でスクネの頭を掴もうとしたが、スクネは後ろに飛びのいて逃れた。

カグヤ「この芸術品は、カグヤとか申す管理者の魂の物ではなかったのか？」

折れた手を見せながらカグヤは言った。

スクネ「それがどうした」

カグヤ「さすが四魂（しこん）、なんの躊躇もなく左手を折るとは、しかし、恨まれはせぬのか？」

笑いながらカグヤは言った。本気でおかしそうに笑いながら。それでスクネも理解する。左手で受けたのが故意にすぎない事を。

予想通りの圧倒的な実力差を感じながらも、スクネは表情の表面には出さず、いつものように話す。

スクネ「おまえが気にする必要ない。それより早く、その左手を治したらどうだ」

カグヤ「治す？　はて、余が治せると知っていながらこの程度の攻撃をするとは？　さては、カグヤとか申す魂が目覚めるのを待っておるな？」

スクネ「おまえの好きに取れ」

心臓目掛けて、空間歪曲の力を駆使してスクネは天之壽矛（あまのじゅぼこ）を突いた。それを見越したようにカグヤは、スクネの目の前に転移する。転移してきたカグヤを蹴って払いの退けようとするが、それもあらかじめ察知していたかのように、簡単に避けられる。

笑みを浮かべるカグヤの右手によって、スクネは頭を掴まれ締め付けられる。

カグヤ「今度は避けられなかったな……どうする、もう一度遊ぶか？」

激痛がスクネの頭を襲うが声は上げず、カグヤを睨みつけた。

カグヤ「会話も出来ぬとは情けない。それでも余の四魂か？」
スクネ「これを待って……」
天之壽矛を天高く突き上げる。
カグヤ「何がしたい、四魂」
天高くを飛来していた物を、スクネは天之壽矛で受け取った。それから、天之壽矛の矛先を手の平の中に、カグヤには分からない様に空間歪曲の力で移動させる。そして、矛先に付いていた真布津鏡を受け取ると、カグヤの姿を映し出した。
スクネ「その身体が、カグヤの物なら鏡の力も通じるだろ」
カグヤ「鏡で時間を管理者が眠る前に戻し、管理者を起こすか……すばらしい！　よい、特別に褒美をとらす。余に感謝せよ」
真布津鏡の力が発動する刹那の瞬間、カグヤの左手の爪で、スクネは胸を貫かれた。返り血を浴びたカグヤの瞳が、髪が、元の色に戻っていく。

自らの身体と意志を取り戻したカグヤが目覚める。
カグヤ「わたしいったい……スクネ？」
スクネ「カグヤ……か」
最後の力を振り絞り、スクネはカグヤが元に戻ったのを確認すると、真布津鏡の力を止め、わずかに口元を緩め、笑みの表情を作って気を失った。
力尽きてスクネは目を閉じた。そのせいでスクネは気付けなかった。まして、自らの爪がスクネの胸を貫いているのを見て動揺しているカグヤには、気付くはずもなかった。
手が、モリヤの左手が、真布津鏡を掴んで消えた事に。

別離

力尽きて眠りについてから数時間経った。起き上がると、貫かれた腹に痛みがない。不思議に思い、スクネは腹をさする。傷が完全に塞がっている。疲労もない。わずか数時間で、致命傷になってもおかしくないほどの傷と疲労が完治している。すぐ横では、疲れたようにカグヤがぐっすりと眠っている。

現在の状況が、癒えた傷が、カグヤがそれだけの力を使い始めたという事実を、雄弁に語っていた。

眠るカグヤを見るスクネの胸が痛む。理解不能の痛み。その痛みを無理やり押し留める。そして、スクネは意を胸に秘め、カグヤが目を覚まさない様に注意しながら、立ち上がった。状況を少しでも好転させるため、いま出来得る事をすぐにでも実行へ移すために。

外はすでに暗くなっていたが、人々が慌ただしく動き回り、街の復旧作業を続けていた。それは、あまり興味をそそるものではなかったが、スクネはそれらを漠然と眺めながら歩く。戦いの爪痕は至る所に残されていた。

町並みを出ると、後ろから声を掛けられた。その男はどうやら、自分を待っていたようだった。

タケヒコ「どこへ向かう気ですか？」

待っていたのはタケヒコだった。声を掛けて来ると同時に、タケヒコはわずかな殺気を放ち、あからさまな牽制を仕掛けて来た。

タケヒコ「やはり彼女の下へ会いに行く気ですね？　あなたは何の為に行く気です？」

言葉にも、表情にもとげがある。それを隠そうともせずにタケヒコは言った。

背後をスクネは振り返らすに答える。

スクネ「鏡を奪われた」

タケヒコ「確かに鏡が見つかりませんでしたが……やはり、あな

たが持っているわけではないのですね」
スクネ「気を失っている間にやられたのだろう。おれの失態だ」
タケヒコ「気を失っていたのでしたら……なぜ奪われたとわかるのです？　何か心当たりでも？」
スクネ「起きたら記憶があった」
はっきりと記憶がある。まったく自覚が無いにもかかわらず、何者かの手によって、真布津鏡（まふつかがみ）を奪われた記憶が。
タケヒコ「突然、記憶が生まれた？　おもしろいことを言いますね。夢でも見たのですか？　まるで神の器みたいに？　そのような戯言を本当にわたしが信じるとでも？」
当然の反応をタケヒコが示す。それでも他に言い様がなかった。
スクネ「だが、事実だ」
疑いの色を濃くしながら、タケヒコが話題を変える。
タケヒコ「今日、わたしがヒミコに仕掛けようとしたときに、彼女の命令を聞いて邪魔をしましたね」
スクネ「それで」
タケヒコ「あなたが、最初からわたし達の仲間でない可能性もあります。元々、敵でしたから」
スクネ「だとしたら、どうする」
当然の質問。自分がタケヒコの立場なら同じ質問をするだろう。
そして、自分がタケヒコなら次の行動も当然。
タケヒコ「あなたを殺します。これ以上やっかいな敵を増やすわけにはまいりません」
言葉が言い終わるよりも早く、タケヒコが天之羽張（あまのはばしり）を抜き去る。言葉を終えたときには、スクネの首筋を切り払っていた。その一連の動作を予想しながら、スクネは身動き一つ取らない。斬られる覚悟はあった。だが結局、首は落ちなかった。
スクネ「首を取るなら、もう少し踏み込め」
背後のタケヒコに向かってスクネは言った。
タケヒコ「あなたが避ければ、本気で切り落とすつもりでしたが

……動きませんでした。非常に残念です」

スクネ「茶番はいい。時間の無駄だ。用件を言え」

背後のタケヒコが殺気を止める。声には依然と、疑いの色を見せてはいたが。

タケヒコ「先に聞いておきます。あなたはスクネですか、スクナですか？」

思い出したくもない名をスクネは聞いた。それでも答えた。

スクネ「……スクネだ。あの男は、スクナと呼ばれた男は、千年前に死んだ」

タケヒコ「死にましたか……確かにそうかもしれませんね」

千年前の出来事は正直、あまり記憶になかった。仮に思い出そうとしても、心がそれを拒絶するから。心が「二度と思い出すな」と締め付けるから。そして、「スクナは死んだ」と叫ぶから。そう思わないと自らの心が壊れそうだったから。

タケヒコ「仮に、あなたをこのまま行かせて、戻って来ていただける証拠でもありますか？」

スクネ「これを渡しておく」

天之壽矛（あまのじゅぼこ）をスクネはその場に突き刺した。神宝（かむたから）は世界の法則に干渉する事の出来る武具。四魂（しこん）以外の者が手にしようとしても、触れる事すら叶わない。だが同じ四魂（しこん）ならば違う。その気になれば、奪う事すら出来る。同じ四魂（しこん）ならば、他者のであろうと所有が許される。

だからこそ、スクネはそれをタケヒコに渡した。他に自らを信じて貰う手段などなかったから。

タケヒコ「あなたはあまり道具を大事になされないので、これも証拠としては不十分なのですが……わかりました。あなたを信じましょう。大事に預かっておきます」

振り返り、無言でスクネはタケヒコの眼を見た。眼は物語っていた。信じたのでなく、信じたいのだろうと。それでスクネには十分だった。

タケヒコ「但し、先程のことはあなたが帰られたら、きちんと追求いたします」

スクネ「了解した」

それも当然だろうとは思う。どちらにせよ、自分で理解出来ていないのだから、答えようはなかったが。

タケヒコ「くれぐれも、ヒミコには気をつけてください。間違いなく、わたし達でもわからない何かを隠していますから」

地面に突き刺していた天之壽矛（あまのじゅぼこ）を、タケヒコが引き抜く。その動作を視界に納めながら、なぜかは自分でも分からない願いをスクネは口にする。

スクネ「おれの行き先を、あいつには話すな」

タケヒコ「それはわかっています。もっとも、カグヤ様に隠し事は出来ませんでしょうが」

スクネ「後になって気付かれたとしてもだ。面倒だ」

なぜかタケヒコは微笑んだ。それが何となくスクネの癇に障り、目を逸らす。

表情を真剣なもの戻したタケヒコが最大の懸念を口にする。

タケヒコ「わかりました。カグヤ様の件で聞いておきたいのですが。あなたはカグヤ様が神代（かむよ）のことを、どこまで知っておられるか御存知ですか？」

スクネ「わからない。少なくとも、おれ達が四魂（しこん）だと認識はしていた。そして、神の力も行使している。だが、カグヤとしての記憶はしっかりしている」

貫かれたはずの胸にスクネは手を当てる。傷跡一つ残っていない。同様の場所に、タケヒコも目線を向けていた。

タケヒコ「それは妙ですね。あれの力にあがなえていらっしゃるのでしょうか？」

スクネ「それもヒミコが知っているはず。ついでに、問いただして来るつもりだ」

そう言ったスクネの言葉に頷くと、タケヒコは懐に手を入れて、

何かを取り出した。
タケヒコ「彼女が話してくださるとよいのですが、あまり考えても仕方ありませんね。邪馬一国まではこの飛行呪を使ってください、私が準備した物です」
スクネ「使わせてもらう」
差し出された飛行呪をスクネは受け取る。
タケヒコ「最後にもう一つだけ、お願いしときます。あれは、おそらく邪馬一国にあるでしょうから、出来れば一緒に回収して来て下さい」
スクネ「何のことを言っている？」
タケヒコ「あなたに、カグヤ様が眠りになられていた間にお願いしていた一件です。時間が無かったとはいえ、伊都国に置き残して来てしまったあれが、邪馬一国にあったなら取り返して来て貰いたいのです」
スクネ「話に聞いた二枚目の鏡の事か？」
伊都国が落ちてすぐにスクネは、タケヒコに頼まれてそれを取りに行った。もっとも、聞いた場所に行っても、すでに何もなかったが。
真剣な表情のタケヒコが言葉を続ける。
タケヒコ「ええ、あれは神宝（かむたから）も兼ねる真布津鏡（まふつかがみ）と違って、戦闘では何の力もありませんが……厄介な事に、神器にはなり得るのです」
スクネ「それで降臨の儀を行えるとでも」
タケヒコ「あのままの、何も捧げていない状態では不可能です。ただし、神宝（かむたから）を鏡に捧げさえすれば、本物の神器と同等になります。もしもの時のためにも、あなたも覚えておいてください」
スクネ「了解した」
話が終わると、スクネは飛行呪を首に掛けて、空へと飛び出した。
邪馬一国にいるはずのヒミコの下を目指して。
空を飛行しながらスクネは前日の事を思い出していた。まだ、あ

れから一日しか過ぎていないはずなのにずいぶんと昔のことのように感じながら。

河川に着くと、共に釣り糸を垂らした。今回はカグヤにしっかりと釣りの仕方を教えた。

数時間後、教えた甲斐あってか、カグヤは上達していた。それでも、いまだ一匹も釣れていなかったが。少なくとも岩などに針を引っ掛けて根かかりを起こし、大地を釣ったなどと言っていた頃とは、雲泥の差があった。

カグヤ「今度こそ釣れるかな？　釣れるなら大きなのがいいかな」

餌を付け終わったカグヤが河川に釣り糸を垂らす。

スクネ「大きいかどうかは釣れたらわかる」

カグヤ「どうせなら釣れるって断言してくれないかな」

スクネ「釣れるかどうかはおまえ次第だ」

カグヤ「いいよ、もう」

そう言って揺らめく糸にカグヤは目をやった。同じ様にスクネも目をやる。時がゆっくりと流れて行く。その中で手にわずかに感じる竿の重みがスクネは好きだった。

何度かカグヤが釣れそうになった魚を逃した後、遂にその時が来た。竿がしなり、糸を引いている。一瞬の時宜を見計らってカグヤが教えた通り竿を強く引く。

カグヤ「釣れた！　釣れたよ。やった、すごい、スクネ、見て見て」

釣り上げるとカグヤは小さな魚を両手に優しく乗せた。そして、嬉しそうな表情を浮かべる。それを見てスクネは思わず笑った。

カグヤ「あっ、笑ったな。ひどいよ。初めて釣れたんだぞ」

スクネ「本当によかったな」

カグヤ「ぜったい、思ってないでしょ。まったくきみは」

スクネ「その魚はどうする。食べるか」

カグヤ「子供だと思うし、逃がしてあげるよ。でも、少し待ってて。一応傷だけでも治して上げとくから。針の痕、とっても痛そう

だし」

スクネ「何をする気だ」

釣った小さな魚の口元に刺さった針をカグヤは抜いた。針を抜いた部分から僅かに血が流れている。両手でカグヤが魚を覆うと紫色の光が輝き始めた。輝きと共に傷口が消えていく。輝きが終わるとカグヤは魚を川に帰した。川に帰った魚は勢いよく泳ぎだす。その魚に向かってカグヤは手を振った。

カグヤ「もう捕まったらだめだよ。もし捕まるんだったら、大きくなってから、わたしに釣られるんだよ」

スクネ「カグヤ、おまえ……」

目の前で起こった奇跡を見てスクネは言葉に詰まった。

カグヤ「だって、せっかく助けたんだよ。どうせなら捕まらないでいて欲しいけど」

スクネ「その話じゃない。今、何をやった」

カグヤ「何って……針の傷を直して上げただけだよ。そうした方が元気に泳げるだろうし」

スクネ「巫女でもそんな力はないはずだが」

カグヤ「そうだっけ？　そう言われればそうだよね。あんま気にしなかったよ。なんか出来ただけだし」

傷口を一瞬で癒す力をカグヤが手に入れているという事実。それを考えるとスクネの心が痛む。絶望、恐慌、あれが作り出す悪夢以上に、なぜか深い悲しみが心を痛めつけた。

声「お願いだから・・・殺して」

頭に声が響いた。何処かで聞いた気がする声、言葉。それが誰だったか、それが何時だったか思い出せない。思い出したくない。

カグヤ「なんで、泣いてるの？」

耳に聞こえたカグヤの声で現実にスクネは引き戻された。そう、今は不可解な幻聴を気にしている時ではなかった。

スクネ「帰るか」

カグヤ「うん。今日は満足したし」

釣り道具を手に帰路に着いた。その途上
スクネ「先程、夢を見たがその内容は忘れたと言ったな」
カグヤ「本当は少しだけ覚えてるよ。とっても嫌な夢だったよ」
しばらく無言で歩いた。風の冷たさが肌を焦がす気がしながら。
沈黙を破って、その話題をスクネは自ら切り出した。絶対に話さなければならないが、出来得るなら話したくない話を。
スクネ「カグヤ、おまえが記憶している知識は全て神と呼ばれている者の知識。おまえがさっき使った癒しの力も同等」
カグヤ「神の知識と力？　なんでわたしに？」
問いに答える代りにスクネは話を続ける。
スクネ「世界には神の力が存在する。五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）、真布津鏡（まふつかがみ）、そして、もう一つ……神の器として生まれた者。それぞれ強大な力と引き換えに代償が必要になる。」
カグヤ「神の器、わたしの事？」
スクネ「そうだ。そして、代償が記憶」
それきり必死にカグヤは何かを考えている様子だった。再び、沈黙が二人を包み込む。
カグヤ「わたしの記憶？　何か忘れたかな？」
沈黙の間、考え続けたカグヤの答えがそれだった。そして、その答えはありえない事。だから、スクネの答えは一つしかなかった。
スクネ「神の力の行使を始めたのなら、間違いなく記憶を失っているはずだ。失ったという事実すらわからないままに」
カグヤ「ちょっと待ってて、何か忘れたかな？　きみと初めて会った時の事もはっきり覚えているし」
異な事を言われて立ち止まったスクネの前を、両腕を組んだカグヤが考えごとをしながら通り過ぎていく。
スクネ「初めて会った時……いつの事を言っている」
カグヤ「伊都国できみがシンムを殺しに来た時だよ」
きょとんとしながらカグヤも立ち止まって振り向いた。
スクネ「記憶が間違っている」

カグヤ「ぜったい、間違ってないよ。きみに会うの、あの頃怖かったし。あれ？　でもなんであんなにきみのこと怖かったんだろ？　まぁ、いいや」

スクネ「確かに、そんな事も会ったが……その前の記憶は何処に行った」

カグヤ「その前って……じゃあ、きみの記憶で、初めてわたしを知った時の事どうなってるの？」

スクネ「カグヤを初めて知った時の事……森の泉で」

カグヤ「森の泉って何それ！　きみの方こそ記憶が変だよ？」

怒り出すカグヤ。同時に危機感がスクネを支配する。

スクネ「おれの記憶に違いはない。間違っているとすればおまえだろう」

カグヤ「なんでわたしがきみとの思い出を作り変えるんだよ」

スクネ「記憶の欠落を偽るために」

カグヤ「意味がわかんないよ。ぜったい、きみの方が変だよ！」

そう言って、カグヤは走って行った。その行方を見守りながらスクネはなぜか一歩も動けない。心を、得もいわれぬ恐怖と、深い悲しみが包み込んでいたために。

思えば変な話だった。その時に気づいていればと後悔しつつも、スクネは邪馬一国へと急いだ。

空高く舞い上がり、スクネが星空に消えていく。その姿を呆然と目で追いながら、現在の状況に、タケヒコは思いを巡らせる。状況は悪化の一途を辿っていた。それでも、まだあれは降臨していない。だから、状況は悪いが、最悪ではないと、タケヒコは自分に言い聞かせる。

邪馬一国を目指して消えたスクネが視認出来なくなっても、タケヒコは星空を眺め続けた。何も出来なかった自分を責めながら。

しばらく眺めてからタケヒコは下を向き、懐から二つの呪を取り出す。それは、邪馬台国の女王ヒミコの作ったヤマタノオロチと呼ばれる呪。それと、狗奴国の大王ジョウコウから頼まれていた呪。その二つの呪を手に握り締め、自らを責め続け、固く決意する。強く握り締めた手からは、赤い雫が流れていた。

タケヒコ「伊都国崩壊後、すぐにわたしが真布津鏡（まふつかがみ）とともに邪馬一国へ向かい、タマモとヒミコを暗殺するべきでした。わたしがそうしていれば、このような事には……ですが、まだひとつだけ出来る事が」

再びスクネの消えた星空を見上げる。そして、タケヒコは咆哮した。その思いを、その決意を。最後の希望を信じながら。

タケヒコ「スクネ、あなたは必ず帰って来てください。わたしも決心しました。わたしがこの刻から消えましょう、ヒミコ、タマモと共に。それで、神代（かむよ）が終わるはずです。この世界は決して終わらせません！」

結局タケヒコはその場に一晩中、立ち尽くした。

父と母と

朝日と共にタケヒコは動き出す。託された呪を、ジョウコウより託された言葉を、シンムに届けるために。

朝を迎えた街並みにタケヒコが入ると、地に両足を手で抱えて座して、表情を重くしているカグヤが目に入る。

カグヤ「タケヒコ……」

暗い表情のカグヤが顔を上げて、タケヒコを見上げながら呟いた。

タケヒコ「カグヤ様、おはようございます。今日は早くからお目覚めですね」

頭を下げてタケヒコは挨拶した。簡単に頷いて挨拶をカグヤは返すと、自らのすねを強く抱きしめて、弱弱しい声を絞り出すように口を開く。

カグヤ「スクネは？　スクネはやっぱりどこか行ったの？」

タケヒコ「突然、どうなされたのですか？」

不意をつかれて、タケヒコは顔に出そうになったが、スクネとの約束を守るために無理やり押し込める。

カグヤ「スクネ、起きたら、わたしに気付かれないように外へ出て行ったから」

タケヒコ「気付いていらしたのですか？」

カグヤ「うん。スクネどこ行ったの？　やっぱり、わたしが何かしたんだ……」

心の中でスクネに謝りながら、タケヒコは先程の事をカグヤに伝える。

タケヒコ「心配なされないでください。少しだけ、出かけただけですので、すぐに戻って来ると思います」

カグヤ「そっか……邪馬台国に帰ったんじゃないよね？」

更に弱弱しげに、怖さを含む声色でカグヤは言った。だから、あえてそれを否定するために、タケヒコは声を強くする。自らにも言

い聞かせるためにも。
タケヒコ「ちがいます。スクネは、すこし用事が出来たらしいので出掛けただけです。理由は、わたしがきちんと聞いておきました」
カグヤ「それならいい、信じるよ」
それだけ言うとカグヤは立ち上がって背を向ける。そのまま立ち去るかと思った。しかし、一歩踏み出しそうになった足を止めると、小声で背中越しに問いかけて来た。
カグヤ「タケヒコは今から弟のところへ行くの？」
タケヒコ「そのつもりです。塞ぎ込んでおられる様子なので……カグヤ様も共に参られますか？」
カグヤ「やめておくよ。今は疲れてるし……けど」
そこでカグヤの言葉が止まる。
タケヒコ「けど、どうかなさいましたか？」
カグヤ「ごめん、やっぱりいいよ。わたし部屋に戻って寝るね」
今までの弱弱しい声とは違って、明るい声が帰って来た。明かに無理をしている声が。それと分かりつつも、タケヒコは何も聞かずに笑顔で応えた。
タケヒコ「わかりました。元気をお出しくださいませ。お休みなさいませ」
カグヤ「うん、おやすみ」
一度振り向き、カグヤは無理やり作った笑顔で答える。それを見て、タケヒコは少しだけ安堵する。少なくとも、他に対するやさしさはまだ残っている。それを知り得ただけで、今は十分だった。

部屋に籠ったシンムは、早朝でありながら日課の訓練には行かない。だからといって、かつてのように眠りこけてもいない。何をするでもなく、シンムは暗い部屋の隅で壁に寄りかかり、呆然と上を向いていた。表情が弱弱しく、顔色も死人の様にすぐれない。実際、シンムの心は死にかけていた。すべてがシンムにはどうでも良くな

り、出来れば逃げ出したいという気持ちが強くなっていた。
だから、来客に気付くと、会うのがわずらわしそうに声を出した。
シンム「タケヒコだろ……そこにいるのか？」
タケヒコ「シンム様、お話があります」
シンム「なにも聞きたくねぇ、出てってくれ」
自分の声が妙に耳に、脳裏に響く。自分の声すらも、今のシンムにはうるさく感じられた。
タケヒコ「今日は是が日にも聞いてもらいます。シンム様ご自身のためにも」
来客が言うことを聞かず、出て行かない。仕方なく、シンムは来客を受け入れた。ただし、上を向き、呆然としたままの状態で。
横からタケヒコが何かを言っている。耳には入って来たが、頭が動かない。だから、何を言われても気にもならなかった。
タケヒコ「ジョウコウ様が亡くなられました」
父と名乗った男の顔が浮かんで、すぐに消えた。
タケヒコ「ジョウコウ様が生前のおりに、お言葉を承っております。お聞きください」
少し前まで師として尊敬していた自分を思い出し、シンムはすぐに忘れる。
タケヒコ「これは祭りの時にお話しました、言葉を封じる呪です。使い方は他の呪と同じく、念じられれば……」
祭りの日を思い出す。あの日、楽しかった事さえ恨めしかった。
タケヒコ「呪はここに置いておきます」
何かを、おそらく呪を置いてタケヒコは出て行った。
一人になると、シンムには否が応にも、昨今に起った事実が頭を駆け巡った。実の父親が、尊敬して止まなかったコジロウでなかった事実。不覚にも心を許しかけたイヨが、自分を人質にして逃げ出した事実。そして、何よりも姉であるカグヤが、父と名乗ったジョウコウを手にかけた事実。
それらが頭にちらついて、決して離れなかった。

シンム「なにがなんだかさっぱりわかんねぇ。姉貴、なんでジョウコウさんを……ジョウコウさんもなんで、姉貴を殺そうとしてたんだ」

一日中シンムは外に出なかった。動く気にもなれなかった。このまま何もしないでいたかった。出来れば殺して欲しいとさえ思った。

一日塞ぎ込むだけ塞ぎ込むと、いつの間にかシンムは眠りについた。眠りながら夢を見る。それは、正確には夢ではなかった。それは、呪からの言霊を自らの夢に置き換えただけ。事実はそれでも、シンムは夢と言う形でそれを見た。だから、本来、緑色をしていたはずの呪が紫色の輝きを放ち、同じ色の光が遥か上空で輝いていた事になど、気付くはずもなかった。

夢はシンムにとって、記憶し得るはずの無い時の光景を映し出した。

夢の中には四人の人物がいた。

四人の右端に立っていた人物が、真っさきに口を開いた。やさしい垂れ目が特徴的だった。その人物は、シンムが夢にまで見たイブキコジロウだった。

困った顔をコジロウはしていた。

コジロウ「ほら、二人とも何か言わないと、いつまでもにらめっこはないでしょう」

隣に立っている人物にコジロウが言った。

その人物にシンムは見覚えがあった。その人物は若き日のジョウコウだった。

ジョウコウ「うむ」

ぶっきら棒に腕を組み、若いジョウコウが何かを真剣に考えている。

左端に立っていた女性が口を開いた。その女性は姉であるカグヤをおしとやかにした感じだった。その女性はカグヤの母、サクヤだ

った。
サクヤ「姉さんもせっかくなんだから、生まれてくる赤ちゃんに、今の気持ちを伝言にして残しとくんでしょ」
優しそうに笑いながら、サクヤがもう一人の女性をせかす。
若きジョウコウと同様、その女性は腕を組んでいた。その女性は、サクヤに顔が似ていたが、短髪で、精悍な身体つきをしていた。その女性はサクヤの姉、キサラギだった。
キサラギ「……そうだな」
急かされたキサラギも必死の表情で何か考えている。
コジロウ「わざわざジョウコウと義姉さんの子供のために、この呪を準備くれたんだろう」
考え込む中央の二人に、説教するようにコジロウは言った。
サクヤ「そうですよ。ジョウコウさん！　姉さん！」
強い口調でサクヤも言っているが、生来のやさしい顔が強さを拒んでいる。
キサラギ「ええと……そうだな」
大量の汗を掻きながら、キサラギが必死に言葉を探している。
明らかに困惑して言葉を捜している二人に、サクヤは半分怒った様子で、残り半分はあきれた様子で助けを出した。
サクヤ「まったく……とりあえず挨拶からしたらどうです？」
キサラギ「そうだな……はじめまして母のトヨウキサラギと言う。名ぐらいは覚えて貰えるとうれしい」
本気で自分の子にキサラギはそう言っていた。照れたように顔を真っ赤にしながら。
サクヤ「覚えるに決まってるでしょう……まったく」
呆れかえるサクヤに、顔を真っ赤にしたキサラギが目を向ける。
キサラギ「そ、そうか……それはありがたいな」
その言葉を聞いたコジロウが疲れた様にため息を吐く。
コジロウ「ありがたいって……ジョウコウも、とりあえず挨拶ぐらい」

ジョウコウ「アシハラシジョウコウだ」
コジロウ「それだけ？　他人行儀すぎだ」
呆れたようにコジロウは言った。顔をジョウコウが渋め、黙り込んでしまう。
手を二回叩き、注目をサクヤが集める。
サクヤ「はいはい。この二人だと、これ以上求めても先に進まないから……とりあえず挨拶はそれぐらいで、次は子供に伝えたい事。これが一番大事！」
ジョウコウ「うむ、何を伝えればいい、コジロウ？」
提案に頷くと、ジョウコウはコジロウに顔を向けた。
コジロウ「子供にはどう育って欲しいとかいろいろあるだろう？」
再び腕を組み考え始めるジョウコウの横で、キサラギは自信満々に述べた。信じられない言葉を。
キサラギ「とりあえず産まれて、生きて、そして死んでくれればいい」
サクヤ「姉さん、それはいくらなんでも……死んでくれればいいって」
キサラギ「そうか？　生まれれば、いずれ死ぬ。その日まで精一杯生きてくれたならおれは満足だ」
サクヤ「姉さんらしいけど、先に精一杯生きてからって言わないと」
キサラギ「そ、そうか……」
妹であるサクヤの言葉に首を垂れてしゅんとなるキサラギ。それを見たコジロウが再びため息を吐いてから尋ねる。あいかわらず難しい顔しているジョウコウに。
コジロウ「ジョウコウは思いついた？」
ジョウコウ「どうせなら、我の様な男にならずに、コジロウの様な男になれ。その方が幸せにはなれる」
その言葉を聞いたキサラギが嬉しそうにジョウコウの腕を組み、弾んだ声で語りかけた。

キサラギ「それいい、ジョウコウ。コジロウの様な男になって、おれやジョウコウと違って、みんなに好かれて幸せになれ！　良いな、絶対だ！」

お腹をさすりながら、キサラギは声を弾ませている。

コジロウ「僕みたいにって……なぜに？」

サクヤ「コジロウさんみたいに？　姉さんとジョウコウさんの子がなるの？」

困惑するコジロウとサクヤを余所に、キサラギは興奮気味に声を張り上げる。心底嬉しそうに声を弾ませながら。

キサラギ「そうだ。おれ達の子は、コジロウみたいに優しく育てる、絶対だ」

その後もこんな感じで続いた。考え込むジョウコウ。照れくさそうにするキサラギ。そんな二人を必死にさせるため、声を掛けるサクヤとコジロウ。心底楽しそうな、心底嬉しそうな思いが、そこには溢れていた。

コジロウ「……あと少ししか言霊封じれない」

突然、コジロウが声を張り上げた。

サクヤ「姉さん達、他にはないの？」

急にサクヤに振られたキサラギが慌てる。

キサラギ「ええと、他には……とにかく愛してるぞ」

最後にキサラギはそう言った。顔を真っ赤にしながら、心底嬉しそうに、キサラギはそう言った。

サクヤ「姉さん」

にっこりとしながらサクヤが隣のキサラギに目を向ける。

コジロウ「これ何年後かに聞い……」

何か言いかけたコジロウの言葉は、最後まで聞きとる事は出来なかった。

呪の輝きが消える。呪から発せられた言霊も同時に終わりを告げた。終わって欲しくないというシンムの思いは届かずに。

それでも夢は終わらない。夢はこの時から時間を進める。

返り血で若いジョウコウは血まみれだった。その右手には、真っ赤に染まった大きな剣を、都牟刈之太刀（つむがりのたち）を握っていた。大木に寄りかかった女性がいた。その女性を見つけるとジョウコウは剣を収め、両手の血を自らの服で拭う。そして、背中に背負っていた赤子を大事そうに両手に抱えなおす。その女性は、両手に抱きかかえられた赤子を見ると、嬉しそうに笑みを浮かべながら話し出した。

キサラギ「よかった、生きていた」

その女性はキサラギだった。胸からは赤い血が溢れていた。

ジョウコウ「どうする最期にもう一度抱くか？」

赤子を渡そうとするジョウコウに、キサラギは首を振って返す。

キサラギ「止めておく。今抱くと、死ぬのが怖くなる。それよりもジョウコウ、おれからの最期の命令を聞け」

ジョウコウ「キサラギ、まだ我に命令するか」

キサラギ「当然だ、ジョウコウ。おまえは、おれの言う事を何でも聞く約束だっただろう？　だから、おれからの最後の命令だ、この子はサクヤ達に預けろ」

笑顔でキサラギは命じた。嬉しそうで、それでいて、悲しそうな笑顔を赤子に向けながら。

ジョウコウ「この国に居れば、我の正妻に命を狙われようが……確かにコジロウなれば。名は？」

キサラギ「シンム」

その名を聞いてジョウコウは即答した。

ジョウコウ「よかろう」

キサラギ「その都牟刈之太刀（つむがりのたち）は……もし、シンムが望む時が来たなら……その時に渡してくれ」

ジョウコウ「剣ぐらい持たせても、コジロウは何も言うまい」

キサラギ「本人が望んだ時だけでいい」

ジョウコウ「よかろう、他には？」

首を振る。そして、キサラギはジョウコウの頭を撫でながら言っ

た。赤子に向けるのとは違う笑顔を見せながら。
キサラギ「もう何もない。おまえは最後まで約束を守ってくれた。おれの我がままを最後まで聞いてくれた。だから、妖鬼共が来る前に早く行け、ジョウコウ。シンムを頼んだぜ」
最後に唇を二人は重ねると、キサラギはジョウコウを手で押し退ける。
ジョウコウ「さらばだ」
赤子を再び背負いジョウコウは離れていく。それをキサラギは笑顔で見送る。その笑顔は、これから死に行く者の顔とは思えないほど綺麗だった。
夢は終わりを告げた。

目を覚ましたシンムの右耳に涙が当たり、目尻から耳に掛けて濡れていた。濡れた涙の跡がひんやりとして輝いている。
夢は鮮明に覚えていた。
シンム「あれがジョウコウさんと……おふくろ?」
天井を見上げたままそう呟くと、シンムは一度目を閉じる。涙を止める為に。
目を閉じたまま部屋にいるであろうと思われる男の名を呼んだ。
シンム「タケヒコ、居んだろ?」
何も返事は無い。目を開けて見回すが、やはり誰もいない。不思議に思いながらも、仕方なく起きて外に出た。
外には思った通り、タケヒコが立っていた。
タケヒコ「シンム様」
シンム「やっぱいたのか、タケヒコ」
タケヒコ「勝手なことを、申し訳ありませんでした」
頭を下げて謝るタケヒコ。その姿を見ると、シンムは申し訳なくなって来る。自分ためにやってくれながら、自分のために謝ってくれるタケヒコを見て。でも、それを照れくさくて口に出せないから。

シンム「ジョウコウさん……最期になんか言ってたか？」
表情を隠してシンムはそう言った。他に言葉が出なかったために。
そして何よりも、心底気になっていたために。
タケヒコ「ジョウコウ様の最期」
頭を起こしたタケヒコが目を閉じて、一心に記憶を探る様に語り出した。

脇腹から体を貫かれたジョウコウは、全身を血だらけにして、シンムのすぐ近くで倒れていた。
タケヒコ「ジョウコウ様！」
慌てて駆け寄るタケヒコを、ジョウコウが言葉で制止する。
ジョウコウ「近寄らずに、しばし待て」
そして、力を振り絞り、ジョウコウは立ち上がった。
タケヒコ「無理をなさらないでください。カグヤ様がもし、神の力を行使できるなら、必ずや治せます。ですからそれまで……」
慌てて寝かせようとするタケヒコを、ジョウコウが一喝する。
ジョウコウ「くだらぬことを言うな！　我の身体ぐらい我がよくわかる。最早、カグヤでもどうにもならぬ。我は倒れて死なぬ、我は倒れたままで死ねぬ」
聞き取るのが精いっぱいぐらいな大きさの声。それでも、威厳も、力強さも、普段よりも増している声でジョウコウは言った。
ジョウコウ「我の遺体、どうすべきか分かっているな」
タケヒコ「……この世から消滅させよと申されました」
言い終わるとタケヒコは唇を噛みしめ、血が流れる。
ジョウコウ「分かっておるならよい。タケヒコ、ヤマタノオロチを出せ。我の最後の仕事だ」
立っているのも辛いはずなのに、立ち上がった事さえ奇跡に近いはずなのに、ジョウコウは姿勢を正す。
タケヒコ「でしたら……せめて、シンム様を起こしましょう」

気を失って倒れているシンムに、タケヒコが目を向ける。同様にジョウコウも目を向けた。

ジョウコウ「必要ない。今の内に、身体だけでも休ませておけ」

タケヒコ「しかし、シンム様も……最早、今しか」

ジョウコウ「気にする必要ない。我の事でもし後悔するなら、すればよい。悩みがあれを強くする。この一年でよくわかった。あれは母に似た」

タケヒコ「ですが……一度ぐらいは父と」

ジョウコウ「それも、今更いらぬ。あれと一年もの間、師と弟子の関係になれた。それで我は十分だ」

手をジョウコウが差し出す。広げた手の平の上にヤマタノオロチを置いてくれと。

タケヒコ「なにか……なにかシンム様に伝言はありますか？」

広げられた手の平の上に、タケヒコがヤマタノオロチを乗せる。

ジョウコウ「カグヤを間違っても恨むなと」

タケヒコ「ジョウコウ様」

ジョウコウ「それだけ伝えよ……さらばだ」

手の平の上に置かれたヤマタノオロチを、ジョウコウが握りしめる。呪が、ヤマタノオロチが、輝きを放つ。最後の命のきらめきを連想させるように。そして、輝きが消える。それはジョウコウの死を示した。だが、ジョウコウは倒れない。否、死した今、ジョウコウは決して倒れない。

立ち尽くすジョウコウの握り締めていた呪をタケヒコは受け取ると、一礼する。そして、懐から火炎呪を取り出す。その火炎呪によって作り出された炎は天高く燃え上がり、日輪でさえもくらむほどに明々とその場を照らし出した。

その光景を、狗奴国の大王アシハラシジョウコウの最期を、タケヒコは思い出し得る限りつぶさに語った。

しかし、ヤマタノオロチのことだけは、シンムには話さなかった。
タケヒコ「ジョウコウ様は……シンム様を決して棄てたわけではありません」
シンム「最初から、そんなこと思ってもねぇ」
タケヒコ「シンム様」
シンム「親父であることより、ジョウコウさんであることを望んだんだろ？　ならそれでいいじゃねぇか」
タケヒコ「シンム様がそれでよろしいのでしたら」
シンム「今はな。あとで……いくらでも、その時が来たら、死に目に会えなかったことを、後悔でもなんでもするさ」
神妙な面持ちでタケヒコが黙り込むと、シンムは咄嗟に呟いてしまった。出来れば、口に出すのを避けようと思っていた言葉を。
シンム「……姉貴はいったい」
タケヒコ「カグヤ様の事を、お知りになりたいですか？」
目線を下にしてタケヒコは言った。声は何処が恐れを含み、さえない表情で。それだけでシンムにも理解出来る。姉が、タケヒコでさえも言い淀む、何かであることを。
だから、大事な事だけをシンムは聞いた。
シンム「タケヒコ、姉貴は敵じゃあねぇよな？」
タケヒコ「当たり前です、シンム様」
快活な返答。それだけでシンムは十分だった。
シンム「ならいい。これ以上は何も聞かねぇ。とりあえず、おれは寝る」
タケヒコ「わかりました。余計な事をしたことは、お許しください。お休みなさいませ」
シンム「おれ、父さんや、親父のように強くなって見せるぜ……必ずな」
何も答えをシンムは何も望んでいなかった。それを分かってくれたのか、タケヒコは何も答えない。
部屋に戻ってシンムは天井を見上げる。いろいろな思いがシンム

を襲う。悲しみが、辛さが、いっきに襲いかかって、あふれる涙を堪える事が出来なくなった。

シンム「なんで……なんで父さんも、親父も。いったい、何がどうなってやがんだ。くそぉぉぉぉぉ」

訳が分からず、何も出来ず、気付いた時には大事な者を失っている。その苦しみに耐えきれなくなって、我慢出来なくなって、シンムは叫び続けた。

外に一人残ったタケヒコは、その声を聞かれる範囲内に誰も居ないか辺りを見回して確認する。確認を終えると、シンムの泣き叫ぶ声が止むまで、誰一人家に近づかせないために、その場に立ち続けた。

誰がために

人里離れた森の奥深くにスクネは立っていた。
辺りは暗く、日が落ちてからすでに何時間も経過している。目的地である泉には気配が二つ感じられたため、ヒミコが一人になるのを待っていた。結局、それをあきらめる。これ以上は時間の浪費にしかならないと思い。

泉に近づくと、すぐにヒミコが待ちかねた様子で声を出した。
ヒミコ「遅い。何をしておった？　まさか、そなたともあろう者が、尻込みしておったわけでもあるまいに」
気配を完全に消し、空気と同化しているスクネの侵入に対して、ヒミコは事も無げに言った。予期していたスクネも動揺しない。ただ泉を見回す。予期せぬことがあったために。
スクネ「一人しかいないのか」
言葉を口にして、ヒミコに注意を払う。表情の変化を、態度の変化を、見逃さないために。おそらく無駄だと理解しつつも。
ヒミコ「翁やタマモがおれば、話も満足に出来まい。それに、そなた達の戦いに巻き込まれるのもごめん被る」
予想通り、無表情で、何の変化もヒミコは見せない。
仕方なく、スクネは細心の注意を払いつつ話を始める。尚も、スクネは二人分の気配を感じながら。
スクネ「先に聞いておく。おれを、わざわざ招待してくれた用件は何だ」
ヒミコ「そなたと少し語らいたかった。この国を離れて、一年ほど経つが……その間、どの様な事が起こった？」
スクネ「答える、必要を認めない」
一歩、スクネは踏み出す。
ヒミコ「それ以上、近づくでない。あまり近寄られると……わら

わも恐れをなして、逃げ出すしかなくなるであろう」
スクネ「恐れの色など見えないな」
更に一歩踏み出そうとして、スクネはそれを中断する。中断せざるおえないものをちらつかされたために。
ヒミコ「だから、近づくでない。わらわには転移呪がある。こう言えばよいか？」
呪をヒミコは確かに握っていた。
笑みの色を浮かべながら、ヒミコは静かだが、澄み渡るような声で話を始めた。
ヒミコ「そなたは父親の名を知っておるか？」
意味のある質問にスクネには思えなかったが、答えた。
スクネ「父などいない」
ヒミコ「母親の名は？」
スクネ「母などいない」
ヒミコ「知らぬのでなく、おらぬのだな？　それが変だと思わぬか？　神の器である天之岩戸（あまのいわど）を持つトヨウカグヤでなく、四魂（しこん）にすぎぬそなたに、親がおらぬのは？」
脳が「これ以上聞くな」と指示する。それをスクネは振り払う。
「気のせいだ」と自分に言い聞かせながら。
ヒミコ「そなたは四魂（しこん）の中でも特殊な存在。元来は、魂のみしか存在しない。固有の身体を持たず、他の者の身体に宿り、初めてこの世界に存在する」
脳裏に絶望がよぎる。汗が額からあふれ、得も言われぬ息苦しさに、スクネは侵される。
ヒミコ「しかし、今この時代、そなたは身体を手に入れた。千年前と違い、そなただけの身体を」
悲しみと苦しみが同時に襲いかかる。それをスクネは抑えつけようとすればするほど、息苦しくなっていく。
スクネ「兄」
否でも応でも兄の名が脳裏を走り抜ける。その名に感じるのは怒

り。なのに、怒りを感じれば感じるほどに、息苦しさが増していく。
ヒミコ「そなたの兄は千年前の戦いで、魂の大部分が、この世界から追放され、そなたの魂はこの時代に逃された。そして、そなたは代わりの身体を手に入れた。それにしても……皮肉とは、この事を言うのであろうな」
ほんの一瞬だけ、ヒミコの表情が大きく変化する。何処か懐かしさを感じているような、それでいて悲しそうな表情を見せた。
わずかな変化の後、表情を戻したヒミコが言葉を続ける。
ヒミコ「そのおかげで、そなた達の願いは叶ったのであるから」
スクネ「願い」
とうとう息苦しさに耐えられなくなり、スクネは両膝を折り、その場に這いつくばる。
ヒミコ「この時代に、そなた達は別々に存在している。ただし、兄はこの世界の者に認知など出来ぬ存在となり、記憶の大部分を失っているがな」
スクネ「にぃさんに責任は……」
全身から汗が流れ落ちる。それが原因か、息苦しさに加えて、激しい乾きが襲い、スクネは声を出すのが辛かった。
ヒミコ「そなたの兄は、それでも、たった一つだけ記憶を残した」
懐から呪をヒミコが大事そうに取り出す。呪からは詩が流れ出す。

いと思ふ　いとしの君に　木漏れ日で
出会ふた事も　いと悲しかな

その詩は、片方が作った詩。何度もタケヒコに怒られながら、自分に笑われながらも、必死に、真摯に、一心に、作った詩。そして、届けるべき相手に、なかなか届けられなかった詩。
呪を、懐にヒミコは大事そうにしまう。
ヒミコ「この詩は、そなたの兄が残した唯一の記憶」
スクネ「兄は、セイガは……」

兄の名を、スクネは口に出した。名を思い出すだけで、今まで感じていた怒りは、不思議と消えていた。代わりに苦しみがスクネを打ちのめす。

ヒミコ「そなたも気付いている通り、そなたの兄は、セイガは、塩土の翁として存在している」

スクネ「塩土の翁の記憶は……」

苦しみの中で塩土の翁を思い出す。記憶がない者には見えなかった。ただ、兄とは何処か違っていた気もする。

ヒミコ「わらわが記憶を与えた」

遠い目をしながらヒミコは続ける。

ヒミコ「そこには感情も何もない。あるのは与えられた情報と、それに対するわらわが教えた反応の演技のみと思っていたが……この間、そなたと会った時、確かに、塩土の翁は感情を見せていた」

そして、ヒミコは笑みを浮かべる。

ヒミコ「そして……その事実はわらわに自信を与えた。神に対し得る、強い意志の存在を」

笑みを引っ込め、ヒミコが元の表情に戻る。

ヒミコ「少し話が逸れた。そなたの話に戻ろう」

苦しみから、息苦しさから、スクネは逃れたかった。それなのに、この話から逃げれば、更なる苦しみが襲いかかるような気がして、逃れる事は出来なかった。

ヒミコ「そなたが得たのは、死に逝くはずだった捨て子。魂はすでに黄泉へと旅立っていた赤子。クメと名付けられた赤子」

その名を聞いて心に激痛が走る。信じられないほどの罪悪感がスクネの心を襲う。それでも、それを押し込める。壊れそうなほどの苦しみを押し込める。

本当に壊れる前に、聞かねばならない事を聞くためスクネは立ち上がった。

スクネ「カグヤに何をした」

声を出すのも辛い。それでも、スクネは必死に声を出す。息苦しさと渇きを、無理やり押し込めて。

ヒミコ「突然、何を聞いてくる？」

スクネ「カグヤが神の力を得ているのに、なぜ記憶が消えない」

ヒミコ「何の事を言っておるのやら。わらわごときが、神の器に何も出来ぬことは存じておろう」

スクネ「もう一度聞く、カグヤに何をした」

現在のスクネにとって、この問いはすべてに優先された。自分の心よりも、自分の命よりも、なぜか理由もわからずに。

ヒミコ「何も出来ぬ。神の器として生まれた者は運命によって守られる。自然の脅威、四魂、力の暴走、ありとあらゆる運命によって守られる」

ひょうひょうとヒミコは答える。

スクネ「そんなことは知っている。カグヤに何をした。なぜ記憶が消えない。なぜ神に二度も身体を奪われながら、理性を保てる」

ヒミコ「偶然であろう。それよりも……いい事を教えよう。真布（まふつ）津鏡（かがみ）と五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）が、現在タマモと共に狗奴国にある」

動揺が走る。恐怖が、壊れかけたスクネの心に襲いかかる。

スクネ「まさかカグヤを」

ヒミコ「他に理由が？」

何かが壊れた音がした。音と共にスクネはその場に崩れ落ちた。

広げたヒミコの手のひら上に鮮やかな紫色をした呪が乗せられていた。

ヒミコ「心の傷をえぐるような真似をしてすまなかったな。そなたの力無くば、神は降臨せぬ。だから、帰せぬゆえな」

そして、やさしくヒミコは微笑む。

ヒミコ「スクネ、あなたはこの世界で今度こそ幸せになりなさい。ですが、その前に……己の過去と向かい合って貰わなければなりま

せん。自ら封じている記憶と……それだけが、あの人をこの世界へと導いてくれる、唯一の手段ですから」

そう呟くと、ヒミコは自らの背の後ろで横になっている塩土の翁に目をやる。

ヒミコ「もう少しです。あと少しだけ、あの中で我慢してください。かならず魂の残りすべてをこの世界に取り戻します」

そして、憎しみを込めてヒミコは最後に付け足した。

ヒミコ「そして、あれの時を終わらせる」

無意味な勝利1

巨大な社の前に集まる猛者達。静かだが、いっさいの緩みを許さない張り詰めた場で、一人の声が響きわたる。

ショウセン「大王アシハラシ　ジョウコウ様の遺言により次の大王にアシハラシ　シンム様が就任なさる。異論のあられる御方はおられるかな」

主無き席の隣に立つカカシ　ショウセンが、正面に座する三十人程の者達に、物腰は柔らかでありながら、力強い声で語る。

そ　の隣で、シンムは座して目を見開き、狗奴国の誇る歴戦の猛者達を見回す。手前から順に位の高い者達が座していると、タケヒコから予め聞いていた。その顔を見る。一番手前には良く見知った顔が並ぶ。その後ろには、何度か見覚えのある顔もありはしたが、ほとんど知らない者ばかり。ある者は目を閉じ、ある者は見るからに怒りを抑え、ある者は品定めするように凝視していた。その表情から分かるのは、明らかに一人も歓迎している者はいないだろうという事実だった。

侮蔑と激昂が渦巻く沈黙を破り、先頭に座する者が発言する。

マサノリ「先に聞いておく！　カカシ老はどう思っておる。余所の負け犬の下にわし等が着くことを」

怒りの色を見せる眼をぎょろりとさせながら、マサノリは言った。

ショウセン「中立ですな。大王になられた方にわしは仕える。じゃから大王がおらぬ今は中立ですな」

静かに力強くショウセンは答えた。その答えが気に入らなかったのか、元々真っ赤にしていた顔を、更に真っ赤にさせてマサノリは睨みつけて来た。

マサノリ「わしは、狗奴国の大王に強者がなる意外は気に食わん。負け犬、おのれはなにが出来る」

シンム「やれることは全部やる」

眼を見会わせて、シンムは即答した。本気で、最初から思っていた故、考える必要性がなかったために即答したのだが、マサノリの怒りを煽るには十分だった。

マサノリ「即答しおったな。勝負しろ。わしにその言葉、嘘でない事を示せぃ。従兄は最強だった。おのれも実力なり、才なり、見せろ！」

シンム「いいぜ。それで認めてくれんなら」

自分でも信じられない位、シンムは冷静だった。少し前ならマサノリの大声に触発されて、我を忘れていたはずなのに。

マサノリ「表に出ろ！　カカシ老見届けぃ。他の奴等は道を空けろ！」

激昂と共にマサノリが叫ぶ。通路が、叫びに呼応して左右に動く人々によって開けて行く。出来上がった通路を、マサノリは言葉にならない声を荒げ、大地を踏みつけて歩いて行く。

静かに、シンムは後ろから付いて行った。

二人は対面して戦いの合図を待つ。両者の手には木刀が握られ、両極端の表情を見せる。怒り狂うマサノリと、涼しげなシンム。

二人を見据える位置に立つショウセンが確認する。

ショウセン「お二方とも、準備はよろしいですかな」

マサノリ「早くしろ！　わしはそんなもの、いつでも出来ておる！」

シンム「おれは……いいぜ、いつでも」

自分でも不思議な状態だった。対面するマサノリに集中しつつも、シンムは周りの景色がよく見えた。殺気を受け、飛んで逃げる鳥達。風を受けてざわめく草花。好奇の眼で見る観客達。そのすべてが感じられた。

高々と上げた手を、ショウセンが下ろす。

ショウセン「始めなされよ」

勝負は一瞬で着いた。開始と同時に突進して来たマサノリの木刀

を、シンムは振り下ろそうとした瞬間に弾き飛ばした。弾き飛ばした木刀がマサノリの背後に転がる。信じられないものを視た様にマサノリは目を見開き、自らの頬を一回叩いた。

勝敗を見届けたショウセンが声を出す

ショウセン「決まりましたな。よろしいですかな、マサノリ殿」

決着がついた事を、驚くマサノリにショウセンが確認する。

マサノリ「この男、従兄の技を……最早、わしに文句など言えるか！」

吐き捨てるようにマサノリは言った。

シンム「これからたのむぜ、叔父さん」

木刀をシンムは横に置いてから手を差し伸べた。

マサノリ「好きにしろ！」

差し伸べた手が弾かれる。そして、マサノリはその場に座り込み、背を見せてぶつくさ言っている。

目をシンムはショウセンに向けると、こくりと頷かれた。だから、それ以上何も言わず、シンムもマサノリに背を向けた。

席に戻ると、ショウセンは改めて他に意見が無いかを求めた。先程と違い、今度はどよめきを見せている。それは侮蔑でなく、明らかに動揺の色が濃かった。どよめきの中、ショウセンの声が響き渡る。ただ黙って、シンムは目の前の猛者達を見つめながら意見を待った。

ショウセン「他に、どなたも異論があらぬのでしたら、大王にシンム様が就任なされてよろしいのですな」

最初から目を閉じ、たまに首を横に落としては頭を振って意識を保っていた、最前列に座すもう一人の男が手を上げる。

明らかに眠りかけていたその男は、いつの間にか目を開き、精気に満ちた表情をしていた。

ハルモチ「ショウセン殿、意見を述べさせて貰ってもよろしいかな？」

その男は初めて会った際に呆けている様にしか見えなかったイナバ　ハルモチだった。

ショウセン「今日は調子がよろしいようでなによりですな。ハルモチ殿、何かありますかな」

うむと頷くと、全身をハルモチはシンムに向けて来た。その礼儀正しい態度に、シンムも背筋を伸ばす。

ハルモチ「シンム様と申されたな。このハルモチ、先々代よりこの国に使えさせて貰っておるが、余所者が大王に就任なさるのは初めてでの……単刀直入に言わせて貰いますが、信用も、信頼も、出来ませぬ。とはいえ、故親方様の言は存外には出来ぬ」

真摯に言ったハルモチの言葉が、シンムの心に突き刺さる。当然の論理、それだけに反論が出来ない。乏しい自らの言葉や知識で反論しても、どうにもならないと悟ったから。

ショウセン「つまり、どうなされたいのですかな？」

言葉に詰まったスクネを察したのか、ショウセンが口を挟んだ。言葉を口にしたショウセンに向き直して、ハルモチが言う。

ハルモチ「一時的に、大王の座をシンム様が預かると言う形には出来ませぬかな？　今後どうするにせよ、時間も必要であろう」

真摯なハルモチの言葉に賛成するかのように、頷く者が多数表れる。そのしぐさを見てショウセンが賛同者に挙手をうながす。

結果は満場一致だった。

ショウセン「どういたします、シンム殿？　何か意見があられましたら、申されてはいかがですかな？」

シンム「何もねぇ。それでいいんなら、それで認めて貰う」

本心でないことをシンムは言った。本当はこの提案は望外。無視されるか、失笑を買う位ならまだしも、内部分裂の可能性が一番高い事を、タケヒコから聞かされていたから。だから、これ以上の条件など望めるはずなかった。

ショウセン「ふでしたら、一年ほど様子を見ましてから、正式に就任でよろしいですかな？」

そのショウセンの提案に対する答えは全員同じだった。

一同「意義なし」

終わると、シンムに緊張していた実感はなかったが、大量の汗が噴き出た。自分としては、望外の結果を得た事に安堵しつつ、全員の退席を待ってから、シンムもその場を後にした。

無意味な勝利2

崖下の平野が一望出来る場所にタケヒコは立っていた。頭によぎるのは、現在、別の場所で一人戦っているシンム。現在、大王になるべく戦う相手は老獪な歴戦のお歴々。おそらく、誰一人余所者の就任などお認めになられないだろう。その状況下で、一人でも味方を作らないといけない。しかも、シンムの苦手とする交渉によって。出来れば手助けをしたかったが、実際には、その件で自分に出来る事は何もない。　そこまで頭を働かせてから、それ以上考えるのをタケヒコは止める。全身を戦いのために集中させ、眼前に広がる敵を見据える。両手に剣を握り、四魂（しこん）として、自らの持つ力を行使すべく精神を統一する。

敵は妖鬼の大群。数は万を優に超えるだろう。辺りに味方は誰もいない。それは、タケヒコが本気で戦っても誰も犠牲が出ないことを意味する。それは、妖鬼達にとっての絶望を意味した。

大声で静かに、タケヒコは通告する。同時に、すさまじいばかりの殺意を発しながら。

タケヒコ「妖鬼達よ。現在、感じているであろう恐怖の本能に従い、退きなさい！　これ以上の行軍は許しません！」

崖下の敵が、妖鬼となる前、動物であった頃なら、本能がそれ以上の歩みを許さず、散開して逃げ出しただろう。だが、妖鬼達は恐怖が襲って来ても行軍を続ける。自らの意志はすでに奪われ、別の者の意志に従うしかなかった。

通告を無視して行軍を続ける妖鬼達のために、タケヒコは黙祷を捧げる。一分後、目を開くと同時に崖下へ跳躍。

平原に足を踏みしめる間もなく、タケヒコは再び地上寸前を跳躍する。両手に握られた剣が、左右の妖鬼の群れを分断する。妖鬼の大群が画材と化し、直線が描き出される。その直線は妖鬼達を黄泉

へと誘う奈落。それを描き出す者は飛翔する。その手に握った剣を翼に変えて。

そして、奈落にすべての妖鬼が落ちた。痛みも、自らの死さえも、感じる時間も与えられない程、わずかな間に。

翼をたたみ、地上にタケヒコは降り立つと、最大級の殺気を放ち、天を睨みつけた。来たる真の戦いに闘志をたぎらせながら。

その姿を、嬉しそうに雲の上から眺める者がいる。その者は妖鬼がいくら葬られようとも気にも留めない。妖鬼がいくら集まろうとも、四魂には何の障害にもならないことを知っている。まして、タケヒコは翼を広げ大地を飛翔している。その姿を見たいがために、妖鬼を準備しただけなのだから。その美しい姿の彩りとして、妖鬼がいるのだから。

天を見上げたタケヒコは、自らを見下ろす者に向かって高々に叫ぶ。

タケヒコ「タマモ、出て来なさい。いることはわかっています」

その叫びに呼応して空から舞い降りて来る。かつて、伊都国を壊滅せしめた死の天女が、口元をほころばせ、悠々とタケヒコの目の前に降り立った。

死の天女の名はアメノ　タマモ。その者はうれしそうに語る。

タマモ「ふふふ。そう、うっとりするぐらい、そう。あなたの翼は戦いの中でこそ、大きく、力強く、美しく、羽ばたくの」

その表情にタケヒコは憤りを覚える。戦いとは言えない、一方的な殺戮（さつりく）。本来、存在してはならない程の圧倒的な力。

だから憤りを覚える。妖鬼の命運を知っていたはずのタマモに。

タケヒコ「やはりあなたが来ましたか。この国に、何をしに来たのです」

憤りを、無理やり心の奥底に押し込めて、タケヒコは冷静に言葉を出した。冷静さを失えば、タマモを相手に戦えないから。自らの目的達成など不可能になるから。だから、心を落ち着ける。

タマモ「ふふふ。お久しぶりかしら、タケヒコ。来た理由は公的

な用件が二つ、私的な用件が一つって所かしら」
人差し指を頬に当てながら、こちらの反応を楽しんでいるのか、タマモは舐める様な視線を見せ、口元を緩め、ゆっくりとタケヒコの回りを一周した。
タケヒコ「あなた方にカグヤ様は決して渡しません」
タマモ「ふふふ。あなたには悪いのだけど……真布津鏡も、器も、両方持って帰らせてもらうわ。それがタケヒコの為だと思うし」
不可思議な事をタマモは口にした。奪ったはずの真布津鏡を持って帰ると。顔に出さないよう気をつけながら、タケヒコはその意味を自らに問う。
妖艶な笑みを見せるタマモを、タケヒコは見つめながら、色々な可能性を自らに問う。言葉巧みにこちらを何らかの方向へと誘導している可能性、ヒミコから何も知らされていない可能性、本当にそれが事実である可能性などを。
楽しそうにタマモは言って来た。
タマモ「どうするのかしら？　戦う？　神器同士の戦いになるかもしれないけれど……そうなると、手加減まったく出来ないわね。この辺り一体全部吹き飛ぶわよ」
心の中で疑念が渦巻く。もしも、真布津鏡の件を何らかの理由でタマモが知らないのなら、若干の勝機も見えて来る。だから、タケヒコは駄目で元々と思いながら、言葉を口に出した。
タケヒコ「お互いに神器を使わなければ問題ありません」
タマモ「タケヒコの言葉は尊重したいのだけど……それは約束出来そうにないわね」
その言葉を聞いて、内心で笑いながら、それを悟らせない様にタケヒコはすぐ行動に出る。
タケヒコ「でしたら、使う暇を与えないだけです」
駆け寄り、間合いを詰め、タケヒコは右手に握った天之羽張を振り下ろす。後ろに飛び退き、タマモが避ける。次手に移る。左手に握った小金丸で、タマモの着地よりも早く、身体目掛けて突きを入

れる。突きは、天詔琴（あまのりごと）と銘付けられた弓で払い退けられるが、更に流れるように天之羽張（あまのはばしり）を下から跳ね上げた。一本の矢が落ちる。投げつけられた矢を弾き飛ばしたために。

間合いは元通りに戻っていた。

タマモ「いきなりとは酷いわね。女性にはやさしくしなさい」

タケヒコ「今の攻撃で、半歩近づくつもりでしたが……」

本心をタケヒコは口にした。出来得る限り、真布津鏡（まふつかがみ）の件を悟らせないためにも、タケヒコはそれ以外の事は本心を口にする。

タマモ「ふふふ。その左手に握っているのが天之羽々斬（あまのはばきり）だったら、うまくいったのでしょうけれど……そんな玩具でどうする気かしら？」

決してタマモに考える時間を与えない。玩具とタマモが言った小金丸（こがねまる）を一閃する。

タケヒコ「これはこれで業物ですよ。キサラギ様に作っていただきましたから」

タマモ「キサラギが創ったと言うの！」

そして、話題を極力逸らすために、タケヒコは小金丸（こがねまる）を打った者の名を出した。それは功を奏し、予想通りタマモが食らいついて来た。

タケヒコ「あなたならキサラギ様が作る物が何か御存知のはずですが？」

タマモ「それが新しい神宝（かむたから）とでも……」

警戒したのか、タマモが飛行呪で空高く舞い上がろうとする。当然、タケヒコはそれを阻止する。小金丸（こがねまる）を背中に隠し、タマモの死角から呪を砕く。

剣の間合いの外からの攻撃に、タマモが警戒を更に強める。

タマモ「今のは……空間歪曲？　その剣に、天之壽矛（あまのじゅぼこ）と同等の力があるということかしら？」

タケヒコ「さすがですね、今の一撃で気付くとは。問いにはお答えは出来かねますが……ただ、あなたに間合いを与えるつもりは一

切ありません」

その言葉がやぶへびになったのか、タマモが恐れていた言葉を口にする。

タマモ「タケヒコがそこまで神器の使用にこだわるなんて、そんなにこんな国が大事かしら?」

タケヒコ「五百之御統之珠(いおつのみすまるのたま)を使用する時間など与えないと言ったはずです」

タマモ「ふふふ。そうやって?きになったあなたも素敵よ」

天之羽々矢(あまのはばや)を天詔琴(あまのりごと)に掛け、タマモは前転しながら跳躍する。丁度、タケヒコの頭上で逆さになると、天之羽々矢(あまのはばや)を放った。放たれると同時に、天之羽々矢(あまのはばや)の力で一本の矢は百本に増え、天詔琴(あまのりごと)の力で百発百中と化した矢が、頭上から降り注ぐ。頭上から降り注ぐ矢のすべてをタケヒコは天之羽張(あまのはばしり)で弾く。弾く際、一部の矢をタマモに向けて弾き飛ばすが、それらは弓で防がれた。

間を置かず、タケヒコは飛び上がる。今度はタケヒコがタマモの頭上付近に到達すると、天之羽張(あまのはばしり)を両手に握って急降下する。横に反転しながらタマモは避けると、弓を構えて矢を放った。今度は百本の矢が綺麗に一列に並ぶ。着地と同時に行おうとしていた攻撃をタケヒコは中断して、それを剣で受け止め続けながら前進するが、矢の圧力が速度を奪う。そのわずかな隙にタマモが距離を取る。

間合いが広がりつつあるのをタケヒコは確認すると、前進を止め、片手を背中に隠し、空間歪曲の力でタマモを背後から攻撃する。その攻撃が弓によって防がれる。

空間歪曲の攻撃を寸前まで見極めていたタマモが嘲笑する。

タマモ「ふふふ。騙したわね。これ天之壽矛(あまのじゅぼこ)でしょう?」

タケヒコ「騙したとは心外ですね。わたしは空間歪曲が、小金丸(こがねまる)の力と言った覚えはないですが?」

露顕した以上、天之壽矛(あまのじゅぼこ)を隠す必要が無くなり、小金丸(こがねまる)を鞘にしまう。そして、天之羽張(あまのはばしり)と天之壽矛(あまのじゅぼこ)を握って、タケヒコは滲みよる。少しでも間合いを狭めるために。

鞘にしまった小金丸（こがねまる）にタマモが目をやる。
タマモ「もうなんでもいいわ。どうせそれ、キサラギが作っただけの剣でしょう？　でも許してあげる。ここからが本番だから、お互い本気で舞いましょう。生と死の美しく、儚（はかな）い、尊き舞を」
その言葉の意味を悟って、タケヒコは加速する。
紫色の輝きが、タマモから周囲に放たれ始める。かつて、伊都国を滅ぼした光景が眼前に広がる。圧倒的な力による蹂躙の開始。
最早、「間に合わない」とタケヒコが内心思い始めた矢先だった。絶望の始まりを告げる輝きの方向から、希望が飛来したのは。
背後から飛来したそれにタマモは気付かない。紫色の輝きがそれの目視を防ぐ。
それを手に取ると、タケヒコはすぐさま懐に隠した。
タケヒ「（真布津鏡（まふつかがみ）。スクネ、帰って来たのですね。これがあるならば……」
飛来した希望は真布津鏡（まふつかがみ）だった。
タマモ「これでタケヒコも神器を使わないと勝てないわよ」
タケヒコ「いいでしょう。ただし、あなたも覚悟なさい！」
空へ向けてタマモが弓を引く。放たれた矢が遥か上空で一本の矢から百万の矢となる。そして、百万の矢は光速で上空からタケヒコ目掛けて降り注ぐ。
あわてずに懐から真布津鏡（まふつかがみ）をタケヒコは取り出す。さも、ずっと持っていたかの如く。取り出した鏡が輝き始める。真布津鏡（まふつかがみ）の力で、タケヒコは空間の時間を遅くする。その空間に入った矢は止まった様に遅くなる。すべての矢が空間に入り、遅くなると、タケヒコは走り出した。更なる矢が放たれる。同様に時間を遅くした空間で止める。
思惑に気づかれたのか、その動作を見たタマモが天詔琴を地面に突き立てる。そして、両手の指の間に八本の矢を握りしめる。
感づかれた可能性を考慮に入れながらも、タケヒコは走る。背後からは遅くなった計二百万本の矢が迫っていた。

八本の矢を天詔琴（あまのりごと）につがえたタマモは、やはり笑みを浮かべている。

タマモ「このままだと、あなたも死ぬわよ。いいのかしら？」

タケヒコ「このまま、わたしと共に行って貰います……黄泉へと」

何としても、タマモの動きを封じ、二百万本の矢を自らと共に浴びせさせる。四魂をこの時代から二人消し去る。それが、神代（かむよ）を終わらせるための、タケヒコ最期の賭け。

タマモ「うれしいお誘いだけど……そこはあまり好きになれそうにないの、場所の変更を求めるわ。それ位は問題ないでしょう？」

二種の強力な力を持つ天詔琴（あまのりごと）と呼ばれる神宝（かむたから）。一つはかつて伊都国を滅亡させた対象に必ず命中させる力。もう一つは、同じ様に伊都国で使用された、あらゆる物質を矢として放つ力。

その天詔琴（あまのりごと）から、八本の矢が放たれる。矢はタマモが好んで使う雷撃呪。まっすぐに四本の矢が、わずかな時間的な誤差と共に飛来する。その四本すべてをタケヒコは天之羽張（あまのはばしり）で叩き落す。叩き落とす間に、残りの四本がタケヒコを追い越し、背後でその矢通しが衝突する。力と力の衝突により生まれた衝撃波が、一塊と化していた二百万の矢を瞬時に消滅させる。

タマモ「ふふふ。わたしと消えれば神代（かむよ）が終わりを告げるとでも思ったのね。あなたにしては浅はか、周りに散らかっていた失敗作のせいで、鈍くなったかしら？　わたしが片付けて上げたら、もう少しましな考えでも浮かぶかしら？」

驚愕の表情を浮かべたまま、タケヒコは言葉を返さない。代わりに走るのを止める。

突然、タマモが膝を曲げて前のめりに倒れる。倒れたタマモの背中に矢が一本だけ突き刺さっている。それは、タマモの放った天之羽々矢（あまのはばや）。それは、二人の戦いの合間に、気配を消して近づいたスクネが、タマモの背後から突き刺した矢。

立ち止まったタケヒコの目の前で、倒れたタマモから五百之御統（いおつのみすま）之珠（るのたま）を、スクネがむしり取るのが見えた。

それは、タマモにとってあまりにも突然訪れた死だった。

すでに狗奴国の街並みが見え始めている。先程まで戦っていた地は、タマモを葬った場所は、視界に入れる事は出来ない。二人がその気になれば、街まで一瞬で戻れる距離に違いなかったが、二人はゆっくりと戻って来た。その間、一言も話さずに。

沈黙をタケヒコが破る。勝利の余韻とは遥かな隔たりがある、苦渋の表情で。

タケヒコ「スクネ、なぜ助けたのです。あのまま、わたしがタマモと共に消えていれば、神代も終わったでしょうに」

責めるようにタケヒコは言った。自らの命よりも、神代を終わらせたかったから。

スクネ「……二人では意味がない」

簡潔だが、スクネの言葉の意味を察してしまったタケヒコは言葉に詰まってしまう。

タケヒコ「そんなことは……」

否定する言葉をタケヒコは必死に探す。しかし、そんな言葉は思い浮かばなかった。

スクネ「くだらない奇跡にすがるのは止めろ。神代に入っている間は、何よりも強く神の命の影響を受ける」

分かっているはずだった。神の降臨は、二人の四魂によって行われる。だから、タマモを道ずれにして、自害するつもりだった。四魂が二人死ねば、残るは二人。そして、スクネが神の降臨など望むはずがないと。だがそれは、神の命に背く事。そして、神の命は絶対の法則。それこそ、本当に奇跡を起こしてでも、神の命である降臨は行われる。今が神代である以上は。かつて、その事実を突き付けられたのだから。

遣り切れない思いをタケヒコはぶつける。

タケヒコ「しかし、それを言い出したら、最早どうにもならないではないですか」

スクネ「ならない」
そうスクネは言った。そう言い切った。
最初からタケヒコには分かっていたはずの事実。それでも、わずかな望みを掛けていた行為を、否定され、天を仰いだ。
次の言葉を出す前に、落ち着くために、タケヒコは一呼吸入れる。
タケヒコ「あなたが戻って来たら、答えてもらう約束でしたね。この間、なぜわたしの邪魔をしたのです」
スクネ「天露之糸（あまつゆのいと）」
即答だった。本当なら、それは理解できる話。天露之糸（あまつゆのいと）の針の力なら四魂でも抗えないから。それでも疑問は残る。あの時セイガは気を失っていたはず。それに、スクネは明らかにヒミコの命に反応していたから。
タケヒコ「確かに天露之糸（あまつゆのいと）の力ならば、あなたをも操れるでしょうが……色々とおかしいですね」
スクネ「具体的には何処がおかしい」
タケヒコ「それはですね……」
言葉の続きをタケヒコは呑みこむ。見覚えのある二人が、街の外で揉めているのが目に入ったために。

無意味な勝利3

望外の結果を得た会議を終え、シンムは帰路の途上で、姉であるカグヤが立っているのが目に入った。掛ける言葉が見つからず、シンムは思わず目を逸らしてしまう。

それに気付いたカグヤが、怒りと悲しみとが混雑した声を出す。

カグヤ「本当の姉弟じゃないかもしれないけどさ。でも……そんなこと、今さら関係ないよ」

シンム「違う！」

なぜかシンムは自分でも分からないが、目を会わせられない。それでも、シンムは思いのすべてを込めるつもりで、カグヤの言葉を強く否定した。

その思いは姉に届かない。

カグヤ「なんにも違わないよ。血がつながっていなくっても、あなたは弟だよ、すくなくともわたしは……」

シンム「違うって言ってんだろ！　姉貴が、姉貴かどうかの問題じゃねぇ！」

カグヤ「じゃあ、なんで目を逸らすのさ！　それとも、大王になったら、わたしとは関わりたくないって言うの！」

シンム「冗談じゃねぇ！　大王だろうと、なんだろうと……姉貴は姉貴に決まってんだろ！　ただ今は放っといてくれ！」

カグヤ「全然、意味がわかんないよ！」

口論になる。出来れば喧嘩をしたくはない。目を会わせて話せればとシンムは思う。でも、今それをすれば……

シンム「姉貴に会うと聞いてしまいそうなんだよ。一歩間違うと責めてしまいそうなんだよ。だけど、出来れば今まで通りに、伊都国にいた頃の様に暮らしてぇから。ジョウコウさんが許せって言ってくれたみてぇだから」

たまらず思いを声にした。言葉にした事をシンムは後悔する。逃

げ出したい気持ちが心を覆い、他の事が何も考えられなくなる。だから、目だけでなく、シンムは顔ごと背けた。
顔を背けたシンムの両肩を、カグヤが両手で掴んで揺すりだす。
カグヤ「あなた何の事を言ってんの？　伯父さんが何て言ったの？」
シンム「姉貴を許してやれって言ったらしいから……おれはそれを信じてぇ」
カグヤ「わたしを許す？　やっぱり、わたしが何かしたの？」
シンム「ジョウコウさんが姉貴を殺そうとして。そしたら、姉貴がジョウコウさんを……」
自分に「何を言っているんだ」と、シンムは問いかける。自分に「この話題に触れたくなかったはずなのに」と、問いかける。
両肩を揺らすカグヤの手の動きが止まる。
シンム「とにかく、この話題はこれ以上したくねぇ」
この話に終止符を打って、取り敢えず他の話題を探しつつ、カグヤにシンムは顔を向けた。
シンム「姉貴？」
顔を向けると、信じられない事がカグヤに起こっていた。
飛行呪を使ってもいないのに浮遊を始める。そして、常人ではありえない速度でカグヤが離れて行く。
カグヤ「やっぱりわたしが伯父さんを殺したの？　それにスクネを殺そうとしたの……わたしが？」
姉が何を言ったか、シンムには聞こえない。困惑している時間などあるはずもなく、シンムは離れて行くカグヤを、全速力で追いかけた。
結局、引き離される一方だったが。

街の外で片手を失っているモリヤが、浮遊するカグヤの足に掴みかかっていた。その光景が、タケヒコの言葉を止める。同じ結果を

起こすわけにはいけないから。
カグヤ「失敗作！」
掴みかかったモリヤを見たカグヤの顔が、恐怖で引きつっていく。
モリヤ「死にたくない、死にたくない。おまえが……おまえ等が、あの馬の骨が全部悪いんだ。僕は死にたくない」
目を充血させたモリヤがわめき散らしていた。
カグヤ「スクネ、どこに行ったの？　早く助けに来てよ。いやだよ。もう二度と……もう二度といやだよ」
泣き崩れ、その場に座り込むカグヤ。足から肩に手を持ち替えて、わめき散らすモリヤ。

二人を見つけたタケヒコが動き出すより早く、スクネが動く。無理やりモリヤをカグヤから引き離すと、放り投げた。そして、スクネがカグヤの手を握る
手を握られたカグヤが、恐怖に満ちた眼をスクネに向ける
カグヤ「違う。スクネに似ているけど……違う。違うよ、手を放して！　助けてよ、スクネ」
泣きながらカグヤが必死に手を動かすが、スクネに握られた手は振り解かれない。
タケヒコ「まさか、その男は……カグヤ様を放しなさい、ツクヨセイガ！」
言葉と共にタケヒコは動く。天之羽張（あまのはばしり）を抜き、塩土の翁に斬りかかる。しかし、天之羽張（あまのはばしり）は、眼前を横切った上空からの一本の矢に遮られた。
その矢を見て、タケヒコは先程死んだ者の名を口にした。
タケヒコ「タマモ！」
タマモ「正解。随分おひさしぶりね、タケヒコ。ご機嫌はいかがかしら？」
無傷のタマモが、妖艶な笑みを浮かべながら、上空に浮かんでいた。

タケヒコ「タマモ、邪魔はさせません」
上空のタマモを視界に捉えると、タケヒコは殺意の目で睨みつけた。
タマモ「ふふふ。わたしと舞う？　それとも、器を守る方を選ぶ？　それだと、少し妬けるわ」
返答代わりに、タケヒコは左手に天之壽矛（あまのじゅぼこ）を握り、上空のタマモを突く。同時に、天之羽張（あまのはばしり）を塩土の翁に向かって払う。何の変哲もない攻撃は、予想通り塩土の翁とタマモに簡単に避けられる。予想していたが故に、タケヒコは迅速に次の行動へと移る。泣き崩れるカグヤを守るべく。
ゆっくりとタマモが降りて来る。更には塩土の翁が若干後退して間合いを広げる。
天之羽張（あまのはばしり）と天之壽矛（あまのじゅぼこ）の両方で二人を牽制しながら、タケヒコは背中越しに、泣き崩れているカグヤに話しかける。
タケヒコ「カグヤ様、この場は大丈夫です。ですから、わたしの近くから離れないようにお願いします」
二人の一挙一動に細心の注意を払いながら、タケヒコは現状を切り抜けるすべを模索する。四魂二人を相手にしながら、カグヤを守り通す手立てを。
背後のカグヤは泣き叫びながら、きょろきょろと辺りを見回している。
カグヤ「スクネは？　スクネは何処に行ったの？　スクネを連れて来てよ！」
タマモ「ふふふ。スクネならそこにいるでしょう。最も、あなたの望むスクネかどうかまでは知らないけれど」
口元を妖しく歪めるタマモの視線の先には、塩土の翁がいた。
カグヤ「黙って、タマモ。スクネを呼んで！　わたしの言っているスクネは土偶なんかじゃないよ！」
背後のカグヤは、タケヒコの予想も出来なかった言葉を口にした。
タケヒコ「今、何と言いました……カグヤ様？」

驚愕するタケヒコの問いかけに、カグヤは答えない。
タケヒコ「塩土の翁が……土偶？」
牽制のため、塩土の翁に向けた天之羽張（あまのはばしり）を持つ手に自然と力が入る。
逆の手に持った、天之壽矛（あまのじゅぼこ）の向けた先にいるタマモが妖しく微笑む。
タマモ「ふふふ。タケヒコでも分からなかったかしら……でも、仕方ないわ。わたしも最初は、騙されたのだし」
先程から無言の、塩土の翁を横目でタケヒコは見ながら、タマモの言葉を耳に流していた。
タマモ「なかなかいい出来でしょう？　その人形に、ツクヨセイガの魂の断片を封じ込めているらしいわ」
タケヒコ「このセイガが土偶？」
タマモ「信じられないかしら？　だったら、いい物を見せてあげる。わざわざ、ヒミコが作った物を」
紫色の呪を取り出すと、タマモはモリヤを掴み上げ、その呪をモリヤの頭に当てる。そして、投げられ、呪がタケヒコの足下に落ちる。
目線を一瞬だけ、タケヒコはそれに移す。そして、呪を投げたタマモの目線を向けた。
タマモ「その呪は記憶の模造品らしいわ。それ、今やったのと同じ様に使ってみなさい」
タケヒコ「記憶の模造品？　呪に、モリヤ様の記憶を映し出したとでも言うのですか」
タマモ「御明察の通り。それを応用して、この土偶に魂の断片を封じているらしいから……とりあえず、頭に当ててみなさい」
二人の動きに注意を払いながら、タケヒコは天之羽張（あまのはばしり）を地に突き刺す。呪を蹴り上げて掴むと、それを頭に当てた。
映像が目の前に広がる。見えたのは何者かによって殺され続ける姿。それによって、モリヤの死体が生まれ続ける姿。

タケヒコ「永劫死を与えられたのですか、モリヤ様」
呪を頭から離すと映像が消える。ちらりと目線をモリヤに移すと、苦悩し続ける姿が見えた。
タケヒコ「最早、わたしに出来る事は……」
呪から流れた地獄が脳裏をよぎり、言葉の続きを言えなかった。
目線をタマモに向ける。
タマモ「現在の記憶を常に記録出来るらしいわ。これがないと、自分が誰かもわからない、何をすればいいかも分からない、人形と言うわけよ」
感傷に浸っている暇などない事を、タマモの声が呼び戻させる。
タケヒコ「この呪の力は理解できました。ヒミコに、なぜこれ程の力があるのです？　少なくとも、わたしの知っている限りでは不可能でしたが？」
タマモ「さぁ、神にでもなったのかしら？」
両手を広げてタマモがおどけてみせる。
タケヒコ「あなたも知らされてないのですね」
タマモ「聞いてるわよ。でも、教えないだけ」
注意深く表情の変化を見たが、予想通り顔には出さない。故に、これ以上の追求を止める。そして、現状打破に全力を注ぐため、全神経を集中させるべく脳を切り替える。
結果として、それすらかなわなかった。
シンム「姉貴やっとで……追いついた。突然どうしたんだ？」
息を切らせながらシンムはやって来た。
タケヒコ「シンム様、なぜこんな所に……」
嫌な汗を、タケヒコは背中に掻いていた。状況は悪い方へと向かっているから。座り込んだままのカグヤを守りながら戦うだけで至難なのに、もう一人増えたとなると、不可能といってもよかったから。
やって来たシンムに、タマモが声を掛ける。余裕を見せつけるかのように。

タマモ「ふふふ。坊や、まだ壊れていなかったのね。すごいわ、褒めてあげる」
シンム「てめぇ、タマモとか言う奴じゃねぇか。丁度いい、伊都国のみんなの仇、ここで討ってやる」
乱れていた呼吸を整えたシンムが、タマモを睨みつける。
タマモ「こわい、こわい。怖いぐらいに頭が悪いわ。褒めて、損したかしら？　そろそろ、場違いなことがわからないのかしら？」
シンム「あれ？　よくよく見んと、モリヤとスクネもいんのか？」
苦しむモリヤと塩土の翁を交互にシンムが見ていた。そのシンムに、タケヒコは事実を教えた。
タケヒコ「スクネは偽者です」
シンム「偽者？」
いぶかしげに塩土の翁をシンムが見ているが、くわしく説明をしている暇などあるはずもなく、タケヒコは声をかけた。
タケヒコ「お願いがあります、シンム様。カグヤ様を連れて下がっていてください。わたしがタマモを討ちます」
シンム「嫌だって言いてぇけど……分かったぜ。どうせ、また訳わかんねぇ理由があんだろ？　だったら任せるからしっかりやれよ、タケヒコ。姉貴、逃げるぞ」
明らかにシンムは不満気ではあったが、カグヤの安全を守る事を優先したのだろう、すぐさま行動に移る。
地に刺していた天之羽張（あまのはばしり）を抜き、四魂の二人がシンムとカグヤに手を出さない様に、タケヒコは警戒を強める。

不満顔のシンムが、カグヤの手を掴み逃げようとした時だった。
それを拒み、手を払いのけ、カグヤが怯えた声で叫んだ。
カグヤ「あなた誰？　近づかないで！　勝手にわたしに近づかないでよ！　助けてよ、スクネ！」
シンム「何言ってんだ、姉貴？　冗談だとしても面白くねぇよ、それ」

神代の訪れで、タケヒコが恐れていた事が現実になる。あれの力にカグヤの記憶が消される。すなわち、あれの降臨の準備が整った合図。

嬉しげなタマモの声が耳をつんざく。

タマモ「ふふふ。川原に転がっている石ころ一つ一つを、わざわざ記憶なんてする訳ないでしょう?」

タケヒコ「シンム様、カグヤ様は気が動転しているだけです。無理やりにでも連れて逃げてください！」

脳裏に絶望がよぎりながら、タケヒコは叫んだ。いま出来得る、最善の道を。

最悪の道を、タマモが語る。

タマモ「ふふふ。カグヤと言ったわね、わたしと来たら、本物のスクネの所に連れて行ってあげる。どちらか好きなほうを選びなさい」

怒声をあげながらタマモの言葉をシンムが否定する。

シンム「うるせぇ、姉貴がてめぇの言うこと聞くわけねぇだろ。さぁ、行こうぜ」

愉悦の表情を浮かべるタマモの言葉を聞いたカグヤが嬉しそうに立ち上がり、差し出されたシンムの手を払いのけた。

カグヤ「あなたの方こそ黙って。タマモ、本当にスクネの所に連れて行ってくれるんだよね?」

タマモ「ふふふ。スクネは今頃、わたしの知っている場所で、あなたが来るのを待っているはずよ」

カグヤ「だったら、今すぐ連れて行って！」

最悪の道へとタマモによって誘惑されていくカグヤに、タケヒコは祈る様な気持で声を上げる。自らを取り戻して欲しいという願いを込めて。

タケヒコ「カグヤ様、一緒に行かれてはなりません。スクネなら、直に戻ってまいります」

カグヤ「タケヒコも黙っててよ。わたしは今すぐに、スクネに会

って助けて貰うの。タマモ、早く連れて行って」
タケヒコ「シンム様、早く別の所へ、カグヤ様を無理やりにでも連れて行かれてください！」
天之壽矛（あまのじゅぼこ）をタケヒコは消して、懐に手を入れ、真布津鏡（まふつかがみ）を握りながら叫んだ。その叫びにシンムがすぐ反応する。
シンム「姉貴、こんなときに訳わかんねぇことばっか言ってんじゃねぇ。タマモはまかせたぜ、タケヒコ」
カグヤ「近づかないでって……言ったでしょう！」
無理やり連れて行こうとするシンムを拒絶するように、強い口調でカグヤが叫ぶ。そして、同時に生まれた衝撃波によって、シンムが吹き飛ばされる。
タケヒコ「仕方ありません」
衝撃波にシンムが吹き飛ばされたのを見て、これ以上は時間を掛けられないとタケヒコは判断を下した。ゆえに、強行突破を図るため、タケヒコは真布津鏡（まふつかがみ）を取りだす。神器の力を駆使する以外に、手立てがなかったから。
カグヤ「邪魔しないで」
手に握った真布津鏡（まふつかがみ）が、カグヤの手の中に転移する。
カグヤ「セイガ、タケヒコを拘束して！」
一瞬の出来事に動揺してしまい、タケヒコは致命的な隙を作ってしまう。結果、その隙を見逃されず、今まで口を閉ざし、まったく動かなかった塩土の翁から羽交い絞めにされてしまう。
カグヤ「絶対に放さないで！　いくらタケヒコでも、わたしの邪魔をこれ以上させないよ。それと、これは持って行くよ」
転移させた真布津鏡（まふつかがみ）をカグヤ見せる。
タケヒコ「カグヤ様、お願いですから、正気に戻ってください」
何とか塩土の翁の拘束から逃れようとするが、タケヒコは身動き一つ取れない。この時、あせりと絶望だけがタケヒコの心を支配していた。

衝撃波で吹き飛ばされた、シンムは地面に叩きつけられて腰を強く打った。確かに痛みは奔った。でもそれは、どうでもよく感じていた。よりにもよって、姉のカグヤから吹き飛ばされたという事実に比べれば。

シンム「今の……姉貴がやったのか？」

何でという思いが、シンムの心を染める。それには誰も答えてくれない。代わりに、姉であるはずのカグヤが、訳のわからない言葉を口にする。

カグヤ「タマモ、スクネが首を長くして待っているだろうから、早く行こうよ。スクネに守って貰わないと」

タマモ「らしいわよ、タケヒコ。あなたと、もう少し舞っていたいのだけど……悪いけど無理みたい」

流し目線でタマモがタケヒコを見ている。

自分は完全に蚊帳の外だとシンムも自覚している。それも「何で」だという思いもあるが、今はそんな事よりも大事なことがあるから。

シンム「なんか、全然訳わかんねぇけど……てめぇ等に姉貴は渡さねぇ！」

姉を渡したくないという思いが、シンムを行動に駆り立てる。都牟刈之太刀を握りしめ、タマモ目掛けて駆けた。

タマモ「なら、壊れなさい。元々、用はないの」

駆けるシンムに、タマモが無造作に矢を放った。その矢は雷撃呪から作られた矢。それは、シンムに取って絶望的な一撃。

タケヒコ「シンム様！」

断末魔の叫びの様な、タケヒコの声が聞こえた。

タマモ「もう遅いわ、タケヒコ」

嘲笑するタマモの声が聞こえた。

モリヤ「いやだ、死にたくない」

苦しむモリヤの声が聞こえた。

カグヤ「何してるの、タマモ。早くスクネの所に行くよ」

姉の訳のわからない言葉が聞こえた。
ジョウコウ「人には死に対する恐怖がある。人には死に対する恐れがある。すべての五感でそれを感じろ。そして、それを乗り越える本能を解き放てぃ」
それらの声すべてを押し退け、死した師の、父の声がシンムの脳裏に響く。
羽交い絞めにされたタケヒコが必死に手を伸ばす中、音速で走る矢がシンムに迫る。
その時、シンムには周りがすべて止まって見えた。空気の流れさえも。
シンム「唯我独尊汝無意味也（ゆいがどくそんなんじむいみなり）」
教わった念をシンムは唱えた。その念は、頭を瞬時に切り替える様にと教わった言葉。
言葉と共に、全ての雑念が消え、全ての音も消え、森羅万象が消える。最後に、自分だけが存在しているかのような空間にいる感覚が襲い掛かる。空間への侵入者を感じ、それをシンムは無心に切り裂く。それは雷撃の力が消え去り、軽い音と共に地に落ちた。
空間は、更にタマモをも飲み込む。自らの空間に引き込んだタマモを、都牟刈之太刀（つむがりのたち）で斬り払う。完全に油断していたタマモの反応が、一瞬だけ遅れる。都牟刈之太刀（つむがりのたち）がタマモを斬り払う瞬間、再び衝撃波がシンムを襲う。
結局、衝撃波で体制を崩したシンムの都牟刈之太刀（つむがりのたち）はむなしく宙を斬る。
タマモ「今、何が起ったの……答えなさい！　何をしたのか答えなさい！」
嘲笑が消え、動揺と怒りの色が、タマモの声に現われていた。
タケヒコ「シンム様……ジョウコウ様の技を体得されたのですか」
驚きと感嘆の色がタケヒコの声に現われている。
その両方の声が、シンムには聞こえなかった。ただ、カグヤの自

分を見る眼だけが心を支配していた。その眼は、弟を見る眼でなく、他人に対する眼でなく、敵を見る眼でもなく、道端に落ちる石ころを見ているような眼だった。

場に声が鳴り響く。

ヒミコ「全ての準備は整った。早く戻ってまいれ。始めよう、すべての始まりを」

その声は、女性の声だった。

シンム「誰だ？」

姉であったはずのカグヤの眼を見て、すべての思考が停止していたシンムの脳を、その声が再び動かした。

タケヒコ「ヒミコ！」

羽交い絞めにされていたタケヒコが、声の主の名を叫んだ。

塩土の翁「すぐに戻る。急げ、タマモ」

偽物だと聞いたスクネに似た男が、ヒミコの声に応える。

タマモ「人形は黙っていなさい！」

怒声をタマモが振りまいた。

カグヤ「わかったよ」

声に応えたカグヤが、タマモの手を掴んで浮上を始める。それを振りほどこうとタマモがもがき出す。

タマモ「あと刹那（せつな）だけ待ちなさい！　わたしに恥をかかせた、あれを壊してから……」

カグヤ「黙って、すぐに連れて行くって約束したよ。ぜったい、約束はやぶらせないよ」

苦々しげな眼をタマモはシンムに向ける。

タマモ「そこの破損品、シンムとかいう物を絶対に壊しなさい！　粉々になるまで破壊しつくしなさい！」

怒声を上げながら、タマモは無理やり握られた手と反対の手で、矢をモリヤ目掛けて投げつけた。矢がモリヤの首筋に突き刺さる。

矢は、伊都国で妖鬼に使った力を持っていた。

タケヒコ「魂魄強化！　タマモ、あなたという人は……」

魂を燃焼させて肉体の強化を行う魂魄強化は、魂の消滅という危険性と隣り合わせ。そんな力をモリヤに使ったタマモを、タケヒコは睨みつけた。

カグヤ「セイガ、もういいよ」

空高く舞い上がったカグヤの声によって、タケヒコの拘束が解かれた。

タケヒコ「逃しません」

カグヤ「邪魔、タケヒコ」

跳躍してカグヤが行くのを阻止しようとするタケヒコを、カグヤが衝撃波で吹き飛ばす。そして、三人はたちどころに見えなくなった。

姉が去って行くのを、シンムは見ている事しか出来なかった。追おうとしたが、モリヤに行く手を阻まれたから。

モリヤ「死にたくない、死にたくない……ぼくは死にたくないんだ！」

シンム「うるせぇ！　なら、勝手にどっか逃げれば良いだろ！　姉貴がどっか行っちまっただろうが！」

怒りをモリヤにぶつける。姉であったはずのカグヤが去って行ったのに、追う事も出来なかった怒りを言葉にしてぶつける。

モリヤ「死にたくない。死ぬなら馬の骨が死ね」

うめきながら、苦しみの声を上げながら、モリヤが右手でつららを乱射しながら、突っ込んで来る。魂魄強化によって飛躍的に高められたモリヤの力は、以前のそれを遥かに凌駕する。鬼と呼ばれる、人が人ならぬ者と化す変わりに得た力と、魂の消滅の危険性をはらむ、魂魄強化による力の結晶。それほどの力に、以前の自分なら対抗出来なかっただろうとシンムは思う。同時に、だが今は、と。

静かに、都牟刈之太刀を正眼に構える。迫り来るつららのすべてを、シンムが描き出した軌道の中に飲み込む。最後に、モリヤが飛

びかかって来た瞬間、わずかに身体の向きを変えた。都牟刈之太刀(つむがりのたち)が描き出した軌道に、モリヤの右手にかかる。

右手が地に落ち、モリヤは両手を失った。

モリヤ「シンム、シンム、シンム。どいつもこいつもシンム！おまえが僕から全部奪ったんだ。取り返してやる。全部、今ここで取り返してやる！」

二、三歩程動けば、都牟刈之太刀(つむがりのたち)の間合いに入る距離で、モリヤはわめいている。その姿に、シンムは今までの怒りを忘れて、ただ憐れみを覚えていた。

シンム「これでわかっただろ。わりぃけど、あんたには何もまかせれねぇ。後はどっかでのんびり暮らしてくれ」

モリヤ「うるさい、うるさい、うるさい。あの女も、この国も、糞婆の子のおまえに、母上を裏切った父上の思惑通りに、くれてやるかぁ！」

シンム「なら、仕方ねぇ」

一歩前に出る。自らの提案を受け入れてくれないのなら、斬るしかなかったから。

タケヒコ「いけません、シンム様」

間にタケヒコが割って入った。左手に握られた天之壽矛(あまのじゅぼこ)がシンムの都牟刈之太刀(つむがりのたち)を受け、右手に握られた天之羽張(あまのはばしり)が……

タケヒコ「申し訳ありません、モリヤ様。魂魄強化(こんぱくきょうか)を施されたあなた様を救うためには、わたしにはこんな事ぐらいしか……」

詫びの言葉を口にするタケヒコの天之羽張(あまのはばしり)が、モリヤの心臓の下辺りを貫く。

狗奴国の大王ジョウコウの腹違いの兄弟は、目線をタケヒコの天(あ)之羽張(まのはばしり)にやっていた。

タケヒコ「御二方供、そのままお聞きください。ジョウコウ様より、わたしが受けていたお言葉です」

目をタケヒコが閉じて語りだす。

タケヒコ「モリヤとシンム、何時(いつ)の日か、各々の国を掛けて争う

日が来よう。どちらが勝つにせよ、恨むなら我を恨め。恨み足りぬなら」

黙ってシンムは、タケヒコの言葉に耳を傾けていた。

ジョウコウ「来世で殺しに来い」

最期のタケヒコの言葉が、まるでジョウコウ本人が言ったようにシンムには聞こえていた。あの威厳に満ちた声に。

言葉を聞き終えたモリヤの眼に涙が浮かぶ。

モリヤ「勝手すぎる……勝手すぎるよ。ぼくが欲しかったのは、そんな言葉じゃない……」

涙がモリヤの眼からぼろぼろと落ちて行く。

タケヒコ「わたしには、これ以上は何もモリヤ様に申し上げられません。ですから、わたしも来世で待っています。いつでも、殺しにいらしてください」

目を開いたタケヒコが、モリヤに向かって頭を下げる。

シンム「モリヤ、おれはてめぇが好きじゃねぇけどさ……」

ゆっくりタケヒコの天之壽矛（あまのじゅぼこ）を手でどかして、シンムはモリヤに近づいた。都牟刈之太刀（つむがりのたち）の刃を素手で握り締める。刃に自らの手が傷つき、血が滴り始める。

そして、手に力を込め、シンムは自らの血と刃でモリヤの心臓を突き刺した。

シンム「この痛みは忘れねぇ。あばよ……糞兄貴」

モリヤ「シンム」

怒りでも憎しみでもない眼を、モリヤはシンムに向けていた。

タケヒコ「失礼します、モリヤ様」

頭を上げたタケヒコが、天之羽張（あまのはばしり）をいっきに振り上げると、モリヤはその場に倒れた。

刃を握ったシンムの手からは、二人分の赤い雫がたれ落ちていた。

降臨1

全速力でタケヒコは駆ける。景色は早い流れの中に溶け続け、その形を留めない。

かつて、伊都国の街並みを守る大きな門があった場所で、タケヒコは立ち止まった。待ち伏せを警戒して、注意深く辺りの気配を察知する。少なくとも、タケヒコの敵となり得るほどの気配はない。

タケヒコ「予想通りこの国で降臨の儀を……急がねばなりません。神の降臨がなる前に、何としても阻止せねば」

かつて合った大きな門の先には、廃墟と化した伊都国が広がる。遠くに、タケヒコ達が暮らした館の更に向こうに、薄く輝くもやの様な光を見つけた。薄く輝くもやの様な光を、千年前の記憶と照合する。結果は、最悪の事態が近づきつつあることをタケヒコに突き付ける。

狗奴国を出たのが僅か数時間前。夜の闇の中、星の動きが時間の経過を物語る。

タケヒコ「もう少し早く来たかったのですが」

再びタケヒコは動き出す。時間的余裕が、もうほとんどないから。駆けながら、シンムから預かった物を手に取り確認する。預かったそれには、小金丸（こがねまる）の刃を付けた。それは、シンムがイヨより預かった柄（つか）。それは、タケヒコが手にした切り札。

タケヒコ「あとは、キサラギ様の力を信じましょう。わたしの天之羽々斬（あまのはばきり）と、完全に同じ力があることを」

主より預かった柄を大事に握り締めながら、かつて暮らした街並みを、タケヒコは駆け続けた。絶望を止めるために。

数時間前。

天之羽張（あまのはばしり）で斬ったモリヤを弔う。簡素な墓を、狗奴国の街はずれに作った。参列者はタケヒコとシンムの二人だけ。元皇太子にして

は寂しすぎる葬儀。
黙祷を故人に捧げてから、タケヒコは告げた。
タケヒコ「シンム様、わたしがこのまま向かいますことを、どうかお許しください」
黙祷を終えたシンムが振り返る。
シンム「姉貴の所へか？」
タケヒコ「スクネも、今は邪馬一国に居るはずです。ですが、向かうとしたら……」
行き先を、タケヒコは告げようかと迷ったあげく、結局は言葉を濁した。
暗い表情のシンムが、重たそうに口を開く。
シンム「よくわかんねぇけど。五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）とかいうやつとか、ヒミコとかが関係してんだろ、姉貴と」
タケヒコ「今、聞きたいですか？　カグヤ様の話を」
愚かな事を口にしたとタケヒコは思う。説明している時間などあるはずもなく、説明していいかどうかも、判断に迷っているのだから。だがそれは、次にシンムが口にした言葉で杞憂に終わる
シンム「いや、いい。時間ねぇだろうし。それに、おれが聞いてもどうにも出来ねぇ事がよくわかった」
タケヒコ「もし……いえ、帰って来たら、その時にすべて話します」
嘘をタケヒコはついた。本当は生きて再び、シンムと会えるとは思っていない。もう二度と狗奴国に戻れないと思うからこそ、こぼれ落ちる時間を使って、モリヤを弔ったのだから。
シンム「ああ、待ってるぜ。そういや、イヨから預かったんだけどよ。この変な御守り、効果あるかどうかしらねぇけど、渡しとくぜ」
懐から、シンムが刃のない柄を取りだす。
タケヒコ「イヨ様から預かられたのでしたら、シンム様が持たれて……それは！」

その御守りは、イヨから預かったという御守りは、シンムが懐からだした柄は、天之羽々斬（あまのはばきり）と呼ばれた剣の柄だった。千年前の戦いの折、天之羽々斬の刃は折れ、刃は二つの剣として生まれ変わっていた。都牟刈之太刀（つむがりのたち）と、小金丸（こがねまる）と銘打たれた剣に。

そして、片割れの小金丸をキサラギより受け取る際に、タケヒコは言われた。

キサラギ「もし剣の柄があれば、元に戻るぜ……これ」

今日まで暇さえあれば柄を探し続けたが、結局は、千年前から見つける事が出来ないでいた。

だからこそ、タケヒコはその柄を見て心底驚いた

シンム「この刃のない柄が何か、知ってんのか？」

手に握った柄を見ながら、シンムは聞いて来た。

タケヒコ「わたしが遠い昔に失っていた物です。まさか、イヨ様が持っていらしたとは……しかし、なぜ？」

シンム「よくわかんねぇけど、見つかってよかったな」

受け取るかどうか、タケヒコは躊躇した。その柄を、御守りとしてイヨがシンムに渡したらしいから。それでも、結局は受け取った。少しでも力が欲しかったから。

大事に柄を受け取ってから、シンムに頭を下げる。それは、柄を渡された礼、今まで世話になった礼、恐らくこれが最期になるという詫び、全てを込めて頭を下げた。

そして、それ以上は何も言わずに、その場を後にした。

再び一つに戻った剣を握りしめて、タケヒコは駆ける。

タケヒコ「必ずや、どの様な形であれ、お返しいたします。今は、この剣の力がどうしても必要ですので」

駆けながらタケヒコは決意する。必ずや絶望を止めて、柄をシンムに返す事を。例え、自らの命が燃え尽きようとも、それだけはたがえない事を。

伊都国の街の奥にある小高い丘の上、かつて、小さな社のあった場所に祭壇は築かれていた。その中央にはカグヤが座している。虚ろな表情をしたカグヤの斜め前に、タマモとスクネの二人が、それぞれ五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）と真布津鏡（まふつかがみ）を両手で支え、うやうやしく方膝を付いていた。

少し離れた位置で座しているヒミコに、男が頭を膝の上にして横になっている。その男の顔色は信じられないぐらいに青白く、目を閉じ、身体中のいたる所にひび割れたような痕があり、一見すると死人にしか見えない。だが実際には男は生きている。男はツクヨセイガ。千年前、神によってこの世界から追放された男。

その二人を見るように、塩土の翁が横に立っている。

ヒミコ「この世界に残りの魂が維持できなくなる前に、この肉体が崩壊してしまう前に、事を成せそうです。仮の身体とはいえ、このような土偶に閉じ込めたこと謝罪します」

やさしくセイガの顔に手で触れるヒミコの言葉に、土偶は何も答えない。当然だった。新しく創った塩土の翁の土偶には、呪を入れていないのだから。呪がなければ、セイガの魂の欠片がなければ、ただの人形なのだから。

ヒミコ「詩（うた）を詠っていただけますか？　あなたが真に記憶する、唯一のこの世界の記憶を、あの森で詠（うた）ってくれた詩（うた）を」

悲しい笑みを浮かべながら、ヒミコが呪を土偶の中に入れる。土偶が、塩土の翁が詠（うた）う。千年の間、ヒミコの拠り所であり続けた詩（うた）を。

塩土の翁「いと思ふ　いとしの君に　木漏れ日で　出会ふた事もいと悲しかな」

その詩（うた）をヒミコは何度も聞いた。当初は、そのたびに涙で濡れたが、今は一滴も出ない。代わりに決意する。その詩（うた）を聞くたびに、前に向かう力を得られた。

ヒミコ「魂を戻します。本来の肉体に。そして、帰りましょう。あの頃に、必ずや。だから、あと少しだけ待っていてください」

優しくヒミコは言った。土偶に閉じ込めた魂と、崩壊しつつある肉体の両方に向かって。

冷やかな眼をしながら、タマモがあざ笑う様に言葉を口にする。

タマモ「勝手に盛り上がっているみたいだけど……準備いいわよ。一応聞いておくけど、あなたの役目、分かっているでしょうね」

少しだけ感傷的になっていたヒミコを、冷たい声が現実に引き戻す。

ヒミコ「わかっておる、わらわが全ての妨害を遮断しよう。ゆえに、安心して始めよ。神の降臨の儀」

その言葉が合図となった。

スクネ「了解した」タマモ「当然でしょう」

祭壇に座すカグヤに向かって、スクネとタマモの二人が目を閉じ、祈り始める。

それは、ヒミコにとって希望の始まり。それは、タマモにとって願望の始まり。それは、すべての人々にとって、絶望の始まり。

祭壇に座すカグヤに対して、タマモとスクネの二人がうやうやしく頭を下げる。そして、タマモが五百之御統之珠を、スクネが真布津鏡を天に掲げる。

タマモ「掛けまくも綾にゆゆしきかも」

スクネ「言はまくもましてゆゆしきかも」

祈りの言葉の始まりを、降臨の儀の始まりを、タマモ、スクネの順に、口にした。そして、同時に目を見開き、同時に祈りの言葉を口にする。

スクネ　タマモ「命の御前に謹み敬ひて白さく」

掲げた神器を二人は同時に下ろすと、再び目を閉じ、タマモ、スクネの順に祈りの言葉を捧げる。

タマモ「今日を生日の足日の良き日と定め　御前に五百之御統之珠をば捧げ奉りて　国に御霊授け給へ　恐み恐みも白さく」

スクネ「常世の契りし良き日と定め　御前に真布津鏡をば捧げ奉りて　此の世に御霊授け給へ　恐み恐みも白さく」

祈りの言葉に応えるように、二つの神器、五百之御統之珠（いおつのみすまるのたま）と真布（まふつ）津鏡（かがみ）が、淡い紫色の輝きを発する。

その光景をヒミコは目で追いながら、意識は別の場所にやっていた。

ヒミコ「現れたか・しかし、相変わらず一手遅い。それでは勝てない」

祭壇のある丘の下に、ヒミコは罠を張り、今か今かと、四魂最後の一人を待っていた。降臨の儀を止めようと駆けつけて来るのが明白だった、タケヒコを。

小高い丘の下、薄く輝く光の中、すでに始まっている降臨の儀。

それを見てタケヒコは一切躊躇せず、うやうやしく座しているスクネを、背後から天之羽張（あまのはばしり）で貫いた。

異様な手応え。土を貫いた時に感じる手応えだった。

タケヒコ「これは土偶！　では……この祭壇は偽物！」

驚き、天之羽張（あまのはばしり）を引き抜いたタケヒコに、スクネの形をした土偶が口を開いた。　声は、よく知った女性の声だった。

ヒミコ「やはり来たな、タケヒコ。しかも、予想通り男であるスクネを貫くとは、ありがたい」

タケヒコ「ヒミコ、今すぐ降臨の儀を止めなさい！」

ヒミコ「今更、止めるわけ無かろう、たわけた事を……それよりも、自らの身でも心配した方がいい」

言葉に呼応するように、タケヒコの背後から大男が飛び出す。地面から飛び出した大男は、両腕でタケヒコの頭を掴むと、上空へ放り投げた。

ナガスネ「うがぁぁぁぁぁ。メイレイ　オマエ　コロス」

タケヒコ「ナガスネ！」

大男はかつて伊都国で見た、マヒトツ　ナガスネだった。

地上でタケヒコの落下を待ち構えるナガスネを見て、天之壽矛（あまのじゅぼこ）を握る。着地の瞬間を狙って、ナガスネが突進して来た。そのナガスネの心臓を、天之壽矛（あまのじゅぼこ）の持つ空間歪曲の力を使って貫く。異常な手ごたえ。心臓を貫いたはずのナガスネは突進を止めない。仕方なく、タケヒコは体当たりを受け入れ、突き飛ばされた。直撃を受けた胸部に痛みが奔る。

タケヒコ「あばらが一本ぐらい持っていかれましたか。それにしても……彼も土偶とは」

ヒミコ「それだけではない。今の状況で、痛手をあばら一本で済ませるそなたを、相手にするのだから」

天之羽張（あまのはばしり）で胸に穴が空いたスクネの土偶が言った。邪馬台国の女王の声で。

ナガスネ「メイレイ　コロス」「メイレイ　コロス」

周囲の地面からナガスネ達が次々に飛び出した。百体のナガスネ達がタケヒコを取り囲む。百体のナガスネ全てが鬼の刺青をしていた。

ヒミコ「かかれ鬼達。タケヒコを釘付けにせよ！」

穴の空いた土偶の命令を受け、鬼達は四体ずつ順に、四方から襲い掛かった。

攻撃は激しいが、タケヒコに取っては苦戦するほどでなく、簡単に迎撃する。しかし、数は一向に減らない。的確に急所を攻撃しても、土偶である彼等には急所その物が無い。両足を切り落としても、周りにある地面からすぐさま両足を作り出す。鬼達は、タケヒコをすり抜けるとすぐに最後尾に入った。

今のままなら、永遠に同じ状況が繰り返される。それがヒミコの意図だろうとタケヒコは察する。

タケヒコ「これ以上の時間稼ぎはさせません」

それなら、やる事は単純。これ以上時間を使わせないように、タケヒコは中央を突破した。ここで予想外の事が起こる。追ってくると思っていたナガスネ達が、立ち尽くして眺めるだけでその姿勢す

ら見せない。
内心、タケヒコはいぶかしく思ったが、それ以上考えるのを止めて先を急ぐ。
目を丘の上に向けると紫色の光が見えた。
タケヒコ「少し時間を掛けすぎました」
偽の祭壇を後にして、紫色の光へと駆ける速度を上げるが、すぐに壁の様な物にぶつかり、前進を拒まれた。間髪を容れず、背後から炎が飛んで来る。それは簡単に避けたが、背後からは次々に炎が襲いかかって来る。後ろに目を一瞬やると、炎は偽の祭壇にいるタマモが放っているのを確認する。本物なら問題だが、偽者と分かっているため、確認だけで済ませる。
炎を避けながら、前進を拒んだ空間をタケヒコは観察する。
タケヒコ「見えない壁ですか？」
手で触れてみると、壁がそこにある様な感触を得る。時間は賭けられない。だから、壁を天之羽張（あまのはばしり）で一閃する。まったく手応えがない。上空を見上げると星空が輝いている。その間も、背後から襲って来る炎を避け続ける。足元に落ちていた小石を拾い、空高く投げた。小石が、壁のあると思わしき場所よりも向こう側に落下する。それを確認すると同時に、タケヒコは壁を飛び越えるべく跳躍した。
着地したタケヒコの目の前には、胸に穴が空いたスクネの土偶が立っていた。
タケヒコ「これはいったい、どういうことですか……」
ヒミコ「鬼達、襲いかかれ！」
再び、四方からのナガスネ達の攻撃が始まる。反射的にナガスネ達を切り刻むべく、タケヒコは天之羽張（あまのはばしり）と天之壽矛（あまのじゅぼこ）を縦横無尽に振るった。
タケヒコ「少しだけ考えますか」
徹底的にタケヒコは切り刻む。粉微塵に刻まれ、ナガスネ達の再生速度が落ち、わずかな時間が出来る。そのわずかな時間で、タケヒコは結界に閉じ込められている事を悟る。そして、結界の破壊方

法を導き出し、少しだけ躊躇する。
タケヒコ「やはり、あの偽者のカグヤ様を殺すしかないのでしょうか……恐らく、イヨ様と思われるのに」
襲い掛かる炎を避けながら、カグヤに近づく。少しだけ躊躇したため、本来、神速であるはずの剣は、人の行い得る速度で振り下ろされた。人の領域で振り下ろされた剣よりも早く、炎がタケヒコを襲う。直撃を受け、衝撃によって剣が逸れる。間髪いれず、炎の追撃が入る。それは簡単に跳躍してタケヒコは避けた。
着地すると、またもスクネの土偶が待ち構えていた。
ヒミコ「時間は刻一刻と過ぎて行く。いかにする？　前進を止めて、わらわと語らいでもいたすか？」
タケヒコ「何を言っても無駄です。今度こそ結界を破壊します」
ヒミコ「呪の位置が特定できたのか？」
タケヒコ「必要ありません。イヨ様を中心に結界を張っているのでしたら……対象を葬るまで」
それしかないと思う。確かにヒミコの言う通り、結界は呪で作られる。ゆえに、呪を破壊すれば結界も崩壊する。だがそれを探している時間はない。
ヒミコ「イヨは、わらわが眠らせているだけでも？」
タケヒコ「黙りなさい！　あなたがイヨ様を巻き込み、そして、あれを降臨させようとしているのでしょう！」
激しい怒りを覚え、タケヒコは声を反射的に荒げた。かつての彼女ならありえないはずの行動。自らは安全な場所にいながら、他の者を危険に晒すなど。まして、義娘（むすめ）を晒すなど。そして、タケヒコには、そのイヨを助ける余裕などなかったから、怒りで声を荒げた。
ヒミコ「呪は、イヨの胸にかけてある。それを破壊すれば、そなたを縛る結界は消える。信じるかどうかは自由だ」
土偶の言葉を聞いて、タケヒコは目をイヨの胸に向ける。確かに、白く輝く呪が首に掛かっていた。それを見て、タケヒコに疑念が浮かぶ。

タケヒコ「あなたは何がしたいのです！」
ヒミコ「ナガスネ、タケヒコを阻め！」
合図と同時に、ナガスネ達がタケヒコを取り囲む。取り囲んだナガスネが、一体だけ襲い掛かって来た。襲って来たナガスネを斬らず、投げ飛ばす。そして、タケヒコは剣を持ちかえる。天之羽々斬（あまのはばきり）という銘の剣に。
タケヒコ「これ以上、無駄な時間稼ぎなどさせません。消し飛んで貰います」
天之羽々斬（あまのはばきり）の力を発動させるべく、タケヒコは祈る。
タケヒコ「封にして我になるもの」
天之羽々斬（あまのはばきり）の刃が青白く輝く。投げ飛ばしたナガスネを一閃する。同時に爆発が起こる。剣に封じられた力が剣に宿り、己の力に変える剣。それが天之羽々斬（あまのはばきり）。
天之羽々斬（あまのはばきり）が一閃される毎に爆発（ごと）が起る。爆発はナガスネ達を一体残らず吹き飛ばした。再生などかなわないほど粉々に。
ヒミコ「予定通り、イヨから柄を受け取っておったか」
タケヒコ「消えなさい！」
湧き上がる怒りを叩きつけるように、スクネの土偶に、天之羽々斬（あまのはばきり）を振り下ろした。爆発と共に土偶が消える。
次なる目標をタケヒコは見据える。偽の祭壇に座す、偽のカグヤ。その胸には呪が掛けられていた。両手に天之羽張（あまのはばしり）を握り、偽のカグヤに詰め寄り、横に呪を一閃する。呪だけが真っ二つに斬れ、地に落ちる。
呪が地上に落下するよりも早く、タケヒコは見えない壁があった場所を通り抜ける。
タケヒコ「本当に……罠も何もなかったのですか」
いぶかしさを覚えながらも、タケヒコは立ち止まらず駆け抜けた。
二つの神器から発せられる淡い紫の光の輝きは広がり続け、祭壇すべてを包むまで大きく広がった。その光の中で、タマモ、スクネ

の順に祈りの言葉が刻まれ続ける。
タマモ「世を開き給ひしより先に契りし世の定まれる命の限りに有りけむ」
スクネ「世を新に発足つ為に御前の赦し求む願ひ給ふ」
タマモ「新な世に生まれ出で新な世に住ませ願ひ」
スクネ「新な世に行く為に隈無く見守り導き給ひ願ふ」
タマモ「幸を乞ひ祈み奉らく清き気高し血、国民諸々の血を捧げ奉る」
スクネ「幸を乞ひ祈み奉らく数百の時を捧げ奉る」
祈りの言葉を一旦打ち切り、二人は瞑想する。

急ぐタケヒコの目の前に、本物のヒミコが立ち塞がる。その背後には、降臨の儀が現在進行している祭壇。進行状況を目視する。祭壇の中央にカグヤが座し、すでにスクネとタマモは、それぞれの神器の力を開放し終え、濃い紫色の輝きが辺りを覆っていた。記憶通りならば、残りは最後の祈りを捧げるだけ。時間は残り僅かしかない。
目の前の敵は、時間稼ぎのために立っているのだろう。決して強敵ではない。だが術中にはまれば、時間を取られる可能性はある。だから、タケヒコは目の前の敵を睨み、感情を心の奥に沈め、自らを人形と化した。瞳は無為に、両手に二本の剣を握り絞めるだけの人形、死神と恐れられていた頃に戻る。

その間にも時は無常に過ぎて行く。
タマモ「神道を誠の道と戴き持ちて」
スクネ「各も各も持ち分くる職務の随に勤み励み」
祭壇の二人は、祈りと瞑想を繰り返す。

心を完全に閉ざすと、ヒミコが口を開いてきた。

ヒミコ「その姿、懐かしい。初めて会った時を思い出す」
何もタケヒコは答えない。否、すぐさま応える。言葉でなく、瞬殺すべく両手に握り絞めた剣で。空間が十字に裂ける。手応えがない。間合いの外へと、ヒミコはいつの間にか移動していた。
瞳を動かしタケヒコは情報を得る。それで気付いた。天露之糸(あまつゆのいと)を、ヒミコは自らの背に突き刺している事を。その力でヒミコは、わざと塩土の翁に操られる事によって、タケヒコに対抗している事を。四魂の力だけが四魂に対し得る。考えれば当たり前の事実だったが、タケヒコは少しだけ驚いた。
しかし、すぐに次の攻撃に移る。手品の種がわかれば、それに対応すればいい。天露之糸(あまつゆのいと)を斬るべく、ヒミコの背後に回り込む。瞬間、衝撃を受けた。自分が置き去りにして来た偽の祭壇にいた二人を、タケヒコは忘れていた。否、忘れていたというよりも、ヒミコの力を完全に見くびっていた。転移呪をイヨに仕掛けていたなど、考え付きもしなかった。まして、イヨを触媒にして、イスズの炎だけを転移させて来るなど。
炎が背後に回り込もとうするタケヒコに襲い掛かって来た。激しい攻撃がタケヒコの行動を拒む。その間に、ヒミコが間合いを広げる。
転移して来る炎は、全てヒミコの背後を守る様に飛んで来た。それにも驚きはしたが、タケヒコに迷っている暇は無い。

刻一刻と降臨の儀は終わりへと近づく。
タマモ「一向(ひたすら)に平和(おだ)しき世を作り」
スクネ「西東睦(にしひがしむつ)び和(なご)みて」
二つの神器の輝きが、陰りを見せ始める。

いっきにタケヒコは間合いを詰めて、両手の剣を同時になぎ払う。首を狙った天之羽張(あまのはばしり)は避けられたが、腹を狙った天之羽々斬(あまのはばきり)に、浅いが確かな手応えが残る。攻撃の手を更に強め、踏み込み、天之羽(あまのはばしり)

張で突く。身体を横にしてヒミコ避ける。一瞬の隙が出来る。その隙を見逃さず、タケヒコは天之羽々斬(あまのはばきり)を振り下ろした。その一撃によって、ヒミコの左肩が血で滲む。傷は浅い。天露之糸(あまつゆのいと)によってヒミコは、タケヒコの攻撃を寸前で避けていた。第三の斬撃、ヒミコの右足をかすめる。かすめるが、まだまだ浅い。浅いが、確実に、一歩一歩近づく。第四撃、脇腹。第五撃、第四撃目と同じ箇所。

そして、避けようのない間合いまでヒミコを追い詰めた。

タケヒコ「終わりです、ヤマトト！」

ヒミコ「やはり、甘い！」

懐からヒミコが取り出した氷結呪が輝きを放つ。その輝きに導かれて、大地が輝き、凍結する。瞬時にして、タケヒコの足が大地と共に凍りついた。

足を凍らされたタケヒコに、炎が襲いかかる。その間にヒミコは後ろに飛び退き、間合いを離される。軸足の自由をタケヒコが取り戻す暇もなく、ヒミコが次手に移る。いくつもの呪がヒミコの周りを旋回する。連鎖による火力の増大。一つでタケヒコの身体を粉々に吹き飛ばせ得る爆炎呪の連鎖。

ヒミコ「連鎖せよ」

ひと塊りとなった爆炎が、足を凍らされて動けないタケヒコに襲いかかる。

タケヒコ「愚かな。一つにしてしまえば、わたしには何の意味もない事を忘れたのですか」

爆炎を、タケヒコは天之羽々斬(あまのはばきり)で斬り裂く。否、爆炎を天之羽々斬(あまのはばきり)に封じる。爆炎は一瞬で消え去った。

二つの神器の発する輝きが消えると、タマモとスクネは祈りの言葉の続きを捧げる。

タマモ「遍(あまね)く人々の福祉を増進(いやまさ)しめんと、労(いたづ)く状(さま)を」

スクネ「愛(め)ぐしと思ほし給(たま)ひ」

祈りの度に、淡い紫色の光が色を濃くして行く。

その光景が目に入り、タケヒコは千年前の状況と照会する。

タケヒコ「時間がありません」

記憶と照会すれば、時間が無い事が必然となる。ゆえに、すぐ行動に移る。足を無理やり大地から引き離すと、若干の痛みを感じたが、気にしている暇はない。

動きを阻むヒミコとの間合いを一瞬で詰めると、タケヒコは右手に握った天之羽張（あまのはばしり）を振り上げた。今度こそ最後の一撃となるはずだった。しかし、右手が自らの意志とは無関係に、違う動きをする。よく見ると、右手には天露之糸（あまつゆのいと）の針が刺さっていた。爆炎の最中に刺されたのだろう。突き刺されてしまえば、四魂であるタケヒコであろうとも操られる。右手に握られた天之羽張（あまのはばしり）で、自らの左手に握った天之羽々斬（あまのはばきり）を弾き飛ばした。弾かれた剣が、タケヒコの背後の地面に突き刺さる。

その直後だった。辺りを覆っていた紫色の光が収束を始めたのは。

降臨2

祭壇の中央に座すカグヤに濃い紫色の光が吸い込まれていく。否、正確には、そう見える様に収束を始める。

最早、手遅れになりつつある状況を理解して、タケヒコは刺さった天露之糸（あまつゆのいと）の針を抜き、天之羽張（あまのはばしり）を祭壇目掛けて投げつけるべく振り上げた。

タケヒコ「させません！」

右手を振り上げたタケヒコの耳元に、ヒミコがそっとささやいた。

ヒミコ「もう遅い、神は降臨する。スクネが正気を取り戻したなら、二人で協力して、カグヤの右脳に植え込んでいる紫色の呪を狙え。天之羽張（あまのはばしり）なら身体を傷一つつけずに出来るであろう。その後のことは、イヨに呪を持たせている」

タケヒコ「ヤマトト、いったい何を……」

咄嗟の事にタケヒコが捻りだせた言葉はそれだけだった

ヒミコ「イヨとイスズ、二人を保護してやってくれ」

それ以上ヒミコは何も答えず、呆然とするタケヒコに対して、無防備に背を向けた。その動きに呼応して、隠れていた塩土の翁が姿を見せる。その両腕には、全身傷だらけのツクヨセイガが抱かれていた。両腕でそっと塩土の翁からセイガを受け取ると、ヒミコは転移呪を使い、その場から消えた。消えると同時に、塩土の翁はただの土くれとなり、崩れ落ちた。

事態がまったく飲み込めず、タケヒコは立ち尽くしていた。

収束を始め、紫色の光が縮小していく。両目を同時に見開き、スクネとタマモが言葉を重ねる。

スクネ　タマモ「弥栄（いやさか）えに立ち栄え仕（つかま）へ奉（たてまつ）らしめ給（たま）へと畏（かしこ）み畏（かしこ）み白（もう）す」

最後の祈りの言葉が刻まれると、紫色の光はカグヤの頭上に一点

となった。すべての世界が一点に集まるかのように。一点に集まった光が弾け、濃い紫色の光は金色に輝く紫色の光となり、カグヤに降り注ぐ。その光景はあまりに美しく、そして、恐怖に満ちていた。

金色に輝く紫色の光の中心に立つ、かつてカグヤと呼ばれた者が口を開く。森羅万象を作り出し、生きとし生きる物すべてを産み出した圧倒的な存在、神と一言で呼ばれる世界を超越した存在が。

神「降臨の儀、大儀であった、四魂。余が降りた今、穢(けが)れた世界に終わりを告げ、共に新たな世界を創り出そうぞ」

光が消えてカグヤだった者の姿が顕(あら)わになる。紫色の髪、紫色の瞳、紫色の唇、かつて草原を連想させたカグヤの姿は、絶望的な美しさをしていた。

祈りを終えたタマモがうやうやしく口を開く。

タマモ「恐れながら申し上げます。新世界の創造よりも、この世界の回帰こそ成すべきであると思われます」

神「何故それを望む？　回帰であろうとも、新世界の創造であろうとも、原初から始めることに違いないであろう」

タマモ「この世界にはまだ価値があると思われます。原初からやりなおせばこそですが」

うやうやしく口を開いたタマモは、明らかに言葉を選んでいた。口にする言葉一つ一つ次第で、神の行動が決まる可能性があるから。すなわち、タマモにとっての未来が決まる可能性が高いから。

タマモ「この世界は本当に些細な事を修正すれば、貴方様の好まれる通りになると思われます」

神「この世界に何を望む？　回帰を望む以上は、変化が望みであろう？　よもや、四魂ほどの者が、再び原初から今この時までを、同様に繰り返したいわけではあるまい」

タマモ「千年前の戦いで、天人を敗北させた者を、この世界から消滅させてください」

神「はて、天人を消し去ったのはそちではなかったか？　解せぬ

事を申す」
　タマモ「わたしは、天人たる者達が敗者として、その後の世界に存在するのが許せなかっただけです」
　神「あらためて問うが、天人が仮に勝利したとして、如何様な意味があると？」
　タマモ「御前の作られたる天人が、失敗作共に敗れ去ったという事実自体が、恐れながら穢れと思われます」
　神「それを穢れと申すか。なれば必要ない。天人どもは所詮、余の玩具にすぎぬ。玩具も塵に埋まれば塵にすぎぬ。塵が増えたなら、それを燃やして新しく作ればよいだけ」
　タマモ「でしたら、新世界の創造を、やはり成されるのですか？」
　神「当然。回帰に意味は見出せぬ。この世界の穢れすべてを落とすよりも、破棄した方が早い」
　タマモ「どうしてもこの願い、お聞きとげられませぬか？」
　そう言ったタマモの表情に、わずかな陰りが生まれる。うやうやしい態度こそ変わらずにいたが。
　祭壇の中央に座す、元カグヤで会った者、今は神と呼ばれるものが、断を下す。
　神「くどい、余の降臨によってこの世界の目的は達せられた。よって、意味を成したものに、新たな意味を見出すなど無意味」
　タマモ「でしたら……力づくで叶えさせるまで、ひざまずきなさい！」
　態度を一変させ、タマモは天之羽々矢を神に向かって次々と放った。そして、次々に一本の矢が百本の矢となり、何人も避けようがない程の矢が、神を覆い尽くす。
　矢によって覆いつくされた空間に向かってタマモは言葉を発した。
　タマモ「新世界の創造も、現世界の消滅も、わたしには興味が無いの。あるのは回帰。世界を、タケヒコ達と共に駆け抜けた過去への回帰。わたしから幸福を取り上げた、あの忌々しき女に出会うよりも前への回帰。そのために、あの女に手を貸してまで、神を降臨

させたの。だから、願いをかなえなさい！」

神「残念ながら、余にはまったく興味がわかぬ」

声はタマモの背後から聞こえた。頭を掴み上げられ、タマモが宙高く放り投げられる。上空で今度は足を掴まれる。天詔琴（あまのりごと）で、タマモが神に向かって放った矢が神を追尾して来た。そのすべてを、神はタマモの身体を振り回して迎撃する。矢の迎撃が終わると、タマモを地上に叩き付けた。叩きつけられた際の衝撃で、タマモの身体が鞠（まり）のように弾み、神との間合いが僅かながら開く。苦痛に口元を歪めながらも、タマモは再び矢を放つ。矢は神に一本も届かず、全て衝撃波で叩き落とされた。

倒れ込むタマモに神は近づき、頭部を踏みつけると、つまらなさそうに言い放つ。

神「こうも一方的では面白くない。後は好きにせよ、四魂スクネ」

そう言いながら、神はタマモの腹を一回蹴り飛ばすと、無防備に背を向けて、跪いたスクネの目の前に立った。

神「いかにした、四魂。はて、なぜ動かぬ？」

うやうやしく跪いたままスクネは何も答えず、身動き一つしない。目を細め、神は首をひねると、スクネを見下しながら額に手を当てる。

神「記憶を自ら封じておるか。よい、余が新たにくれてやる、以後は余の慈悲深さに感謝し、一心不乱に尽くすが良い。そして、余の無限大の愛を受け続けるが良い」

額に当てた神の手が輝きを放つ。それに伴い、スクネが立ち上がる。立ち上がったスクネは、神に向かって頭を下げた。

神「四魂スクネ、記憶は得られたか？」

スクネ「御前の力で記憶をいただきました。感謝の言葉もありません」

神「よい、臣に優しくするのも余の勤め」

スクネ「御前の御心に、ただ甘えるわけにも参りません。何か御命令くださいませ」

満足そうな笑みを神は見せながら、スクネに命じた。

神「四魂スクネ、四魂タマモを屈服させよ」

スクネ「了解しました、直霊（なおひ）」

その名をスクネが口にした瞬間、神は怒声を飛ばしながらスクネを殴り飛ばした。

神「二度とその名を口にするな！　臣下如きが口にして良い名ではない！」

スクネ「了解しました、御前」

命を実行すべく、スクネは拳を強く握り、タマモに滲み寄る。降臨（あまのりごと）した神によって痛みつけられていたタマモが起き上がり、天詔琴を構える。動きは鈍いが殺意は強い。

拳を一瞬だけ弱めると、いっきにスクネは駆けた。矢が一本飛んで来るが、勢いが弱く、簡単に避ける。間合いを無にして、タマモの懐に拳を放つ。最初の拳は寸前で避けられる。間髪いれず、二撃目を放つ。かすかに手ごたえがあったが、浅い。三撃目を放とうとした瞬間だった。背後で聞こえた音に気を取られる。致命的な隙が生じ、矢が襲い掛かって来た。回避不能。ゆえに、左腕を犠牲にして致命傷を逃れる。同時に、一歩だけ後ろに退き、タマモとの間合いを開く。そして、左腕に刺さった矢を引き抜き、応急手当てをする。

背中越しに神の声が聞こえる。先程の、音の主に話しかけているようだった。

神「ようやく参ったか、四魂タケヒコ。余という存在に対して、続けて遅刻とは、よくないとは思わぬのか」

タケヒコ「あいかわらずの傲慢さですね。少しは神として自覚を持ったらどうです？　そうなされば、わたしも遅刻などいたしません」

神「傲慢？　はて、傲慢とは四魂タケヒコの様に、余に対して剣を振り下ろし、一撃でも加えられると思うのが、傲慢ではないのか？」

タケヒコ「そう思うのでしたら、傲慢ではなく事実だと、すぐに証明して見せます」

天之羽張（あまのはばしり）を振り上げるタケヒコ。それが振り下ろされるよりも早く、スクネが腕を掴み、阻止する。

神が激昂する。

神「四魂スクネ、誰がタケヒコと戯（たわむ）れよと命じた！　そちには、四魂タマモを屈服させよと命じたはず。勝手なことをいたすな！」

怒声と同時に起きた衝撃波で、スクネはタケヒコと共に吹き飛ばされる。傲慢に満ちた無慈悲な言葉を神は続ける。

神「四魂スクネ、罰として、そちが自ら封じた本当の記憶を取り戻させてやる。ありがたく受けよ」

記憶が蘇る。忌まわしき、そして、スクネが自ら犯した罪の記憶。自己嫌悪に満ちた絶望の記憶。

スクネ「カグヤをおれは……血の海を作っておれは……」

頭を抱え込み、スクネはその場に両膝を付いた。罪の意識が、忘れらていた事実への絶望が、全身を支配する。

甲高い神の笑い声が辺り一体に響き渡る。

神「絶望せよ、それが余に叛（ほん）した罰。その穢（けが）れを洗い流し、世界を新しく創造するのが、余と臣の使命。それを認知せよ」

タケヒコ「黙りなさい！　千年も昔の事実に、どれ程の意味があると言うのです！」

笑い声を上げる神に、タケヒコが怒声と共に斬りかかる。瞬間、転移でそれを避けると、神はタケヒコに耳打ちした。

神「千年如き、余には瞬きする時間すらない。それに、勝手に苦しんでおるのは四魂スクネ。余は、記憶を少し取り戻させてやっただけ。感謝こそされども、恨まれる筋合いはない」

タケヒコ「中途半端に記憶を戻したのですか！」

天之羽張（あまのはばしり）で神を払いのけながら、タケヒコが叫ぶ。

タケヒコ「スクネ、思い出しなさい！　絶望だけが、すべてでなかった事を」

嘲笑まじりに神が答える。

神「それが何になる？　どうせ、そち達は新たな世界に記憶を持ち込むこと等出来ぬ。なれば必要ないであろう」

タケヒコ「世界を見捨てるなど、絶対にさせません！」

神「四魂タケヒコ、そちがどうさせぬと言うのだ」

言葉で返答する代わりに、タケヒコは両手に剣を握り締め、次々に剣撃を放った。剣撃は線で始まり、弧を描く。速度を増し続ける剣撃は、すぐに面となる。その凄まじいばかりの剣撃が最速になった時点で、待ち構えていたかのように神は動き出す。剣撃によって描かれる面を、何も無い空間を歩くようにゆっくり通り抜け、タケヒコの懐に入り、衝撃波で吹き飛ばした。

神「それが四魂タケヒコの本気か？　余を、失望させるでない。純粋な戦闘では、そちは最強でなかったのか？」

タマモ「その通りよ！」

いつの間にか、神の背後に回り込んでいたタマモが矢を放つ。天詔琴（あまのりごと）の力によって放たれる対象に向かって追尾する矢を、神はスクネの頭を掴み持ち上げて、その左腕で防ぐ。寸分たがわず、先程の傷口と同じ所に矢は突き刺さった。

神「さすが四魂スクネ。余の恩に報いるため、その身を犠牲にするとは……よい臣下を余は持った。しかし、その左腕をタマモの矢を防ぐために使うのは、少し勿体なくはないか？」

そう言いながら、神はスクネを振り回すと、タマモ目掛けて放り投げつけた。動きの鈍いタマモはそれを避けそこない、腹にそれを受けて吐血した。

神「すばらしい。余の言葉をすぐに理解して、その身を武器と使うとは、四魂スクネの名にふさわしい奉公よ」

転移で近づくと、再び神はスクネの頭を掴みあげる。

神「褒美を取らす。その傷、治してやろう」

傷口を抉（えぐ）りながら神は矢を抜く。鮮血が吹き上げ、スクネは絶叫する。愉快そうに神は笑った後、スクネの傷を治癒の力で塞いだ

目覚めたイヨは呆然とした。記憶する限り、確か邪馬一国で義母（ははは）であるヒミコに会っていたはず。そのはずが、目の前にはイスズしかおらず、その上どうやら、今居る場所は邪馬一国でもなさそうだった。訳がわからず混乱する。少し経って、混乱した脳が機能を回復した後、改めて考え治してみても分からない。考えるだけ無駄だと脳が判断し終えると、改めて冷静に辺りを見回してから、イスズを起こした。

イヨ「起きて、イスズちゃん」

イスズ「ちょっと待ってて欲しいですぅ。イスズちゃんノビノビしたいですぅ」

起きたイスズが眼をこすりながら背伸びする。

イヨ「寝ぼけてないで、起きてイスズちゃん」

イスズ「イヨちゃん……おはようですぅ」

目をこすりながら起き上がると、イスズは首を右に左に動かして辺りを見回す。

イスズ「ここ、どこですぅ？　イスズちゃんこんな所に来た覚えありません。イヨちゃんが運んで来たんですか」

イヨ「違うよ。わたしも目が覚めたらここだったから」

イスズ「じゃ、あイスズちゃんとイヨちゃんを誰かが拉致したんですか！　まかせてほしいですぅ、その人イスズちゃんが今からボーボーにしますぅ」

イヨ「それも違うと思うけど……えっ？　あの紫に光っているの何？」

話しながらふと目を逸らすと、イヨは紫色の輝きに気付いた。つられてイスズもイヨと同じ方向に目を向ける。

イスズ「きれいですぅ。あんなにきれいなの、イスズちゃん初めて見ました」

イヨ「イスズちゃんはそう思うの？　わたしは怖いよ、あの光」

紫色の光が、イヨには混沌のもやに見えた。恐怖と絶望の象徴にさえ感じられた。

イスズ「イヨちゃんが怖いのはいけません。すぐにスタコラサッサと動きますぅ。こう見えても、イスズちゃんとっても早いんですぅ」

胸を張って自身の程を見せるイスズを横目で見ながら、イヨはすでに正反対の行動を決めていた。

イヨ「あっちの光の方へ行こう、イスズちゃん。怖いのは怖いけれど、何かがあるのも確かだろうし」

イスズ「怖かったらまかせてほしいですぅ。イスズちゃんがイヨちゃんを守りますぅ」

イヨ「お願いね、イスズちゃん」

二人は紫色の光を目指した。途中、何度か突風みたいなものが吹いた。それは神の起こした衝撃波の残り香の様な物だったが、それだと気付くはずもなく、二人は駆けた。

そして、二人のたどり着いた先には見知った人物達が倒れていた。

治癒したスクネを、神は倒れ込んだタマモの上に放り投げた。自分に圧し掛かるように倒れているスクネを、タマモが横に押し退ける。日頃のタマモならば、たいして苦労もしない行為のはずが、身体に受けた痛手が、それを困難にさせた。丁度その時に、イヨとイスズの二人は現れた。

二人に気付いたタケヒコが声を大にする。

タケヒコ「二人とも、すぐにこの場を離れ、出来うる限り遠くへ逃げて下さい！」

神「二人？　誰に向かって話をしている？」

本当に気付いていないかのように、神は首を右に左に動かしてタケヒコの言った二人を探す。そして、タケヒコと同一方向を見ながら目を細め、注意深く探しているかのような表情を見せる。

神「四魂、そち達以外に、他は誰もいないではないか。四魂タケヒコ、脳が錯乱でもいたしたか？」

イスズ「イスズちゃんとイヨちゃんがここにいますぅ。カグヤさんの眼はポカーンですか！」

手を振って、イスズが自分達の存在を訴える。片耳を塞ぎ、神が眉間にしわをよせる。

神「騒音がする。先程までは無かったというのに……実にうるさい。このままでは、臣達もうるさくて叶わぬであろう？　余が調律してやろう」

やって来た二人に向かって、神が人差し指と中指を向けた。その動作に気付いたタケヒコが駆ける。爪が伸び、二人に襲いかかる。間一髪の所で、イヨに向かって伸びた人差し指の爪をタケヒコが斬り落とす。しかし中指の爪には間に合わない。それでも、辛うじて軌道だけ逸らすことに成功し、爪はイスズの右肩を貫くだけで済んだ。

イヨ「イスズちゃん大丈夫？　いったい、何をするんですか……カグヤさん？」

爪に貫かれて倒れかかったイスズを、イヨが慌てて抱きかかえる。

イヨ「あなた誰ですか？　人ですか？」

言葉に詰まったイヨが疑問を口にする。目の前にいる人物は、間違いなくカグヤにしか見えないはずだった。

その疑問に、タケヒコが不審そうな表情を見せる。

タケヒコ「イヨ様は……カグヤ様が他の誰かに見えるのですか？」

神「四魂タケヒコ、何をしている。余がそち達のために雑音を消してやろうと言うのに……まて、そこに何がある」

転移した神が覗き込むようにイヨの瞳を見た後、全身を品定めするように隈なく見回して言った。

神「芸術品？　はて、なぜに二つもある？」

タケヒコ「今、何と！」　タマモ「何て言ったの！」

同時にタケヒコとタマモの二人が絶叫する。

愉快そうに神が笑い声を上げる。

神「たまにはこのような趣向もよい。それに、よくよく見ると芸術品には違いないが、天之岩戸（あまのいわど）は持っていないようだな。余はこれが見られただけで満足した。そろそろ世界を換えよう、新たな世界も、余を楽しませる事を望む」

ひとしきり笑った後、神は左の手の平を広げた。葦（あし）の芽が左手の上に現れる。右の手の平を広げた。黒く混濁（こんだく）し、ねじれた小さな紐のような姿をしたものが、右手の上に現れる。

そして、世界が色を失い、あらゆる景色が消え去り、ただの真っ白な平面が生まれる。地平線すらない、永遠に続く平面が。

神「四魂、準備は整った。魂だけの姿に戻り、余の供をせよ」

色を失った世界で、唯一変わらない神の言葉と供に、三人の身体から、青白い姿をしたスクネ、タケヒコ、タマモが出現する。

神「はて、四魂セイガはいかがした？　何処にいようとも、この場に現われるはずだが……」

少しだけ表情を厳しくしたかと思うと、次の瞬間には神は納得したように言った。

神「忘れておった、余がこの世界から追放したのであったな。よい、そのうちどこかの世界で呼び戻そう。次の世界に、四魂セイガがいないのも面白いかもしれぬ」

真っ白な平面の中で、カグヤの形をした神は世界の変換を開始した。

意識が朦朧とする中、スクネは目の前で行われているのが、神が世界を換えようとしているという事実だけは、かろうじて理解出来た。それでも良いと思えるような気もした。

この身に刻んでしまった罪が消えるのならと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1579x/

倭国神代記

2011年10月26日13時05分発行